

72-430

文 學 士  
沼 波 瓊 著  
齋 藤 松 州 裴 幀

三 紀 行

43.4.6  
田 英



はしがき

「莊内の山水」は題の示す如く自然を主として寫し且つ空想の文字多し、この全篇萬朝報に連載せしものなり、當時即興詩人を耽讀し居りし爲文脈用語自ら其書と相似たるもの多くなれり。

「秋田めぐり」は人事を主として寫せり、この旅行の目的が其方面の觀察なりければなり、この篇の大部分は萬朝報に連載したれど、後部は同紙上には大に省略したり、こゝに記せるが全部なるなり、當時綾雲峽雨日記を読み居りし爲用語の自ら相似たる多くなれり。

以上二篇描寫の法用語の選擇に甚しく苦心せり、もとよりこは予が淺學不才の爲の勢力なりき。

「お伊勢参り」は何等の苦心無く唯思ふ儘見聞せし儘を書きなぐり

しなり、この篇口語體を以てしたれど、神宮の事を記し奉るには如何にしても口語不妥當なれば其の部は文語を用ひ、その前後の口語との連絡法に多少の用意をなせり。

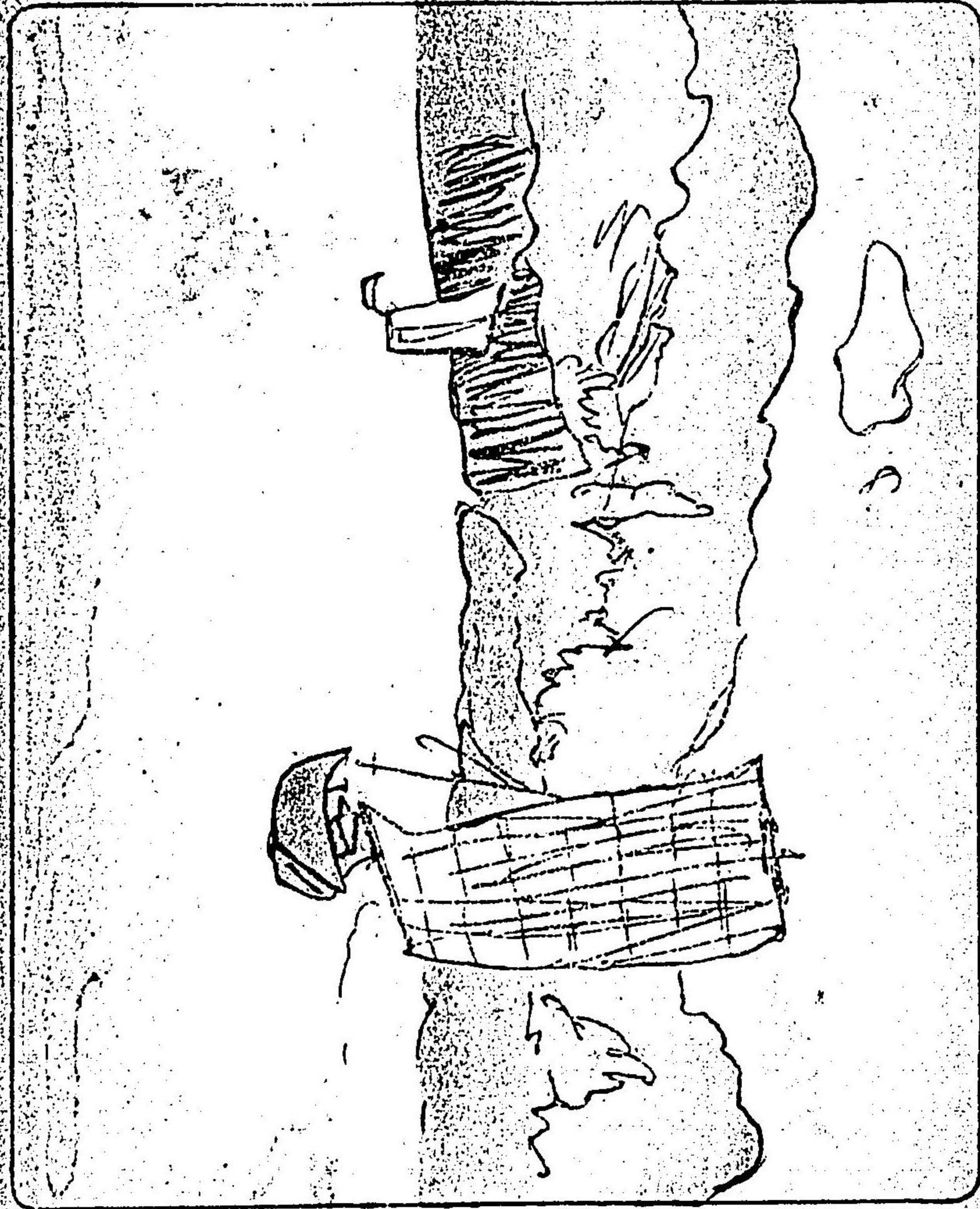
挿む所の四葉の畫は予が手帳にスケッチしたるものに、齋藤松洲子が彩を施したるなり、初め予のスケッチを子に示しこれに據つて挿畫を作る事を頼みたるに、子は却てスケッチ其儘の方面白しと云ひて止まず、予も一種の興を催して拙陋を顧みざりしなり。装釘意匠は總て松洲子の手に成り、書名揮毫は中川無名子を煩はしたり。

明治四十三年三月

環音識

目 次

莊内の山水……………	一
秋田めぐり……………	五
お伊勢参り……………	一三



三 紀 行

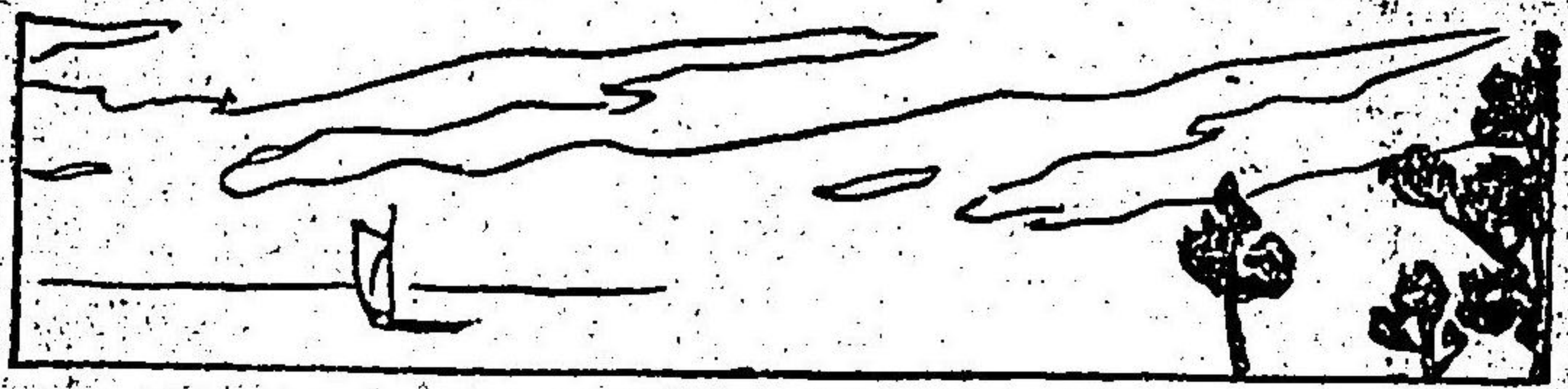
沼波瓊音著

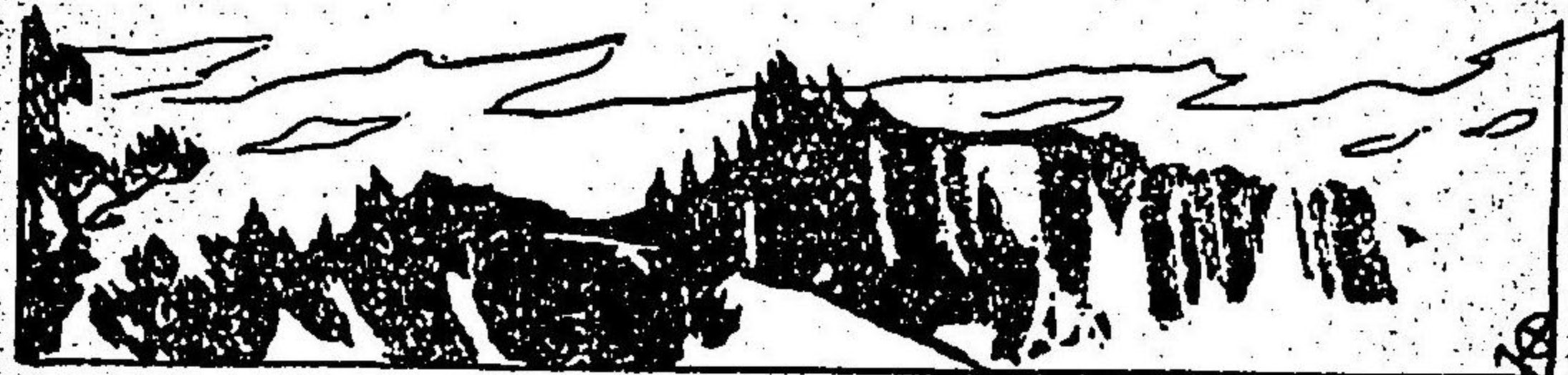
一 莊内の山水

(明治四十一年七月二十六日  
日より同八月三日まで)

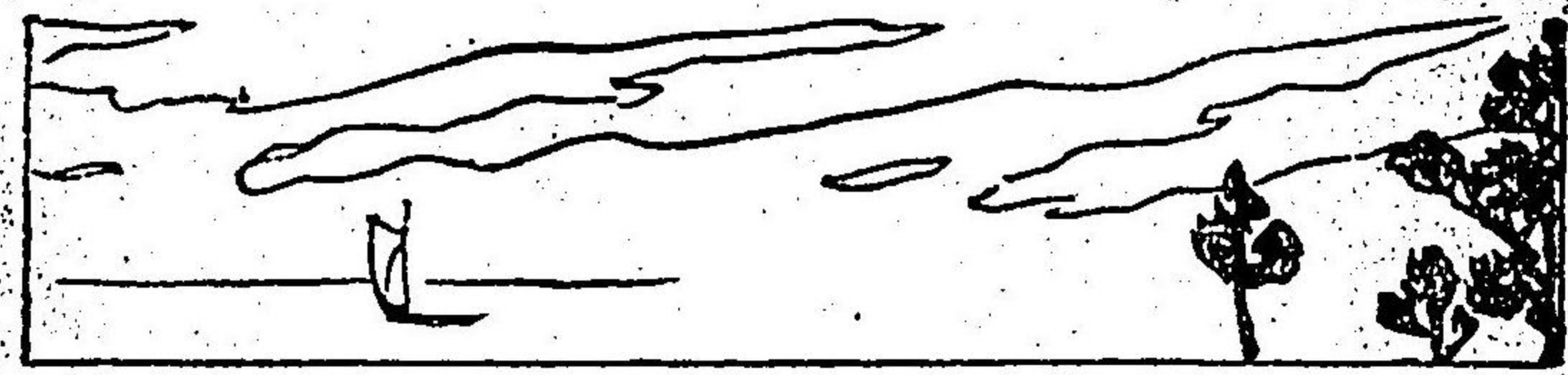
美しきよりは壯なるを好み、圓きよりは角あるを好み、易きよりは  
難きを好み、文雅よりは粗野を好み、南方よりは北方を好み、太平洋  
よりは日本海を好む。是れ少くとも現下の我が趣味なり。友人相馬明  
次郎君は莊内の人類に郷里の山水と風俗とを説き君若し彼地に遊ば  
恐らくは歸意断たむと云。君の言に據りて其境を想ふに頗る我が趣味  
に合ふものゝ如し。遊心急なり。即ち七月二十六日午後八時上野發の

莊内の山水





二  
汽車に乗りて北を指す。二十七日朝車米澤を過ぎて西北に一秀峯を見る。其容悠揚迫らず谿毎には雪輝きて白銀の巖積を疊めり。傍人に其名を問ふ。曰く月山なりと。我必ず彼の山に登り彼の雪を踏まむの意忽ち決しつ。風の如き雲あり、今しその山腹を離れ斜に碧空を指して飛べり。山形市に至りて下車先發の相馬君と會して朝饌を喫む、鮎鮎先づ嬉し名物の桃は左したる物にも非ず。市中一見の後再び汽車に乗じて新庄に至り、これよりは腕車を僦うて進む。莊内未だ遠けれども其風趣は已にこの邊より認め得るとや、町の家々の屋根は杉の皮もて葺き大なる石をそが上に隙無く並べたり。清き流れ路の傍を走り家の裏を廻れり。眉濃き女の括袴穿きたるが其の流れに下り立ちて手を洗ふあり。其の水の力もて絲車旋らす装置したる家あり。色淺黒く暈ましき二人の少年の一頭の裸馬に跨りて遊ぶあり。家の内を窺へば午睡

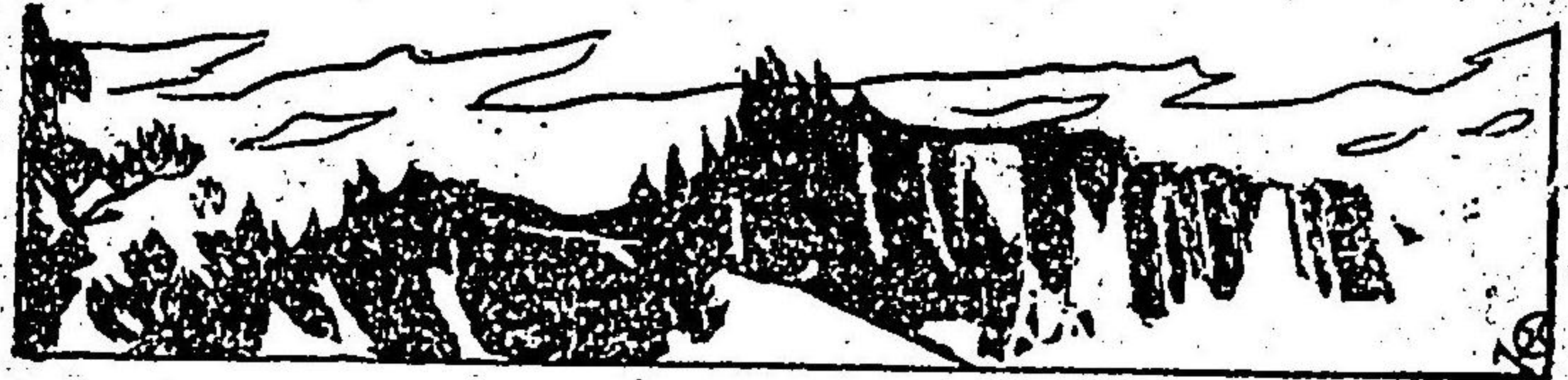


したる多し、いづれも俯伏に臥したるはこの邊一圓の習ひなりとぞ。町を離れ松本仁間など云ふ小村を過ぐ。雪の月山は行手の雲に隠見せり。溝川の岸には野菊苦百合など咲き競ひ鶯群をなして歩みつゝ鳴けり。疎なる垣に括袴干したる邊には葵草紅白の花を陳ねたり。祠の鳥居の横木が必ず右の刎上りたる鄙しけれども珍らかなり。雑木林に蟬喧しく草原には蟲の音優し。亂川橋を越えて山路を辿れば鶯ぞ遠近に鳴く。車夫渴きたりとして清水を掬ぶ間、我は車の上に帽裏の汗を拭ふ。老杉の梢に山百合の蔭に亂れ飛ぶもの悉く鶯なり。車輪の響に妨げられねば暫く縦に其の嬌音を樂む。哀なる市塵中の人よ、御身がこを聞き得るは僅に三春の季に限れり。

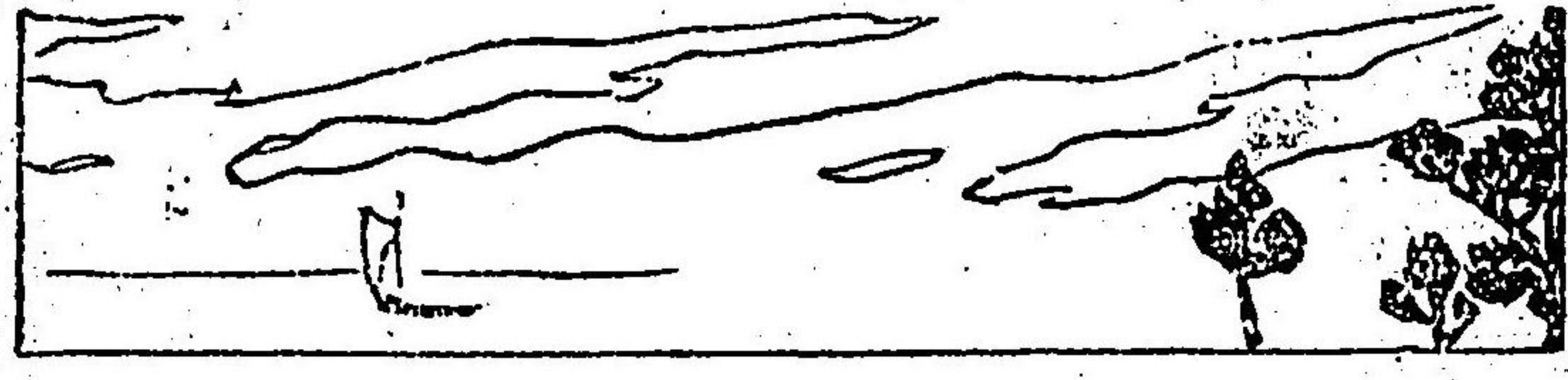
二

三時に近き頃本合海に着きて憩ふ。こは羽前最上郡に在りて最上川

莊内の山水



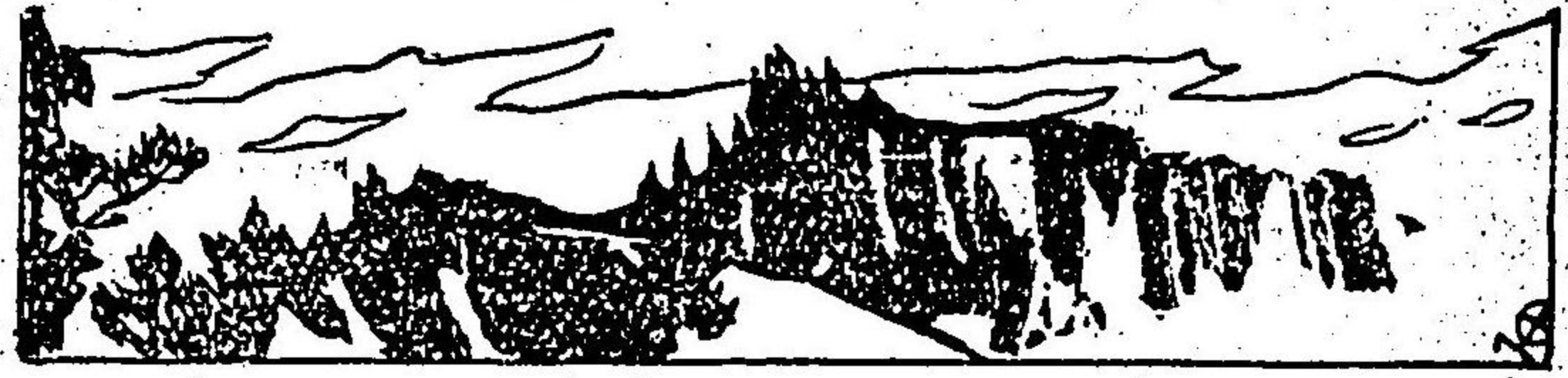
の東岸なる小村なり。我等は今日廻館まで行かむとす。これより車に  
乗續くとも船にて川を下るとも途にて日暮るべし。汽船の便もあれど  
一日一回にてそは夙く過ぎたりといへど、最上川を汽船にて急ぐは忌  
はしければこは憾みにもあらず。斯く語り合ふ程車夫走り來て、今下  
りの荷船を見たれば兎も角呼留め侍りと云。岸に下りて船夫に問ふに  
酒田行きにて今宵は清川泊りなりと云。左らば清川までこの船に依ら  
む、腕車の都合出來ずば清川に一泊するも可しとて船に移る。前後に  
薪炭米陶器などと積み、中央に三疊程の間を殘せり。こゝに苦より自  
在を垂れ煤びたる鐵瓶に土瓶の蓋したるを爐に懸け、爐のまはりに新  
しき座を敷きて我等の席とす。狩川より船形まで商用に行きし歸さと  
云四十恰好の男と、札幌の某會社に雇はれて未だ一年ならざるに病を  
得て郷里余目に歸ると云若者と乗合はせたり。船夫は船に二人船に



人あり。「アラララアエー……シツ……シツ」といふを拍子に船唄面  
白く唄ひ交はして、水快く舷にさゝらぎて船ははや最上川を下り始め  
ぬ。  
抑最上川は源を羽前岩代の境なる吾妻山に發して北に走り、羽前な  
る南東西の置賜郡西東北の村山郡を經こ、最上郡を中斷して西に流れ  
羽前羽後の境をなして一瀉酒田の海に注ぐ、流域實に七十餘里日本三  
急流の一なりと聞く。この邊うち見たるところ左ばかり速き流とも見  
えねど我が嬉しき特色と覺えしは迂曲甚だ多くして風色の變化盡日飽  
かざる事なり。

兩岸家を見る稀にして樹影漸く濃に爲近く鳴き蛸遠く聞えて、黄な  
る席帆揚げたる上り船一二或は二三「アラララアエー」の聲を長く殘  
して去る。船に出で苦に凭れ悠然として眺る間我、我を忘れぬ。短き時



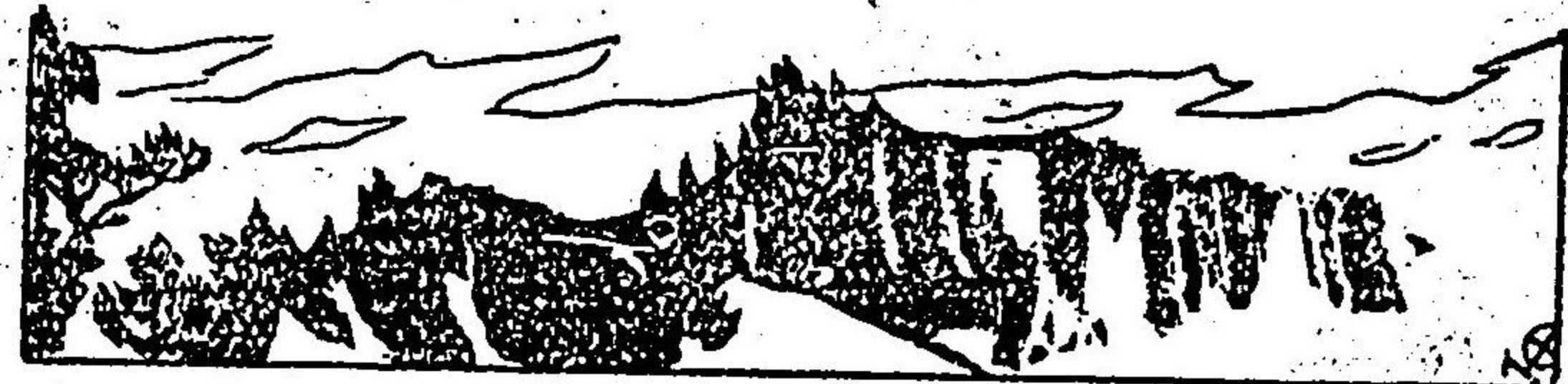


に多く事を成さむとするの燥氣、人の浪押分けて我疾く進まむとするの焦慮、時代の潮流に對する憤、境遇の壓迫に對する悶、これ等一切の苦艱はこの清き最上川の水に溶け去りて我が心は未だ繁瑣なる人間の約束を學ばざる昔に返りしが如し。忽ち雲、田川の空より湧立ちて雨大に至る。萬象唯白く雨の外聲無く、土の香杉の香衣に染入む許り漂ふ。古口村に沿ふ頃雨はたと歇む。水の流漸く急に所々瀬枕だちたり。川の迂曲愈よ多く岸の山常に來し方行先に横はれば川としも覺えず宛然湖を漕ぐが如し、白き雨雲は川を廻りて轉り行けり、晴れたる西の空は山と山との間に淡碧なる絹を展べ始めたり。山には苔蒼く或は風に曝れて白き斷崖凄しく杉松楡など其上に生ひたり。溪流其樹陰を縫ひ巖に躍り直下深を爲すもの數を知らず。鶯近く鳴き蜩遠く聞え「アラララアエー」の唄益興に入る。右に机に似たる山巔はる。天狗の遊



ぶ所なりとて人登るを恐るとぞ。これを廻れば杉の蔭深く古祠を望む仙人堂と云。船夫艇を乗て、一齊に跪き笠を脱し沈みたる聲にて祭文を唱へ堂の隠るゝまで止めず。これに近く一道の飛瀑あり白糸の瀧と云。この時の情景深く胸を刺して我は兩頬に涙の冷なるを覺えぬ。友は我肩を打ちて「いかに」と唯一言問ひぬ。商人は大なる掌を合せて船夫と共に祈り、病みたる若者は黙して水の瀬を目守りたり。奥の細道にこの川を下りこの堂この瀑を見ることを記し次に、五月雨を集めて早し最上川、の句を置きたり。其文を思ふに、芭蕉がこの句を得たるは我が今過ぐるこのあたりには非すや、二百餘年の光陰短かきにあらねど此處にて眺むる風物に左したる變化ありしとも覺えず、強ひて之を求むれば道ある所に電柱の小さく望まるゝのみ。

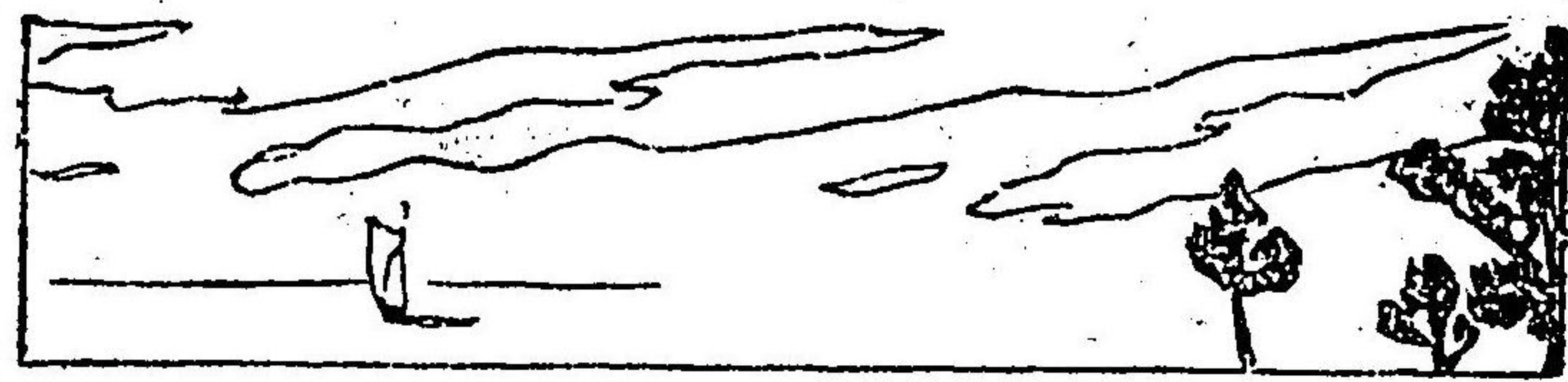
水愈よ速し船は直下りに下る我等ははや莊内の領に入れり。忽ち左



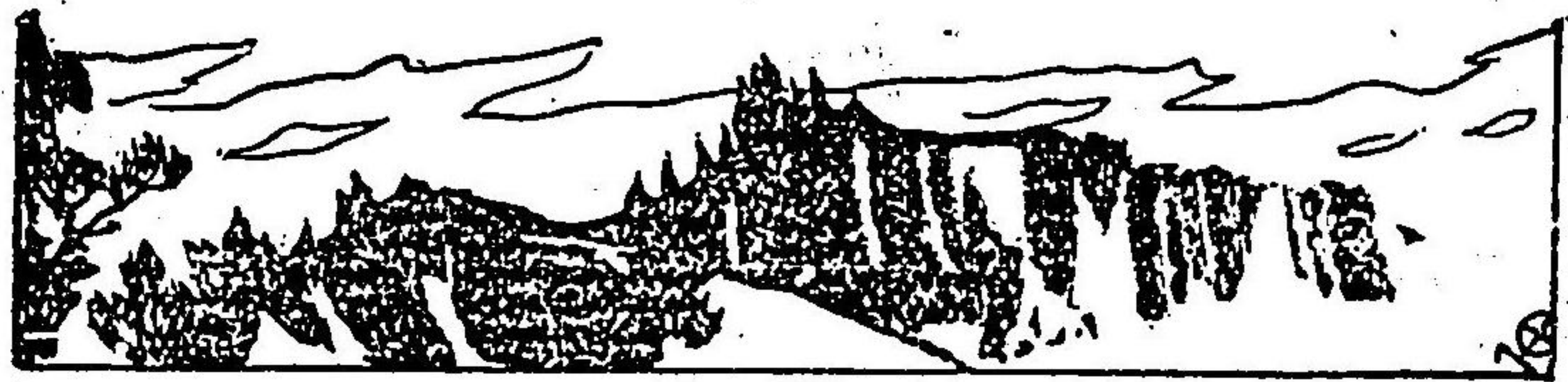
方崔嵬たる巨巖の聳ゆるあり腹巻岩と名づく。戊辰の年莊内の農夫悉く奮起りこの巖に據つて官軍に抗せりと云。夕焼の空血よりも紅に鶯の聲漸く稀なり。頓て御殿林黒く顯はれ。立合澤川の南より來るに逢ひ、燈美しき清川村は物靜に我等を迎へぬ。

三

腕と肘露なる衣着たる女二人船の内に押入り、妾は何屋なり宿り給へと云意を、乾きて韻短きこと露西亞語に似たる言葉もて口疾に言ひ立て、否とも諾ともいはせもあへず鞆傘など引抱へて行く。呆れながら可笑しくも覺えて我等も岸に上る。我は始めて莊内の地を踏めり。土白く松多し清げなる水音立て、路傍を流れたり。破風のあたり底の支へやう窓ある垣の様など總べて神社めきたる家並み立てり。小さき郵便局の前に狗高き雞の集へるを向なる旅籠屋の女房見つけて歸



さむとて筒袖の両手廣げつ、追ひ行く。旅籠屋の二階には笠白衣影しく懸けたる明狀に見ゆ。この地古は最上口なる羽黒山の一、木戸にて參詣者先づこゝにて齋戒せりと云實に左る方に相應しく見るからに清げなる里なり。勇敢なる女は我等を宿に導きたれど我等は履を脱がす縁に腰掛けて、廻館まで車雇へ疾く、と云張りたり。友は自轉車にて我は俥にて西を指して急ぐに、清川の村を外れて前途に無數の灯影を望みたり。斯く盛なる市のこの邊にあるべき謂れなし、或は公園やうのものありて提燈陳ねたる店多きにや、など思惑ふ間に近づけば、螢なり。左の方に老松の林延びて梢高く茂りたるに螢のひしと着きたるなり。其數は其葉の數にも等しかるべし。而かも靜まりかへりて一螢だも飛ぶなければ活ける物としも覺えず、蓋の如き、龍の如き、一本毎の松の容分明に、枝の屈り幹の瘤まで見え渡れば、國王宮に驕りて



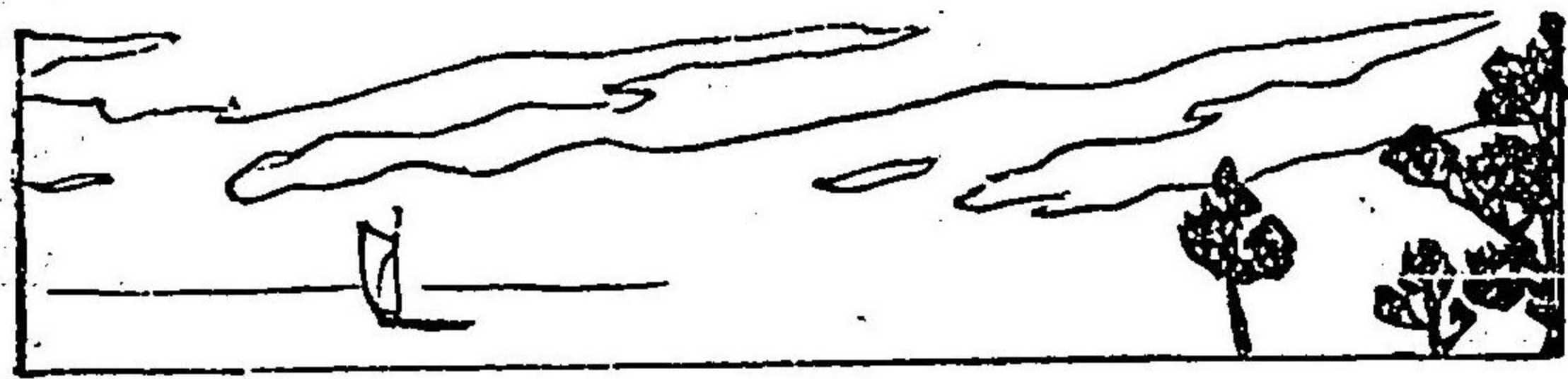
碧瑠璃を積重ねて林の様を造りなしたりとも譬ふべきか。或は網目版もて刷りたる暗き松林の大なる圖の其の網目の點が悉く螢なりといはば、未だ見ぬ人の心にこの様を描かしむるを得べきか。

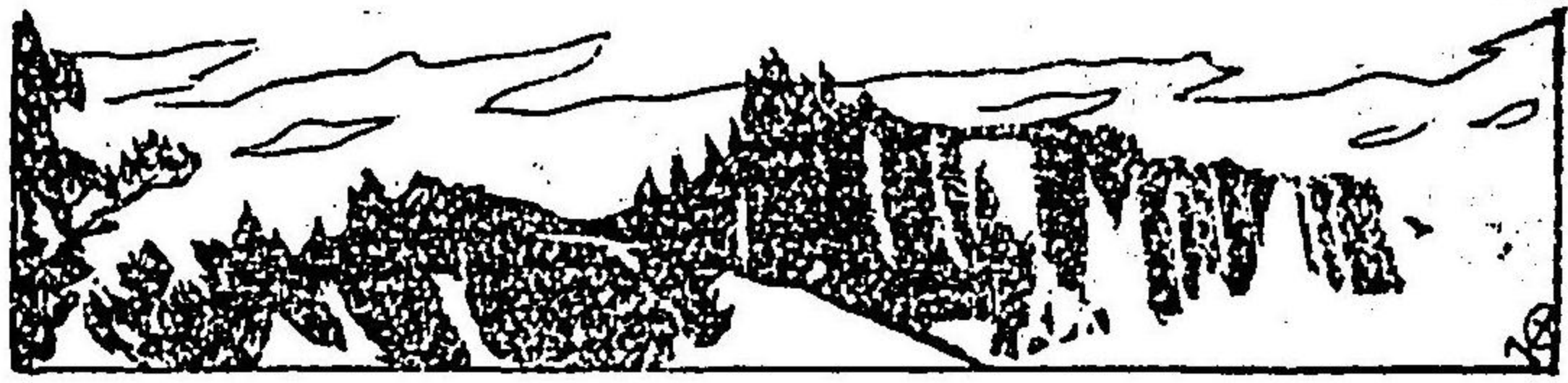
右に最上川仄白く見えたり。空は雲淡く渡りて星の影弱し。車は飛ぶが如く輝く林を後にして右に折れ打開きたる田圃に出で風冷しと覺ゆる刹那、螢の驟雨的驟として横様にわが車を襲へり。靜の螢去つて動の螢來れり。眼を定めて細かに見れば、大なる螢の王を小さき螢の群がり圍みて衛り行くあり。草より飛びし螢と木より飛びし螢と中空に會して陸み行くあり。一雌を双雄の争ふあり。低く飛んで水を求むるあり。我獨り思ひ昂りて高く星を指して飛ぶあり。一群の螢の敗れて逃ぐるを一群の螢の勝誇りて眩ゆき光を放ちつゝ逐ひ行くあり。碧き光空に漲りて、車は螺鈿の如く車夫の背は神將の肌はだかの如し。遂に自轉車

驅り行く友を望めば、驚いて亂るゝ螢夜の海濱ぐ船の舳うしほに夜光蟲の光沸立ちて左右に長く尾を曳くに似たり。あはれ晝は鶯の聲に飽き夜は螢の光に飽く、わが旅の幸多きを道守の神に謝しつゝ、九時の頃ほひ廻館に着きぬ。

#### 四

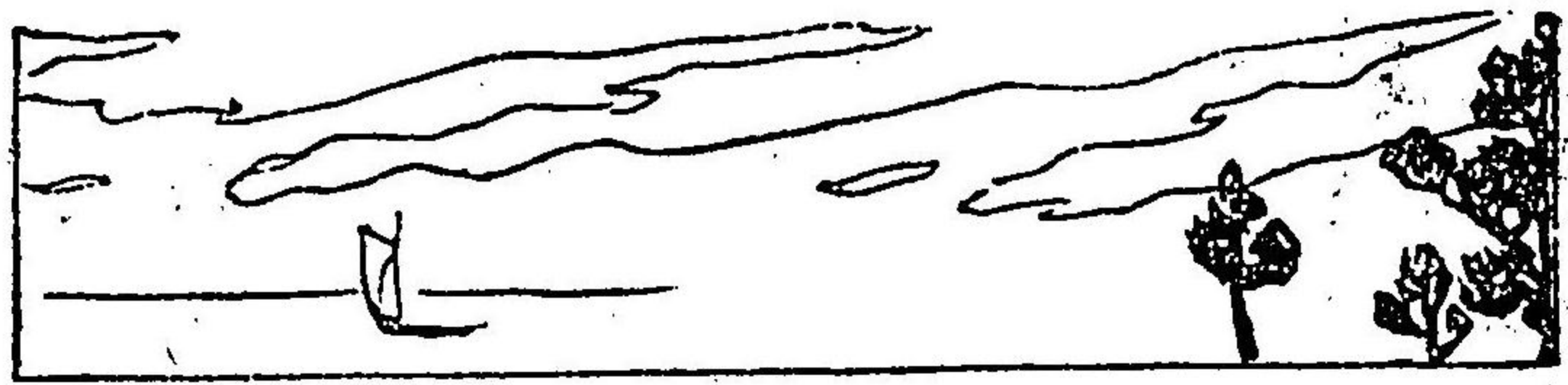
我は爰に莊内の地の事どもを一筆記さむ。東國の人には要なきことながら西國の若き人達には莊内と云名の指す範圍も不明ならむを恐るるが故なり。莊内とは羽前國なる西田川郡東田川郡及び羽後國なる飽海郡を總稱したる名なり。北東南の三方に峻嶺たくなはり、西は濤荒き日本海に瀕し、この間に廣く平らかなる野ありて自ら一の境を成せり。地は肥えたり、山の物海の物にも事缺かねば、他に一物の供給だも仰いで一千餘年を経たり。古はこの地越の國の一部なりしが、元明天皇の





御代に出羽の國の一部となりぬ。王政隆なる間朝貢缺くる時あらざりしも、頓てこの邊武臣跳梁の場となり、鎌倉時代に入りては武藤氏世々莊内を領し慶長の頃はひには本莊繁長に略せられ、後また最上義光の掌に容りたるが、元和八年酒井忠勝信州松代より封をこの地に移されてより、四民撃壤して三百年の太平を樂みたり。戊辰の役起るや莊内の民士といはず農といはず悉く戈を振つて官軍に抗す。疾きこと風の如く動くこと電の如く雄名四疆に鳴る。王政復古の事定まりてよりは、明治元年出羽は羽前羽後と分れ、莊内のうち飽海郡のみ羽後に屬し、四年には三郡酒田縣に屬し、八年鶴岡縣下となり、九年山形縣に入りて今日に至れり。

莊内の地勢前に述べたる如くなれば、人の性格單純にして安らかなり。甘き言もて人を喜ばしむる才はあらで、身を勞して人の爲に盡す



誠心あり。打對ひて語るに淋し、されど客の知らぬ間に思はざる奔走して大なる便宜を興ふ、しかも彼は其奔走の次第を一言も告ぐるることなし。旅籠屋の婢の立ちながら物言ふを見て、始めてこの地に遊ぶ者は、莊内の人禮を知らずと憤ることあり。そは彼等の知らざるなり、未だ教へられざるなり。舊家を訪へば、短き衣着たる若者の中腰になり右手つきて長者の命を聞く様凛として武家時代の劇を見る思あり。莊内生れの兵は演習に拙きこと甚し、しかも實戦に臨んでは虎よりも猛し、とは軍隊にての定評なりと聞く。莊内人の特色この一言もて窺ふを得べし。我は莊内の人に對ひて、安逸を貪らずして競争場裡に立て、保守に傾かずして進取せよとは必ずしも勸めず。唯この撲實なる美風の永く傷れざらむを祈ること切なり。

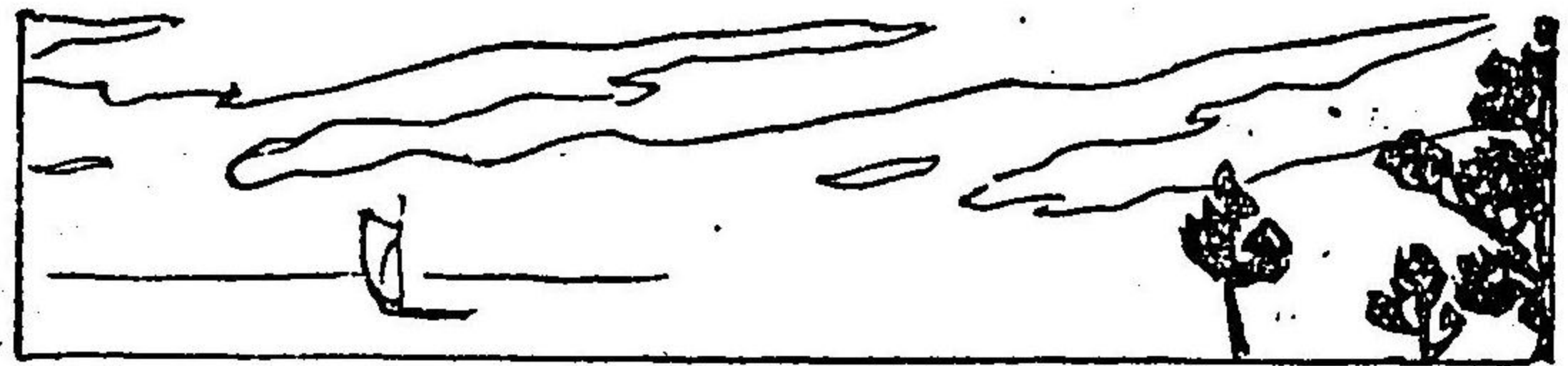
同行の友相馬君の家は廻館にあり。永祿元年君の遠祖この郷を開き、



館を築きて守り、小なりと雖も獨立國の形を成し、莊内酒井氏の封となるも敢て随はずして年を経後に松嶺氏の客分となりぬ。明治十四年聖上東北巡幸の砌相馬氏の邸に御小憩あり。系圖に就て御下問あらせられきとぞ。氏の家に平親王用ふる所の鏡あり、家寶として傳ふ、當家嫡子にあらざれば見るを許さず、床しけれども詮無し。

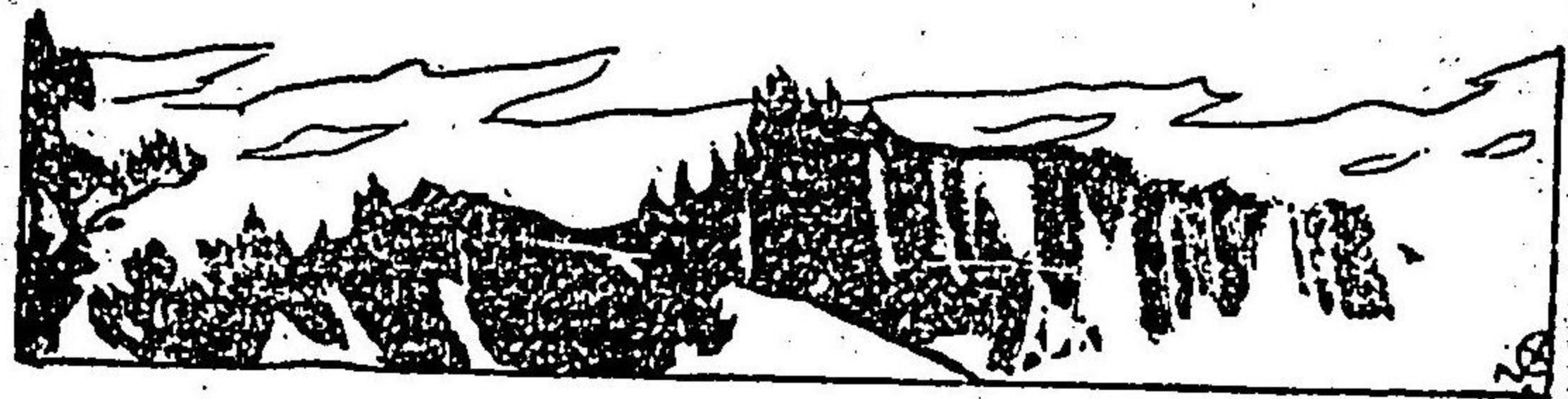
五

廿八日朝友と共に田圃道を漫步す。廻館の周りは見る限り肥えたる田にして、蒼きこと海の如く、いづ方を見ても程よき距に山美しく連りたり。我はこの景色の尾濃の平野に酷似せるを覺えて、久しく歸らざる郷里を思浮べつ。空は紺青に晴れたれど、北の方のみ積雲の巨なる車蓋を成すを見る。友を指して鳥海山彼處にありと云。願れば南の空に月山鮮かに發えたり。雪の光いと近くして眉の冷ゆるを覺ゆ。蒼



嶺として物凄き羽黒山はその前面を衝れり。我等は流れに架せる石橋を三つ四つ渡りて小學校を訪ふ。この學校在る邊は相馬氏の館ありし跡なり。孔雀草咲く小さき花園に沿ひて校の裏に出づれば、古き杉並立ちて灰汁色に濁れる水その蔭を流れたり。こは館の濠の名残とぞ。職員室に昇り校長に會ふ。この邊の山悉く登りたる人にて、我が爲に月山登りの案内を説く。友も未だ登らざれば我と行を共にせむと云。校長曰く、今日明日は天氣良かるべし、早く出で立ち給へ、山中雨に逢ふ時は氣候激變して健なる者も爲に氣を失ふことありと。傍なる若き教師、我を見守りて、朝日の灰打落しつゝ、禮無きに似たれども先生の足よく月山の巔を極め得べきか役者藝者も登り得る富士山と等なみに思ひ給ふなとて笑ふ。

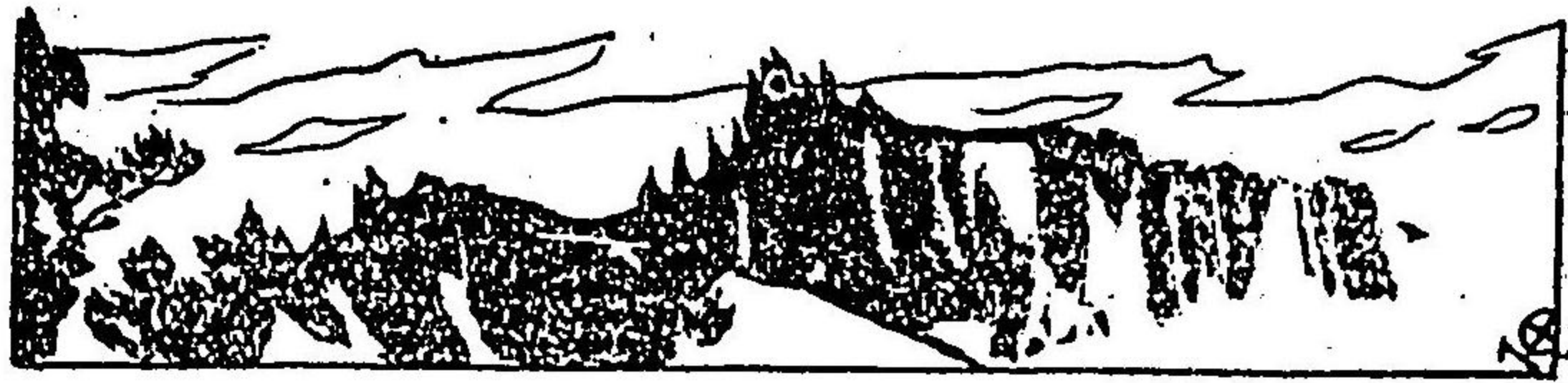
我等は今日羽黒月山湯殿の三山順禮に出で立たむと決しつ。午餐の



箸を下すや直に襦衣と袴とのみになり、蓆を背にし笠を戴き跣足袋を穿ち息杖を音高く杖き鳴らしつゝ、羽黒山口なる手向村に向ふ。日は烈しく照りたり、襦衣一重なる背は爲に裂けむと欲す、息杖握る手は見るゝ赤みて爛るゝが如し。うち開きたる田の青み潔けれど、その眩き反射はなほ熱を噴くかと疑はる。憩ふべき樹蔭求むるに難く、稀にある森には油蟬衰ゆるが如く鳴けり。狩川村を過ぐる時鉛色の雲月山の頂に重さを見る。添川の家々を望む頃、風俄に吹下して雲低く亂れ冷かなる雨滴傾けたる笠を潜りて満面を濡す。我は危みて里人に明日の天氣を問ふ。こは通り雨なり、御山近ければ斯る雨は殆ど日毎に降る、明日は確に上日和なりと答ふ。この里を出で急坂を攀づれば物淋しき山路なり。雨は果して霽れぬ。村立てる杉は夕陽を受けて葉も幹も樺色に映えたり。白き百合菊萩の花など山嵐に揺れて珠の如

き露を足袋の上に散らせり。苦熱は忘れたり、足は軽し、小唄詠ひて潤歩し行けば、行手の叢より雉子の飛立つを見る。暫く別れたる鶯の聲は今や再び我等に親みたり。

手向村に入しは灯ともし頃なり。こゝは舊羽黒山領執務所の在りし所にて、今も三山の神官小屋守先達など概この村の人のみとぞ。柿葺の家所々にあり、道者の宿る所にして坊と稱ふ。嚴かに注連張りたる正面の廣間に、白衣の人居並びて、八房の鈴鐸振ひつゝ夕の勤行を爲すを見る。我等は六字橋に近く宿を定め、精進の夕餉したむ。登山の者こゝより口に脛を斷つを法とするなり。眠るに先だちて窓を推せば、杉の梢に風高く泉の流れこゝもとに咽ぶ。見る限り燈といふものなし、なほ聞ゆる鈴鐸の音は人の鳴らすとも覺えず、空には星斗闌干としてまた煙嵐の漂ふなく、靈山の容も臆げに仰がるゝが如し。

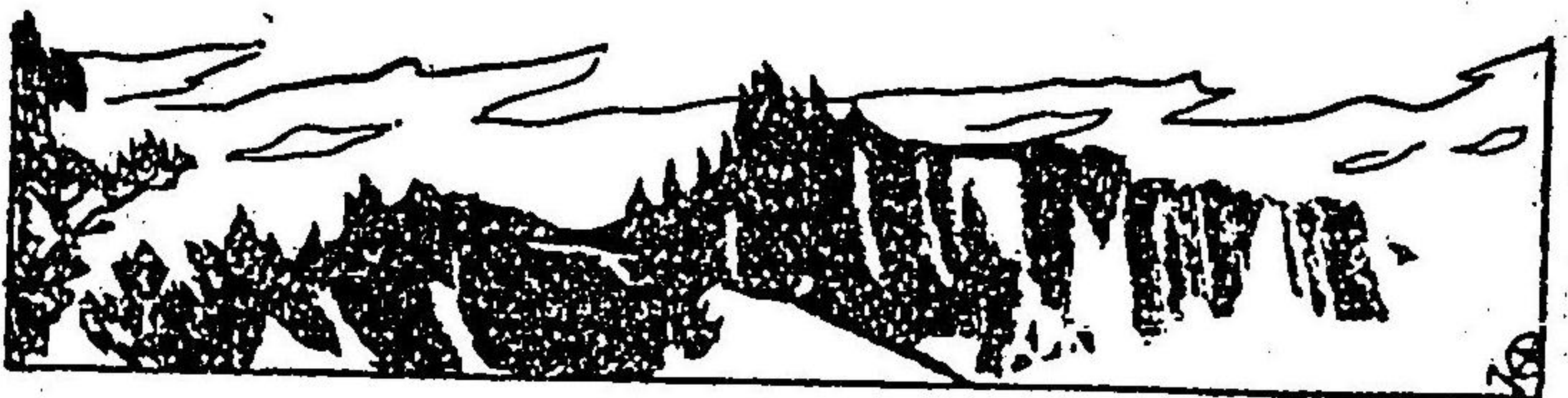


廿九日空は晴れたり笠戴き産着くることも、はや慣れ顔に手早く装を調へ履ひたる先達と共に三人聲高に物語りつゝ宿を出づ。三山の總門とも謂ひつべき隨身門を潜れば石階急に下る。下り盡せば脚下に祓川の流れ岩に激して雪を捲くを見る。須賀瀧右に懸れり、肌漣の如き子等その飛沫に浴みて戯れ合へり。樹は悉く杉なり。磐裂、根裂、水波女、天八降なんどの小祠其處此處に寂びたり。石階は杉の木立を縫ひて果知らず續く。一階の丈極めて低ければ行手、櫛の齒よりも細かに見えて異様なるに、所々石凹みて弓の如き更に奇を添へて寔に仙路神蹤の趣あり。左に將門建つる所の五重塔を望みてより磴路漸く上る、一の坂と云ふ。これを過ぎて羽黒山第一の急坂二の坂來る。登り慣れたる者もこゝにては必ず息切すと先達語る。坂の上に茶亭あり。憩う

六



て西北を瞰下すれば、莊内の平野美しく浮上りて日本海に連り、杳冥の際に飛島の幻の如き、又白帆の坐するを望む。行きつて路傍に「有難や雪を薫らす南谷」と云ふ句を刻せる碑を見る。こはこゝより南に入る三町の南谷にありしを移したるにて、芭蕉その地に俳諧興行せし折の吟なり。三の坂はこの句碑の邊より起る。これを踏盡せば唐銅の大華表を仰ぐ。我等は斯くて羽黒山の嶺出羽本宮の御玉垣内に入る。隨身門よりの石階は始めて此處に盡きたり。本宮は其高さ九丈八尺、屋根は悉く萱もて葺き、其厚さ九尺殊に四隅の突出でたる所の厚さは一丈六尺なりと云ふ。齋かれ給ふ出羽の大神とは稻倉魂命玉依姫命の二柱におはすとぞ。本宮に并びて蜂子神社と申すあり。蜂子皇子を祀る。蜂子皇子の御名は耳に親しからぬ人多からむ。皇子は馬子に弑せられ給ひし崇峻天皇の御子なるが、馬子の嫌疑甚しきに逢ひ、崇峻

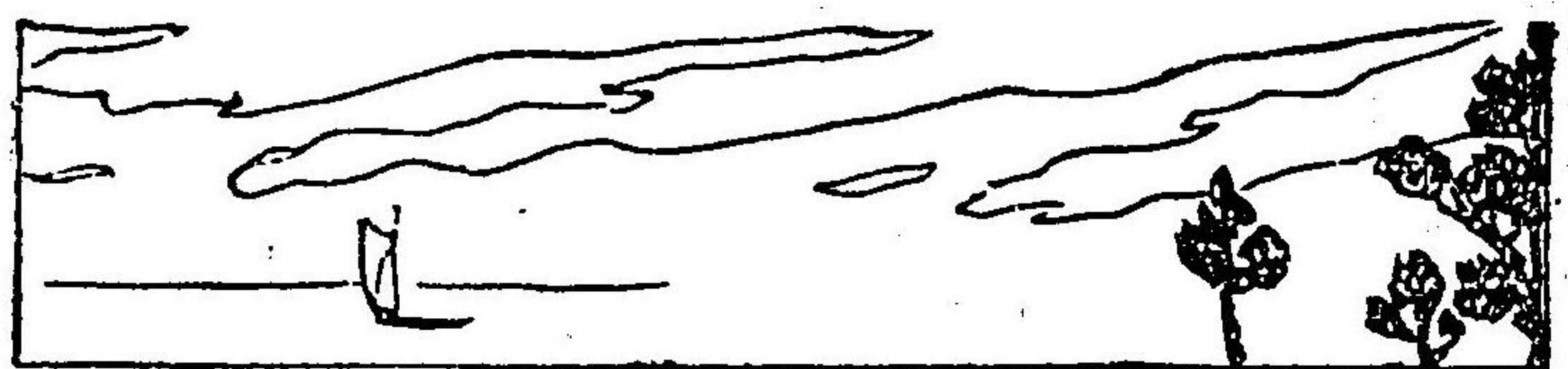


二〇  
天皇の先々代敏達天皇の十四年譯語田の都を去り給ふ。皇子嘗て聖徳太子に就きて法を問ひ、道念もとより深く在せば、この災を機會として諸國抖擻を志し給ひ、遠く越路に下り石動彌彦の山々を開き、更にこの國の濱邊より靈氣搖曳せる山を望み、渴仰の心盛にして手向の丘に至り、それより三足の靈鳥に導かれて羽黒の巔に登り、推古天皇元年こゝに社殿を營み草庵を結びて住み給ふこと二年、更に月山の頂に攀ちて又十年の苦行を嘗め次に西南に下りて湯殿山を開き給ひ、遂にこの三山の外に出で給はず、舒明天皇十三年十月石上に跣坐して薨じ給ふ。この間皇子は藤の皮を衣とし木の實を食とし修練に修練を重ねて唯一修驗道一派を始め給へりとぞ。御陵墓はこゝより南方なる御玉垣外に拜れ給ふ。去廿二日この御陵墓の工事調査の爲帝室より安江審査官を遣されたりと聞く。我は老杉の蔭に秋の如き氣を吸ひつゝ、

遠く人寰を去つて高貴の身を自然に投じ、雪に眠り嵐に覺めて四十九年を過ごし給ひし皇子の御心を偲び、言ひ難き感胸に湧きて全身の打震ふを覚えぬ。

七

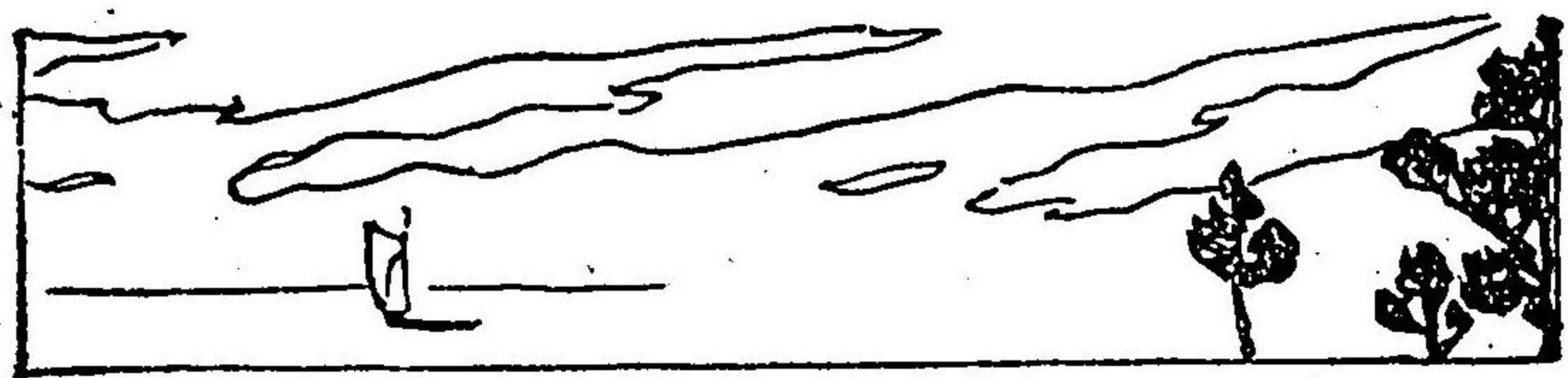
數知らず並み立てる末社の前なる小舎に藥湯を酌んで心頓に爽かに、玉垣を出で、去年の落葉に露繁き徑を行き行く。吹越の社を過ぎ荒澤の溪に下り、參詣の人己が影を映して吉凶を占ふといふ影見川を渡り、野口の岡の觀音堂を過ぐれば、森林盡きて草高き野に出づ。涼しさやはの三日月の羽黒山、加多羅禮奴湯殿仁潘須袂加那、雲の峯いくつ崩て月の山」といふ芭蕉が三山順禮の句碑を左に見る。これを背にして立てば、莊内の平野豁然として展開す。さきに二の坂の上にて見たるは寔に狭き眺なりしのみ。積疊せる空氣は赫々たる夏日の下に



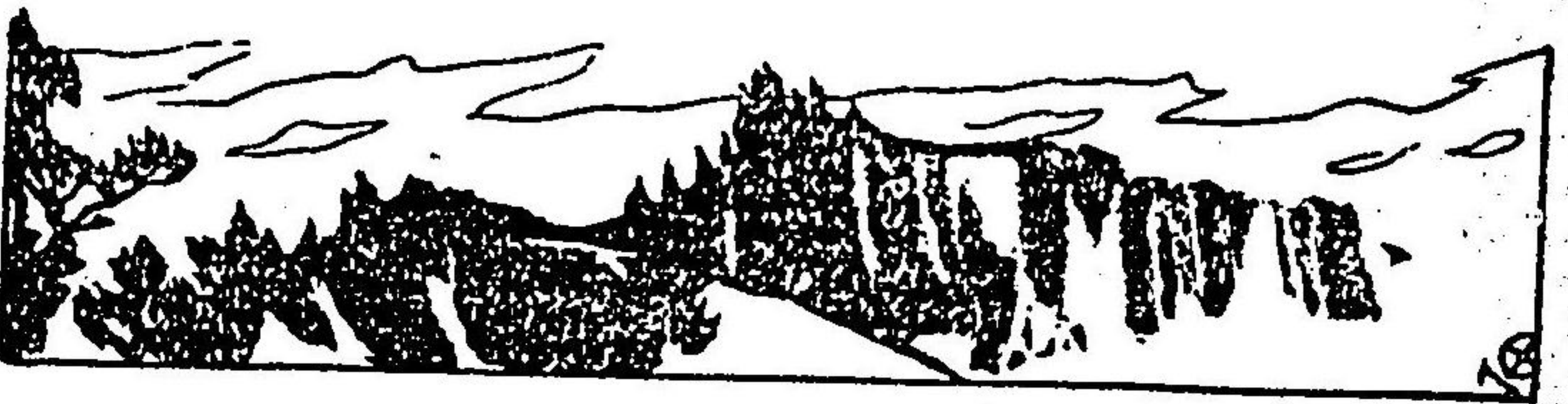




なほ淡き藪をなして平野の上を蔽へり。人住む里の點々として黒きは海の上なる群島の如く、其の最も大なるは鶴岡の町なり。野を横切る一條の流は大鳥川なり。野の涯をなして春の如く霞める山々は、朝日温海母狩摩耶などなり。右に山盡きて海あり、漫々として其末は空と相融けたり。我等暫くこの氣色に對する間、鶯は脚下に鳴きまた耳邊に飛ぶ。趣きあるは廣き平野の眺のみかは、我等が踏めるこの野口高原の、進むに従ひて愈よ面白きを見よや。萱草の中に交りて莓あり、珊瑚薔薇あり、野菊の丈競して咲けるあり、玉簪の弱げに項垂れたるあり、紫匂ふ鳶尾草の盛りなるあり。行くまゝに草漸く低く、細きこと糸の如き尾花生ふる原に出づ。尾花より雲雀揚りて谷の鶯と聲の文を織れり。この邊萱草の中にも尾花の中にも所々石の地藏尊立ちて在す。行基菩薩造營せしと云ふ千體地藏の名残なるべし。あゝ靈境四季



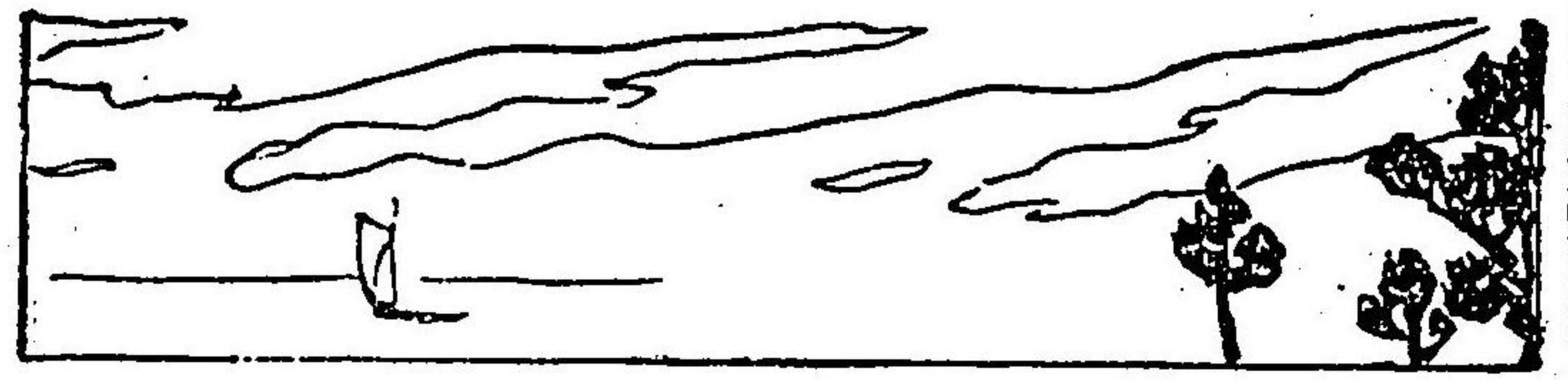
の別無し我は怪しき夢見る心地して言無く進む。中學の五年あたりなるべき青年四人の來るに逢ふ、彼等は軍歌うたひ杖振りて地藏尊打ちつゝ去る、憂々の音は遠く草隠れに續けり。あはれなる青年よ、御身は唯物の物たるを學びて、物に意味を認むることを忘れたるなり。我等も曾てはその暗くして單調なる無意味の谷に陥り、後再び路ある所に攀ちてこそ朗かなる空の光を浴み得たるなれ。あはれ邪なる先達は今も絶えず、御身等をしてなほ我等の覆轍を踏ましむるよ。斯く思ひつゝ青年の後影を見送る時我は天半に雲裂けて秀靈なる山の巔の露るゝを仰ぎたり。雪斑にして其容宛然富士の如し。鳥海にはあらずやと我は叫びぬ。友驚きて振返りて、然り鳥海山なり、と快げに答へつ。よく見給へ、再び雲に封せられなば、君は復たかの靈容を見るを得ずして歸るやも測られずと云。行手には月山の巔雲を拂ひて我等を待て



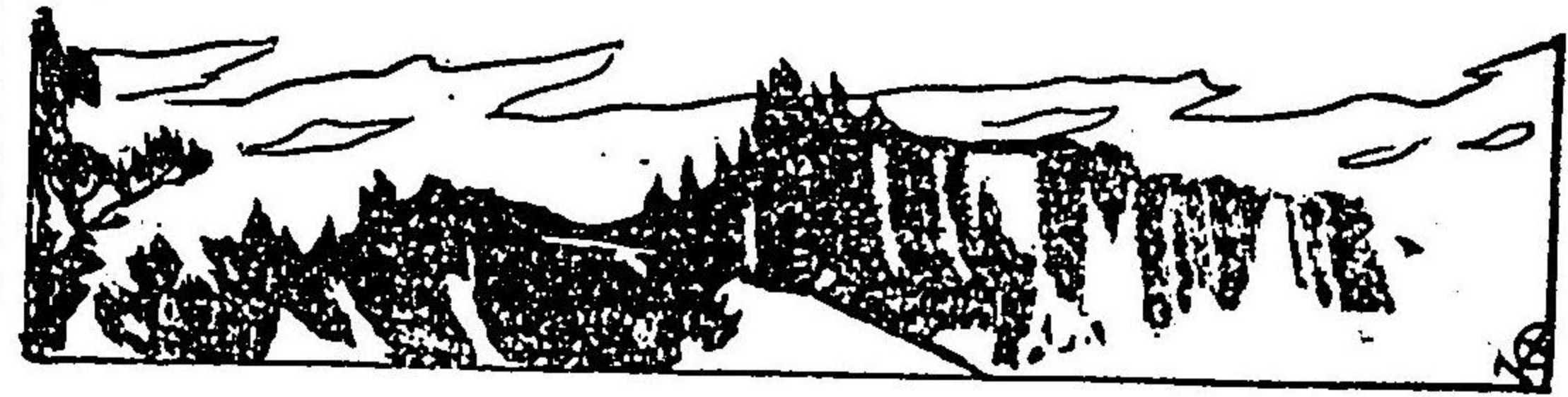
り。傘骨、善知鳥坂など越ゆる程迂曲せる立谷澤川の上流は左の麓に現はれたり。この川を當面に見る所に小屋あり、老女二人水を漕げり、海道阪とはこゝなり。我等暫し憩ひて小屋を去る時先達、海道阪より上には女あらず老いたりと雖彼等をよく見おき給へと叫く。先達殿の相應しからの言や戲言な云ひそ御山や荒れむと戒めつゝ笑ひて行く。清き流に逢ふ泉澤と稱ふ。これを過ぐれば始めて月山の神域に入るなり。羽黒の宮を辭してより所謂萱野三合は已に踏盡しつゝ、再び物凄き森林は前途に隠黒き影を凝して我等を脅せり。

八

森林の入口に小月山の祠あり、大己貴命、櫻大刀自命を祭る。我等は祠前なる苦苺の小屋に入りて暫く汗ををさむ。小屋守る者は翁二人なり、いづれも短き筒袖着て黄なる膚を露したるが、一人は爐の火を



動かして湯を沸らせ、一人は黒木の柱に倚りて、綴絲亂れたる太閤記を讀む。形容寂寥月儂の晝中の人なり。こゝを出づれば一路山毛榉林の蔭を上る。木々高く枝を交へて日光を漏さねば其蔭は長へに暗く濕りたり。路に横たはる岩には滑かに苔生し、土ある所は緩うして深田の如し。我等は唯山毛榉の根を此上なき足場として進む。其根もとには紫陽花白さも紫なるも咲亂れたり。鶯の歌繁くなりぬ、時雨に似たる蟬の聲はそが伴奏とも譬へつべし。又珍らかに鳥の鳴くを聞く、此山に住めるは冬に入れば羽毛雪白に化すと云。忽ち足壘を踏むが如し、年毎の落葉幾重となく重りて路に敷きたるなり、上なる一重は葉の形見ゆれど下なるは黒みて葉と土との間なる様したり。皇子石神社を過ぎて林疎に、日輪午に當つて眼眩き、汗は歩々地に霏して肉皆熔け去るか疑る。蛭蝮あり大いさ人の掌に等し、琥珀の如く透きて

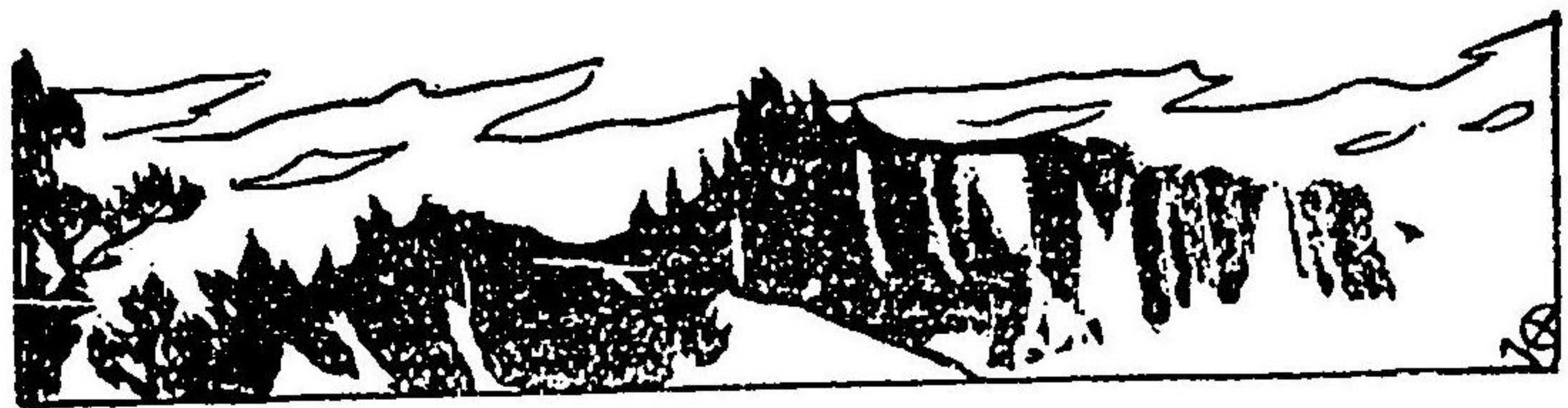


淡紅色の筋ある腹を日に晒して蠢きつゝ横はれり。巖陰なる笹の俄に音立つるを何ぞと見ればこゝには黒花蛇の相追うて走るあり。

強清水に至れり、と先達呼ばる。笹葺の小屋見ゆ、「水之上水あります」と書きたる札を軒に立てたり。我は水の字を讀んで雀躍しつつ。小屋の傍なる岩壁より清水湧けり、我等は先づその水を飲み、又その水に浸したる素麵を食へり、身頓に軽く五官の再び快く働くを覺え、始めて札なる文の摸すべからざる妙味あるを笑ふ。携來りし糞食の包を開けば小屋の男御山の名物ぞとて笹汁を侑む。箸ほどの細長き笹椀の上に幾條となく並びて、撓みたる中程のみ僅に汁の面に着きたる、頗る異様なり。なほ上りに上りて狩籠の小屋をも過ぐれば、路の左谷となりて、杉の樹隠れに狩籠の池の神秘なる藍色を湛ふるを望む。雌雄の龍時に浪を起して狂ふことありとぞ。俄に萬木疾風に鳴り黝黒なる

一朵の雲笠を掠めて飛べり。願れば莊内の平野は三度我が前に開けたり。立谷澤川は脚下より白蛇の如く紆行して遠く最上川に注ぎ、最上川は直なる銀絲を延べて末は天と一色なる日本海に入れり。鳥海の頂は深く雲中にあり、唯其裾の滑なる線を劃して最上の川口よりも遠く海に曳くを見る。狩川添川藤島などの村々最上川の此方に基布し、近く童の頭の如きは羽黒山なり、見渡す所地名を點せざる摸型圖とも云はむか。

平清水の小屋に至りて憩ひ更に進めば、林樹漸く低く、五葉松石南花の巖の上に偃ふを見る。途にて日暮れなば大事ぞ、と先達の云へば、恩繁孝繁の峻阪も一息に攀ぢ、合清水の小屋にも休らはで上る。木立三合巴に盡きて我等は毛無三合の地に踏入りたり。忽ち白雪の斜に谷を填めて横はるに逢ふ。我は覺えず踊躍して走つて先づ雪を踏みた



二八  
り。雪の縁よりは白き蒸氣騰り、雪を圍みて奇なる牛舌花咲けり。花  
瓣唯一つにして白く、形寶珠に似て立ち、その着根には太く黄なる莖  
一本現はれたり。

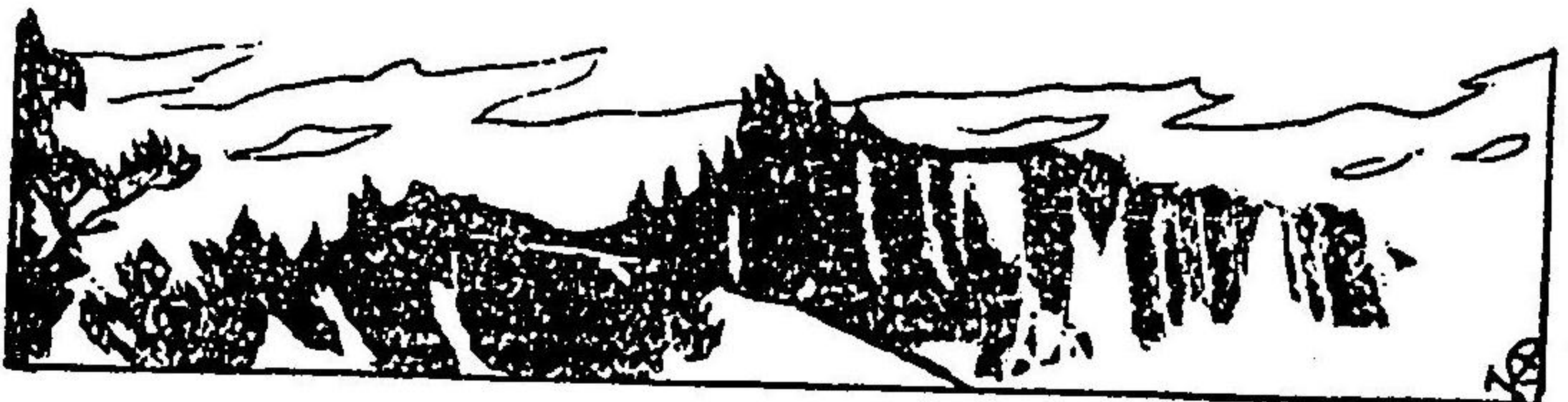
九

これよりは路と云ものなし、我等は唯水涵れたる溪澗の巖に乗り巖  
を抱きて攀ち登る。氣息は専ら鼻孔に依る、誤て口を開く時は胸喘し  
て復た身を動かすべからず。幸うじて砂礫累々たる天安川原に至り、衢  
神社を拜してなほ登れば御田ヶ原に出づ。地は稍平潤なり、月夜見命  
御田作らし、靈跡ぞと傳ふ。嵩松あり、匍匐して翠を敷けり。躑躅あ  
り、花の大きい小米櫻に等し。石南花あり、枝相擁して白き花のみを  
着く。淡紅にして紫の縞ある圃牛兒の花蒼白にして毒を含む五郎左衛  
門草の花、形幣束に似て赤き梵天草の花など、孰れも天風の威に恐

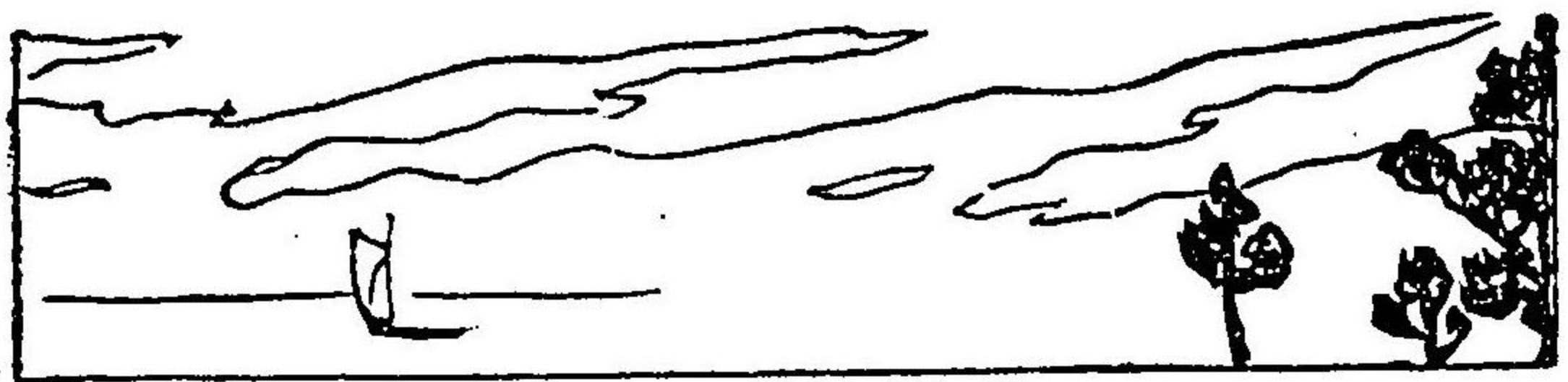


れて地を去る數寸の所に咲けり。この間に於て最も大にして著きを萱  
草の花とす。色赤黄にして半開ける鬼百合の容なるが、見渡す限り咲  
并びたる、精靈の群りて天翔るに似たり。濃き雲は絶間無く巔より涌  
きて花を籠め我等を籠めつゝ逆頰に落ち行く。纏へるもの悉く攀して  
驟雨に逢へるが如し。人頼全く絶えて唯烈しき風の耳輪に鳴ると急し  
き我が氣息とを聞くのみ。

御田ヶ原神社に至りて暫く息を休め、更に巖を攀ち雲を分けて登る。  
途にして我は甚しく飢ゑて四肢の頓に萎ゆるを覺えつ、聲を揚げて遙  
に先立てる先達を呼び食ふべき物やあると問ふ。斯うやうの事あらむ  
とて晝食の餘りを携へ侍り、とて紙に包みたる握飯を取出し、なほ己が  
用意せし味噌乾固めて輪切にしたるを侑む。巔は雲を吐盡して空碧く  
晴れたり。行手の路は明なり。我は先達に、搆はず先立ち給へといひ

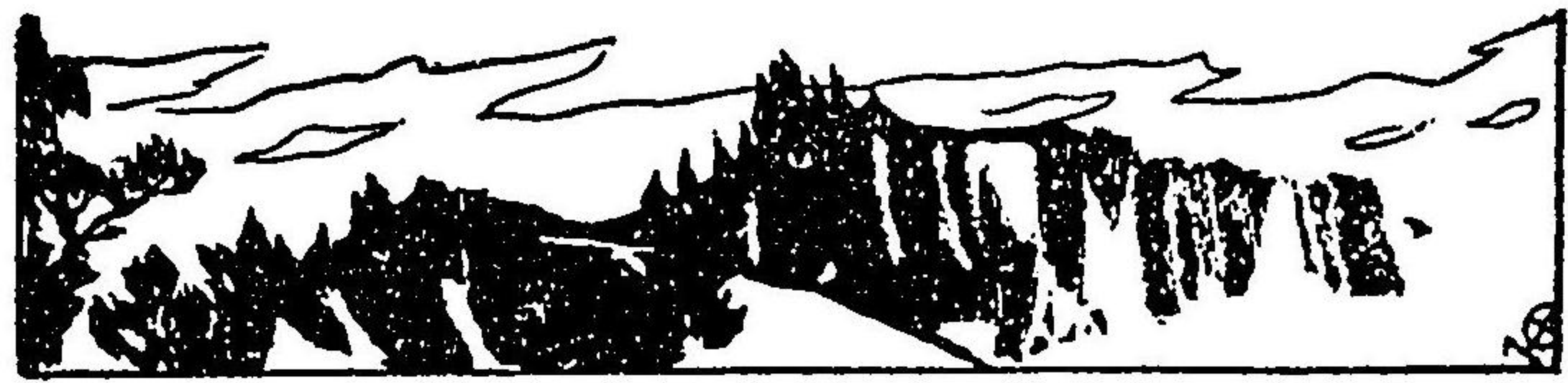


つ。六根清淨を連呼しつゝ、道者の一群來蒐れり、我等を見て「御苦勞様」と挨拶して行く。我等も一々同じ言を返へしつ。友も道者も先達も去りぬ、遠ざかり行くを仰ぐに唯白き鳥の如く、頓て巖陰に隠れて姿消えたり。我は平なる巖に踞して孤獨を樂しみつゝ、食を取れり。傍より下れる傾斜には見る限り皚々たる白雪凝れり、來し方には黝黒なる雲疊はりてその勢濤怒る大海に似たり、乳色なる雲の峯突としてその上に聳ゆる高さ五百丈にも餘らむ、其の頂は身を横へて始めて仰ぐべし、怪しき輪廓を見渡すにたゞ巨なる老婆の面にして、東に向ひ口を開いて笑へり。黒き雲の海もこの月山も彼が纏へる衣の一部とぞ思はる。この空想は我をして戰慄せしめたり、老婆の面は見る見る膨れ上りて宇宙に遍からむとす。我は覺えずこれに背き追はるゝ心地して攀ぢに攀行く。

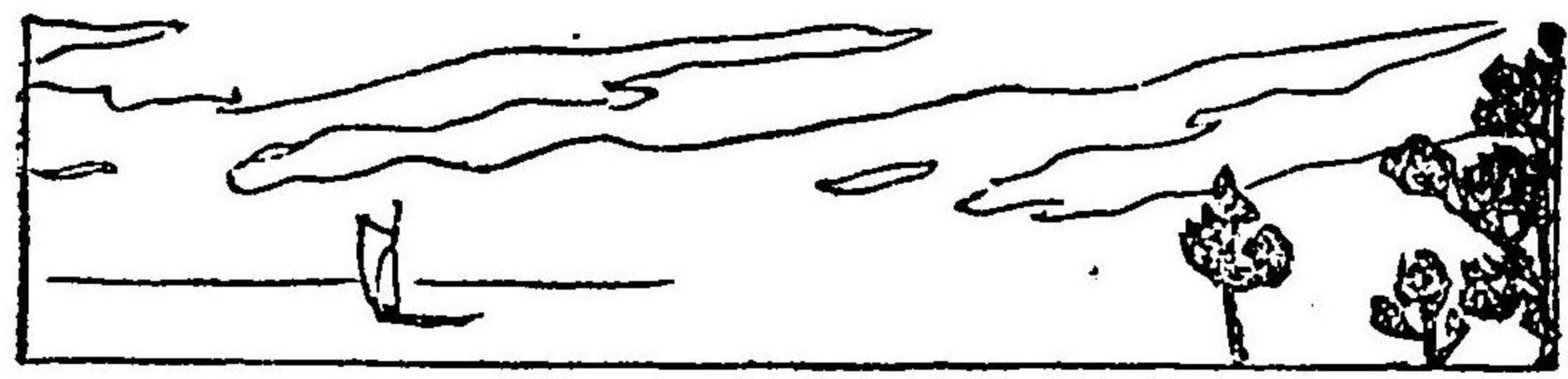


友と先達とは毒池の笹小屋に我を待てり。こゝに憩ふ間落日の逆に窓を射るを見る。奇寒俄かに襲ひて殆んど物言ふべからず、我等は先達より酒を配たれて再び血の循るを覺えつ。この小屋の前よりも雪の原斜に下れり。我等は更に勇を鼓してこゝを出で、蓬々たる天風に身を曝して巖を捕へつゝ登る。役小角蜂子皇子の靈跡慕はしくて登山したるに勤行足らずしてこゝより引返したりといふ行者尻を過ぎてよりは、再び雲暗く四邊を籠めて、踏む所は巖にあらで堅き雪なるを見るのみ。雪の涯は知るに由なし、荒き風の衝き拂ひし痕にや雪に浪の凝れるが如き凸あり、我はこの凸を階として歩一步滑りつゝ行く。若し失脚せば身は鞠の如く雲中に飛ばむ。幸にして大神は我等を退け給はず、僅に夜に入るに先だちて絶頂なる小屋の爐を圍むを得たり。

十

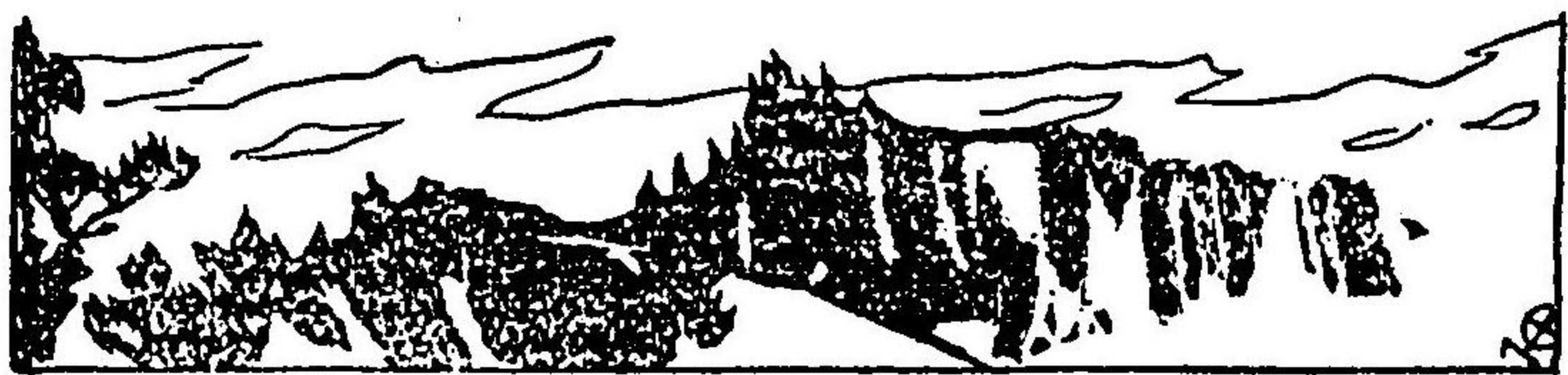


小屋は石を積上げたる垣の中にあり。屋根は苫を蒲鉾形に葺き其上に石を結び垂れて重鎮とせり。床は地に笹の葉を敷重ねたる上に席を展べたるなり。我は厚き冬襦袢を着け、小屋より借りたる褌袍を被り、櫓の燭を擁せむばかりにして僅に凍えざるを得たり。夕食の膳に陳ねたるは薊の巻糰子野蜀葵の浸物黒豆と唐辛子とを交表たるものなり。薊の料理こそ面白けれ、我は二椀を替へて寂びたる山味を喜びぬ。奥の細道の月山登りの條に曰く、雲霧山氣の中に氷雪を踏で登る事八里更に日月行道の雲關に入るかと怪しまれ息絶え身凍えて頂上に臻れば日没して月顯ると。嗚呼芭蕉はこゝにて月を見たり、其時の情感如何ばかり幽なりけむ。形ばかりの臥床に入りて眠るに風の音凄まじくして夢屢ば驚く。音に速き段あり、譬へば天上に雪の盤狀に凝りて重りたるが、この山嶺に向つて絶えず落下し、層々相打つて碎け散



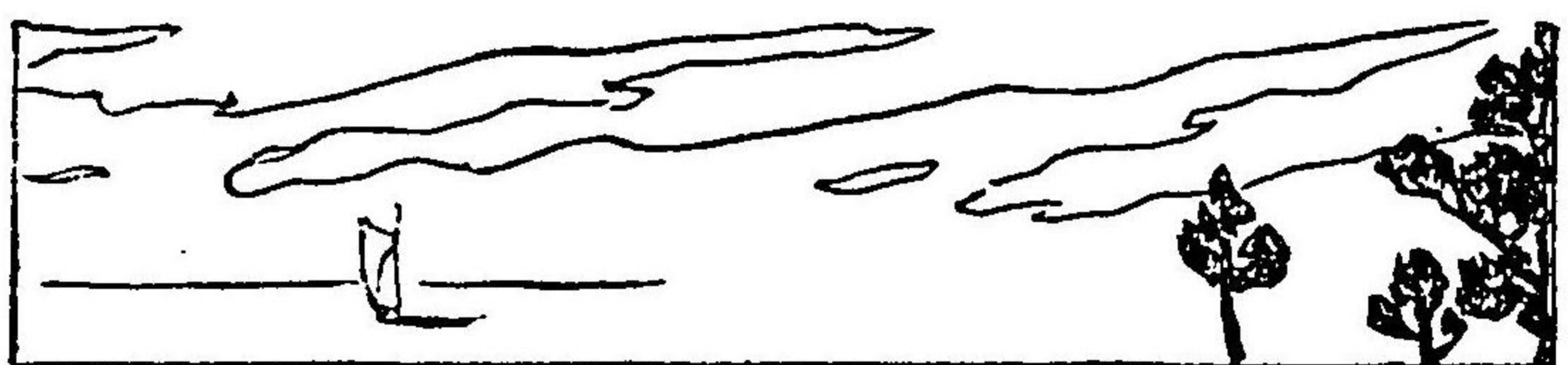
るとも云はむか。

卅日朝に至れど風止まず屋外に出づれば月山は黒き雲の薄の底に没せり、御寶前開けたり、と小屋守の告ぐるに我等は斜に上れる石垣の間に、背を屈めて風を避けつ、月山神社に詣づ。齋かれ給ふは月夜見命に在す。屋上なる日月の象の雲の流に見え隠れせる、殿内に供へたる燈の物静に燃えたる、神々しとは世の常なり。拜訖りて小屋に歸り、結束し、湯殿山指して下山の途に就く。風怒り雲相逐うて時に咫尺を辨せず、先達は鈴鐸を振鳴らしてこの音を便り給へと呼ぶ。堅く結着けたる笠簾は背に躍つて裂飛ばむとす、細かき石は走つて横様に我が脚を打てり。承暦の昔此國の刀工參籠して月山丸を打つたりと云ふ鍛冶屋敷を過ぎ、釣峯に近づく頃、割きたる如き斷崖の直に我が脚底より右に下るを見たり。左は無邊際へいの雪の原なり、その縁は海の波打際

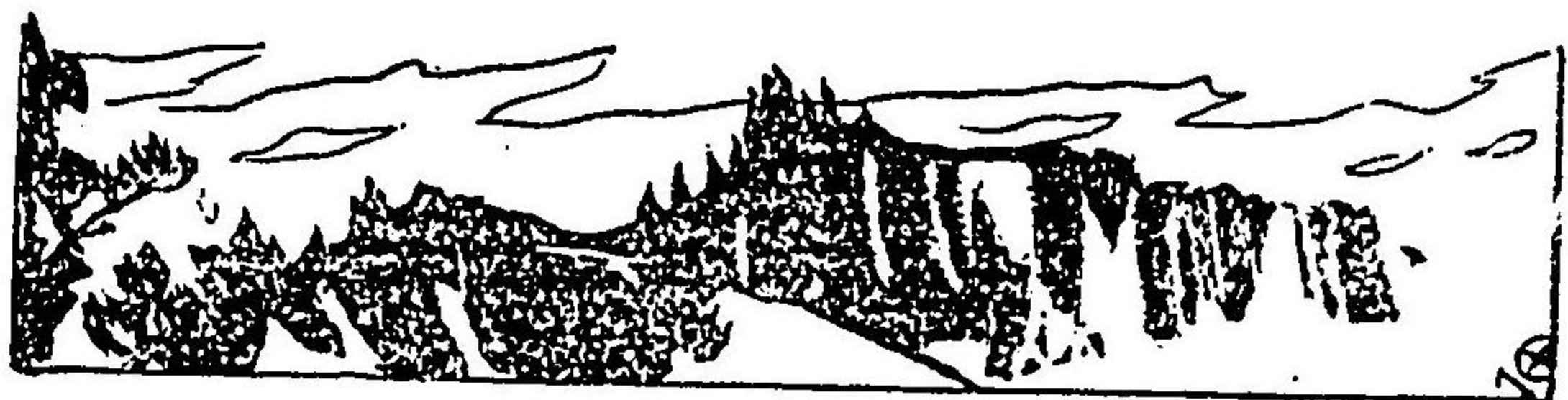


の如き線を劃せり。我が踏む路の岩の間には黄なる萱草の花咲續きたるが、風に靡き崖の方に傾きて顔へり。盡きざる雲の流は忽ち黒く忽ち白みつゝ、斷崖に逆捲き落ちて、濃き澱を作り、遙なる澱の底には爲長閑やかに歌交すを聞く。或詩人のいひける自然と面相向ふの感は今始めて我が胸に漲れり。大と小と強と弱と壯と美と如何に巧に織成されたるよ、我はこの後幾星霜を経とも、月山の名を呼ぶ毎に必ず先づこの光景の歴々として眼前に展せらるべきを信す。

姥嶽を過ぎ、淨川と稱ふる溪流を涉つて、湯殿山の靈域に入れば、風歛り雲漸く高く時に日光の漏るゝを見る。装束場に至りて装を軽くし、小舎に薬湯を酌んで進む。行者の法式としてここよりは吐唾を禁じ談話を戒め手を腰下に着くるを得ず。斯くて笹合向の險に至れば、俯して土を見ず、或は赭き或は碧き層巖巖々として活けるが如く、各



牙を鳴らして人間の肉を裂かむとす。我等は時に鐵梯を踏み、時に鐵鎖に縋り、身を圓め身を翻へして下り行く。忽ち奔流あり巖を噛み我が脚を噛む、所謂水合向の難所なり。水の勢急にして疲れたる足支ふるに難く、水より出でたる巖は苔滑にして捕ふべからず、險極りて胸中念無く想無く危をも亦思ふ遑なし。先達は莊重なる一種の節もて三山の祝辭を唱へ行く、「……此の故に地上靈域多しと雖も三山に勝れたるは無し三山は金銀を土とし珠玉を石とし甘露零ち寶泉湧く五味藥湯溪澗に迸流す其の奥の院に至つては巒峯高く聳え溪壑深く下り石徑崎嶇として鳥獸も輒く攀縁し難し……」この奥の院とは即ち湯殿山を指せるなり。この嶮を踏んでこの文を聞く、肌に粟を生ずるもの我のみならず、横なる絶壁に着け、足を前に向くる能はず、蟹の如くに進む。このあ

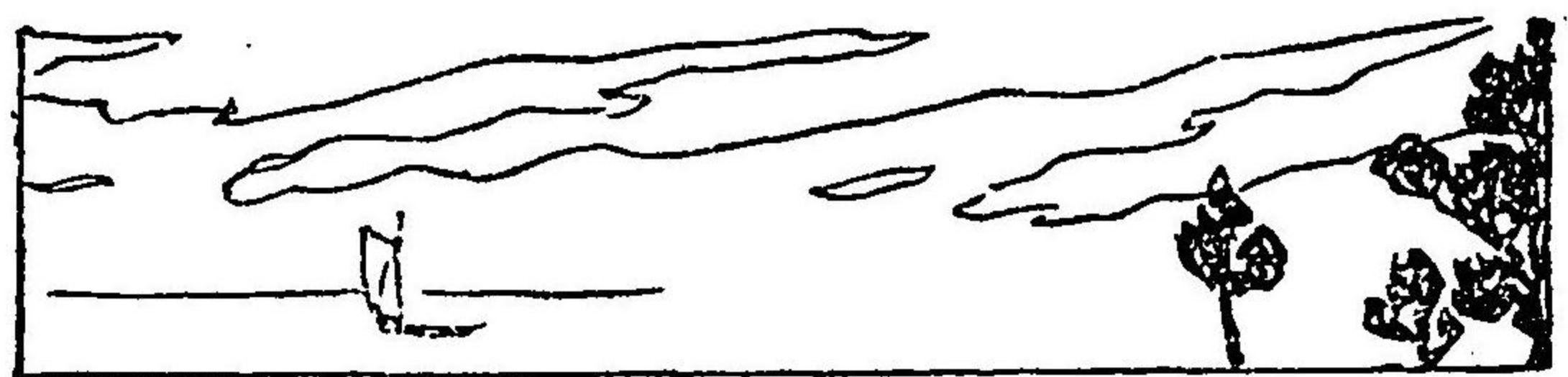


たり巖の上にも流の底にも森物散布けり、湯殿山錢踏む道の涙かなと  
會良の吟せしは此處の趣なり。

三六

頓て我等は湯殿山神社を拜するを得たり。山といへど必ずしも山に  
あらず、神社とは申せども社殿あるなし、神か巖か、神か湯か、拜す  
れば薰赫の氣面を灼く。古來この境を極秘の靈場として人に語るを禁  
ず、故に又語らぬ山と稱ふ。一度詣づれば欽戀の情永く動いて止まず、  
故に又戀の山とも呼べり。我は明確をのみ喜ぶ時代精神に反きて堅く  
神戒を守る者なり。

爰を巡りて磊石を踏み行けば、山裂けて唯だ數十丈の鐵梯と三條の  
鐵鎖との垂直に下るを臨む。御瀑といふ飛瀑は右に近く雷聲を轟かし  
て白き霧梯鎖の半を捲けり。我は命を神に任せてこれを下り、更に膝  
を没する溪流を涉り、苦難を嘗め盡して辛うじて仙人澤の小屋に至れ



り。こゝにて湯殿山神社の神官より心籠めたる晝食を饗せられ、それ  
よりは再び山毛櫨林の蔭を踏み、鶯の歌に送られ蟬の聲に迎へられつ  
つ、笹小屋に下り、こゝに全く三山の靈域を辭しつ。更に息杖を飛し  
て直下りに下るに、田麥侯の村眼下に現はれ、田の薫り高く騰れり。  
先達は「やつと里の香がしました」と呼べり。村に入りしは午後三時  
頃なり。溪を挾さみて山高く翠を滴し、溪には田麥川潔く奔り、家  
はその山と溪との間に散在せり。地勢甚だ鹽原の勝に似たり。黒き温  
泉涌く宿あり、日高けれどこゝに一泊と定めて、先づ浴し、溪流の音  
に夢を誘はれて午睡を貪る。晚餐に田麥川の鱒あり、美味言ふべから  
ず。麥酒やあると問へば、括袴穿たる姉様、突立ちし儘、左様の物見  
たることなし、と答ふ。

卅一日味爽にして立ち、朝濕快き岨路を幾回りして、大網の村を

莊内の山本

三七

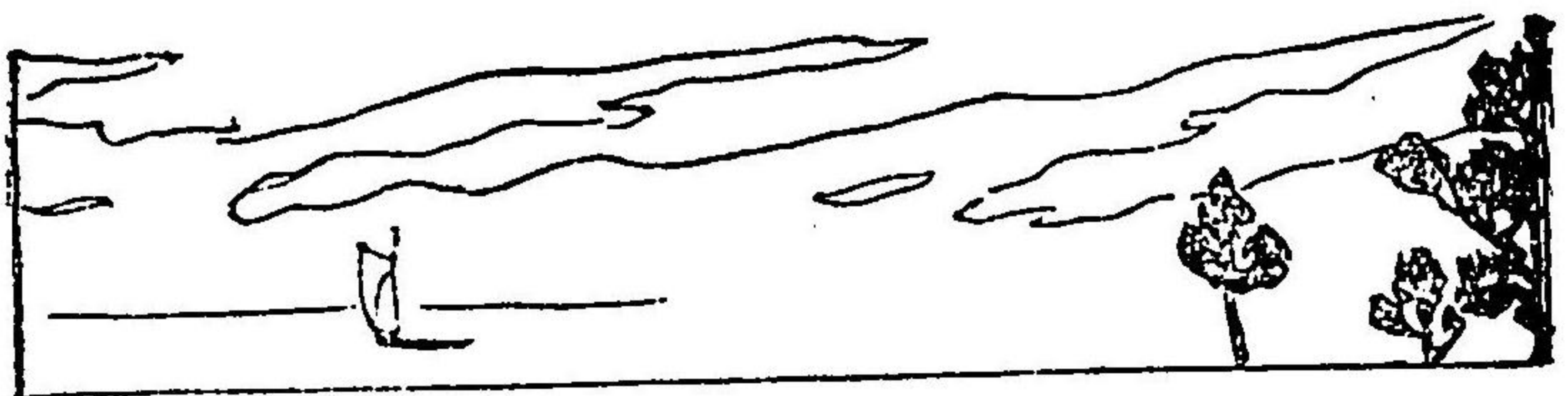




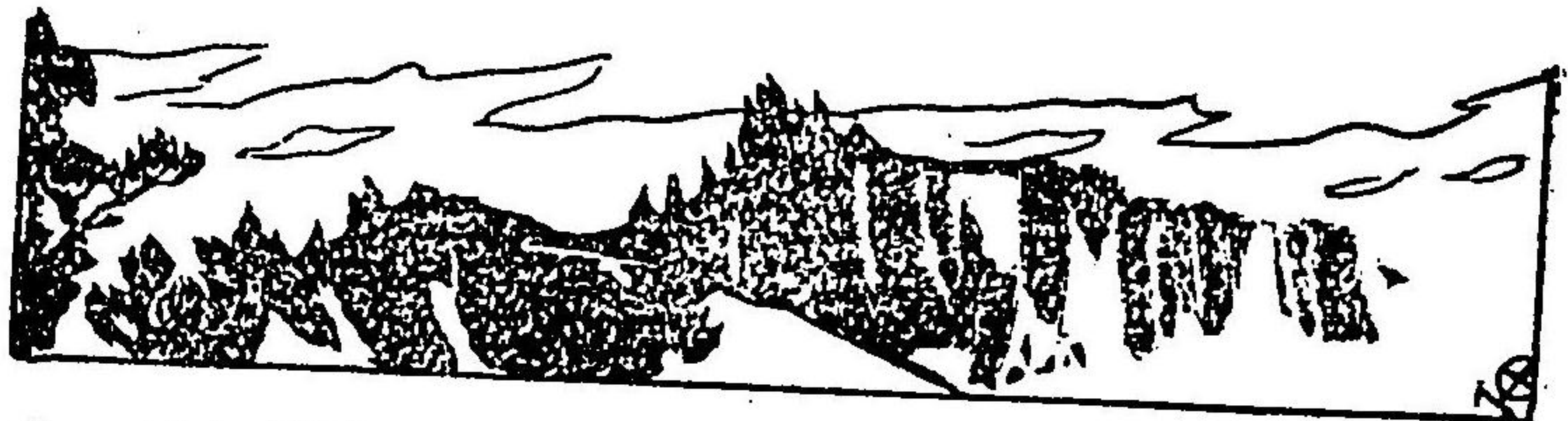
越え、足痛き石高道を辿りて、正午近き頃越中山の里に着く。我等はこゝに至りて始めて平地を踏みたるなり。東橋といふ長橋を渡る。下に梵字川淺くさゝらぎて流れたり、笠着たる男水中に立ちて鮎を釣る様宛然繪の如し。橋の袂に熊出の家々あり。小憩して暑き田圃道を行きく、板井川の里に入る。小川に臨める茶亭に入れば、麥酒あり、我は直にその一瓶を仆して久しき渴を醫したり。道者の一群あり、軒端なる水桶に冷したる胡瓜を一箇づ、取りて食めり。橋を渡りて角兵衛獅子來る、川に泳ぎ居たる童男童女は一齊に岸に上り、黒き肌より雫滴らしつゝ獅子の藝を見守りたり。我等はこゝにて先達に別れ友と二人俤を聯ねて快き夢に遊びつゝ鶴岡の町に入ぬ。

十一

鶴岡には友明次郎君の弟にして法學士なる昌三君住めり。法律を説



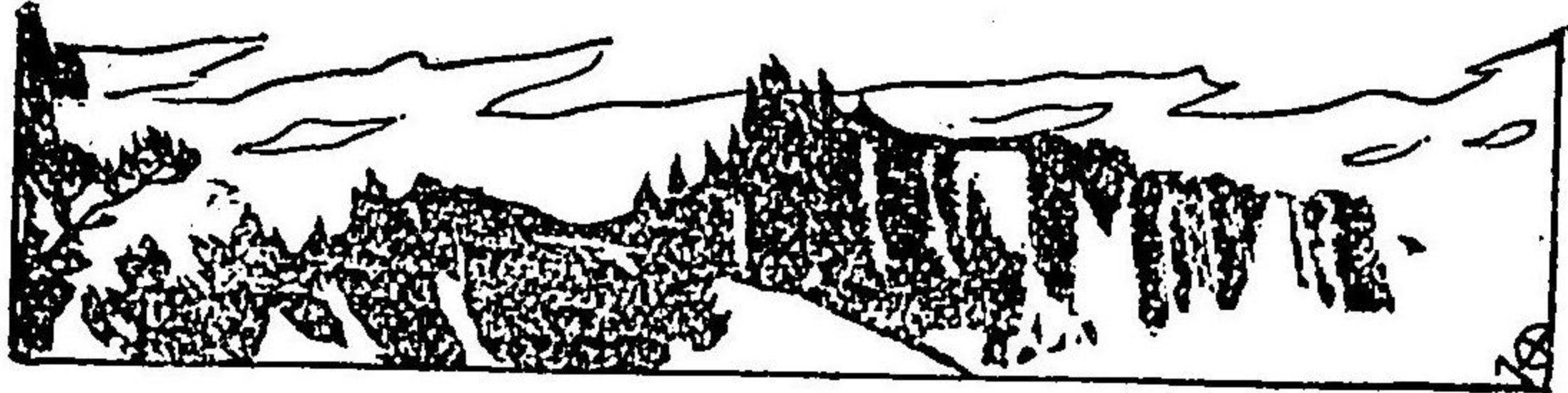
くと共に亦よく文藝を語る、時に文藝の眼もて法律の問題を批判する事あり。この夜は相馬君兄弟莊内新報主筆川崎春江君等と宴したり。莊内の酒は芳烈ウキスキーの如し。魚は日本海より獲たるもの、肉の締りたる殆ど鳥獸の肉に近し。文藝の話、法律の話、新聞事業の話、莊内風俗の話、鶴岡に六尺を越ゆる巨人六人ありと云話、鶴岡に九升の酒を一息に飲乾す鋸の目立の老爺ありと云話など、談は漸く奇に走する時、昌三君傍なる禿頭の翁を顧みて、君よ例のボン／＼時計の物語して遠來の客を慰め給へと云。翁酒循りたる頭一撫して又人を肴にせむとし給ふかと先づ憤りおき、聲を和て、されど今宵は心地いと宜し、自ら進ても彼の物語せむと思居たる折柄なり、客人聞き給へ、物語は我がこの頭に美しき髮生ひし頃のことなり。我は酒に溺れ女に狂ひて親より譲られし資産は盡く擲ち、なほ借得らるゝ限を借巡りしが、



果は債鬼雲の如く集り来りて日も夜も安き心なくなりぬ。斯うやうの折には面白き智慧の出づるもの哉、時は夏の盛りにて、我が住みし町に劇しき赤痢流行せり。我は先づ財布の底はたきて酒を買ひ来り、さて患者の家に警官の貼る札に倣ひて、我が家の門に「赤痢あり」と記したる紙札を貼り、晝も戸を鎖しおきしに、人の来る足音頻りなれど、皆札を見て驚きて引反へず氣情なり。妙計中れりと可笑しく、獨り打寛ぎて彼の酒飲み居たる心地云はむ方無し。斯くて終日飲みて夜に入り夜も更けなむとするに、奥は高まり遂に彼を訪はむと思立ちぬ。彼とは其の頃最交り深かりし娼婦なり。家を空しくして裏口より出で、廓に行けば、人通ははや稀なり。自作の俚歌を口吟みて彷徨れば、彼疾く聞付けて樓上より見下したり。この樓にてはもはや我を信せず、金を見せずば登ることを拒むなり、女我に、持来れりや、と手真似も



て問ふ。もとより持来らず、と手真似もて答ふ。左らば暫し待て、とて部屋のうちに金に換ふべきものを求むる様なり。女も我が爲に衣類調度残りなく典したれば身一つの外に價ある物のあるべきやうなし、酔ひたる我は口笛吹き欠伸高くして急立てたり。女頓て柱にかけたるボンボン時計外して扱帯を結びて下したり、賢しき女よと心に稱へつつ手を伸べて取らむとするに届かず、女更に引上げて蚊帳の釣手を繋ぎて復下しぬ。斯くするうち時計はなほ止まらずで空中に垂れつゝ高らかに十二時を報じたり。この響を怪みて、樓下の者戸を開かむとする刹那我は躍つて時計を抱へ、扱帯を地に長く曳きし儘走つて質屋に至り、金を調へ得て悠々として彼の樓に登りぬ。翁この滑稽なる光景を身振り交へて語るに可笑しさ限なく、嘗て聞きたる人も腹を抱へて笑へり。



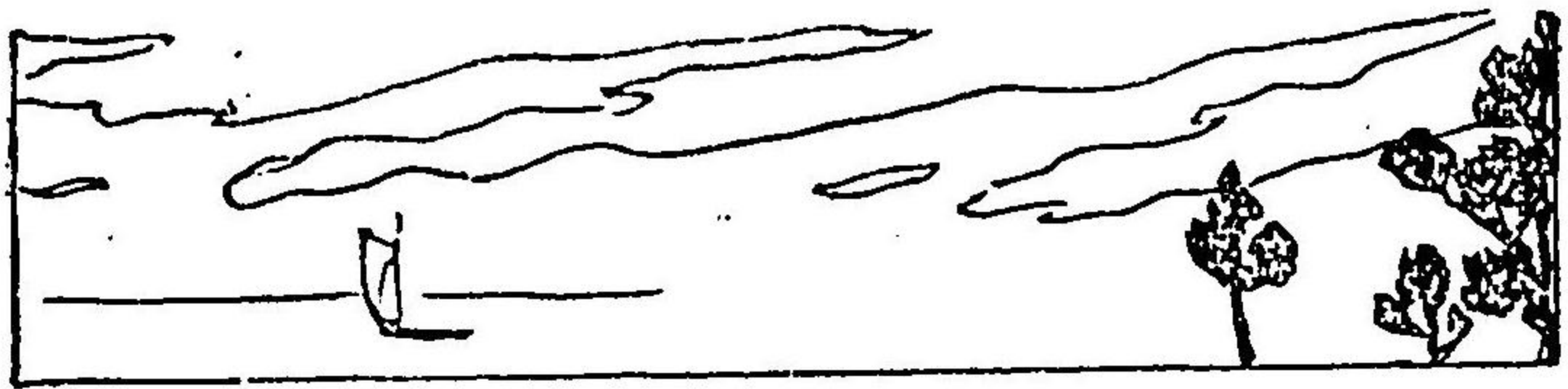
宴は漸く閑にして與は愈よ薄く。座に歌女あり、此邊の古き俚歌あらば聞かせよ、と云へば、女即ち絃を撥つて歌ふ。歌に曰く

おばこ來るかやと、田圃のはんづれ迄、出て見たば、おばこ來もせで、用も無い、たんばこ賣なの、觸れて來る

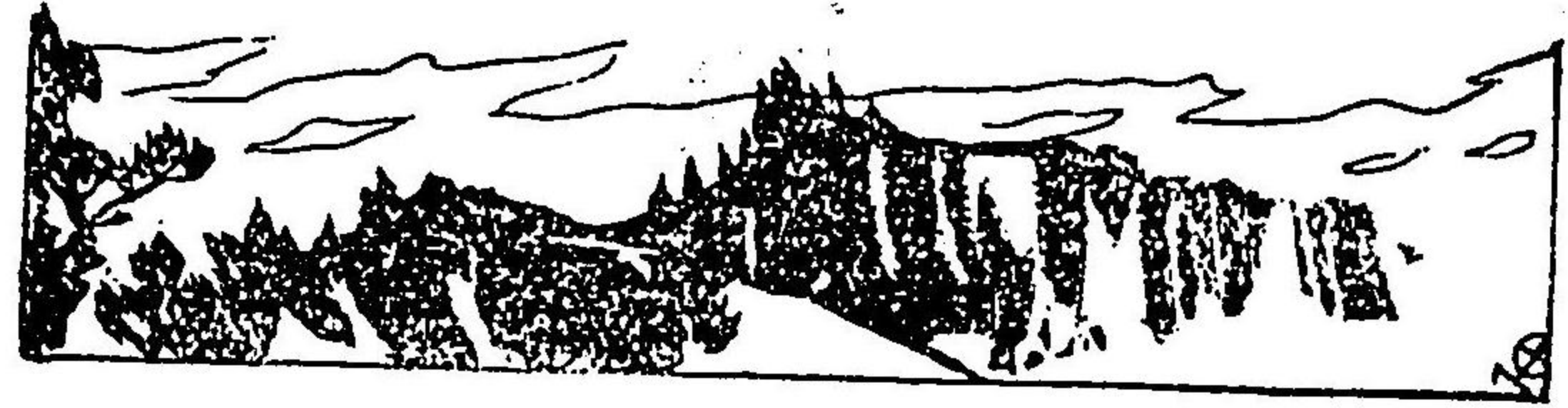
「おばこ」とは長女ならぬ娘の稱(大葉子にて、この節の唄は大葉子を悼みし謠の遺りと云説あり)「見たば」は見たれば、「たんばこ賣なの」は煙草賣のといふ意、この「な」は休辭なるべし。煙草賣といふ行商のありけるならむか。おばこ煙草との音相似たるも故とらしからず。情あり景あり俗中雅あり、其調亦頗る野趣ありて吟するに足れり。

## 十二

莊内の山は見たり、莊内の海を見ばや、とて、八月一日川崎君と共に俥を驅りて三瀬に向ふ。今日もよく晴れたり、朝風爽に吹きて田の

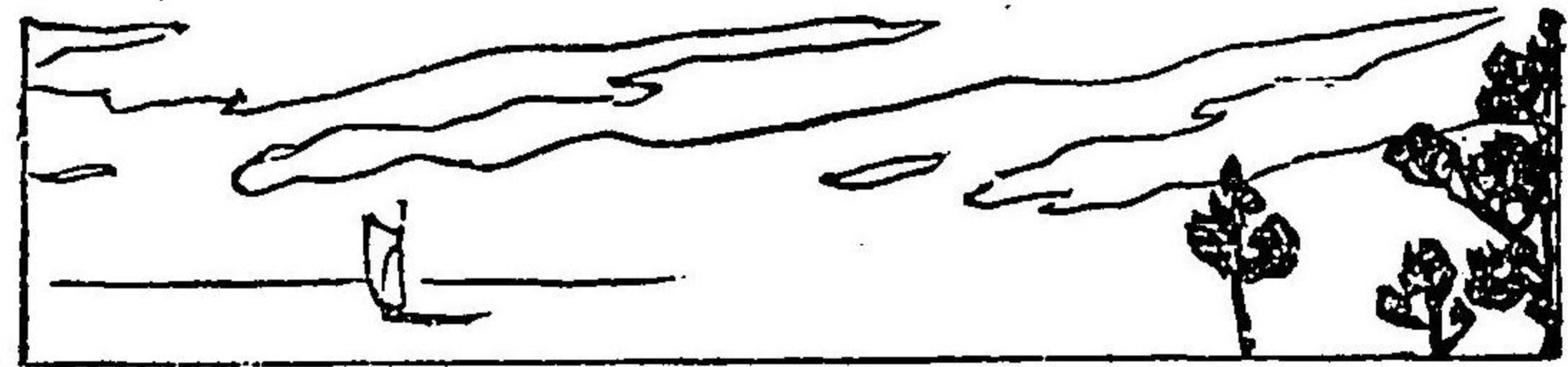


蕪り快し、低き山翠屏を聯ねたれど鳥海と月山とは雲に隠れたり。水澤に憩ひて車を繼ぎ、更に矢引峠の小舎に休らふ。この峠を越え降矢橋を渡れば海風發々として面を拂へり。青き田の彼方に三瀬の家々、岸に立つ巖礫の白きも見ゆ。村に入りしは午後一時頃なり。先づ石塚社司の案内にて氣比神社に詣つ。地は清き砂なり、山毛榉樅楓松など冷かに繁りたり。境内寂として遠く鶏の鳴くと鶯の轟くとを聞く。この社は越前なる氣比神社より勸請せしにて、保食神仲哀天皇神功皇后を祀れり。社前には蛇を繪ける繪馬、鐵もて小さき寶劔の形造りたるもの多く掲げたり。社より右に、杉の根の自ら階を爲せるを踏んで、稍下れば、大の池と稱ふる靈池あり。水は藍碧の色を凝らして一波起らず、汀に列立てる山毛榉の樹は低く枝を垂れてこを衛るに似たり。背偃まりたる老爺あり、岸なる鳥居の下に跪きて池を禮拜し、懷より



四四  
繭を輪形に緊きたるを取出て鳥居に懸けて去れり。我等はこゝを辭して村に歸り、旅籠屋にて晝食喫む。膳に上れるは鯛鮓鮑章魚などなり。我が舌未だ斯る味を嘗めざりき。瞑目して箸を取れば其鯛たり鮓たるを知るべからず。他所のとは全く別物なればなり。我は海岸に住みしことあり、又屢ば海岸に旅行せり、然れども我が舌未だ斯る勝れたる味を嘗めざりき。友云はく、日本海の魚は到底太平洋の魚の及ばざる味を有てり、而してこの三瀬より北、由良に至るの海即ち八少女浦より獲る物は、その日本海中最も美味なるを以て鳴る、然れども世は様々にて肉堅しとて日本海の魚を好まざる人もありと。

この屋の主人船漕ぐといへば巖の奇を見せよとて伴ひて海岸に出づ。風は息止むるばかり荒く吹けり、黒き日本海は沖の方にも浪を揚げたり。岸には銅色の巖亂れ立ち怒潮翻へつてこれを吞吐し、越えたる水



は巖の間に凄じき渦を巻けり。漁者數多あり、男も女も身に一絲を纏はざるが巖より濤に飛び濤より巖に攀ちて鮑を取る。これを見て我は我が筋に骨に力の充ち渡るを覺えぬ。我等は小さき漁船に乗り、主人と一人の若者と船夫になりて、巖を繞ひつゝ岸を離れたり。船はあらゆる方向に揺れて時に船底の半を空に曝し、濤の飛沫は一搖毎に頬を撲てり。岸には高き巖奇を競ひて聳えたり。碧き濤の碎けたる儘凝りたる如きあり、雲の峯天上より崩落ちて暫く消え去らざるが如きあり。この間に大なる洞窟の口を開くを見る。船夫蝙蝠穴とは彼處なりとて船首を轉らし、船は狂舞しつゝ窟内に入る。危きこと云ふも更なり。極まる處は四十間の奥にして、奇臭漂ひ、水黒く氣黒く、唯だ斜めに鋭三角を爲せる洞門より一道の光の岩壁を射るあるのみ。主よ檀那に舞を見せよ、とて船夫權もて舷を亂打す。其音岩に響き水に響きて宛然



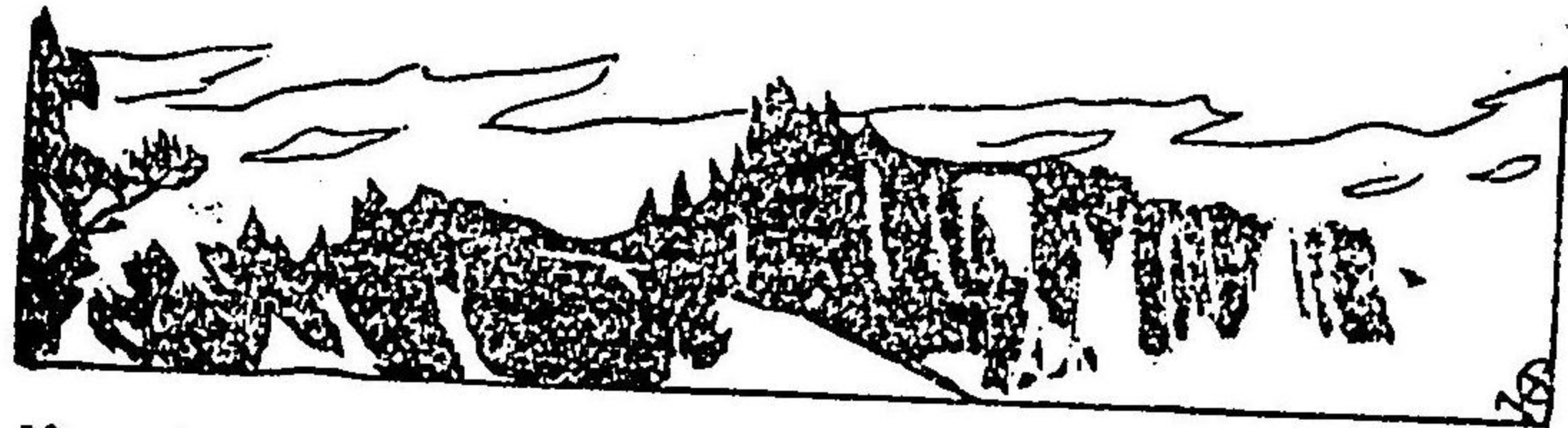
巨鐘を撞くに似たり。忽ち物あり、岩壁より湧きて縦横に翔けり、氣味悪き風頻りに面を掠む、洞門の光に透かして影を逐へば悉く蝙蝠なり。陰森の境久しく住まるべからず、遁れ出で、更に洶湧を凌ぎ、花立巖豚巖など過ぎて八少女の洞に至る。蜂子皇子こゝにて麗しき少女八人藻を探りて洞に運ぶを見給ひ、故を問ひ給へば一人の少女、こは玉依姫大神神遊の靈窟なり又これより東方に靈山あり尋ね奉るべし、と告げて皆洞の中に消えたり。皇子奇異の思を爲しそれより三山に赴き給ふと傳へたり。又この洞遠く羽黒山に通じて、出羽の宮炎上の折ここより煙噴きたりとも云ふ。惜しい哉往年巖崩れて洞門を塞ぎけるが、洞守る家斷絶したれば洞門今に至るも開かず、僅かに注連張りたる邊を其の跡ぞと知るのみ。この地方には相應しからぬことならずや。我等は船を漕寄せてその崩れたる巖に攀ちて慰ふ。願みれば海變入して



自らこの靈境の門を成し、其の周りに聳り立つ巖は寔に奇中の奇なり。譬へば裸形の行者身の丈百尺なるが立并び、各空に嘯いて雲を招くともいはむか。こゝを出づれば濤稍低し、我等は載せ來りし酒酌み交はして徐に由良の港に入り、再び俣を馳せて黄昏の頃鶴岡に還りぬ。川崎君云、今日の遊はよく要領を得たり、莊内海岸の奇勝は八少女の浦に過ぐるは無し、人動もすれば湯の濱加茂の岸を第一とするは大に誤れりと。

十三

鶴岡の朝湯に面白きことありと友のいふに、二日の朝六時過ぐる頃湯屋に行きたり。脱衣する所僅に六疊ばかりなるに、二十人ほどの老人圍をなして坐したり。赤裸なるもあり、衣を半纏へるあり、皆湯上りの顔てらくとしたるが、煙草吹き茶を喫しつゝ様々の事を論へり



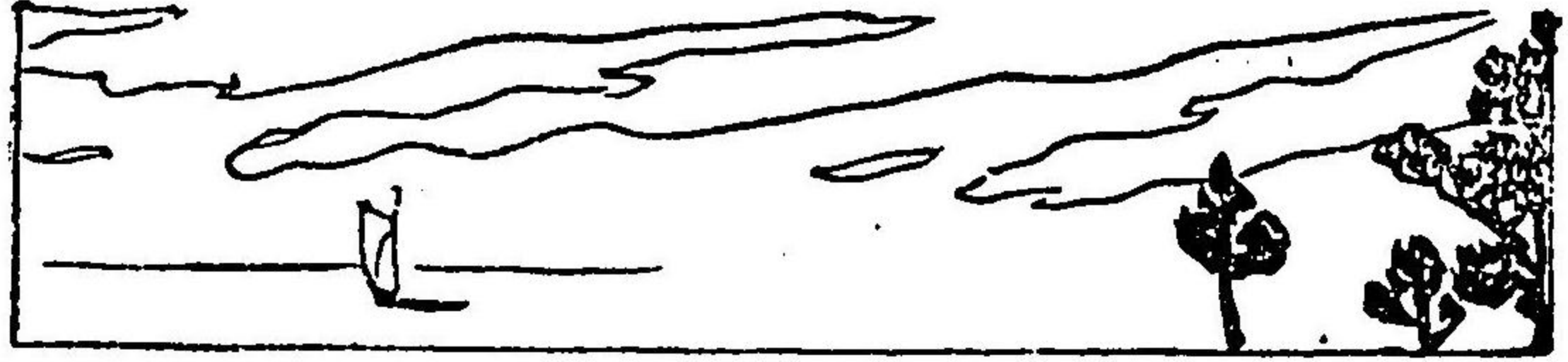
四八  
我が入りたる時は青年男女の交際議題となりて、終に必ずしも不可ならず唯東京に行はるゝ如きは不可なり、との結論に達したり。此時突如として一隅より英雄短身論を唱ふる者あり。その言に曰く、  
すさまじ人(豪い人の意)は體の小つちやいもんだ、秀吉だつて、然だし、信長だつて然だし、木村重成なんか、膝の下どげに(非常の意)短けもんだの、

新議題は提供されたり。老人等は昔物語にて讀みたる或は近く子孫等より聞きたる英雄を記憶に存する限り繰出して、其身の丈の考證を互に求めけるが、題の難きに拘らず論なかなか賑やかにて、我が浴了へてこゝを出づるまで肯否何れとも決し難かりき。彼等は概ね一家の主人にて、目覺むるや先づ朝湯に浴し、二三時間の會議に知識の交換を遂げて歸り、扱て業に就くなり云ふ」



酒田も見たし飛鳥も床しけれど、豫定の日數已に盡きたれば我は再遊を誓ひつゝこの日午前九時の頃友等に別れて、獨り歸途に就きたり。車を俣ひて鶴岡の町を後にし、終日車上に揺られ、午後四時を過ぎて新庄の停車場に着き、上り列車に搭じて、翌三日の午後にははや編輯局に筆執る身となりぬ。人呼び人走り電鈴鳴り送稿機響き筆飛び紙舞ふ。我はこの間に在りて最上川の船夫を思ひ月山の小屋守を思ひ、染々人の生活の多様なるを感じたり。





## 秋田めぐり

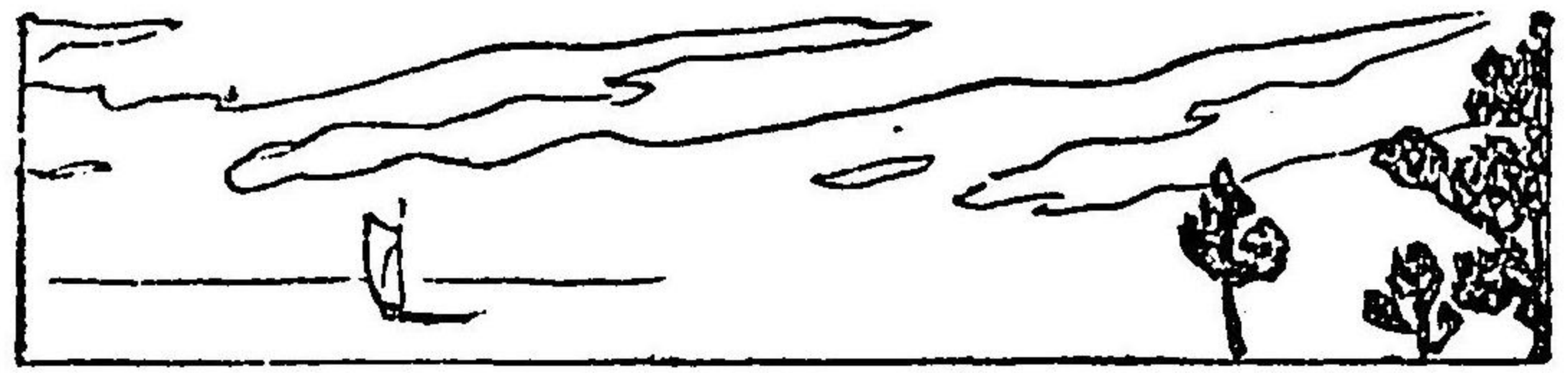
(明治四十二年七月廿二日  
より同八月四日まで)

秋田時事社、東北公論社、秋田魁新報社の主唱にて、東京及び山形縣の新聞雜誌記者を招き、秋田縣内を巡覽せしむ。縣廳此舉に賛し、森知事を始め大に幹旋の勢を執り、沿道各地市と云はず町と云はず村と云はず官民一致誠意を盡し、記者團の一行を遇する殆ど王侯を迎ふるが如し。秋田の地たる富源到る處に在り而かも縣勢の進まざるや久し、その已に完成せる事業も多く世の知る所とならざりき、今や機熟せり、縣民は強く自覺せり、勇往邁進の準備は成れり、この空前の款待は今後屢ば自縣をして輿論の題目たらしめむとする熱望の表顯と見るべきなり。



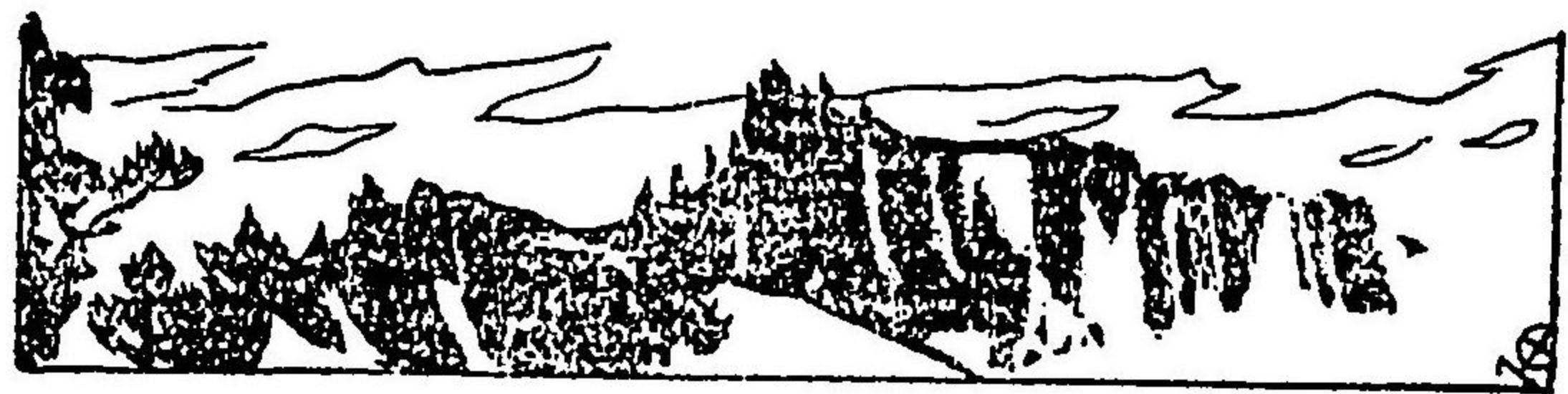


一行の特別車室を領して上野驛を發したるは七月廿二日午後八時廿五分なり。我も亦幸にこの行に加はることを得たり。小野小町を生み、平田篤胤を生み、佐藤信淵を生み、内藤湖南を生み、青柳有美を生みたる國土の雰圍氣は如何に、これを見ずんば天下の湖沼を論ずべからずと云はる、十和田湖の水の光、頼古狂生をして男子一搜、雄鹿島、松洲始覺屬、妖嬈と稱へしめしその巖の姿は彼の如きか左の如きか。想像の夢を車は載せて雲暗き夜を走る。福島驛に覺めて廿三日の曉を見る。峠驛に至れば青年樂隊の我等を迎ふるあり。自活の途無き者を收容して會員とし、組紐の製造に従はせ、彼等に自營の精神を養はしめ、遺棄されたる生産力を活用しつゝある米澤商會主近藤富重氏の率ゐる所にして、樂手は皆氏の仁恩に依て蘇し得たる人々なり。日は漸く烈し、されど綠陰に鶯の歌を聞く。米澤にして會遊の月山に逢ふ。秋田



縣代議士近江谷井堂氏山形驛に一行を出迎ふ。大石田を過ぐる頃最上川の上流を左に見る。烏海の雪のあたりには白き雲搔曳せり。及位驛を越えて車は秋田縣なる峯巒の間に快く進み入る。

今我等の左右に展せらるゝは雄勝郡の山河なり。院内湯澤の驛孰れもこの郡内にあり。著名なる院内银山は院内驛を距る西に一里の所にあり。銀價の下落に遇ひて今は縮少の方針を取れり。湯澤の町は製絲に名あり、其の雄勝製絲所の釜数は百に達し、仙北郡角館のに次ぎて縣内第二の大規模たり。湯澤の町又清酒の醸造頗る盛なり。秋田縣は東北第一の産米地なるに冬期長くして溫度の變無く天然恰好の釀酒所たり。酒商唯縣内の需要に應ずるに甘んぜず、更に技術に學ぶ所あり大に石高を増して中央都市に輸出せば、灘伊丹と對抗するの日も來るべし。郡内川連村の漆器業未だ弘く著はるゝに至らざるも進境年に見



るべきものあり。品質の堅牢を特色とす。今全村二百餘戸にして職工實に六百人を超ゆと云。彼の實業經營の偉人信淵翁の誕生地は實に湯澤驛を西に距る二里なる郡山なり。本郡の實業に勵むは蓋し翁の餘韻か。氷もて冷やしたる稻庭温鮎を味ひ、岩崎川の川風に面を拂はせて平鹿郡に入れば、平原裕達として西に開くを望む。

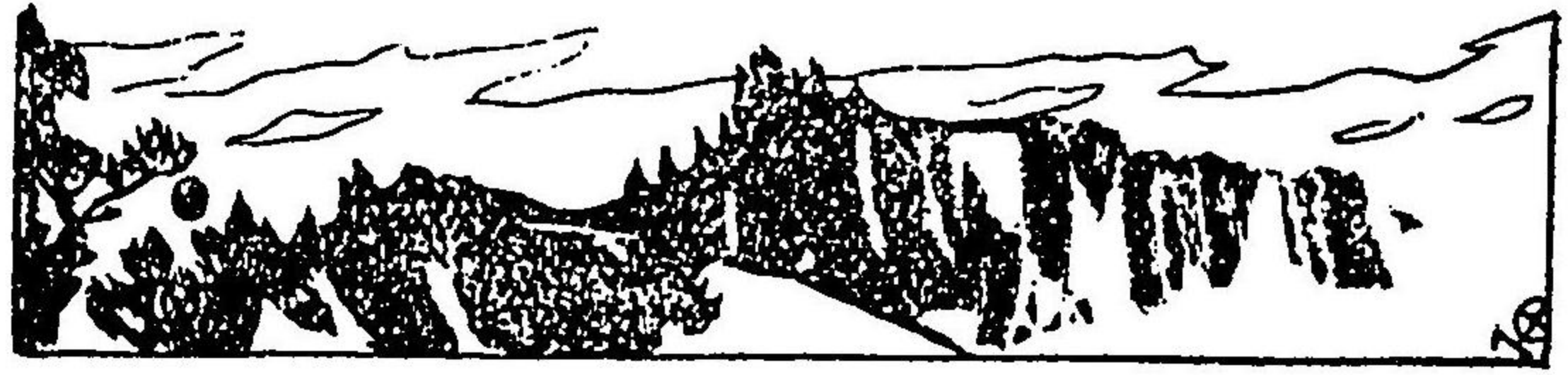
二

横手驛に着して始めて下車したる時日午を過ぎたり。一行腕車を聯ねて横手町横手俱樂部なる午餐會に招かる。樓は水淺き横手川に臨めり。この川に鳴く河鹿は聲美しくして其價賀茂川のと同じとぞ。浴了へて浴衣を纏ひ打寛ぎて一盞を擧ぐ。

縣知事森正隆氏我等を爰に出迎へて席上歡迎の辭あり。宴を撤して後、舊城本丸なる秋田神社に詣づ。社殿の傍より西を瞰下せば全町三千



戸露に陳り横手川の流は電形に町を貫きて白く輝きたり。家盡くる彼方に美田海の如く延へたるは雄勝仙北に連る平原にして、縣内産出の米穀は過半この地に實ると云。社前に記念撮影して草青き公園を漫歩し、七曲に沼田孤松等の苦戦を偲び、坂を下りて公會堂前に引列められたる軍馬を覽る。この町の邊は馬匹の飼育地にして軍馬に買上げらるゝもの年に六百を數ふとぞ。此等の産物を外にすとも横手町は其の位置に於て發展の運命を持せり。横手黒澤尻間は奥羽横斷鐵道の第二期線にして、新潟縣新發田より秋田市に至る羽越線完成せば、横斷線は更に延びて本莊に至るべく、斯くて横手は十字形の交叉點となりて貨物集散の要地となるべければなり。横手町を北に行くこと一里餘に金澤柵址（仙北郡）あり。後三年の役源義家苦戦を重ねてこの柵を破り武衛家衡を滅したる舊跡なり。本丸二の九大手口今なほ歴々指示す

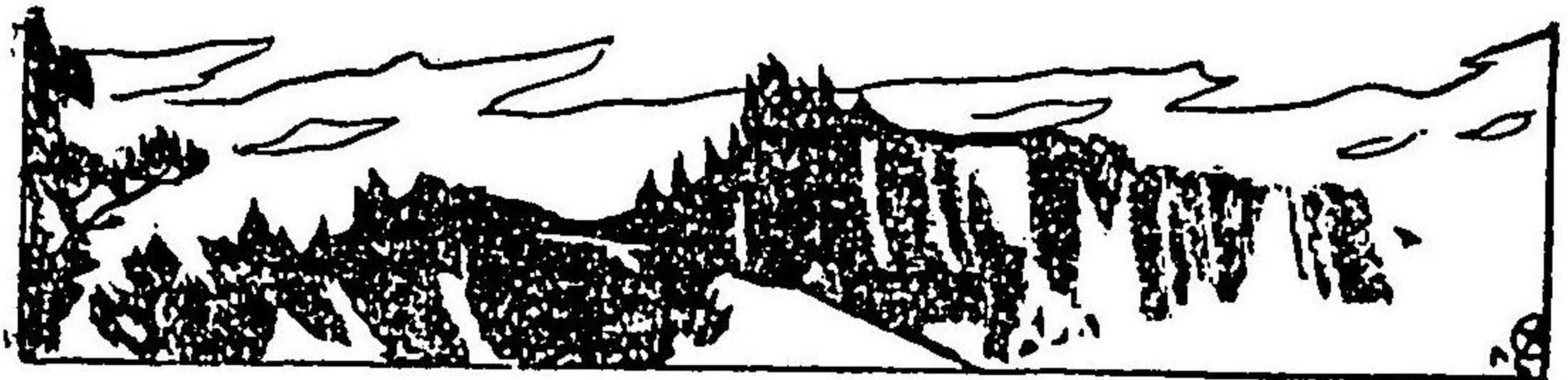


るを得と聞けど、時足らねば其地より贈る所の糧倉址より出づる焼糧を拵りて僅に古を思ひ、五時再び横手驛より乗車してなほ北に進む。

一時間ならずして大曲町に着し鞠水館を宿とす。縁高くして菖蒲池物古り、堀の内外の杉村一聯りの趣を成せるなど流石に本陣たりし名残なり。夕風立つ頃より船遊の催しあり。船は鞠子橋の下鞠子川に浮びたり。其大いさ六十疊を敷くべし。紅白木綿の屋根よりは岐阜提灯數無く垂れ、欄干には紅の氈を懸け、雪洞形の燭臺中程に列ねたる船としも覺えず。數發の煙火に送られて船は動き出でたり。この大船川淺ければ漕ぎ遣るべくもあらず、屈竟の船夫水中を歩しつ、葦と船の兩側に取附き曳々聲して押行くなり。正に是れ平相國の企てにあらずば豊太閤の好みならずや。秋田音頭舟、サイ〜節舟、麥酒舟、水舟など、前後して川を下る。各に飾れる提燈萬燈相亂れ相離れて急調な

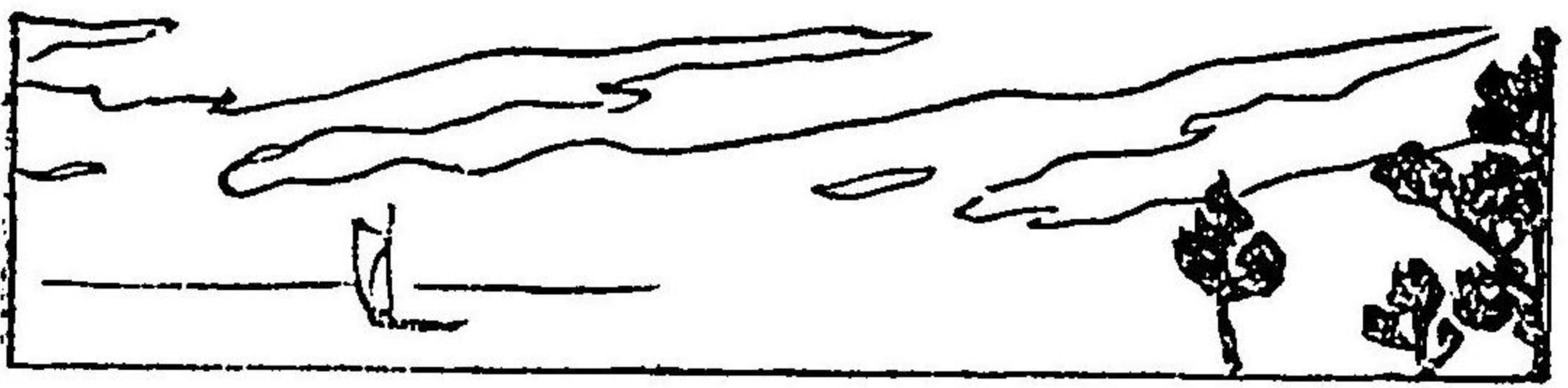


る鼓笛の韻近く遠く流る。船御物川に入りて宴を開く。七日の月は太平山の上にある、灯火に紛れず水を掠めて螢ぞ飛交ふ、喧躁の間なほ蛙の鳴くを聞く、時にわが背を擦るは川杉の梢なり。御物川を下ると一里にして船を留む。松山の山の端には四つの篝火燃え上れり。仕懸煙火一齊大船の四方に發る、仙閣の花鮫宮の燈、火は水となつて送り水は火となつて湧く。僅に光の隙を求めて遠く望めば、黒き川上より數百の流燈潮に任せ風に随つて寄せ來るを見る。ヤツサカ、スケサカ、スケサカ、サツサイ、サイ〜の太鼓は攻鼓の如く促進し、「秋田名物八森神魚男鹿では男鹿獅子、能代春慶檜山納豆、大館曲わつば」音頭の節は愈よ浮きて絃爲に斷たむとす。船は今唯光と響とに圍まれたり。豪興其極に達し滿船の男女歡呼舞踏して深更の風の冷かなるを覺えず。



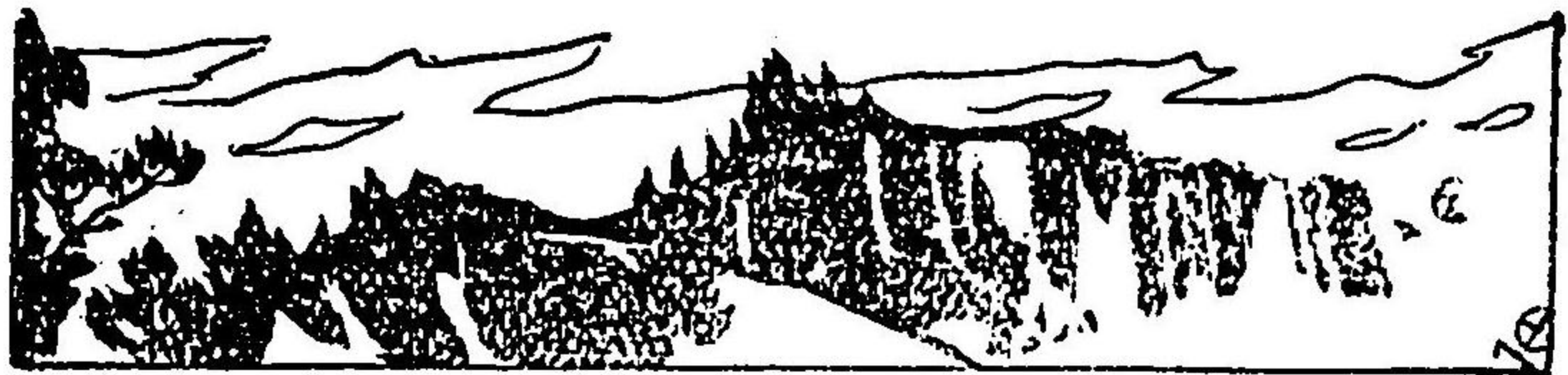
大曲町は富豪多きを以て縣内に鳴る。而して公共事業には相争つて  
出資するの風あり。維新以後順に發展して今は人口九千を有しなほ新  
町の開け行くを見る。又この地より出で、首都の商界に活躍する者數  
あり。兎角消極に傾くとの評ある縣下にこの町の進取を特色とするは  
喜ぶべし。廿四日朝九時腕車を驅り、町の北端なる農事試験場陸羽支  
場を觀る。廿九年創立以來卅六年迄は農作物の試験のみ爲し、が、卅  
七年以降専ら養畜上の研究に意を注ぎ、如何にして馬を肥すべきか、  
如何にして牧草を多生せしむべきか等の解決を求めつゝありと。完全  
の設備を見るはなほ數年後の事なるべし。

此所より二里餘の道を車に揺られて神宮寺町なる秋田種馬所に至  
る。種馬厩一覽の後坂所長各種の種馬を引出さしめて説明す。首高く



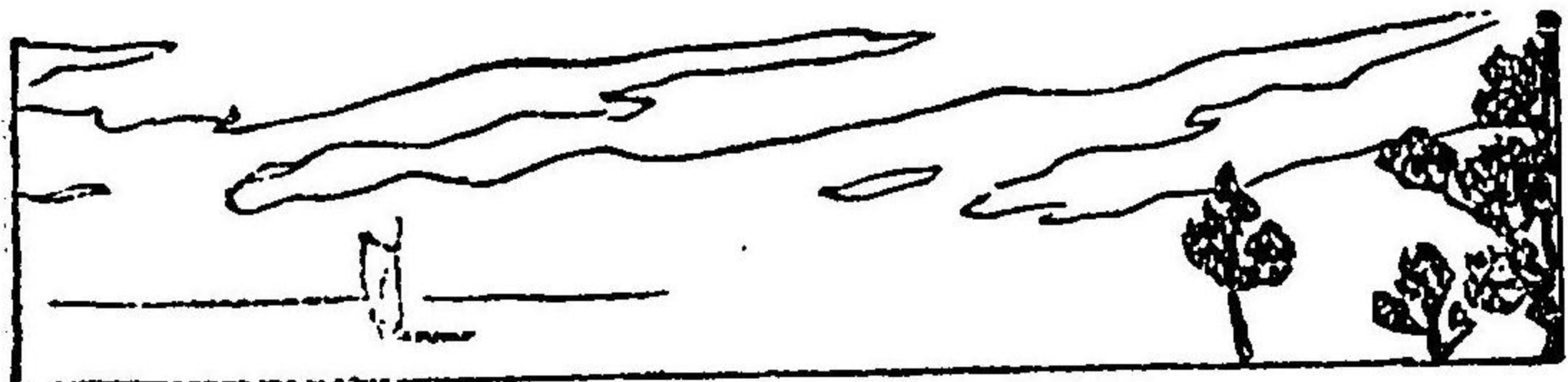
脚細きは騎乗用にして、頸胸脚の肉節樽立ちて逞しきは重鞍馬なり、  
本邦内のは勿論遠く歐米各地に優秀の種馬を求め五千六千の金を各ま  
ずして購へるなり。世界の名馬が相嘶いて其雄姿を誇る様自ら人をし  
て奔放の氣を發さしむ。總て常所に在る種馬廿九頭、多くは鞍馬用種  
にして、就中ベルシエロン、クライヂスデール、ブラバンソン種の如  
きは未だ他種馬所に見るを得ざるものなり。馬は實に秋田縣主要の産  
物にして、昨年の統計に徴するに縣内産馬の總價額五十八萬圓に餘れ  
り盛ならずや。

我等はなほ馬の鞍車運動騎乗運動を見、廣潤なる農場に至りて牧草  
の刈取、敷開、集草等皆大農法によりて行はるゝを見、飾られたる乾草  
舎にて午饗を饗せられ、午後一時四十五分神宮寺驛を發し三時秋田市  
に着す。この日酷熱坐するも懶し、我等の宿れる小林旅館は水道を利



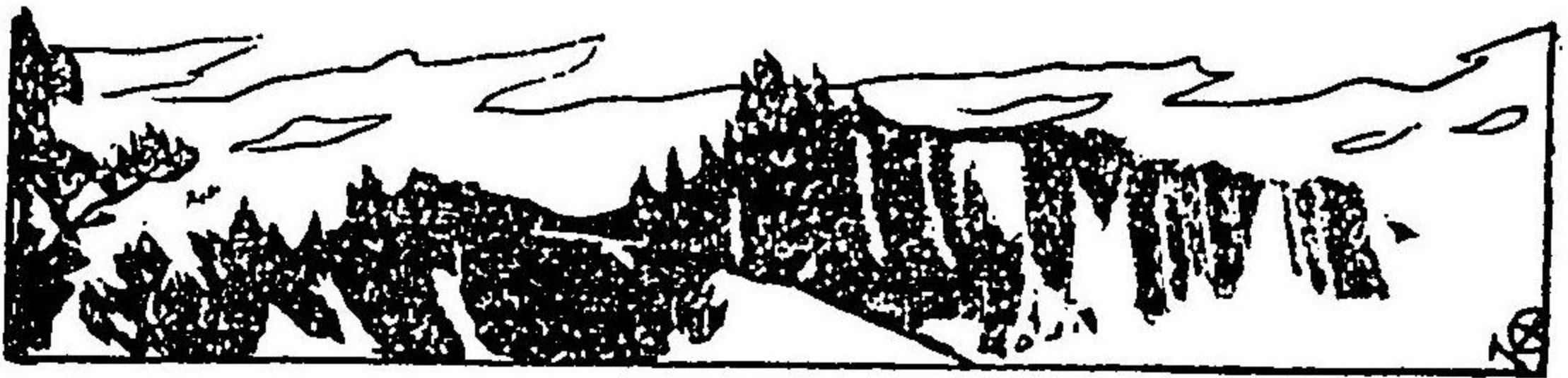
用し、頻りに人工の驟雨を屋背庭園に注げり。五時秋田縣公會堂なる官民合同招待會に赴き、七時秋田市俱樂部別館に於ける秋田市招待會に參す。庭園の畫橋徑路に掛行燈美しく、特に裝置されたる大噴水は五十尺の高さに飛騰して不斷の涼風を湧かせり。見よ竿燈の列を爲して橋を渡り來るを。竿燈は秋田の一名物にして毎年舊曆七月六日夜に行ふを常例とするものなり。二丈餘りの竹竿に横竹十ばかりを結び、これに五十程の提燈を附けたる、兩手にて持するも危げなるを、後鉢うしろはち悉まきしたる若者等或は額かぶひに立て或は肩かたに据ゑ、頭もて支へ、拇指ゆびさしもて受く。時に竹竿彎曲ちくかんわんきよくして提燈悉く横竹と直角なして垂るるも、巧に中心を取り悠悠扇使ひに餘裕を示す。隨ふ者共一齊に懸聲して勵ませ、皮裂くばかり打頻る太鼓の響勇ましとも勇まし。

竿燈や弓と撓んで頭の上



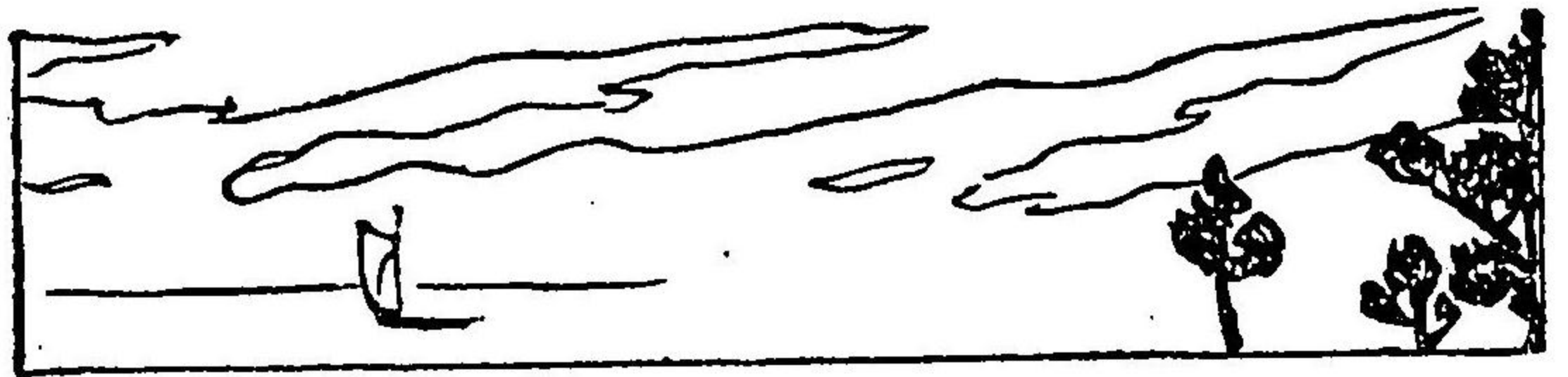
四

我は早く會を辭して宿に歸り、按摩呼びなどして宵より床に入りたれば、廿五日の朝は夙とくく覺めたり。枕頭なる魁新報を讀むに有美の「文筆國たれ」といふ論あり「さても世の中には入りもせぬ事を頭痛に病む人の多きもの哉」と云を冒頭にして、秋田縣に實業家の出づる少く文筆家のみ多く出づるを慨あはくは誤れる輩ともがらなり。人類の幸福は分業に依て得らるべし、日本は硝石を生産せむとして徒勞するよりも之を智利より輸入し別に得意とする茶生絲等を輸出するを策の得たるものとす、秋田人若し文筆家たるに適する傾向あらば大にこれを助長せしめて盛に文筆家を輸出すべし、秋田人若し實業家たる素質無くばこれを他縣より輸入して事に従はしむべし、若し然らば秋田縣の先覺者は文壇第一等人を出す能はざるを憂へて實業家の出でざるを耻とせざれ、



との論なり。我はこの際この論を敢て草せし有美を壯なりとして、昨神宮寺にて得たる微恙の頓に癒えたるを覺えぬ。總じて人の進むには兩脚を要す。この縣殊にこの縣に於ては、この際殊にこの際に於て、指導者の位置に在る人宜しくこの論にも耳を傾くべし。單に奇矯の説として一寸面白き言草いひぐさとしてのみ讀過すべきに非ざるなり。

午前九時頃森知事の招きによりて一同縣廳正廳に會す。爰に於て知事は縣治方針に就て一場の談話を爲す。曰く本縣の急務は人心の奮興と産業の發達とにあり、鳥海山の利用、男鹿遊覽の設備、又旭川の石油、七日市の無煙炭、二萬町に餘る原野の開墾等着手進歩せしむべきもの數ふべからずと雖も急務中の急務は船川鐵道の敷設と船川の築港とにありと。次いで大久保市長市の水道に就て説く所あり。爰に在る一時間頗る有益にして現時の秋田縣の眞髓に觸れ得たる感あり。去つ



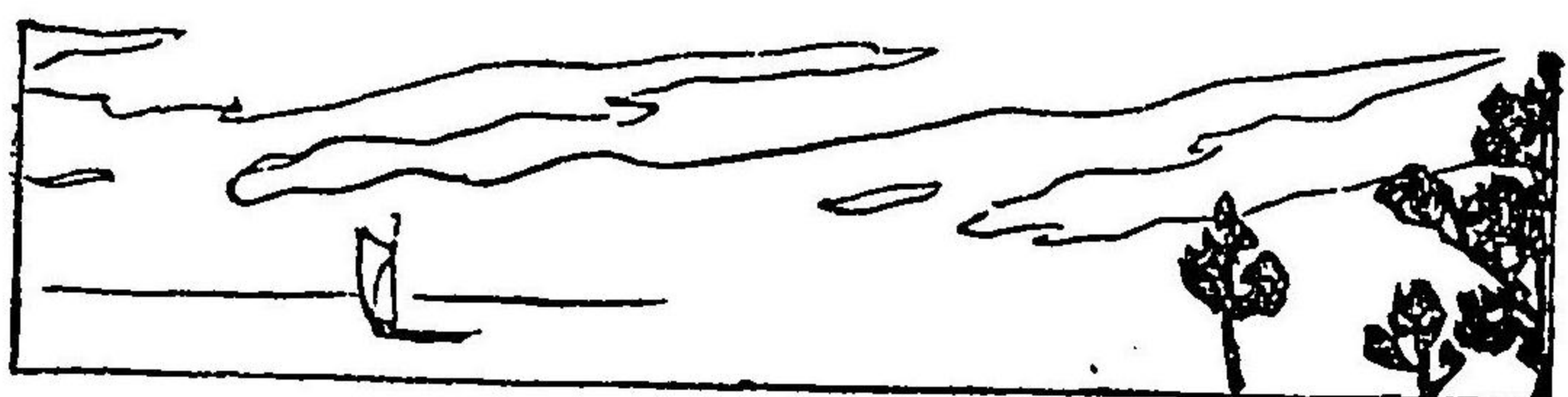
て秋田縣物産陳列所を観る、角館の櫻皮細工趣あり其の唐獅子の置物の如き殊に珍とすべし。春慶に能代春慶角館春慶の二種あるをも學びたり。後者は實用的にして前者は美術的なり、能代春慶の優なるものは其卵黄の光澤に云ふべからざる温潤の味あり、斯る物は仕上まで三年を要すと云。秋田八丈極めて廉價なり、三越にて八圓のもの爰にては五圓餘にて購ふべし、染料不足の爲産額の少きを憾とす。秋田市獨特の銀細工は品質の秀でたる割に意匠に缺くる所あり、宜しく斯道の大家を顧問たらしむべきなり。今日は昨日に引更へて氣冷に雲雨を孕みて低し。

## 五

それより本町なる感恩講の専務所に至り、年番諸氏の談話により、記録により、圖卷によりて悉に講の美質を知る。感恩講は文政十二年



六四  
三月に起る、藩の用達町人那波三郎右衛門祐生なる者、苦しかりし己が半生を顧み、財を捐て、濟貧の事に従はむとす。恰も時の藩主佐竹義厚志を同じうし實施方法を藩吏に諮る藩吏之を祐生に諮る。祐生機至れりと狂喜して弘く慈善家に謀り、金千兩餘を藩廳に獻じ、更に千兩を加へ、知行高二百卅石を備へ、専ら救恤の資とし、名けて感恩講といふ。爾來年番を置て事を執らしめ年々濟貧の事を怠らず。明治維新後政府より五萬餘圓の下波あり。聖駕北巡の日特に三代那波三郎右衛門に謁を賜ひ、廿二年此講永世保続の思召を以て三百圓を賜ふ。基礎愈よ堅くして有志の義捐益す多し。乃ち慣例を成文とし一切を規定す。ポアソナード博士亦此事に與れり。講は一定の範圍内に於ける貧民の狀況を審査し毎月兩度米を給與し、極寒に際しては衣を與へ炭をも與ふ、若し天災時變あれば範圍の内外を問はず非常救恤を行ふなり。創



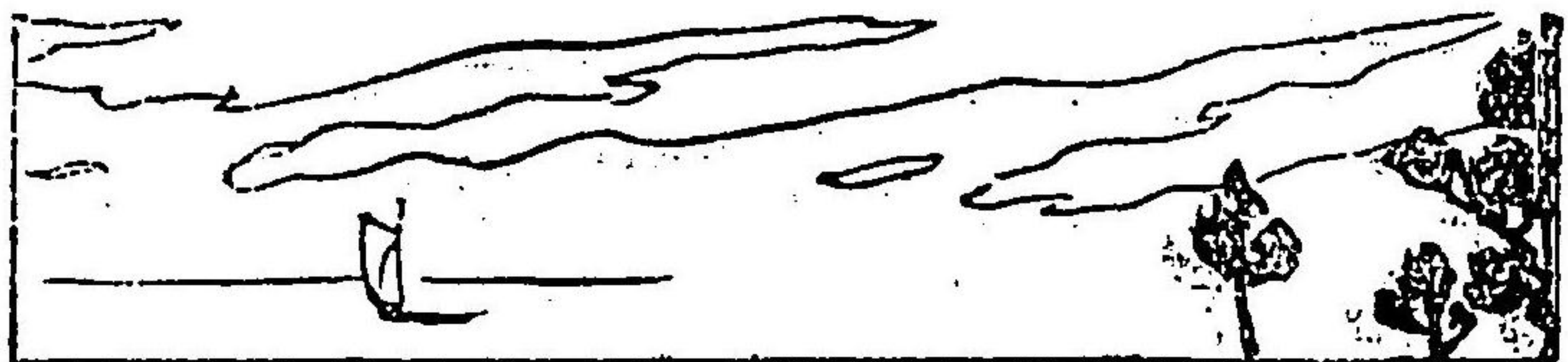
立以來救恤せし貧民の數百餘萬人にして現時講の資産廿萬圓に達せりと云ふ。縣内各地この講に倣ひて土崎感恩講、増田感恩講、淺舞感恩講、角館感恩講等十六所の感恩講相次いで起れり。一時的の慈善事業は華かに清く爲し得らるれど、少しく歲月を重ねれば汚濁を生ずること殆ど通例と云ふべき世に、八十年の長き、塵をも留めずして、淨光日に明かに、無比の財團法人として永世動くべうもあらぬは嬉しからずや。我導かれて天保年間に建てられしと云ふ講の倉廩に入り、棟木まで積上られたる救助米の香に包まれたる時、小學讀本にて出羽國の仁者の物語讀みし昔をも思出で、そゝろに涙ぐまれぬ。  
感恩講を辭して車を郊外に進む。石高路の傍に溝川流れたり、川に臨みて馬頭觀世音の碑石立ち合歡花其の邊りに盛りなり。島を見れば長手拭として藍色の布を頭より顔に捲きたる農婦立てり。句を思うて成



らす。旭川村なる採油場を見る。秋田石油調査會が日本石油株式會社に托して試掘せしむる所にして、令一日に五十石の出油を見るに至れりと云ふ。汲上ぐる石油の飛沫に大なる栗樹の葉の潤ひ光りたる、暑げなれども珍しき調和とぞ見る。本縣の石油脈はこの南秋田及び山本由利河邊仙北の各郡に亘りて存し、總て試掘鐵區七、採掘鐵區十二を有し、油質新潟のにも優ると聞く。

六

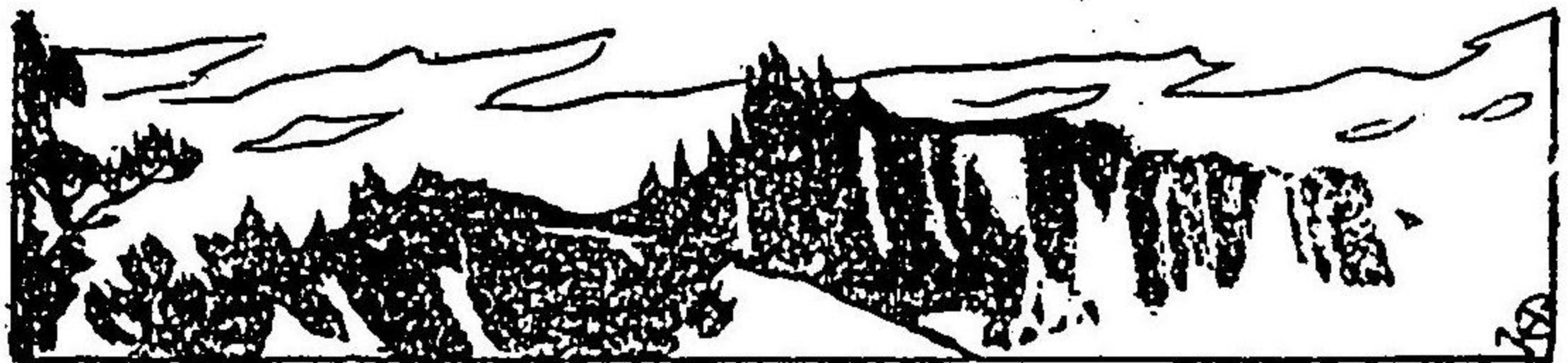
市に歸り、水道濾過池淨水池等を見る。今秋田市に於ける最重要なる問題は水道の完成なるべし。秋田市は水悪しく乏しき所なればとて三十八年以來縣より年五萬圓づゝ三ヶ年間補助金の下附を受け、日本勸業銀行より三十九萬餘圓を借り、國庫の補助を仰がず三年繼續の事業として布設に着手せしが、物價の昂騰配水管の増大等の事情の爲四



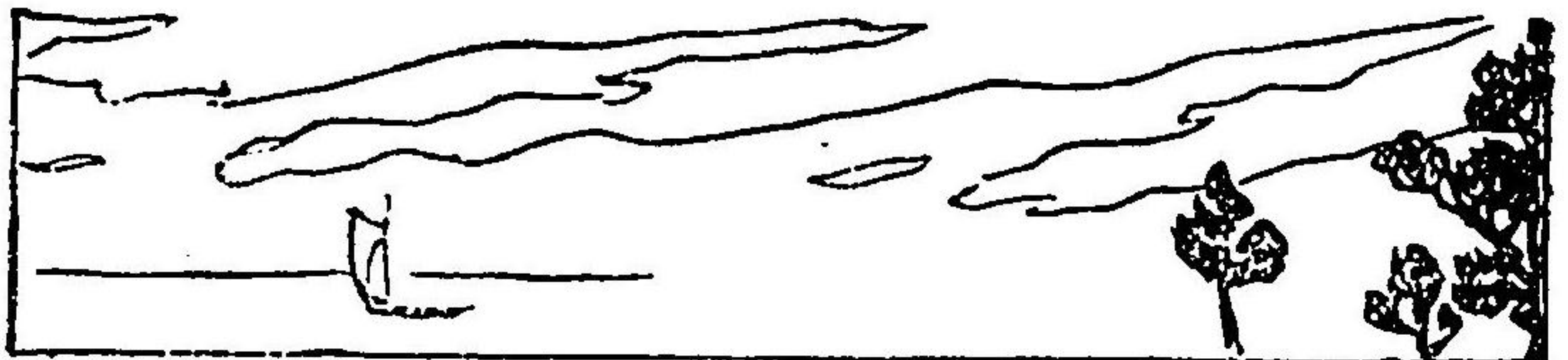
十年に至り五年繼續に延期し、豫算額亦六十六萬餘圓に増加するの止むなきに至る。爾來不幸にして水害頻りに至り水源地水道線路屢ば破損し、遂に國庫に補助を乞ひ九萬二千圓を受けたり。然るに惨害は起り且つ從來の設計に缺如する所あるを發見し、復舊工費十萬餘圓に上りしかば、再び國庫の増額補助を出願したり。されど今尙其詮議に至らず。市の某氏切齒して曰く、市民の負擔は一戸平均十五圓九十六錢六厘に當る、此以上の出費は堪ふる所に非ず、從來他の市の水道に對する國庫補助の歩合は工費の四分一なるを、秋田市のみは獨り七分の一に過ぎず、君よ、秋田市も亦日本の版圖なりと。

縣の公園千秋園に至る。慶長八年佐竹義宣築く所の矢留城の址なり。芝生の上林の蔭に舊金庫址舊勘定所址など立札したるは嬉し。櫻樹到る所に枝を交ふ、春色想ふべし。なほ地を劃して、梅園となし、菖蒲





園となし、萩園となし、秋冬園となす。西廓に上れば、市街の屋瓦起伏して波濤の如きを見る。更に御隅櫓に上れば、勝平山當面に蒼く御物川脚下に練絹を展べたり。日本海は渺々として空と分つべからず、男鹿の翠徹鳥海の白雪今日は望み難し、雲の脚漸く早くして雨滴時に面を撲つ。招魂社、武徳殿、秋田神社、図書館昨招かれし公會堂等皆この園内に在るなり。図書館を觀る。和漢書四萬五千洋書千五百を藏す、古史傳古史徵古史成文等篤胤の自筆本十九種ある、又根本博士の遺書二千五百餘冊を藏する共に珍とすべし。通明翁は實に仙北郡刈和野町の人なるなり。園を漫歩して松風亭に至り、三新聞社饗する所の午餐を受く。疾風砂礫を捲いて雨大いに至る。午後三時旅館に歸りて行李を調べ、魁新報社に一同を待合はせ、二人曳にて雨を衝いて土崎港町に向ふ。



途に寺内村なる産牛馬組合に立寄る。全縣を包容し數百年來の慣習を基として組織せられ、政府指導の下に大規模の活動を爲しつゝある特殊の組合なり。運動場に牽出されたる馬十數頭を見る。佛國産鹿毛の牡馬アレゴチエー號といへるは昨年巴里博覽會にて一等賞を得たるもの、當組合は六千八百圓を投じてこれを購へりと云。又當組合の産第四春日號といふ牡牛あり。黑白駁毛形るが如く、ホルスタイン種中稀有の尤物にして本縣の誇なり。こゝを出で、土崎公園に至り、石階を陞りて舊招魂社址に立てば、土崎の家々御物の川口、遠く船川の灣唯模糊として夢の如く、まことに雨も又奇なるを覺ゆ。

七

土崎町の招待會場たる池鯉亭に入りしは灯ともし頃なり。會は七時より始まる。床脇に氷の富士山を据ゑ庭には篝火を焚けり。宴酣なり、



七〇

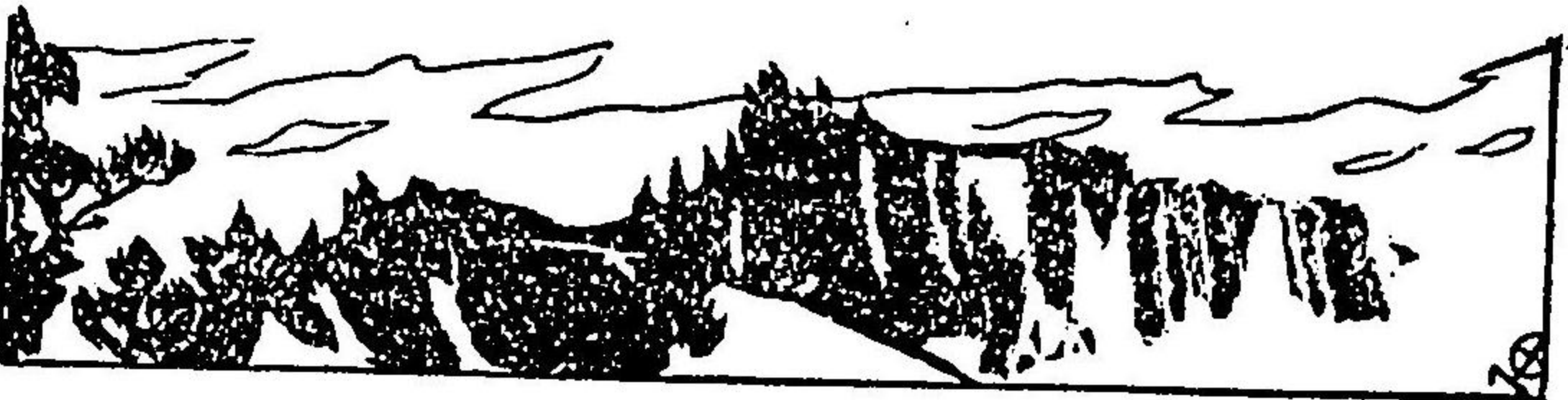
歌妓男装して船頭踊と云を演ず。其の唄手振り足取り深川趣味にして、暫く身の遠き旅路に在るを忘る。九時更らに素封家竹内氏の別墅に招かる。一行大に酔うて旅館佐清に入る。廿六日朝漫歩御物川の川口を見る。土崎の港は水淺くして大船を繋ぐべからず、汽船は川口より一里の沖に泊するを常とす。されどこの町今一萬五千の人口あり、輸出額四百萬圓に上り漸く發展の運に向へりと云。この日船にて男鹿に向ふ豫定なりしかど、天候險惡にして海危しといへば、土崎驛より汽車に乗り追分驛に至り主客七輛の馬車を聯ねて船川に向ふ。

過ぐる所は所謂男鹿街道なり。行けどもく美しき赤松の並木斷えず、觀世音の石像所々に立ちて在す。灰の凝れる如き石積みたる車を馬に轆かせ來る者あり。大なる籠に昆布の細きやうなる水藻を充てたるを背に負うて來る者あり。石は寒風山より切り出す寒風石にして、



水藻は八郎湖より獲らるゝモグと云ものなり。すべてこの道を往來する者多く馬背に依る。諸國を勸進するげなる僧の馬上經を誦し行く、歸省するらしき女學生の髻の上に褪せたる袴纏し行く、二人の子を二つの舂に入れて鞍の兩脇に懸け鐵漿黒き農婦の徐ろに引き行く、いづれか趣あらざる。家ある邊には花菱溝萩不知時草など咲けり。稍雲切れして日は折々射せど西の風いと荒々し。行くこと三里、左に日本海の廻瀾を望み、右に鏡の如き八郎湖の水光を見る。寒風山は雲に障へられで我等の行手に翠を發せり。

湖と海と連る迫門に橋を架せり、長さ二百八十間八龍橋と號く。馬は風に嘶え車は輻輳相應じて進む。橋盡くる所は則ち男鹿半島の地なり。船越の町長太田氏の邸に午餐を饗せられ、更に馬車を驅ること二里、山百合匂ふ茶臼峠を越えて、午後三時船川港町に入る。直に棧橋より旗



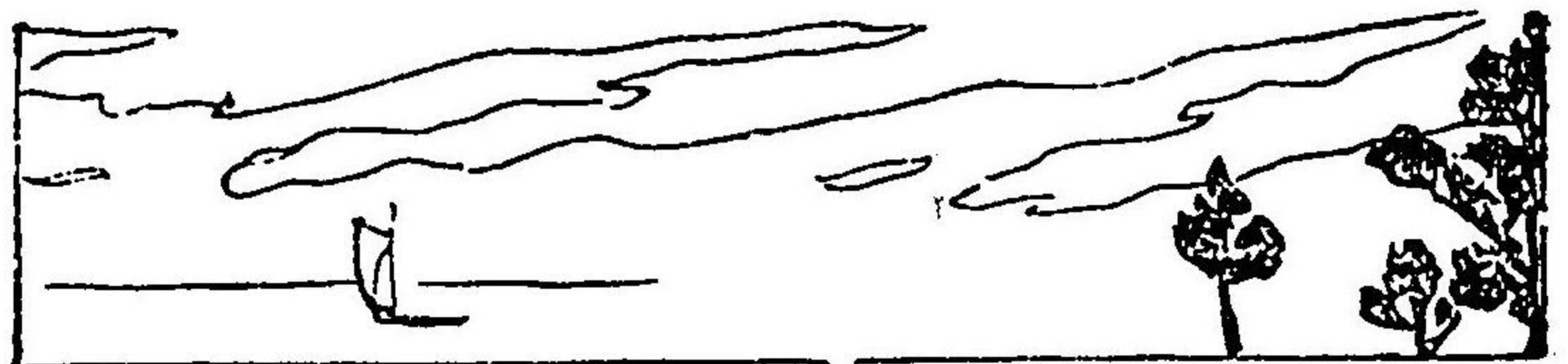
もて飾れる小舟に乗り、牧技師より詳悉に築港の設計を聞く。

七二

## 八

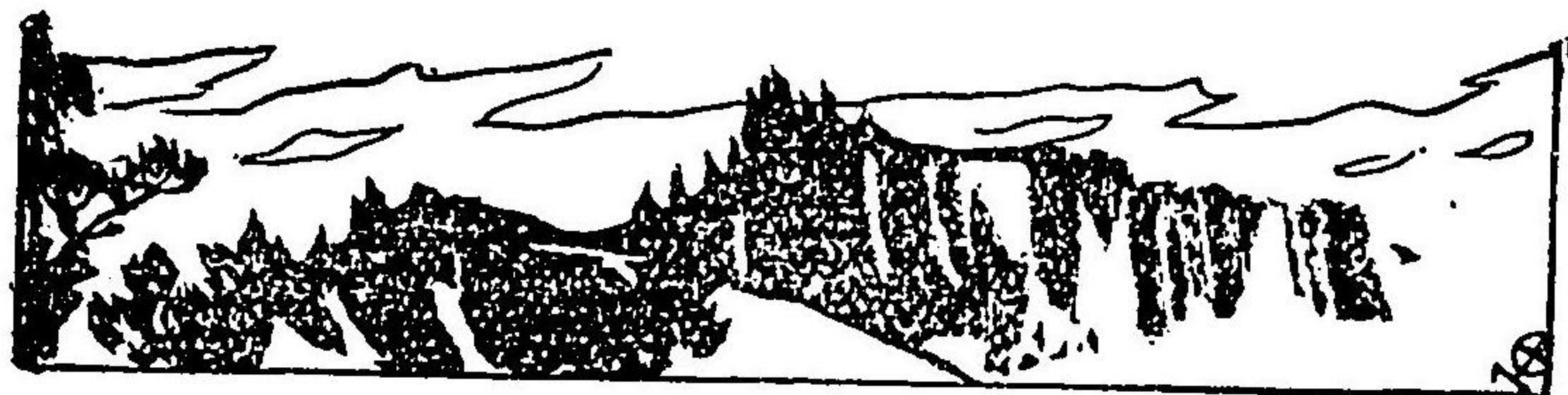
抑も縣民が上下一致船川築港を唱道するは何の故ぞや。船川は浦鹽斯徳を距る僅に四百十二海里、遙に敦賀より近く亦小樽よりも近し。而も低額の費用を以て天巧の缺を補はゞ、東北沿岸無比の良港と爲し得べく、爰に大陸との交通開門開かれなば、單に秋田縣を利するのみならず、奥羽開發の根底定まりて軍事上經濟上國家の益する所鮮少に非ざればなり。船川の港は東南東に向つて開き、眞山本山寒風山を背にして、日本海特有の北西風を受けず、潮流の速度弱くして漂砂入るなく、年中概して波平かに殊に冬期の好泊地たり。

而してこれを修築する、先づ水面積五千坪の船入場を築き、陸に平地之しきが故に七萬五千坪の掘鑿及び埋築を行ふ、是を第一期工事と

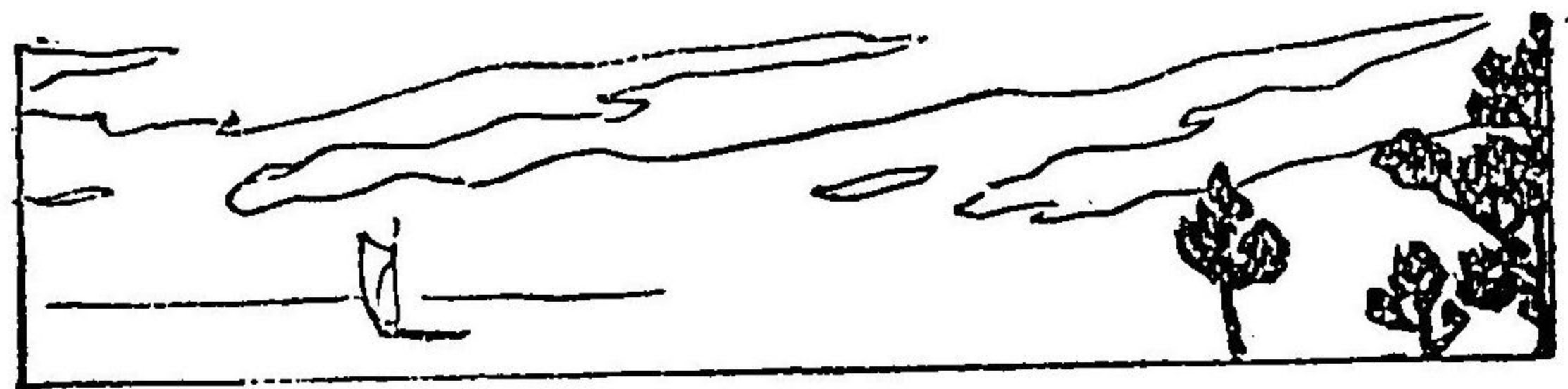


す。更に五千坪の船入場を築き、十二萬七千五百坪の掘鑿埋築を行ひ、埋築地の西端より三百十間の防波堤を斗出せしむ、是を第二期工事とす。東南の海中に五百五十間の獨立防波堤を設け、港内を掘浚して干潮面下廿六尺の海面卅萬坪を造り、貨物積卸に便する繫船設備、陸上設備を爲し更に三萬五千坪の埋築工事を施す、是を第三期工事とす。總ての工費豫算六百卅五萬六千圓なり。中第一期二期の工費なる三百萬圓は縣自らこれを負擔するも可なり、而うして第三期工事はなほ他日の問題に屬す。左れば我等は今日築港其事に就て政府に求むる所あらず、政府に迫り求むる所は實に船川鐵道の敷設にあるなり。

船川鐵道は築港に先じて必ず成らざるべからず。これにして成らざらんば築港完成すとも何の甲斐かあらん。船川鐵道とは奥羽線追分驛より船川港に至る分岐線にして其工費は百五十萬圓にて足る。政府も該



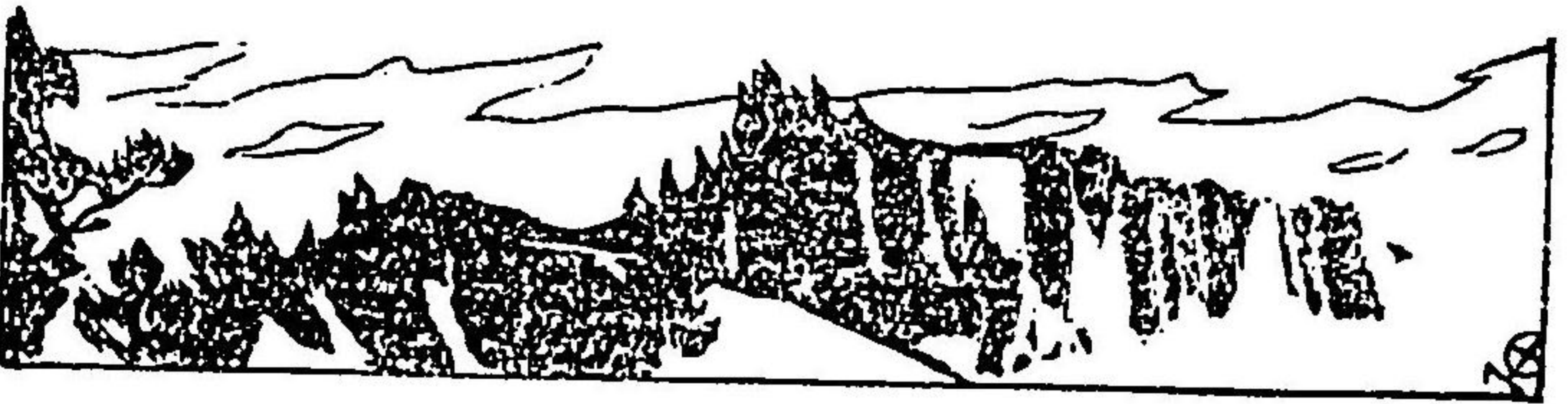
鐵道の必要を認めて豫定線中に編入せりと雖も、其着手の日は未だ期して待つべからず。我等の憂ふるは爰にあり。我縣の銀行は容易にこの工費を提供し得れば、縣に於て着手せば立所に成らむ。如何せむ政府は鐵道國有の方針に反すとして自設を許すべくもあらず。縣は悉く政府の指揮に聽いてこれを敷設し、政府は任意の時に之を買上ぐれば可ならずや。此際政府が飽くまで膠柱鼓瑟を事とせば、恐らくは機逸して東北振興の策挫折せむ。政府幸ひに意を此點に留めて直に敷設に着手するか、左なくば除外例を開いて縣の自設を許すか、二の一孰れにても可なりと。是れ實に現時に於ける秋田縣人の聲なり。北海道樺太の開拓、露國との貿易、韓國に於ける我が利權の確保等總ての事情が東北の交通設備を要しつゝある今日、この熱烈なる秋田縣の希望は政府の快く許容すべき所ならずや。



我等は舟を捨て燈臺ある丘に登り港灣の形勢を下瞰す。この丘の邊には兜菊といへる毒草叢生せり、之を用ひて殺人罪を犯す者往々ありと隨伴の巡查語る。再び舟を泛べて町に歸り、船川小學校なる歡迎會に赴き、素朴にして可憐なる女生徒の侑る酒を受け、澤木氏に宿る。黒雲風中を行き驟雨屢來る。

九

廿七日雨なり。男鹿の島巡りは遂に企つべからず。悄々雨に濡ちて昨來し道を還る。途に脇本村の小學校に小憩す。この村は一行の爲に特に道路の修繕を爲せりと。厚意謝するに辭無し。船越町に至る。ここより汽船にて八郎湖横斷の豫定なりしが、これ亦雨の爲果さず。なほ馬車に揺られて大久保村なる歡迎會場に至る。こゝに午餐を喫して後土瀝青の發掘を見る筈なりしも、今日の路抄取らざりし爲、今汽車



の時刻迫り居れば、我等三四人のみ聲を受けず、俾を飛ばせて土瀝青アスファルト産出地に急ぐ。

七六

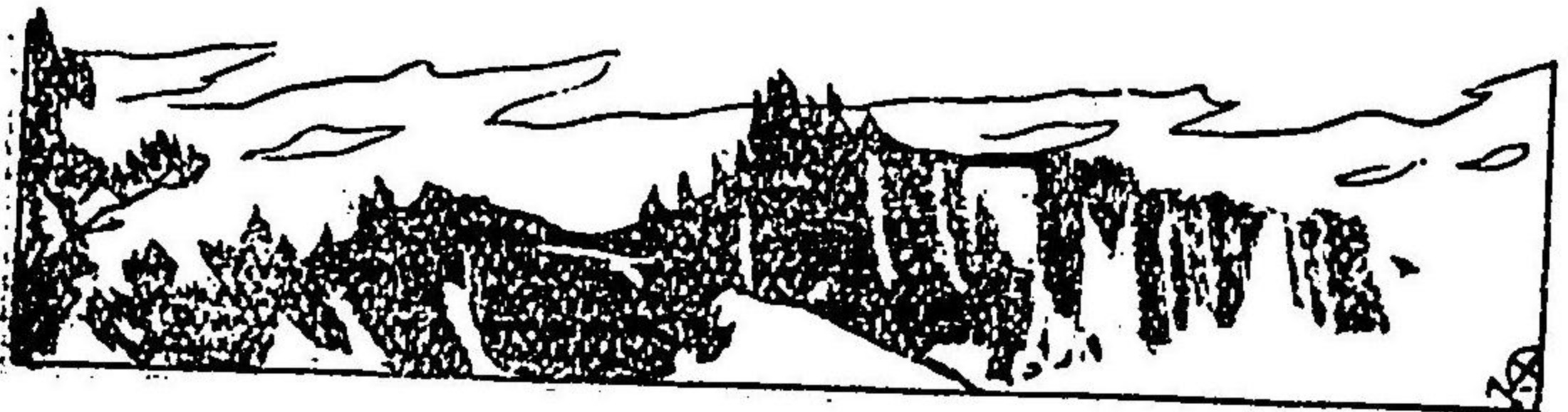
行くこと一里許、豊川村字槻木つきのきに入る。右に連れる一帯の丘に青き煙湧きて石油に似たる異臭を覺ゆ。丘に登る道は車を遣るべからず、徒歩にて行く。路の土せいのつち自ら階段のやうになりて、其の一階毎に二つの圓き穴列あなぐらべり。こは土瀝青アスファルト運ぶ馬の蹄の跡の重り重りたるなりとぞ。路稍平になり、左右に掘鑿されたる淺き洞を見る。掘り反されたる土は黒に藍を含みて鈍き光ある粘土かんどの様したり。是れ土瀝青アスファルトの原鑛なり。なほ行けば老若男女の夫鋤を取り畚を擔ひ掘るに運ぶに忙しきを見る。青き煙遠近に捲き騰り、横様よこさまに匂うて群衆を包めり。煙の發る所おこは横長の小屋にて、内に竈を列べ徑二尺五寸の釜を掛け陳ぬ。竈に燃ゆる物も土瀝青アスファルトにて、釜中かまなかに在て泣く物も土瀝青アスファルトなり。斯くして煮る

こと一日、攪拌かくはんして水を除き油状となるを待つて、木根石片等を濾し、型かたに入れて冷し、方形の石となして各地に供給するなり。燃料に用ふるは粗悪品の利用なり。

土瀝青アスファルトは人も知る一種の鑛物にして、最も屋根に塗り床ゆか又は地に鋪しくに適す。防水及び震動防止の特質あるを以てなり。各都市水道の貯水池、各師團の馬房、重なる停車場のプラットホーム及び事務室東京京橋區道路の一部、其他各地の官衙學校病院工場等皆これを用ふ。左れど其効用なほ一般に知られずと云ふ。今世界に於てこの産地として知られたるは岩狀土瀝青ロックアスファルトを産する佛國セイセル、泥狀土瀝青ソットアスファルトを産する南米ヴェネジエラのベルムデツス及びトリニタツト、油狀土瀝青オイルアスファルトを産する北米の各地方なり。我國にては獨りこの秋田縣に産し品は南米のに等しく、この豊川村槻木つきのき及び龍毛たつげ、金足村浦山うらやま及び黒川くろがは、男鹿中村おがなかむら、

秋田めぐり

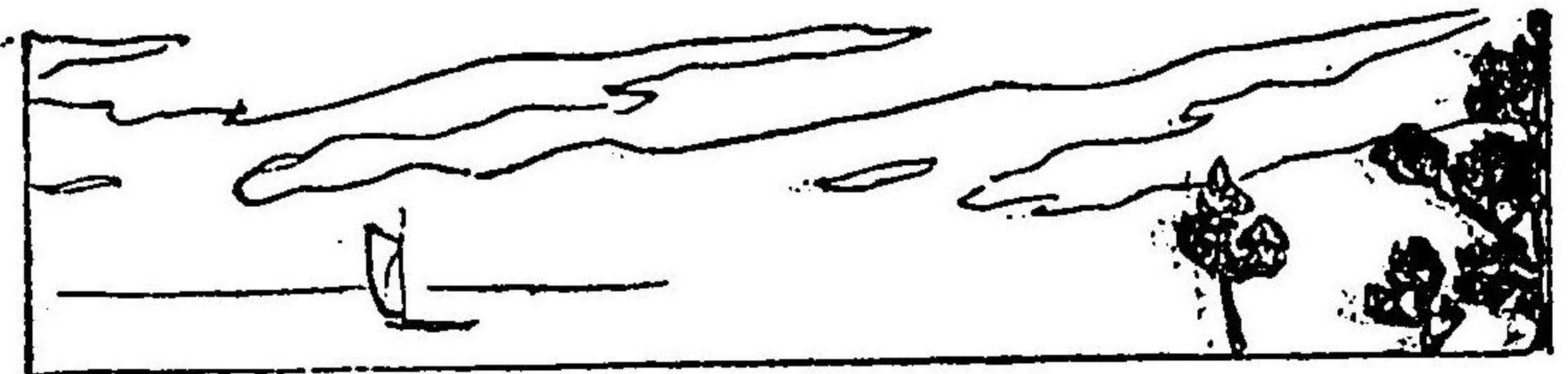
七七



由利郡上郷村横岡山本郡富根村駒形等を採掘地とす。現時この採掘販賣を業とするものは中外アスファルト株式会社、日本アスファルト商會、秋田アスファルト商會等にして東京横濱大阪を重なる華主とせり。

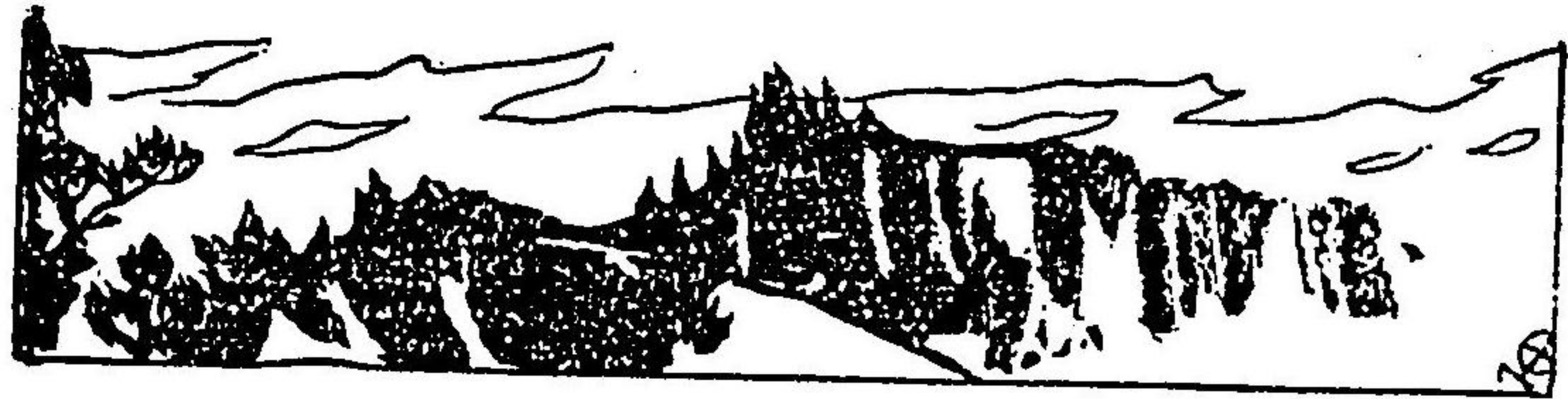
十

我等は辛うじて一行と大久保驛停車場に會ふを得たり。三時四十一分發車して能代に向ふ。雨は歇みたり、車南秋田郡を去つて山本郡に入らむとする所、左に美しき八郎湖の海に似たるを望む。男鹿の山々定かならねど、水平線は恰も日を受けて、眩き一條の光を劃せり。八郎湖を望むは最も此所を勝れりとす。美倉鼻と云。そこなる岡を南面岡と云は、聖上ここに輿を駐め給ひし折賜はりし名なりとぞ。五時十分能代港町に入る。停車場前に幟押立て佐々樂の獅子、頭を振り、踊狂うて我等を迎ふ。先づ秋田木材株式會社を訪ひ、客室に入る、其輪



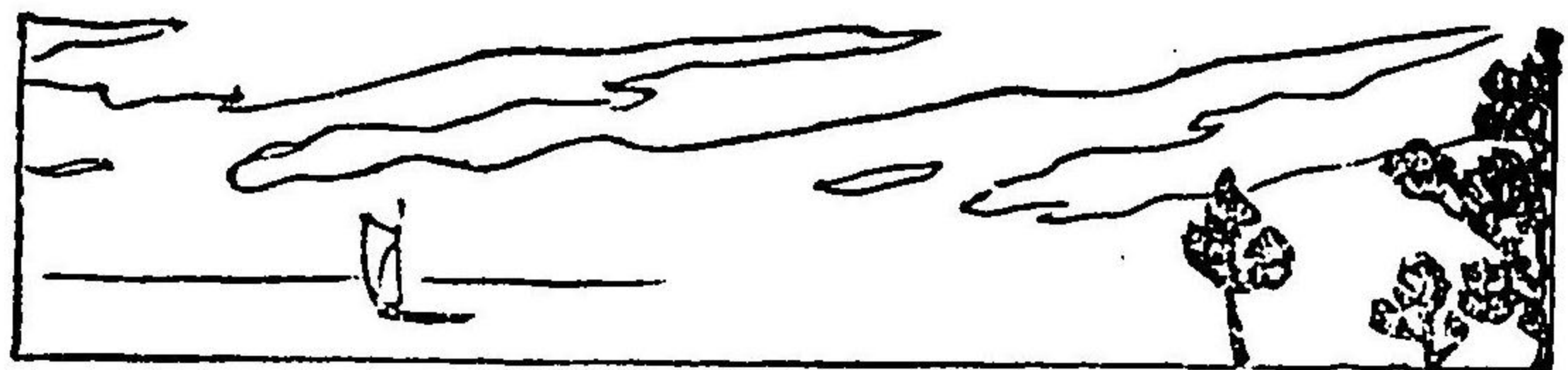
奂の美この縣に入りて始めて見る所のものなり。各工場を巡る。場内の床には縞の如く軌道を敷けり、車巨材を載せてその上を行く、帶鋸あり圓鋸あり旋轉急にして形を認め難く、材これに觸るゝや木糠の霧を噴き、人の如く悲鳴を揚げつゝ見るゝ割かれて片々の板と化す。製材機械總て六十、大工場三、大倉庫六、機關室あり、乾燥室あり、板仕分場あり、會社の全敷地二萬八千六百餘坪、而うしてその製材高一日七千五百立方尺、販賣高一年百萬圓に達せり。我等構内を巡るに踏む所の地絶えて土を見ず悉く鋸屑なり。案内の人に問へば、この地下八尺皆鋸屑にして、なほ日々生ずる所のもの其量を知らず、現時これを燃して得る火力電氣は、この社内は固より能代全町の電燈電力を供給してなほ餘りありと云。

旅館紫明館に入る。獅子踊再び庭前に來る。初め壯丁二人づゝ前み



て棒の仕合の型を行ふ。勢猛にして殆ど型たるを忘れしむ。數番了りて後、甲者真劍を懸し、乙者棒を執り、雄叫して相闘ふ。一上一下風旋り電閃き輸贏容易に決せず。甲躍つて乙の背後より其肩を裂かむとす。乙跪き双手棒を擧げて之を受く。憂然聲あり。兩者相持し互に虚を求めて未だ動かす。鳴りをすゝめてお聞きやれ、森も林もうぐえすすゝまる。編竹鳴り鼓笛急に四つの獅子、舞ひ寄て兩者を引き分け退けて、獅子踊始まる。獅子につれは頭振るもの、女獅子男獅子顔を並ぶる、松に絡まる蔦の葉、縁でなげればさらりほごれる。古びたる唄の節、奇なる獅子の舞姿、觀る者は恍として遠く過去の時代に入る。

紫明館は能代公園般若山の上にあり。縁に坐すれば股賑の市街眼下に開けて燈火花の如し。東に檜山川細く、浩々として町の北を流れ西



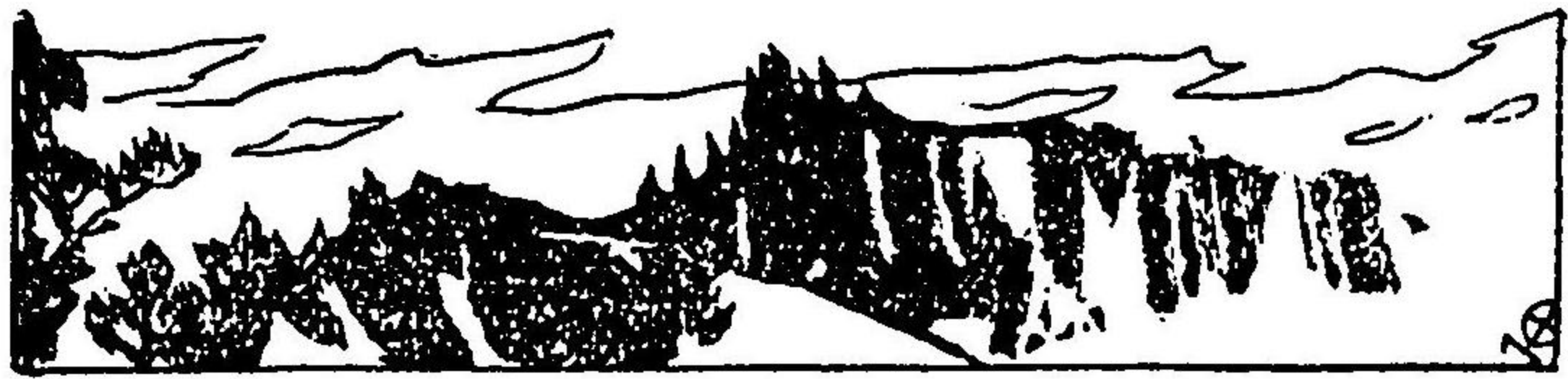
の方日本海に注ぐものは米代川なり。能代橋長蛇の如くこれに懸るを見る。七時山本俱樂部なる歓迎の宴に赴く。能代音頭の踊あり、秋田音頭に比して調更に急なり。欄に倚つて望めば、五彩燦爛たる燈の樓閣を見る。その高さ三丈、當町の名物七夕燈籠にして特に我等の爲に昇出されたるなり。イルミネーションの光、篝火の炎、街路は肩摩殺撃宛然祭禮の如し。

今能代人の望みつゝある事の主なるものは先づ米代川口に工事を施して港の年々毀損せらるゝを防ぐことなり、漁獲物の運輸に便する爲能代より青森に至る海岸道路を完成することなり、町内に中學校及び中學程度の實業學校を設置することなり、米代川の上流には鑛山極めて多し然れども眞に完全と云べきは樺鑛山のみ他の鑛山をして發展せしめ延いてこの町の潤たらしめむことなり、能代附近は頗る果樹の

栽培に適す已に設けたる梨園葡萄園の結果甚だ好しなほ規模を大にして町の物産たらしめむことなり。能代の未來は輝けりと云べし。

## 十一

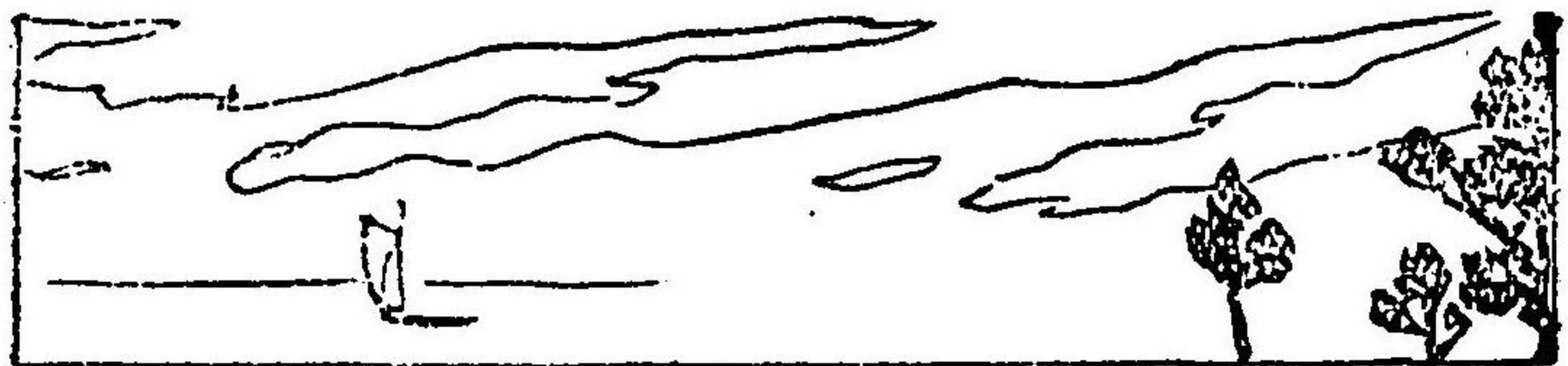
二十八日午前十時能代驛を發車し東を指す。俣后坂の隧道を過ぐれば北秋田郡なり。午後零時五十分大館驛に着す。之よりは軌道細くして特別車を進むべからず。舊式なる幅狭き列車に乗換へて行く。午餐の時給仕茶を侑むる盆を見るに圓板にのみ薄く漆して縁に木地を露す、簡素愛すべし。音頭に所謂大館曲わつばは是なり。山は左右より漸く車窓に迫り来る。葉も枝も悉く血紅色なる奇樹遠近に立てり。小坂嶺山の煙毒を被れる杉なりと聞きて我は寒きを覺えぬ。煙毒、是れ我が屢く讀みたる文字なり、されどこの文字の含める意味の全量は實に血紅の杉を見たる刹那に於て始めて會得せり。こゝに血紅と云この



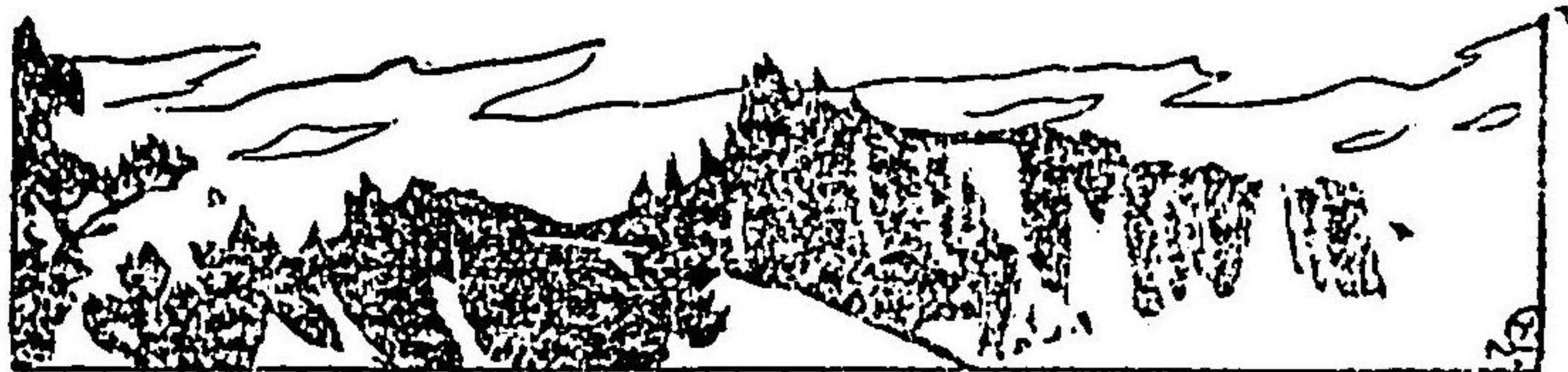
毒々しき紅は血を以て比ふる外無きを信すればなり。世の常の枯葉枯木の黄赭色を誇大せるにはあらざるなり。文人時に秋の紅葉を形容して猩血と云、左れど紅葉の如何に色濃きもこの杉に比すれば遙に淡泊なり血字用ふべからず。煙毒の杉に至りては血の字もなほ足らず、凄惨の色途に見ざる人をして想はしむること難し。斯る木は毒其髓に徹し材としても質脆くして支持の用を爲さずと。

## 十二

今我等が過ぐる所は小坂を距るなほ十里の地なり、しかも毒の及ぶ斯くの如く甚し。我等が偶まこの杉を見たるは大館驛を發車せし後なれど、聞く所によれば、已に大館より西、彼の山本郡の界まで被害地にして、其區域は北秋田郡鹿角郡の各の北半を含み、風強き折には山本郡にも青森縣南津輕郡にも及べるなり。是れ卅五年以來小坂嶺山の







八四

煙突より吐出す煙の亞硫酸瓦斯を含むが爲にして、これに觸るゝ樹木殊に栗桑林檎杉檜等は萌芽枯れ枝葉裂け、杉材を以て天下に鳴る長木澤の森林も禿了に近づきつゝあり。獨り樹木のみに非ず、米を初め雜穀蔬菜いづれも五割以上の減獲を見、大館町外十五町村の耕作物被害價額昨年中にて卅二萬圓に上れり。官有林の損害は其額知るべからず。斯くて被害民の損害賠償、製煉制限等に關する請願は第廿五議會の採擇を経、本年六月更に農相に陳情する所ありしも、今尙有効なる防害計劃の立らるゝものあらず。而して鑛山側の態度は常に倨傲にして僅少の賠償金を投て道を盡せりとし、一方に策を弄して被害民の口を徹するに努む。又往々狡兒の兩者の間に立て償金を私するあり。憐むべきは被害民なる哉。唯その弱者たるが故に、一個營利會社の犠牲に供せられつゝ、月を逐ひ年を逐うて増し行く慘害に泣く。足尾別子の鑛毒は天下



八五

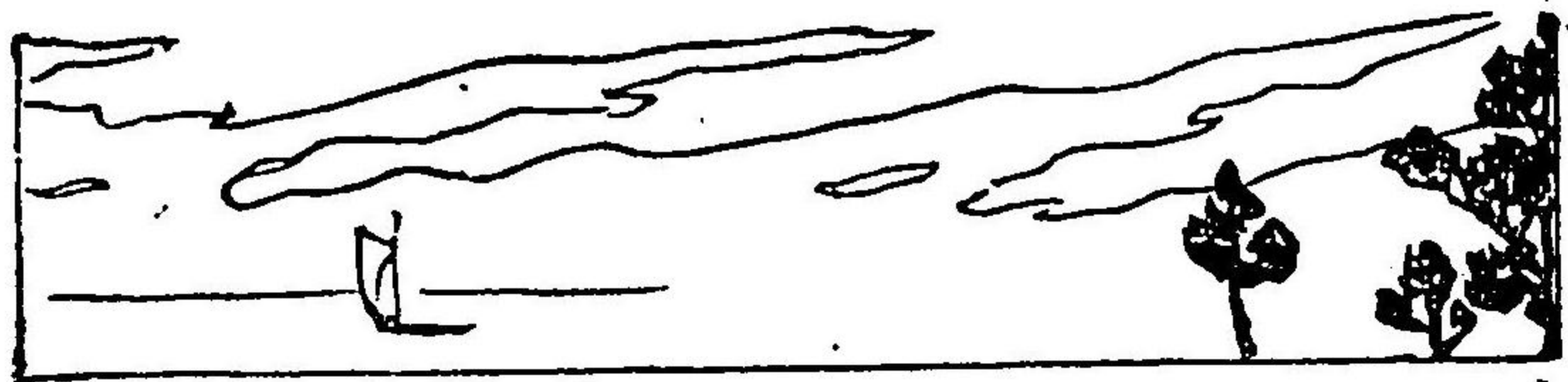
の問題となれり。そは雄辯なる論者ありしが爲なり。小坂の事なほ人の知る尠し。しかも實は別子の毒量は小坂の半額強にして足尾は更に別子よりも少きなり。我社の琴湖去歲八月より九月にわたりて小坂の煙毒を詳論せり。今我再び之を説くは、事地方問題にあらず實に人道の問題にして、重複を厭うて黙すべきにあらざるを覺えられたればなり。感慨の間に車は進みに進む。長さ二門の隧道を過ぎて鹿角郡に入れば、眼界頓に開け、横長の家數無く列なりて算木を施ける如きを望む。坑夫長屋なり。その彼方に笠に似たる丘あり、丘の彼方より煙突の先二つ三つ顯はれ、白き煙と腐れたる蛋黃の如き煙と濛々混糅して重く半空に澱み、其の高く浮めるあたりより徐ろに西に向ひて流れ行くを見る。小坂驛に着せしは午後二時十五分なり。されど其の鑛山を見其の鑛業に従事せる諸氏に面接して其の側の消息を察せむは卅一日の豫



定なり。今日は和井内出張所に小憩せるのみ、直に馬車を急がせて大湯に赴く。山相迫りて路狭し。畠には黍そよぎ、小川の邊には二玉赤く實れり。毛馬内を過ぐ、湖南の郷里と聞く。毛馬内の東南に近き錦木は、かの千束の錦木いたづらに朽ちける蹟なり。昔の戀の今更にあはれなる哉。鹿角郡山深き所なれども多く學才の人を出だし、年々大學を卒業する者必ず二三ありと云ふ。

## 十三

盆踊に用ふる大太鼓の響に迎へられて大湯村に入り、小坂嶺山に屬する水力發電所の飛瀑を仰ぎつゝ、五時大字大湯なる大湯俱樂部に着く。この邊山重なり人家稀にして温泉到る處に湧く。俱樂部に湛ふるもの最も清く槽亦大いにして遊ぶべし。晚餐の魚は煮たる鱒と炙りたるヤマベとなり。秋田市にて別れし森知事は更に我等と共に鹿角の山



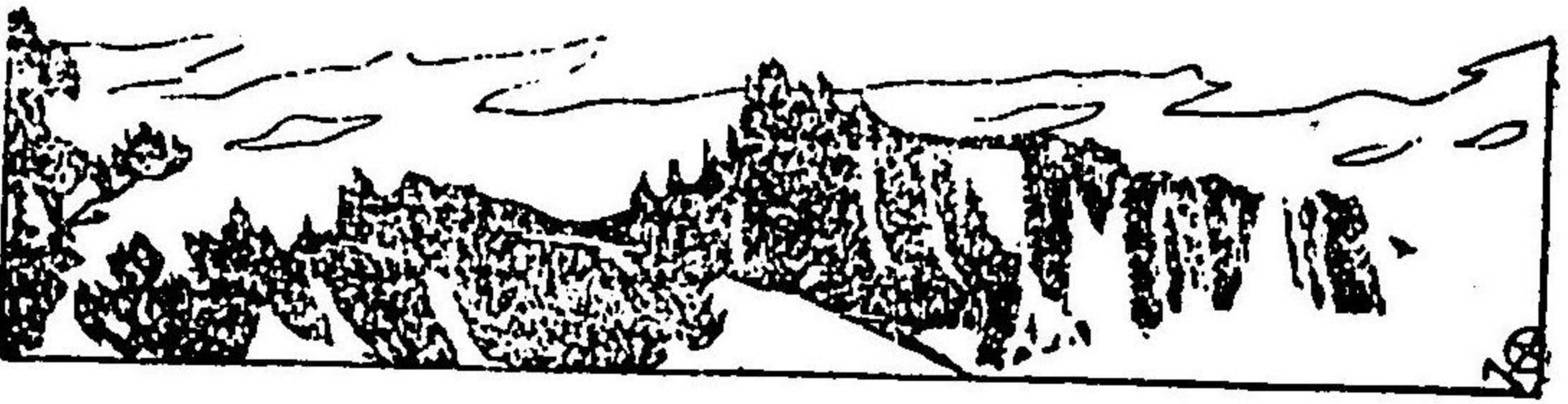
路踏まむとて此所に来り會せり。門を出づれば、

風涼し夕雲の色變り行く

今宵此里の者連座を催さむとす臨み給は、幸なり、と小魚と云ふ人の切に乞ふに、左らばとて同好を誘ひて其會場に向ふ。十二日の月白く照りたり、皆帽を戴かず浴衣の後高く端折り草履穿きにて行く、已に俳諧なり。運座始まりて人苦吟の時、唯亂蛙の閤々を聞く。我秋田に入りてより、今宵始めて旅の寂しみを味ひ得たり。小魚の句に曰く蚊帳を出て裸温泉に入る人の音

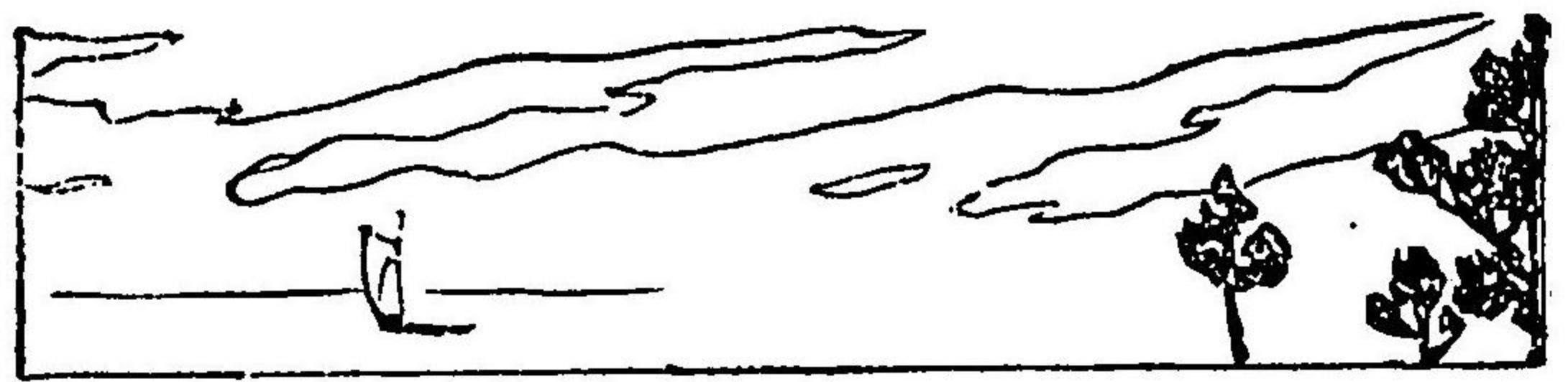
正に此地の趣なり

廿九日空よく晴れたり。午前八時主客卅餘人皆馬上の客となりて出で立つ。蠅の集ひて馬の頸煩げなれば、拂ふものを、と馬士にいへば、馬士は腰なる鉈を抜き、路傍の栗の樹の一枝を切りておこす。これを



八八  
打振りくゞて行くに旅の趣云ふべからず。橋無き溪流所々にあり、馬は首を垂れ蹄を刻みて進む。大湯川右に稍遠く輝けり。葉の徑七尺餘りなる露のかわくゞと風に鳴るあり。木通の青き實を結べるあり。サビタの白き花を開けるあり。山邊にも谷間にも鶯の歌頻りなり。面白しと思ひつゝ何と無う心遠くなり行く。頼朝馬上に眠りて父兄に後れ守山の宿に危き目に逢ひしと聞きぬ。馬に寝て残夢月遠し茶の煙と云翁の句の馬に寝ぬ、と云こと如何と怪しみしことあり。馬上の旅の甚しく眠きものなるを我は今日始めて知りたり。

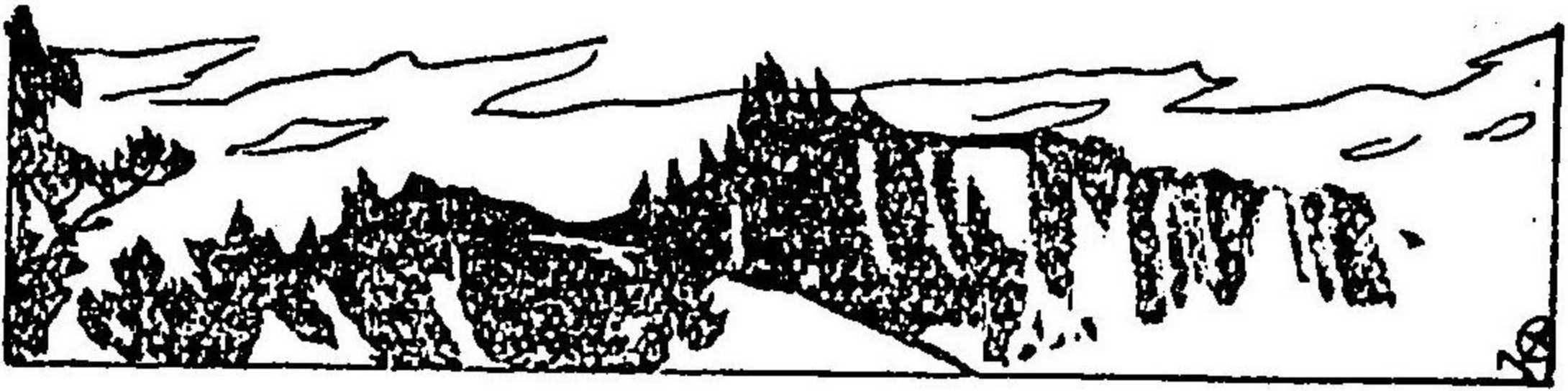
正午頃止瀧の發電所にて午餐を認め、さて白澤と云より汐吹の峻坂に蒐る。暫く木立の目を遮るあらねば、夏草の上に行の騎馬姿ゆらゆらと見えて、まことに葛折なる路を登り行く様、我も人も面白きに得堪へず、前立てるを仰ぎ續けるを願て相呼び相應ふ。路漸く疎林に



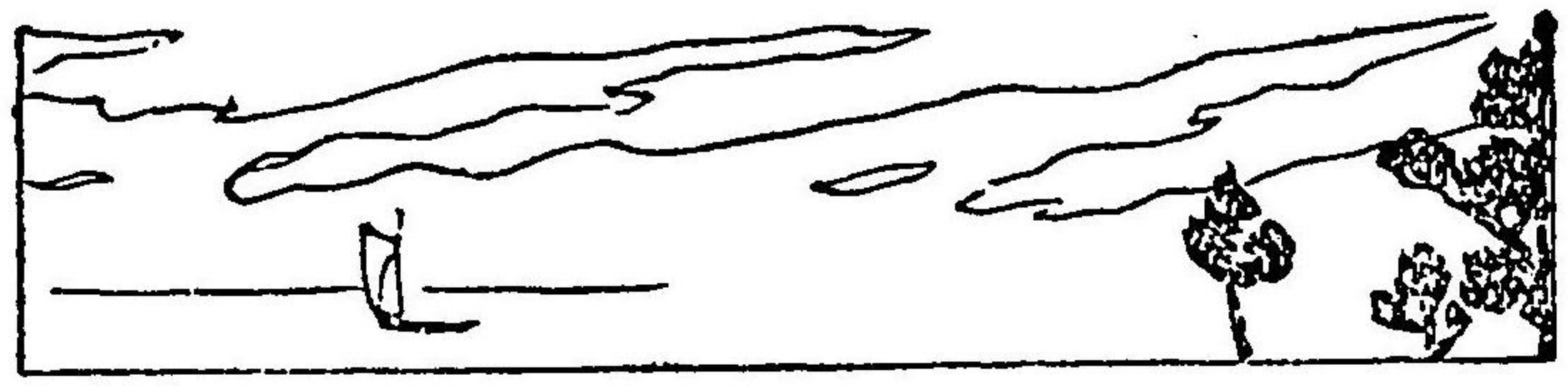
入る。楓栗檜などの老樹枝を張りたり。其蔭にはサビタ蛇麻など生茂り、又放飼の牛の或は臥し或は立てるを見る。人渴し馬渴すること甚し、左れど涓滴の垂るゝにだに逢はず、木の間洩るゝ日の中々に烈しく射して、蟬は實に山下響動むまでぞ鳴盛りたる。うつらゝと再び馬睡を催す時、前なる人の「あ」と叫ぶに驚きて眸を放てば、大湖當面にあり蕩として碧落に横ふ。我は始めて其名に焦れし十和田湖を見つるなり。湖畔には山連れり。遙に一峯の秀づるを八甲田山とす。水に一舟泛ばず又波の光無し。唯晴烟高く漂ひて水も山も見るゝ一氣に溶け去らむとするものゝ如し。

#### 十四

馬は發荷坂の險を下り初めたり。騎る者の背は頻りに尻輪と相打つ。左に崖高く樹枝參りてその陰冷かに路は辛うじて一馬を進むに足る。



九〇  
しかも泥深くして磊石所々に浮く。右は削るが如く谷をなせり、唯青葉の暗く戦ぐを見るのみ、其深さ幾何なるを知らず。人言はず、馬寸を進み尺を進む。谷漸く淺し、湖畔發荷の一亭に着して我始めて蘇せり。大湯より此處に至る行程五里なりと云ふ。馬を捨て舟に乗る。岸を去る遠からずして發荷の亭隠れたり。見ゆる限りの岸は唯蒼鬱たる森林にして人住むべうも覺えず。水は碧を湛へて聲無く、舟の過ぐる所僅に微波の動くあるのみ。日は赫々として照り渡れど四顧寂寥夜と異ならず。追手と云所に上陸して和井内氏の十和田湖鱒人工孵化場を見る。生簀あり、採卵場あり、孵化室あり、養魚池あり、我が最興ありと見しは孵化し行く状態を實物標本を陳ねて示したるなり。昨秋孵化せしめしもの七百卅萬、内他縣に輸出せしもの百五十八萬、今春湖に放流せしもの四百四十萬、收漁は放流後三年目に於てすと云。青森



縣上北郡休屋小學校教員生徒十和田神社々堂及び有志者諸氏特に舟を舩して此所に来り一行を歓迎す。休屋はこの湖畔の地なり。我が秋田めぐりは其北を極て今や青森縣に接せるなり。

十和田湖は東西三里南北二里半周圍十二里の大湖にして秋田青森の兩縣に跨れり。その東より二半島の湖中に斗出せるあり。北なるは御藏山にして南なるは中山なり。我等は追手より舟を進め、休屋に至り、舵を轉じ、中山の岸に沿うて漕ぎ行く。桂、檜、山毛櫸などと物凄きまで重り茂れるを右に見つゝ行くに、細き松疎らに生ひたる二つの岩島に逢ふ。其狀相寄りて物語るが如し。大黒島、惠比須島と名づくところ。これを漕ぎ回れば兜島見ゆ。その形圓し。次に長く横はれるを鏡島と云。いづれにも松面白く生ひたり。楊淋しく立てる小島左に孤り離れたるは種子島なり。島の丈低けれど横に伸びて、枝振り美しき松の、



人の手入しけむやうに程よく並み立てる見ゆ。蓬萊島となむ呼ぶ。所謂山中の松島とはこの邊の景を稱へたる名なり。なほ行けば岸に灣あり、碧巖三丈壁の如く聳り立ちてこれを擁す。巖上密林あり、灣内の水は黒く澱めり。こは自麓とて湖の主南蔵坊の始めて人界を去つて水に投じける蹟なりとぞ。

十五

舟愈よ進めば岸愈よ高し、高き岸は必ず懸巖にして其色其形一ならず。懸巖一撮土を蓄ふる處必ず松あり、松の間には必ず楓あり、湖上秋早し已に點々の紅を見る。浦あり崎あり其數を知らず。瓢崎の巖は彩る如き緑青の苔を着たり。六方石の崎は巖壁縦に蝕みて瘦せたる水晶を堆く積めるに似たり。巖頂に低くして老松一株高く枝を張れるを翠松の崎と云。「取舵」と舟子呼べり。日は已に斜にして暮色燃るが如



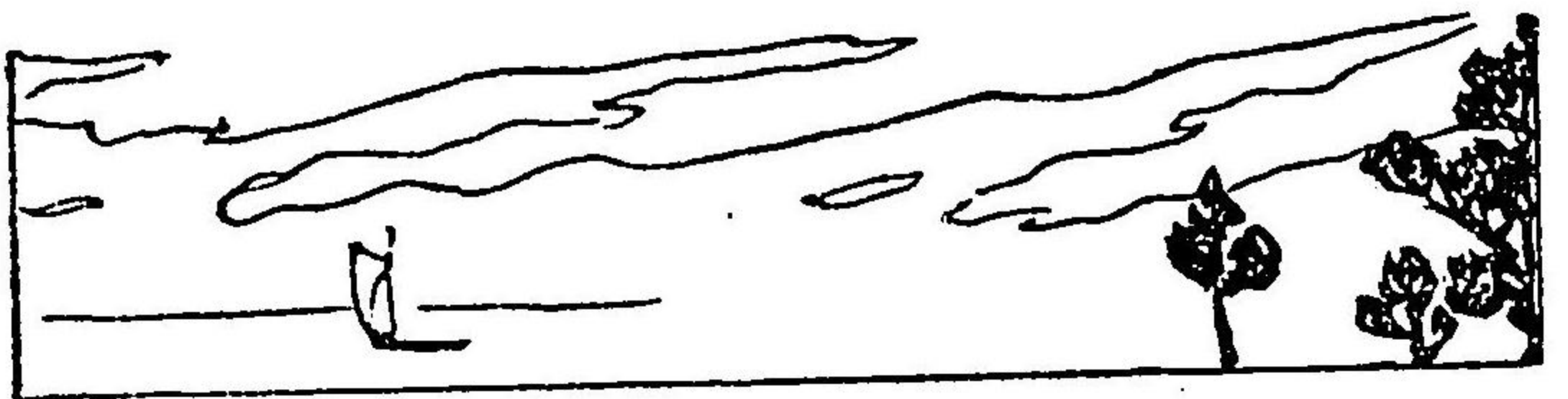
く水より騰る。「うわしやいよいよしやの、うわしやいよいよしやい」櫓拍子揃へて舟湖心に搖ぎ出づ。雲を彩りし落日の名残も薄れぬ。四顧唯一抹の紫にして來し方行方も分かず。奇愁胸を衝きて殆ど泣かむとす。舟は飛ぶが如くに進む。漸くにして、行手の森を認めたり。森の蔭に家あり、家は二層樓なり、その軒に提燈の吊られたるを見る、今宵宿るべき和井内氏宅なる觀湖樓はそれなりと云。樓に上りしは六時なり。この地を精鍊場と名づく。前なる山の昔鑛山なりし折の名の残れるにて樓に對して廢屋の並み立てるは當時の坑夫長屋の朽つるに任せあるなり。

十三夜の月は霧罩め渡りて見えす。八時の頃ひ三艘の舟紅燈を飾りて遠く發荷の方より現れ、三味線入りの囃子賑かに樓前に漕ぎ來り、舳より、頻りに煙火を打揚ぐ。十和田の水に絃聲の響くを聞き十和田の



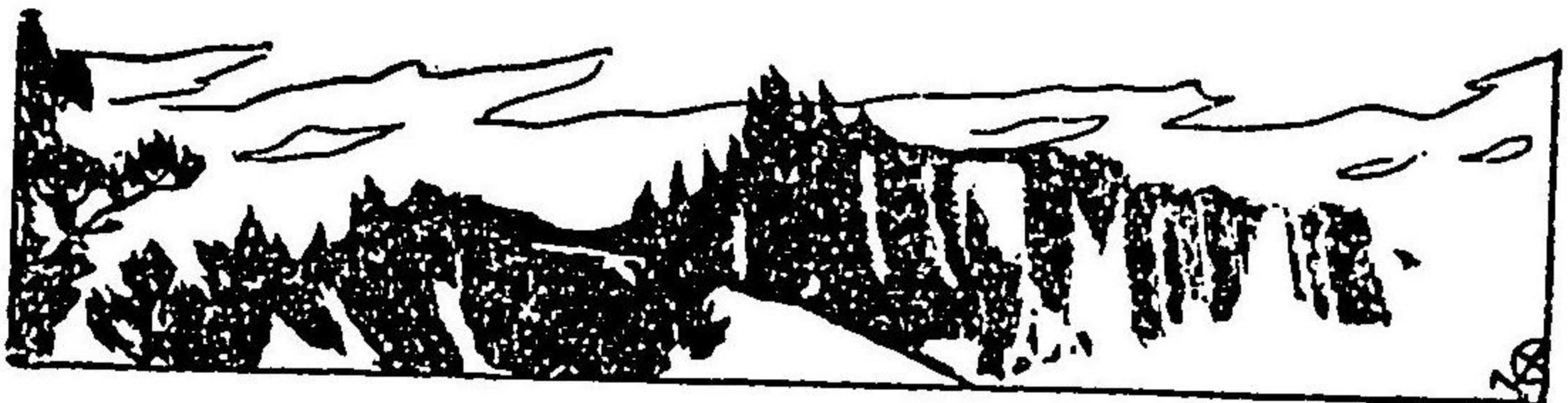
空に煙火の開くを見るは實に我等を以て嚆矢とすとぞ。南蔵坊の夢や如何に。門前には船頭踊始まる。盛岡ぶりの音頭にて調哀れなり、我疲るゝこと甚し、聞きさして臥す。

我が屢ば和井内氏と記し、は、毛馬内の人和井内貞行氏(五十二歳)のことなり。十和田湖に鱒を産するは全く氏の獨力經營の結果たるなり。氏もと此所なる鑛山の事務員たり、日夕森茫たる湖を見、湖に鱒のみに盡きて一魚を産せざるを思て憾むこと甚し。遂に明治十七年意を決して養魚を試みむとす。この年先づ放流せしは鯉と鮒となり。然ども容易に繁殖を見る能はず。あらゆる試験を施し、あらゆる攻究を重ね、水産に關せる會の開催を耳にすれば百里を遠しとせずして必ず赴く。其後辛うじて鯉を獲るに至りしも漸く減じて三十一年後復た漁すべからず。其前年三十年神戸に水産博覽會あり、氏行きて鱒の養殖

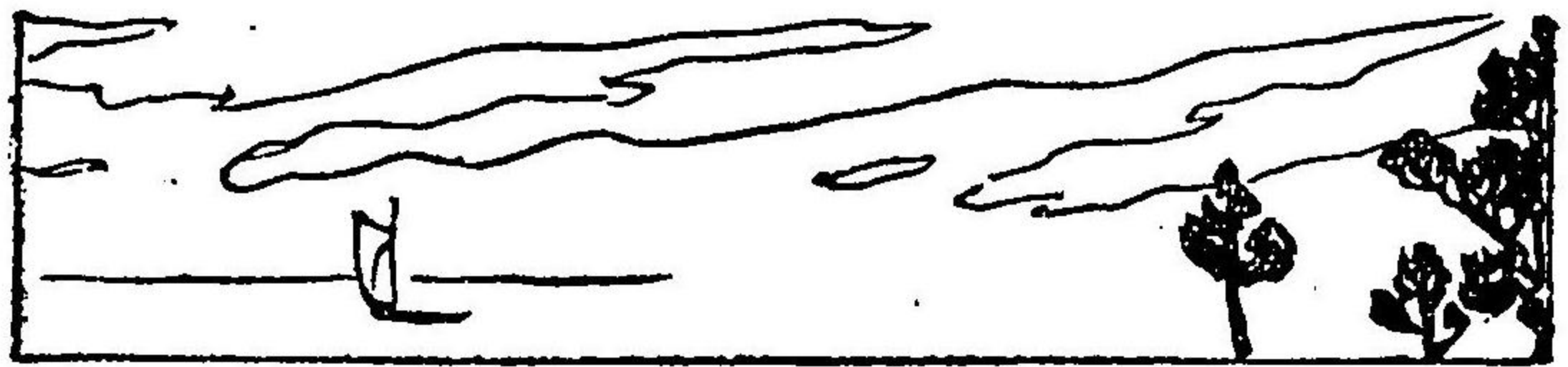


に就て得る所あり。更に日光中禪寺湖箱根蘆の湖の養鱒を視察し、三十一年長男貞時氏(今年二十八歳)を中禪寺湖に遣りて實地研究を爲さしめ、次に東京なる三田水産講習所に派して人工孵化の事を學ばしめ、さて日光より鱒卵を輸入し孵化せしめてこれを湖中に放てり。

氏は斯くて其結果如何にと待てり。然れども十和田の水鱒に適せざる爲か、企劃悉く水泡に歸し去つて、年を重ねるも一尾だに獲難し。和井内氏は舊家にして二萬に近き資産ありき。左れど十七年以來の失敗に、動産不動産悉く蕩盡して、卅五年には全くの無一物となりぬ。世は氏を呼んで狂人痴漢と罵れり、縁近き親戚も氏の姿を見れば金を借られむを恐れて門戸を閉づ。遂に氏の兩親は子とするを潔しとせずして氏を勘當せり。氏は廣き世間に子然孤立せり。唯妻子の僅に氏に同情するあるのみ。然れども養魚の志は儼として動かす。依然蒲行經



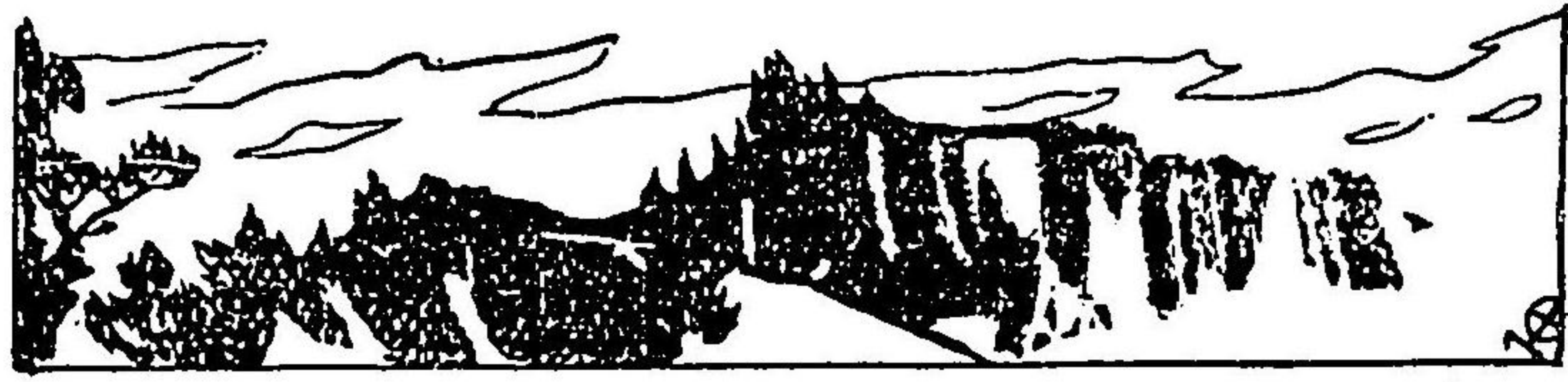
を締めて東奔西走す。この年青森縣水産講習所に赴きて事を謀る。折節偶然北海道より歸來せる信州寒天製造株式會社員中島要三と云人同席し氏の語るを聞き、北海道支笏湖にカバチツボと云魚あり、鱒の一種にして味良し、十和田湖の地勢を思ふに或はこの魚適せずや、と云。氏はこれを聞かば、直に彼地より卵を購ひて湖中に放流せり。幸なる哉天は氏を殺さず三年を過ぎて結果稍良なるを見得たり。即ち始めて人工孵化場を設く。これより年を逐うて繁殖の勢愈盛に販路愈弘く、カバチツボは和井内鱒又は姫鱒と呼ばれ十和田湖は日本一の養魚場となり、一昨年氏は功に依りて藍綬章を賜はるの光榮を負へり。爰に於て、氏は兩親に長く其意に背きし罪を謝し、湖畔に伴ひて親しく其事業を見せ心を安んせしめたりとぞ。人大事を企つ、必ず世人の惡罵あり、親族の反對あり、一身の赤貧放浪あり、これ等はなほ堪へ



得べし。然りと雖暫く不孝の子となるこそ寔に人として忍ぶべからざる事なれ。しかも氏はこれをも敢て忍べり。萬斛の涙の爰に溢るゝを見ずや。和井内氏は一行を大館に迎へてより東道の主人なりければ、親しく聲咳に接するを得たり。まことに柔和なる爺々にして、剛毅の人とも見えず、僅にその圓き眼に非凡の光を認むるのみ。窮境極に達し給ひし折の感想如何にと問へば、笑つて答へず。唯曰く我成功は妻子の賜なりと。

十六

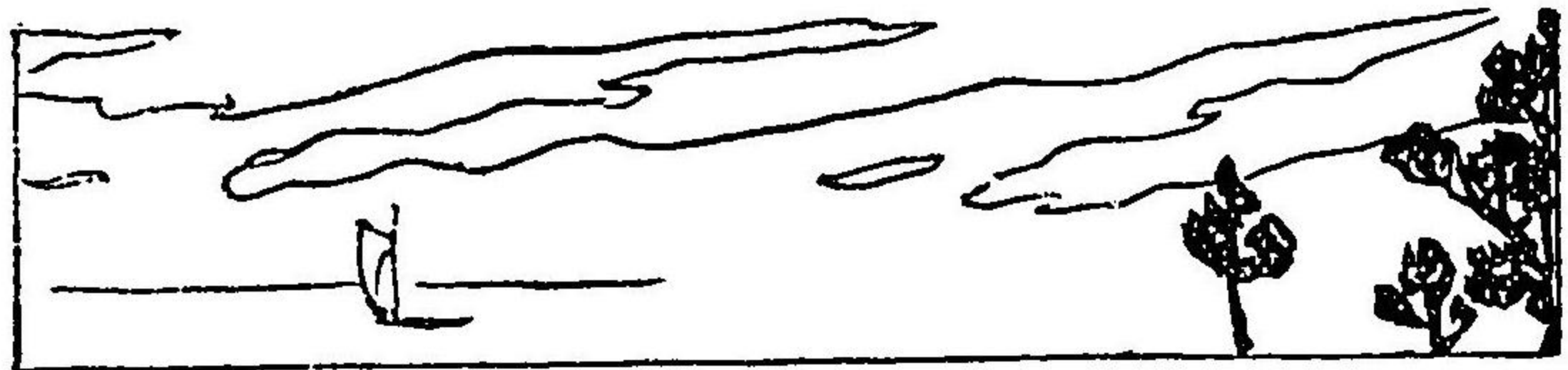
卅日起床戸を推せば水霧冥々として湖を見ず、山を見ず、又日輪無し。散歩せずや、と誘はれて門を出づれば、並み立てる廢屋の朝景色、雨月物語の趣あり。傾ける軒破れたる窓に蛛網ひしと懸り、雨戸失はれて家の内露はに、床落ちてそこに露の生ひ出でたるなど見ゆ。あら



ゆる物皆露を帯びたり。背後の森に鶯の聲高く低く聞え死せる町を乙鳥の如く亂飛して鳴き交ふは子規なり。町の端なる廢屋の一つに戸あり、不審しみて覗へば、机椅子黒板掛圖などあり。こはもと坑夫の妻たりし人の今は師となりて、この邊の十五人の兒童を教ふる學校なりとぞ。學校に近く鳥居立てり、何神の在すにやと辿り行くに、露の仰ぐばかり伸びて葉を張りたる、虎杖の葉の赤う枯れたる、接骨木の實の房々と成れる、藤袴の淋しく風にそよげるなど、右左より路に生ひかゝりて濡れたる蛛網顔に煩はしきに、遂に社の影をも見ずして樓に歸る。湖上漸く霽れて三竿の日眩し。

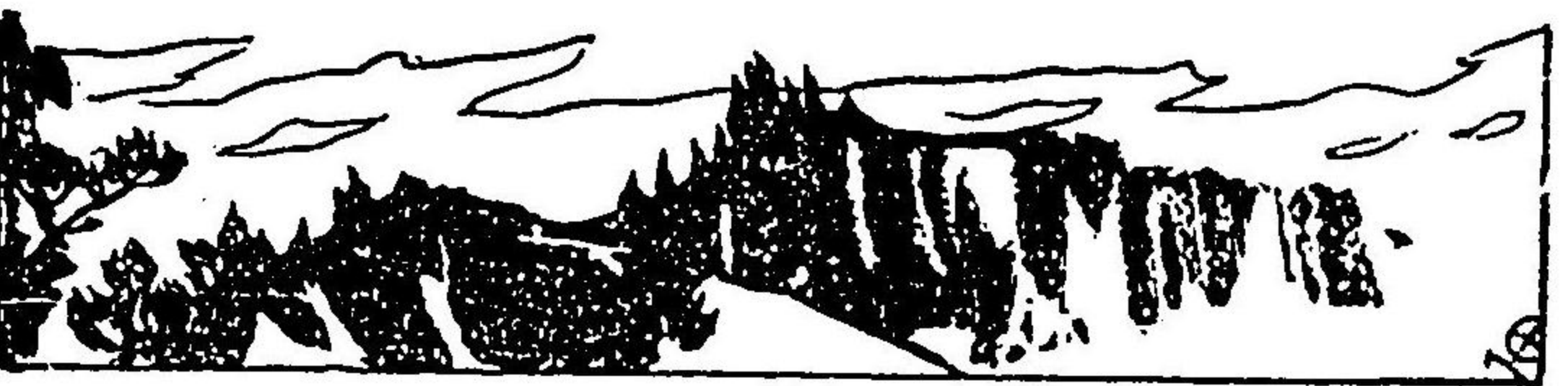
十七

昨夜の晚餐は鮎一式の料理なりしが今朝は鮎一式の料理なり秋田市より我等と行を共にせし大久保市長公務ありて急に歸程に上る。十時



に垂とする頃、舟を並べて東を指す。御門石と呼ぶ岩の、小島なして水面に露れたるに、暫く舟を寄せて舟子を慰はせ、更に碧を亂して子の口の岸に至る。舟を繋ぎて午餐を認め陸に上り、湖水の下流なる子の口川に沿ひて行く。林中の一路頗る趣あり。我は傘を舟中に忘れれば路手折りてこれに代ふ、却て傘よりも大いなり。林の蔭に奇なる植物を見る、裏白の葉枝の丈短く揃へる様したる葉の、低き莖の頂より蘇鐵の如く八方に放射せるなり。このもの雪に耐へて翌年まで生くる故に二年草と云。又ニキョウと云木の藤の如く逞しき蔓を伸して山毛櫨檜などに絡まあり。大樹の倒れて路に横はれる儘なるあり。いづれを見ても快き緑の光のみ充ちて、光景何となう絶海の孤島なんどを探検する心地す。行くこと一里にして、子の口川の雪を翻し霧を捲くを見る。是れ子の口川の奔飛するものなり。これに近く傾斜稍緩

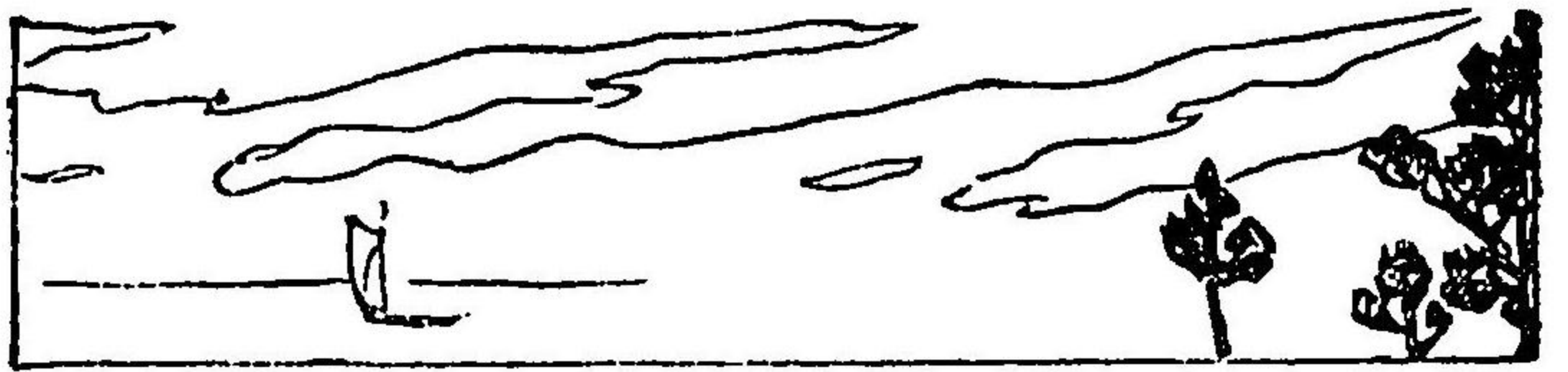




き掛流あるは、和井内氏開鑿する所の魚道なり。

此處より元の道を戻りて、待てる舟に乗り、南を指して漕ぎ出づ。御蔵山の東面に至れば、崇巖聳高き幾十丈なるを知らず。その頂雲を摩する邊龍形蓋影松らしき樹の疎なる、仰げば唯草の如し。又幽林湖面より茂りて巖を隠せる處あり。蔭なる水に囲き石數無く亂れて皆眩き綠青の苔を塗られたり。巨木根を擧げて水に偃れたる其處此處に横たふ。熔ろけたる琅玕の如き水は物を映すこと鏡よりも明かなり。巖壁の北端を日暮崎と云、巖勢雲の湧くにぞ似たる。

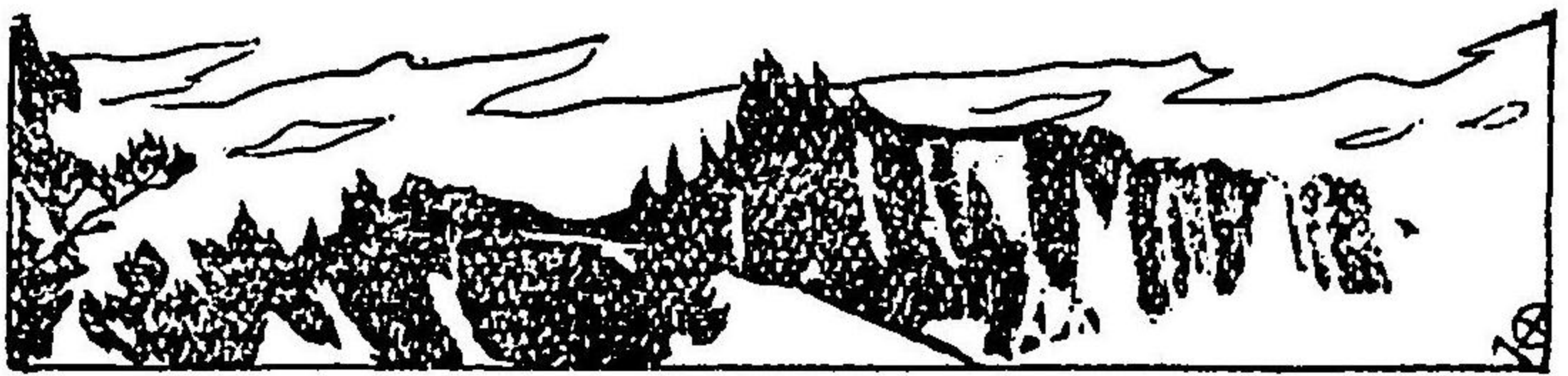
舟この崎を旋りて内海に入れば、斜陽岸を射て奇巖悉く光あり。三角錐なせるあり、烏帽子岩と云。丹碧錯列織るが如きあり、縹緗岩と名づく。遙に高き巖山に殷紅の色を印するを見る、こを色有の山と呼ぶはこの地の習ひ「赤」と云語を忌むが故なり。この忌語ある所以知り



難し。南藏坊敵と戦ひし事に關すと傳ふ。左れば血の色を恐れたるなり。舟中の一人説を爲して曰く、この湖火山坑湖なれば、昔大噴火ありし時の慘事を永く恐れ、火の色を赤を忌めるならむと。占坊と云に暫く舟を繋ぐ。こより鐵鎖を攀ち行けば十和田神社に至るとぞ。參拜者歸途こゝに錢を投じて祈願の成否を占ふを常とす。水を覗へば錢の沈める歴々と見ゆ。我は去年詣でし「湯殿山錢踏む道」を思ひ出でたり。こゝを去りて中山の裏を行くに、景は壯大より漸く纖巧に移る。鴨眠の浦、高砂の浦、明石が浦、巖低く松屈りたるに、黒き蝶舞ひ又鶉の相駢びて愁ふを見る。

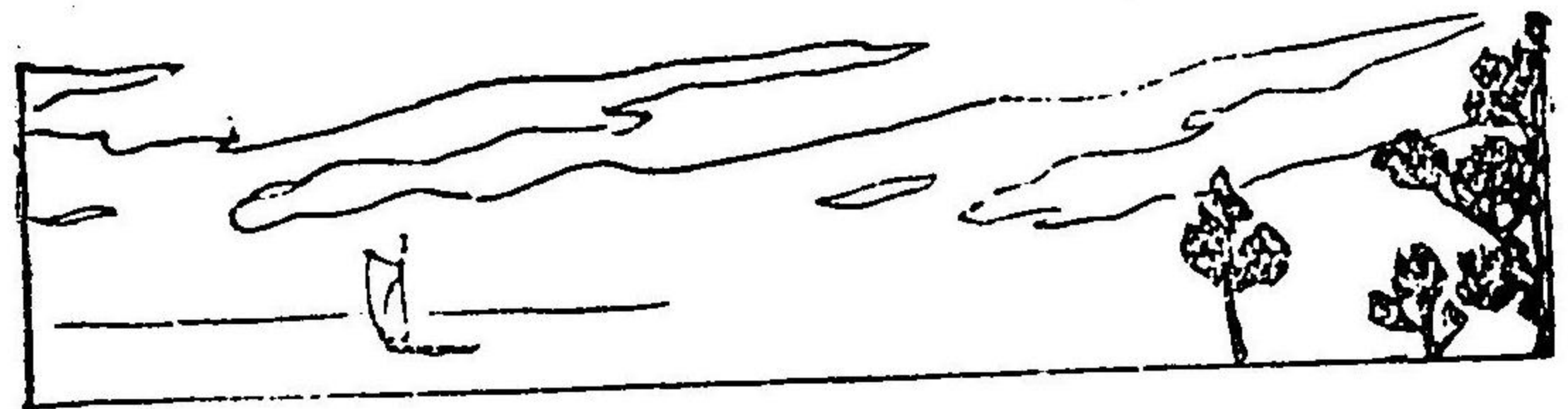
十八

觀湖樓に歸りしは午後六時半なり。晚餐の酒を過して欄に倚れば待宵の月隈なく照り渡りて水の色山のたゝすまひ身に染むばかり哀な



り。酔醒まらばやと湖の岸漫歩けば、今宵も船頭踊始まる。」にやくと遣あれえ、にやくと爲されえのお、にやくとお遣あれえ」種蒔かぬ岩に松さへ生えるぢや無いか、思て叶はの事は無い」思ひかけたら外すな男、かけて外すは樋の水」人の女房と枯木の枝は、上り過せば命がけ、船頭の数は十人に足らず、観る者は唯我等のみ。月の光愈清うして戀の音頭も所から唯物淋しく聞きなされたり。

三十一日午前六時樓を辭し舟を湖上に行ること一里、鈴山に上陸し、此所より再び馬に跨りて小坂嶺山に向ふ。漸く山路を登り行けば、澄み切りたる十和田の湖は、木立の間に隠見して別を惜むもの、如し。木深き路を辿ること七里忽ち小坂の盆地眼下に開けて小坂嶺山全部の堂々一都府を成せるを望む。山内居住の鑛業者總て一萬六千其家々は工場學校病院等の洋館と相錯綜し、電信電話線あり、電車鐵道あり、空



には索道縦横して重き鐵桶の去來する、鳥の翔るに依たり。所謂中央煙突は精鍊所に屹立して高さ二百尺、前きに見たる黄色の毒煙はこゝより渦巻き騰りて、天日爲に熏し異臭大氣を濁せり。我等は盆地に下り行きて小坂ホテルに入り、午餐後嶺山を巡る。先づ事務所より電車に乗る。我等の乗りし電車は汽車風の臺の上に無蓋の自動車様の席を据ゑたるを、四臺繋ぎたるなり。軌道ある限り屋蓋を以て蔽はれたれば恰も長き渡殿を行く心地す。車は昇りくつて元山に着す。各貸與せられしカーキ色の獵帽外套を着けカンテラを携へて三坑道に入る。壓搾空氣は晩秋の風の如く冷かにて、勞役せる坑夫も快げなり、洞ある邊に臭き煙籠りて火影籠になるは今ダイナマイトを用ひし名残とぞ。地上に出づれば酷熱俄に襲うて霎時は酒に中るが如し。喘ぎく山の一角に至り對ひの山の「をか掘り」の光景を望む、「をか掘り」とは



山を穿たず外より崩し行く法にて、頂より漸次麓に及ぼすなり。左れば地底の間に在るべき坑夫等皆天日の下に動く。鶴嘴揮ふ者トロック押す者裸體によりて懋ふ者楮子を攀づる者何やらむ手帳に書附くる者千餘の人の活動せる様博物館などにある模型を見るに等し。

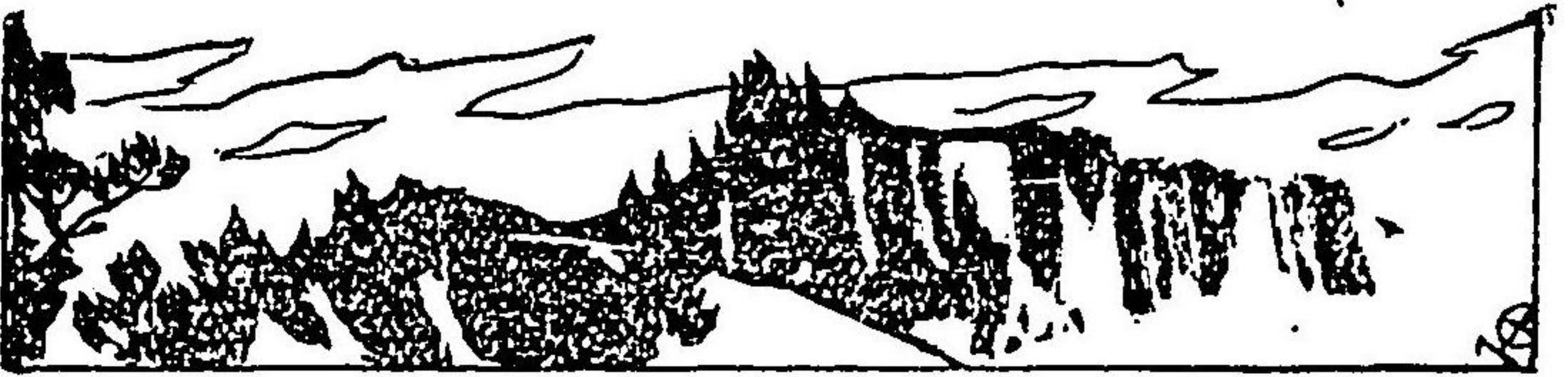
### 十九

再び電車に乗りて山を下り、伴はれて小さき工場めきたる建物に入る。内に機關を据う、こは煙毒除去の機關なり。去年四月來この除毒の事を研究せし結果同年七月に至りて、鏝屑と水とを混じたる中に煙を導き亞硫酸瓦斯を吸収せしむる法を發見してこの試験的装置をなせりと云、されど見たる所機關は運轉し居らず疑深き人はこは單に申譯に据ゑたるものなりともいはむ。この事に關る技師は巧言の人にあらず。曰く有毒瓦斯はこの装置にて吸収せしめ得るも、扱吸收したる毒



水を何處に棄つべきかが第二の難問題なり。この問題にして解決せられずんば實用的除毒機關を運轉すとも益無くして害依然たり。寔に饑毒の事は世界に於ける未決の問題なり。今日急に奈何ともすべからずと。

それより製煉場鏝場等を巡るに、規模の大いなる人をして噤然たらしむ。造幣局に送るべき金銀泥所謂ノープルスレームは大鐵桶に堆く積まれたり。亞鉛蒸溜機の尖管には不斷の碧火物凄く燃え上れり。巨大なる反射爐の口を覗へば銅鏝、湯となつて沸き反れり。吹分けられたる熔銅と熔屑とは二つの樋より炎の瀧となつて迸り落つ。熔屑の瀧の裏には水の瀧跳つて火水相搏ち、熔屑は固體の碎片となりて池底に沈む。大鐵畚あり空より落下し池水を打つや、畚底二つに裂け、碎屑を抄うて昇る。様々の物を見つゝ行くに此世の事とも思はれず。銳



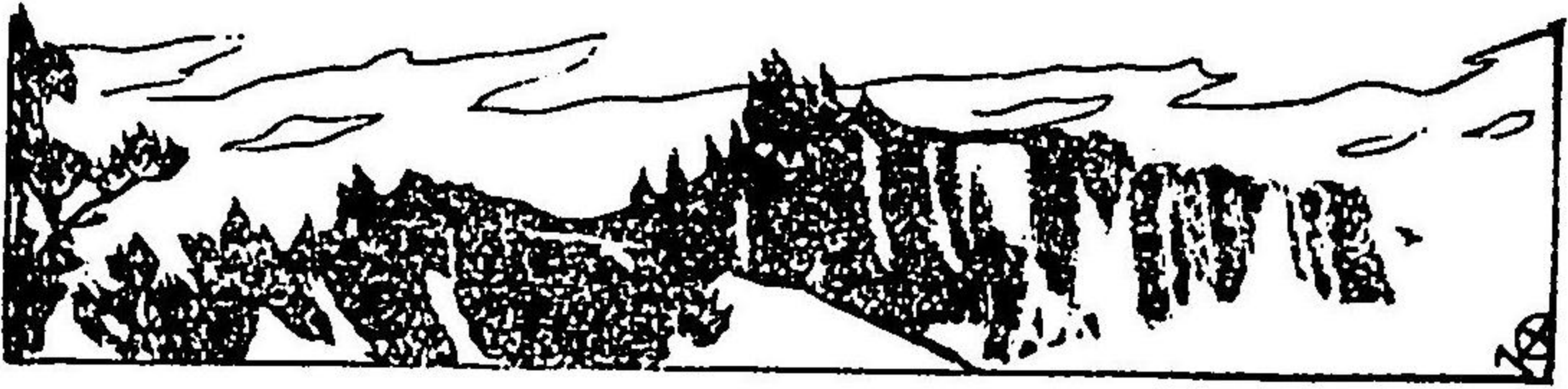
き硫黄の氣は深く肺に入つて吐く息腥きを覺ゆ。疲れてホテルに歸る。今日は我等記者團遊覽の最終日なれば主客一室に會して解散式を舉ぐ。秋田三新聞社は接待の不行届なりしを詫び森知事は切に一行の勞を謝せり。夜七時鑛山主催の晩餐會に招かる。採鑛課長某の演説に曰く、我等は専心本山鑛業をして層一層隆盛ならしむるに努むるのみ。煙毒の事何の違あつてか之を顧みむ、一動起れば反動必ず伴ふ是れ日常平凡の現象なり、諸君亦意に介せずして可なりと。こは洒落を裝うて言を失せるなるべし、されど鑛山側の意向は或はこれに似たるものにして、唯意を留むるは如何にして煙毒の聲を低からしむるかの策略にあるには非ざるか。農商務省の煙毒調査が實地に據らずして鑛山側の調査に據れるが如き、省の處置の寛大と又然く寛大ならしめたる鑛山の策略とに驚かすんばあらず。策士呪ふべし策略の時代滅すべし、

強者は一面に雅量あるを要す、堂々たる小坂鑛山が餘りに策を弄して人の憎惡を招くは憾むべき事なり。一切の策略を棄てよ。椿鑛山は被害區域の田地を總て借受して鑛毒問題を解決せり。區域廣大なる小坂に於ては之に學ぶこと難しと雖も、賠償金の増額、煙突の丈の短縮この二事にして急に行はれなば、問題は幸なる解決を見む。而して一方に熱心なる學者の顯はれて根本的に鑛毒防止法を研究し世界の難問題に解決を與へ以て社會の一缺陷を補ふの日の近く來らむを俟つ事切なり。

## 二十

八月一日午前七時廿五分小坂驛を發して歸程に上る。途に大館町に下車し停車場前の一樓に入り、饗を受く。樓前に獅子踊來る。前きに能代に見しものと似て、唯奴振りあるを異なれりとす。そは可憐なる童

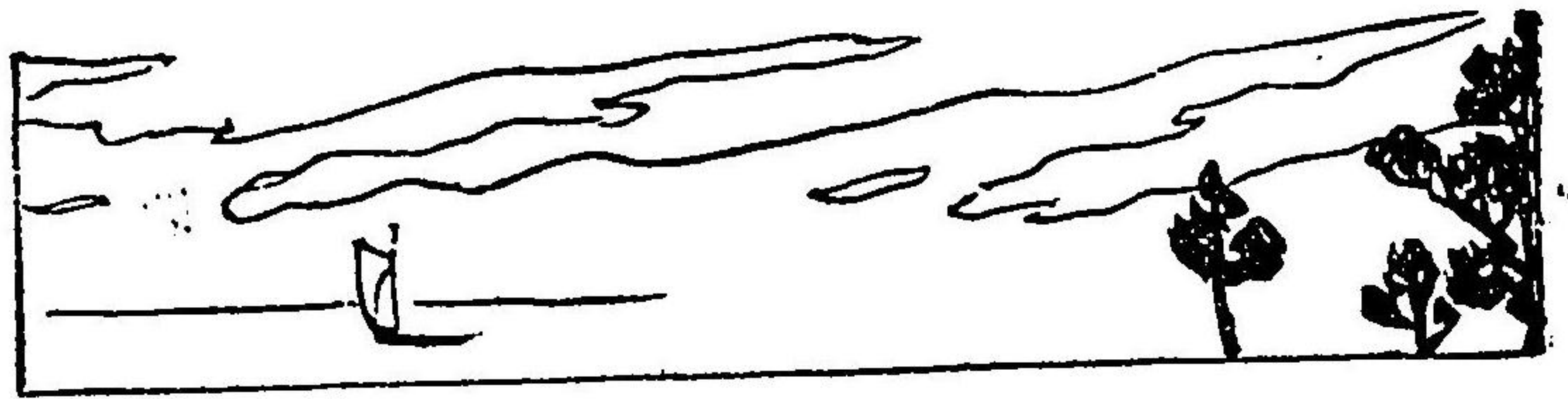




一〇八  
の、後鉢巻し、袂長く華美なる單衣着て、腰に刀を佩び前に金紋縫ひたる廻の小さきを垂れたるが、扇を翳し拍子を揃へて歌ひ囃しつ、踊場を廻るなり。我この踊をつくづくと見るうち涙はふり落つ、何の故たるを知らず。獅子踊終るや當町の名物闘犬を牽き來るを見る。皆太りせめたる日本犬の、耳は鬥争毎に咬まれて垂れたるが、咆哮して敵を求むる勢恰も虎の如し。鬥はす事は今官の禁する所なれば見るべからず。町を辭して復た特別車室に乗る。男鹿の島巡りせずして歸ることの本意無ければとて、朝日の告天子と我と追分にて一行と分れて下車し、再び男鹿街道に馬車を驅りて午後四時船川に着し澤木氏本家に泊す。夜棧橋に出で、月を賞す。

キチ伏せて腰をかけたたり濤の月

キチとは方形なる小さき深刈舟の稱なり。

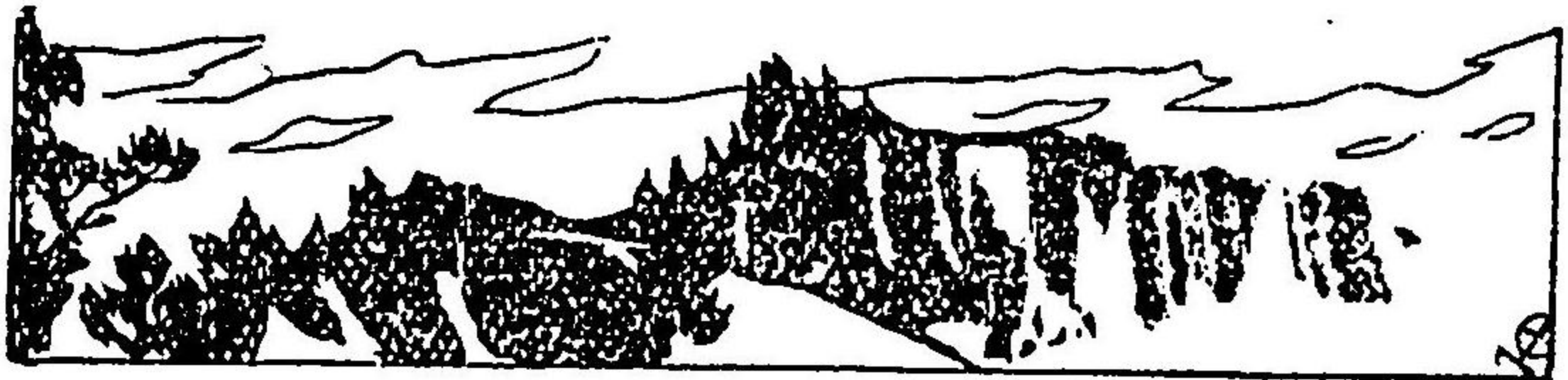


二日晴れたれど風強し。船川の港より舟出せむこと危しといへば、徒歩増川に至りこゝより舟に乗る。狂濤舩に跳つて飛沫時に帆を濕す。空に片雲無し左には鳥海の山の正しき金字形なして直に波より聳ゆるを見る。舟鹽瀬崎を右にして過ぐる時、崎に近く長方の巖島の横たはるあり。帆掛島と云所謂島巡りは爰より始まる。島とは海上或は濱邊にある大小の岩石を指す。此邊より浪は却て穏なり。三つの小さき巖の波上に列べるあり、五徳岩とて鬼の鍋を懸けたる所なりと云。扉島、垢取島あり。廻島など過ぎ行けば、奇巖あり高さ十餘丈、蛟龍首を斜にして飛騰せむとする勢をなす。龍ヶ島と名づく、その頂には雌鳩巢くへり。

雲の峰波上に凝つて龍ヶ島

御幣島と云平岩あり上に百人を載すべし。大館ぐりとして一群の島あり

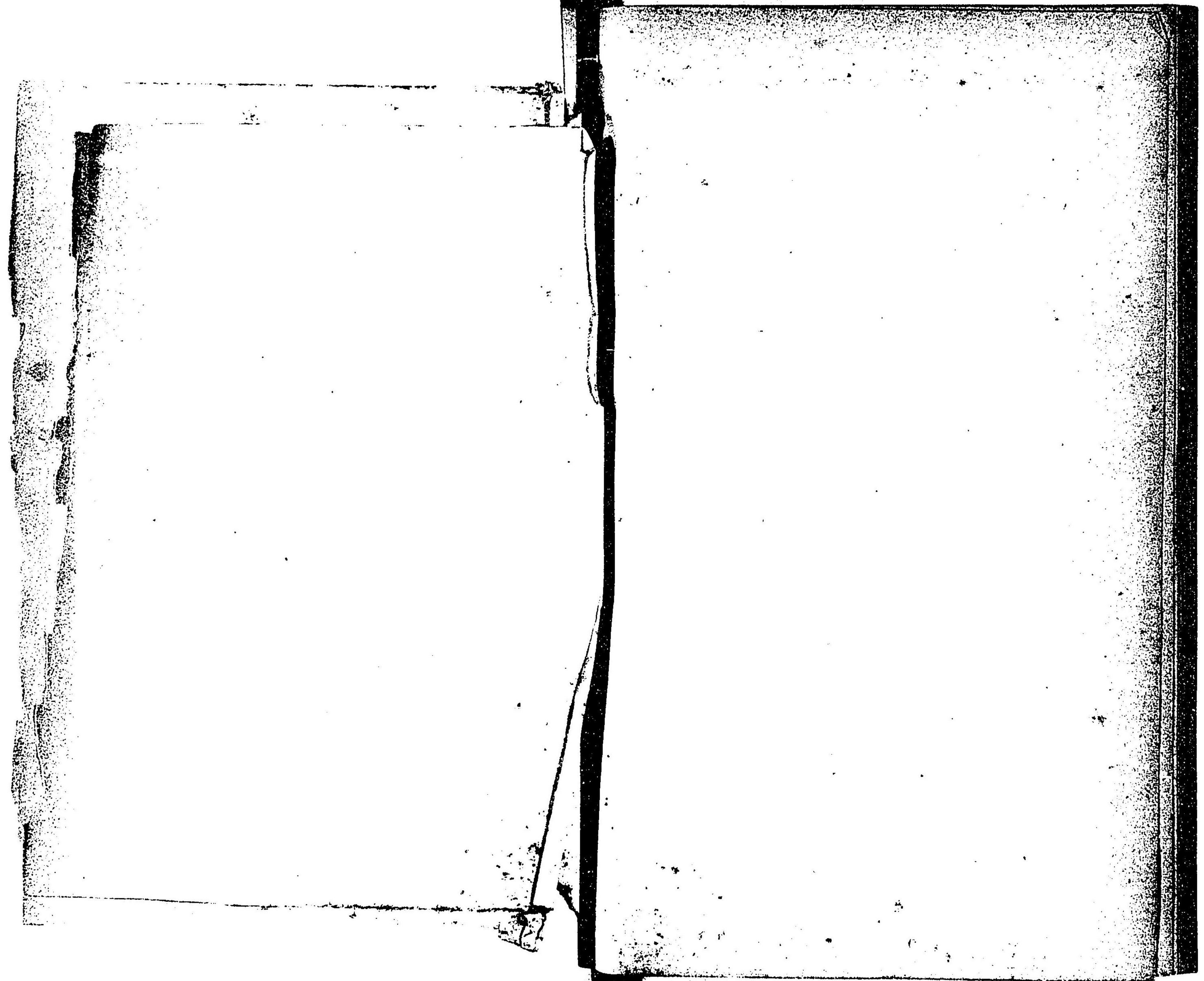
秋田めぐり

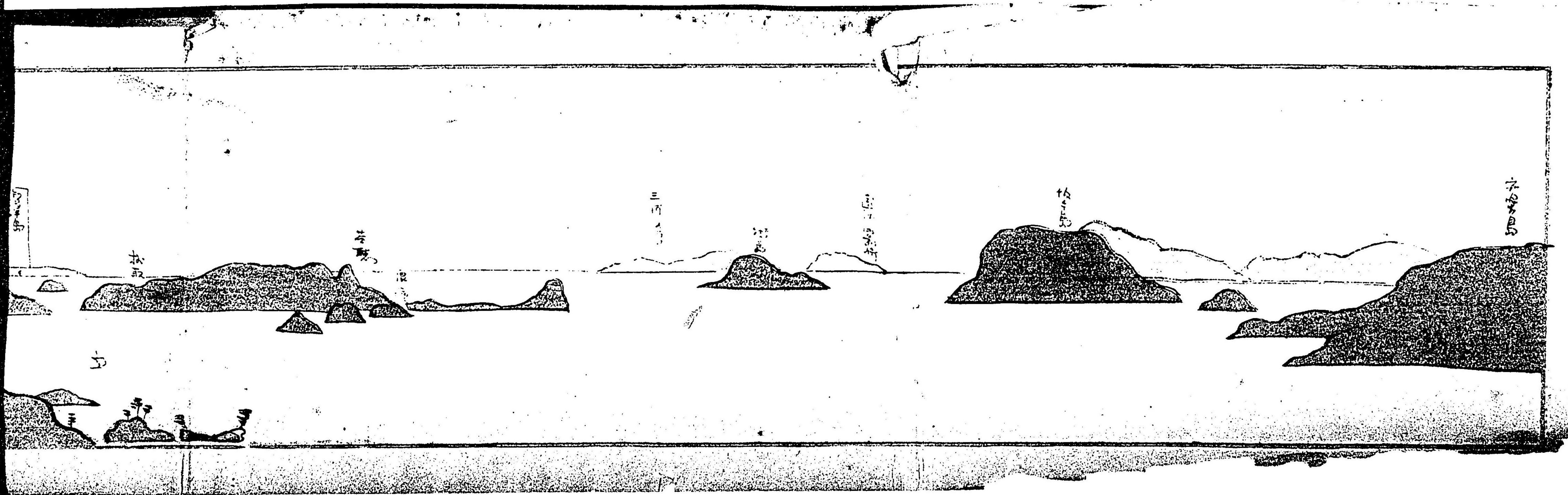


り、頂の雪白なるあるは古き鳥糞なりとぞ。「くり」とは群と云ふ義なる如しと土地の人語る。阿字ヶ島の形稍奇なり、この島の邊海狭くして浪荒きを越ゆれば鶯雀の窟の右岸に開くを見る。窟口高さ二丈、舟子魔除の爲とて舷を叩きつゝ舟を進む。入る事廿間にして砂磧あり。蠟燭を照してその上に下り立ち摸索して進めば、洞窟極る所更に二小窟の開くを見る。記念にとて趣ある石を拾ひて窟を漕出づるに、磧に棄てたる燭なほ燃えて陰森の氣更に動けり。なほ北に進めば小棧橋大棧橋の奇觀あり、巖巖半空に横はれて自ら橋梁を成せるなり。舟大棧橋を潜る。橋は黒煙捲騰る如き態して、つくくと仰ぎ居れば巖搖ぎ去るかと思はる。なほ入道崎に至るまで大小の奇巖數無しと雖絶奇のものは已に見盡したりといへば、此處より舟を反す。總じて男鹿の島々心悸くの状態ありと思ふは誤れり。怒るが如しと云も中らず。我が見

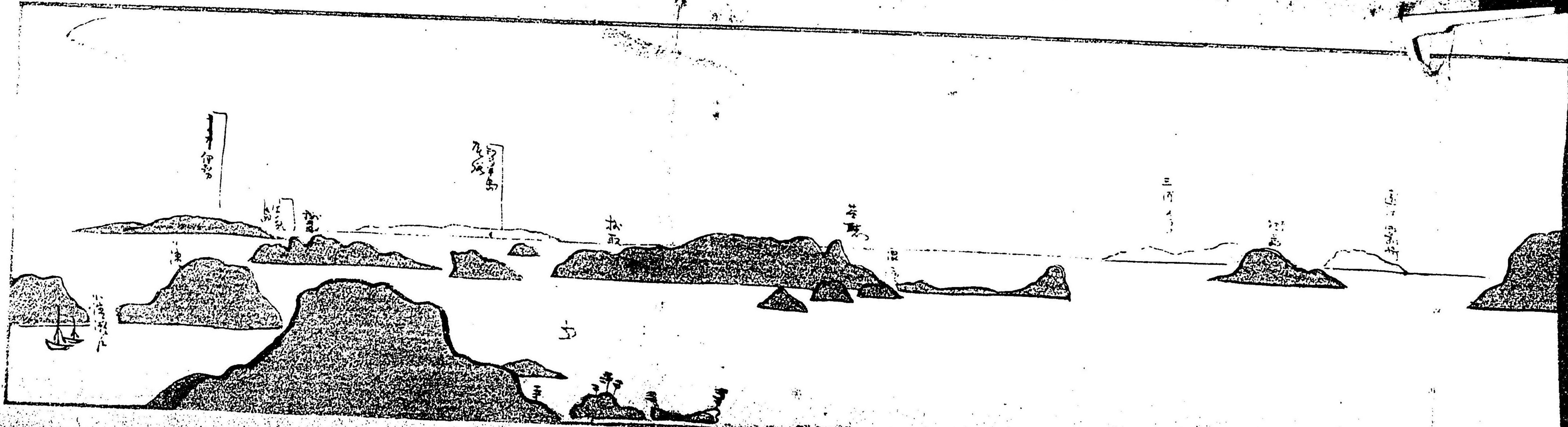


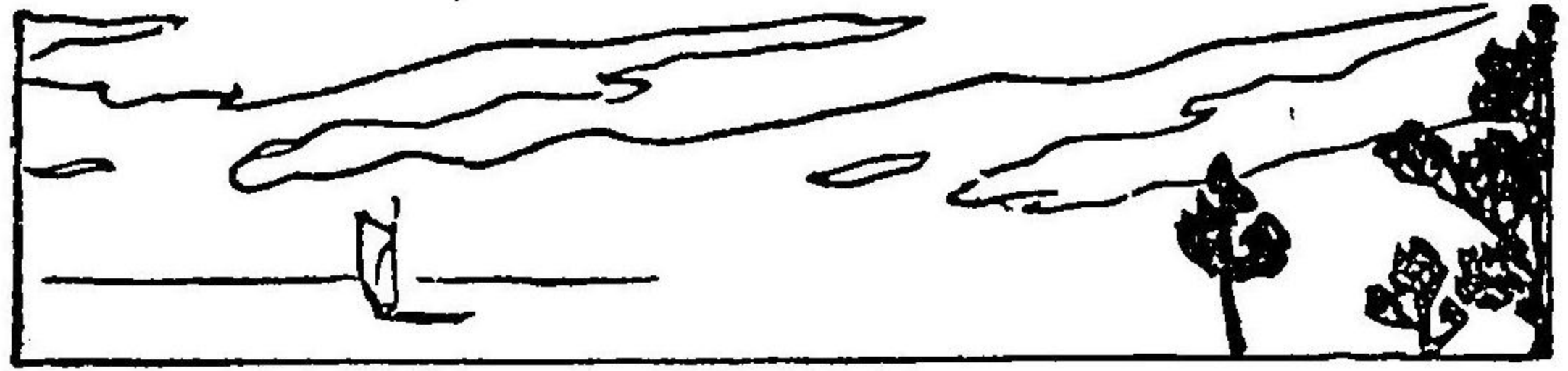
たる所によれば、寧ろ温雅の趣に富めり。徐に舟を行きてその趣向とりくくなる盆石を愛玩すべきなり。巖の色の多く赭色にして土に似たるは最惜むべし。かの御幣島に上りて南磯村の響を受く。巖に蓆を敷き帆を日覆としたる會場様變りて嬉し。若布の根の茶碗盛最珍味たり。日本山に没する頃、船川に歸り、志を遂げたるを喜ぶ。三日例の馬車に乗りて此所を去り、午後零時半追分驛發の汽車に搭す。幸に米澤驛にて一行と會するを得たり。一行の交情は兄弟よりも親しくなりぬ。互に旅中の逸話を談じて、四日午前八時京に入るまで歡笑の聲更に絶えざりき。









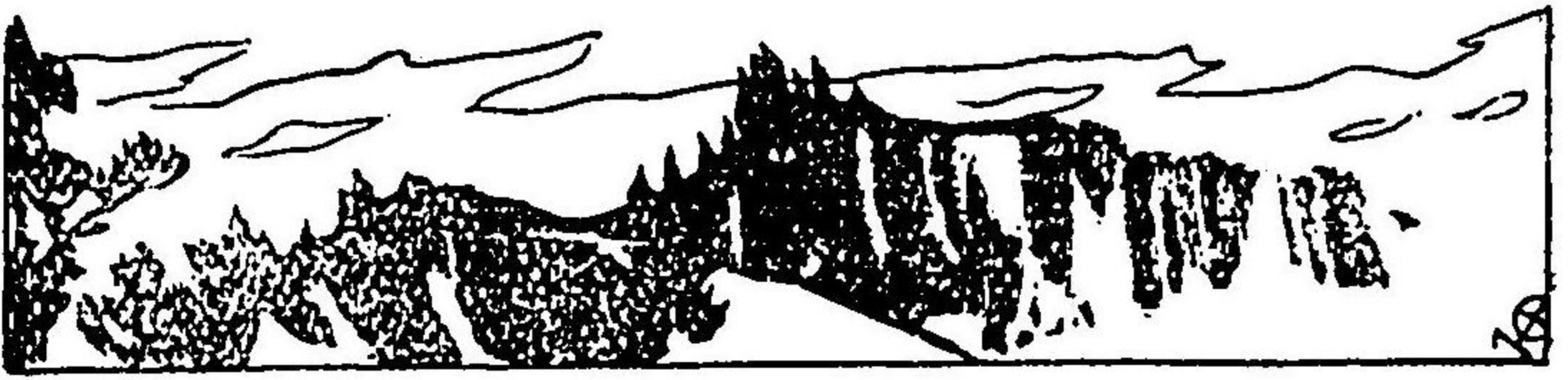


### お伊勢参り (附、志)

(明治四十二年、九月)  
(廿日より十月十日迄)

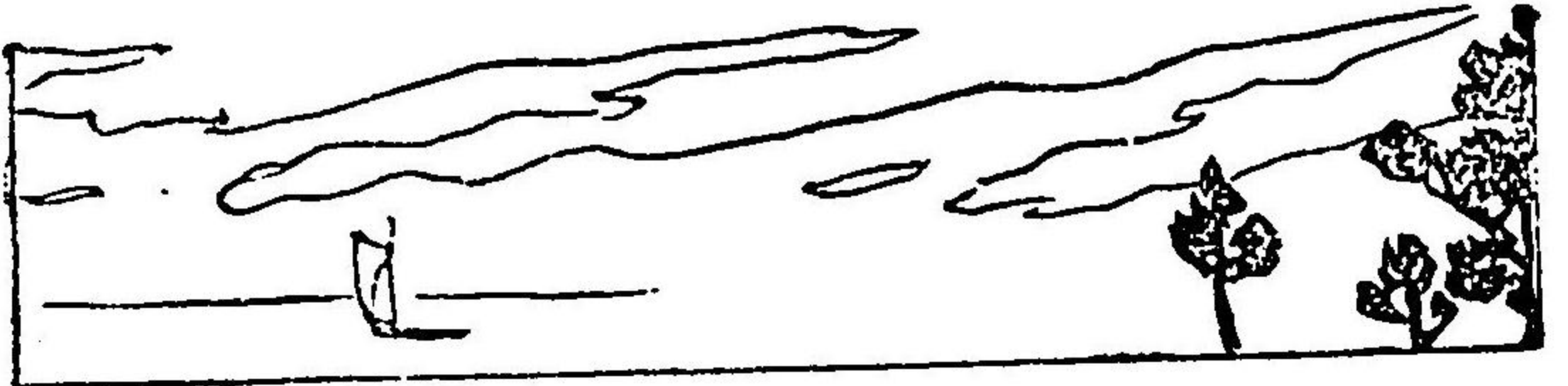
一

「君ねえ……伊勢へ行って呉れませんか」と中内君が例の机の上へ胸を這はせるやうな恰好をして細い目で暫く僕の額のあたりを見詰めて居る。御遷宮の記事が新聞に出た四五日後のことである。「行きませう」と僕は無造作に答へる。僕は斯う云時に、行かうと云て置きながら直ぐ厭になり、又行きたくなり、右へ左へ心が振子のやうに揺れる。「愈シルクハットだな」と口走る。シルクハットのやうな滑稽な物は僕は断じて一生冠らぬと聲言した事がある。所が新聞記者になつてから時々その必要が起つた。頑として中山で通した。米艦歓迎の時に始めて臨風君から借りて冠つたが、大きいので、俵が石橋の上を通る時に、

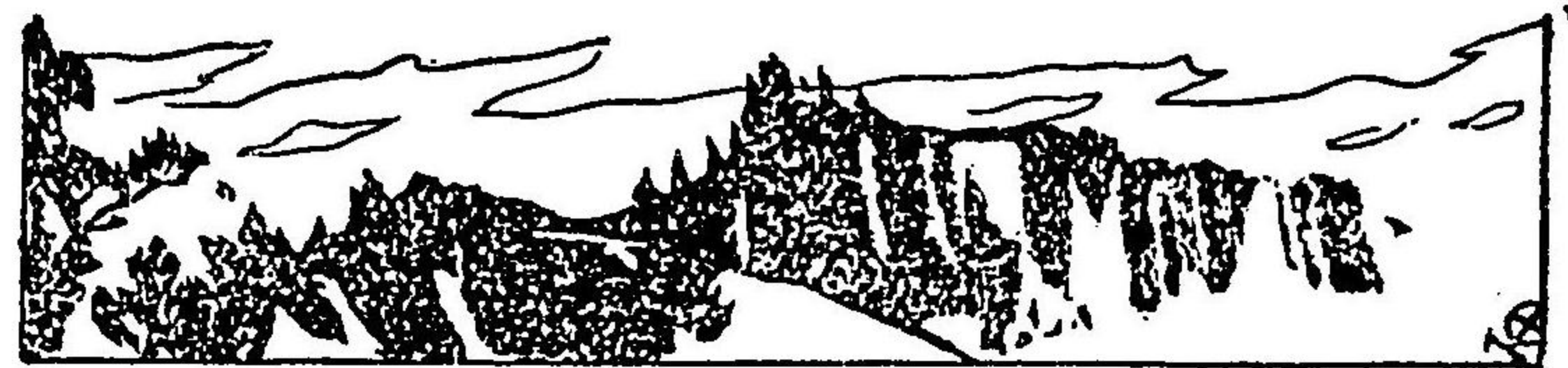


其響に従てハットが眉の下まで落ちて来るのには大に弱つた。借帽と云ことは往けないと悟つたのはこの時である。その後必要が起らなかつたが、今度は伊勢の御遷宮、是非これ無くては往けぬ。伊勢行の聲が懸つてから二三日の間ハットやタオルサツクや、其他の買物を調へる。可なり旅馴れて居るが矢張り出掛けるとなると屹度新しく要る物が出る。これは人の旅行用具を見て段々自分も贅澤になるのかも知れぬ。

準備が出来ると、熱が出て寝た。インフルエンザで、ひよつとしたら脊髄を熱が冒すかも知れぬ、と先生が云。丁度三日ぶつ通して寝た。此間複雑なる悲劇が演ぜられた。それを書く積りで旅行前の事をこんなに書き出したのだが、矢張り省かう、少し耻入ることだから。傾城買二筋道、傾城色三味線など、云軟い物を病床で讀んだ。一兩日中に



伊勢へ行かねばならんですが、行つても宜いでせうか、と先生に聞くと、「それはお止めになつた方が宜いでせう、折角熱が退きましたから、又發したら今度は大變です」と云はれる。併し卅日の朝は如何にも気分良くなつたから社へ出て見た。少しフラ／＼はするが、え、大丈夫だらう、今夜立たうと決心した。校正の中川翁が「おんさんの部屋にでも泊れば癒つちまふさ」と景氣を附ける。今夜立てば十月一日に神都に着ける、十月一日は僕の誕生日だ、何だか目出たい。丁度僕の祖母が今年七十七歳になるから、よい折に祝をして遣りたいと思つてたが、伊勢の歸りに名古屋に寄つて御遷宮の歸りと云お目出たいところでこの祝宴も張つて来ようと思ふ。こんな目出た盡しを考へると無暗にいそ／＼して来る。



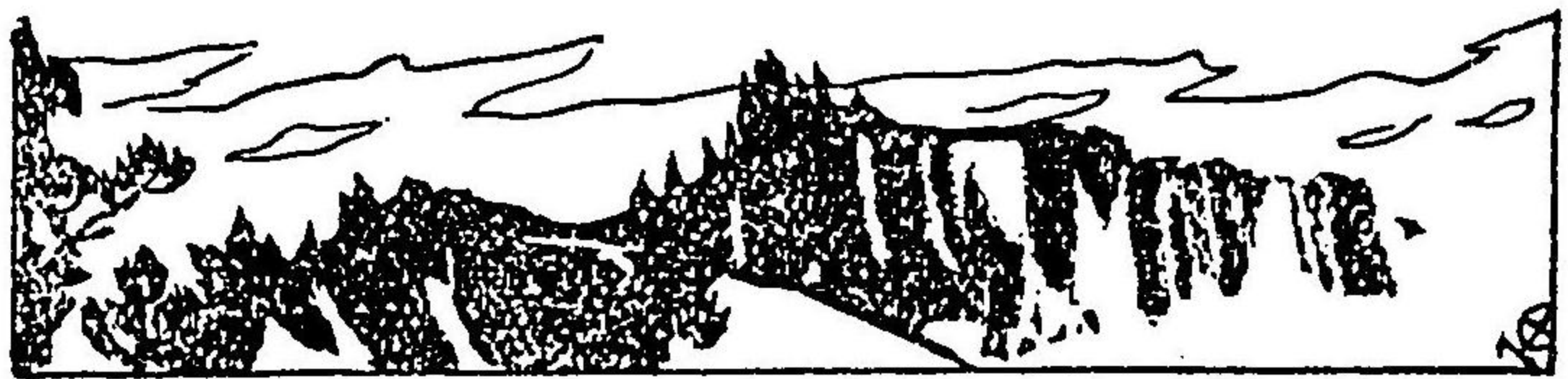
この夜九時發の急行で新橋を出發する。昨夜の十五夜は降つて仕舞つて今日もまだ歌まなかつたが、汽車新橋を發する頃雲やうく切れて消えて、十六夜の月は瑞々しく顯はれた。品川灣の波のうねく生麥村の街道松車の進むに従つて月は愈澄み渡る。室はひどく込むので横になる事は出来ぬ、窓際に席を占めたから倚懸れるのが勿怪の幸位だ。隣に居る人がひどく快活な紳士だから、話しかけて見たが、直に種が盡きた。鼻の先には西洋婦人が構へて居る。この爲に喫煙を我慢して耐へて居る、なあについ御近所で煙が捲騰つてるが、どうも僕は敢てし得ぬ、ハイカラになつたのか臆病になつたのか。

窓外は野といはず山といはず里といはず一面に月の光が流れ渡つて何ともいへぬ。うつらうつらとすること稍暫し、ふと覺めると、車は今駿河灣に沿うて走つて居る、洲の砂も引き上げてある舟も古屋も皆露



を帯びて輝いてる、寄せては反る濤瀾がザアーツと音して巖に碎け洲に匍ふ其色、思ふ様光りながらなほ含む趣あり、見る限り物悉く辭つて唯濤のみ覺めて居る。嬉しいやうな悲しいやうな想が胸に湧く。ウイスキーを飲んで睡る。蒲郡のあたりで覺め、顔を洗つて食堂に入る。客は僕だけである。先づ煙草をうまく喫む、このうまさには西洋婦人のお蔭だ。しら／＼と夜は明けかゝる。「月は在明にて光をさまれるものから影さやかに見えて、なか／＼をかしき暗なり」と繰反し口吟む。源氏はどの方面から見ても絶大の作品だ、聲調の點から云ても、一句一節朗々吟詠して悶を遣ふことが出来る。

明るくなると稻の足穂到る處に美しい、今年は全國に渡つて近年稀なる豊作ださうな、御遷宮に添へて重ね／＼めでたき秋である。六時卅二分に名古屋驛に着いて直に山田直行に乗換へる。名古屋言葉が八方

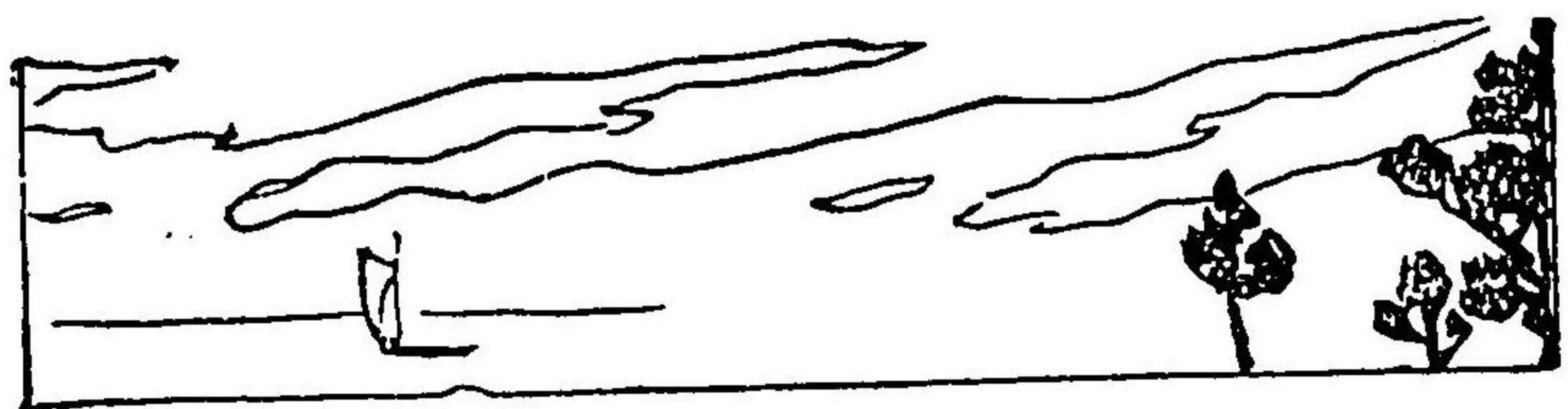


に起る、御里ながら實に厭な言葉だ。名古屋の姐さん株の藝妓らしいのが五六人乗込んで傍若無人に侈り散らす、今朝眠かつたことや、食ふ程楽しみは無いだの、東京と京都とどちらが面白いとか、今度桂様に遇たら何といふとか、仕切無しによく侈る。侈るのは單調を破て結構だが、間々に、廣く世間を知てる自慢や偉い人と知己だぞと云自慢が交つて其折々に一寸濟まして「どんなもんです」と云た風に外の人を見渡すのが憎い。

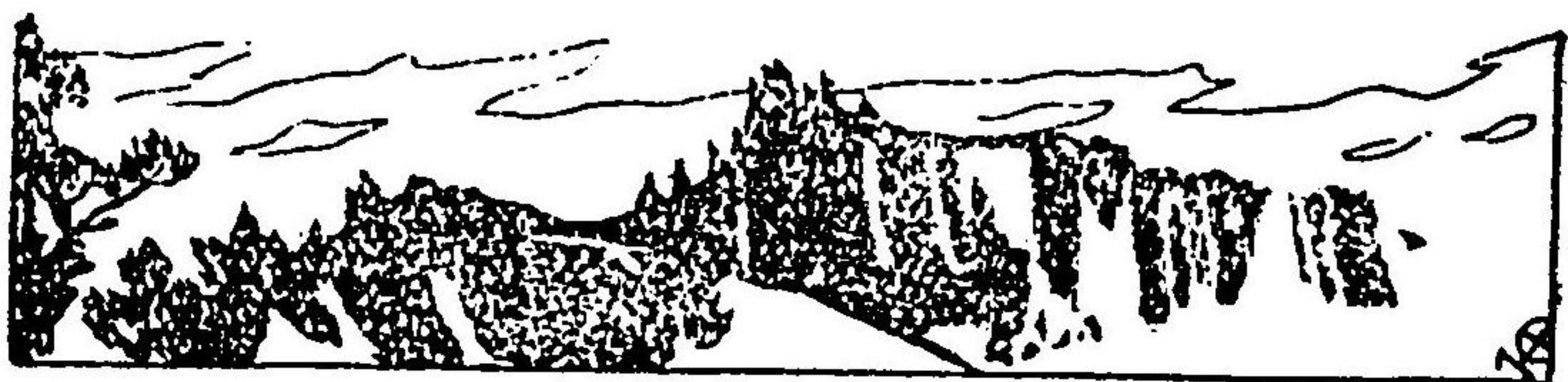
驛に着く毎にドシ／＼人が乗込む、皆山田を指すのだ、荷物は床に山のやうに積まれる、立てる人が十人餘りもある。十時四十四分に山田に着く。

## 三

通信員の立田君から、油屋へ泊れと云電報があつたから、油屋までと



車夫に命じて行く。随分人が入込んでるのであらうが横町は淋しい、電柱の根本から頂上まで葛が絡つてるのがある、古き軒端々々に国旗挑燈が出て居る、国旗のさきの玉の代りに草を挿したのもある。通りへ出ると流石に賑かだ、七年前に來た時の記憶が浮む、その時と大した變りは無いやうである。宇治山田の家々は皆棟の線が往來と直角になつてる、即ち土藏の建て方と同じだ、これは神宮の建て方に似るのを憚つて特に斯う建てるのだと聞く。この事に氣が付かない先に、家の並んでるのを一見して誰しも何だか異つた趣味を覺える。宿屋の看板、萬金丹の金びかの店、神影の掛物を賣る店などに秋の日が照つて居る。下げ髪を白い帛で結んで袴を裾高に穿いた幼い巫女が二三人づゝ手を引き合つて日和下駄をからつかせて行く。子を負ぶつた乳母が牡丹蝶々の大模様を描いた大きな日傘を翳して行く、骨董集のお乳母日傘の



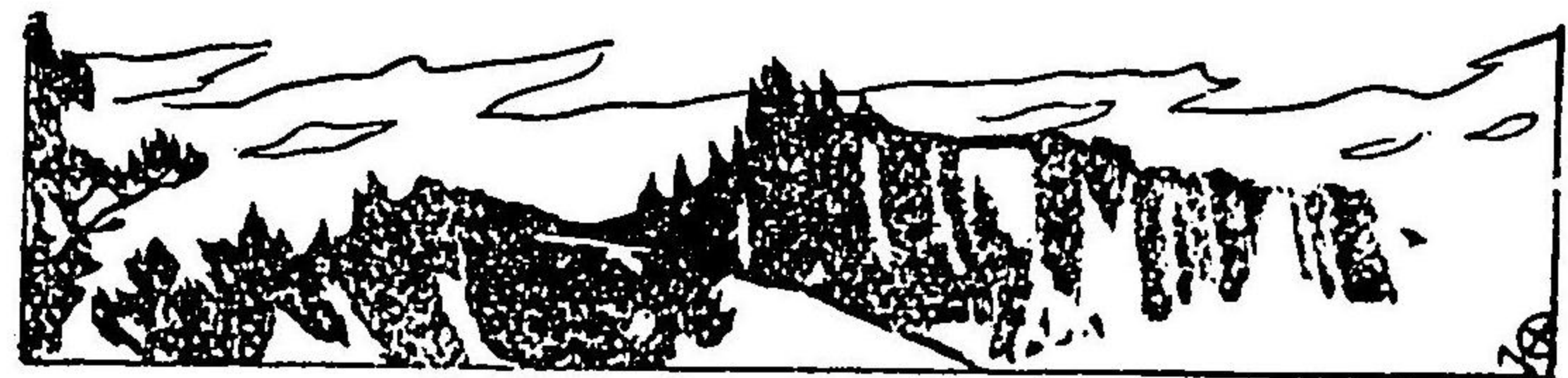
繪に似てると思ふ。装束を着けた伶人らしい人が談笑しながら行く。宿屋に「満客に付き御断申候」と云貼札が見える。小さい宿屋の二階から兵隊が三分刈頭を並べて町を見て居る、儀仗兵であらう。

間の山の急阪に蒐る、兩側の家々殊に古ぼけて居る。ひどい阪だ、阪はくの字になつて、路が滯鉾形になつてる。前の大宮司はこゝで馬車から落されてそれが因で歿したと云ことだ。車夫は臍の邊に鞭を當てがつて兩手ぶらぶらで上て行く。向うから来る車夫が「何處だえ」と聲をかける。「あーぶ」と答へる、無論油屋の畧語であるが、この尻上りのアクセントがいかにも仲んびりして氣に入つた。和合人に油つぎの男をアブ公と呼んであるのを思出す。

やつと油屋へ着く。この前来た時は爰へ泊つた。大に歓迎されて上り込む積りで車を下りて僕は東京の萬朝の記者です、立田さんに座敷



が取つて貰つてある筈ですが」と云と、「新聞社の方は皆藤屋に願ふ事になりましたで」と番頭が云、「藤屋には東京の記者が皆來てるんですか」と聞くと、「大阪や名古屋の方はお泊りになつて居りますさうで、東京の方は追々お見えになりませう」と云、保安課から宿の世話をしようと思ふ。そのうち番頭は藤屋へ電話をかけて「あちらにお支度が出来てるさうです」と云。お茶を一杯御馳走になつて又車に乗つて間の山を下る。疍艇が込み上げて来る。藤屋へ着く。二階の往來に面した部屋へ通される、うす暗くて小便臭い部屋だ。床の間に寫真機と小荷物が置いてある。五十ばかりの、頭の天に面した部分が總て毛溷になつて其周圍の毛が異常に房々してる、丁度磯巾着を冠たやうな男が、のそ



のそと現はれて、「どうも穢い部屋で御氣の毒様で御座います、お連様は今一寸御出掛けになりました」と云。

四

はて面妖なお連様のある筈は無いがと思つて聞いて見ると、社で頼んでる製版屋の石井君らしい。「どうもこの部屋は困るがねえ、便所の匂がして耐らん」と云。「そ、左うですか」と碓巾着が正直に鼻息をスースーと引いて右顧左眄する。慣れてるから匂はないんだらうとムシヤクシヤ腹になつて匂つて来る方の襖障子を圍め切つて、往來の方と床の間の横の方の窓を開ける。開ける所必ず蜘蛛の巣に逢着する。僕は朝目を醒ますと家のぐるりを回つて蜘蛛の巣を點檢する、そして下女をして眼前に於て取らせる、座敷の掃除をするのに障子の棧を第一に掃ふのは日本國一般の慣習であるが、僕は天井、壁、部屋の隅、額



裏などの蜘蛛の巣を第一に掃つて而うして後に障子バン／＼を遣れと命じておく、時には書齋で仰向きに臥て尺蠖のやうに體をずらせて机の下を檢べる。その僕が斯くの如く蜘蛛の巣の包圍に逢つては氣が狂ひさうだ。

碓巾着はおど／＼して引込む。色の青くもあり黄色でもある女が茶と菓子を持つて来る。菓子は本の形になつて、焼付けてある標題の文字は「東海道中膝栗毛」とある。あゝさうか、彌次喜多の泊つたと云宿屋は此處のことかと氣が付く。彌次郎兵衛がこの藤屋の名を忘れて「ハテ口へ出るやうな、何でも棚からぶらさがつてゐるやうな名であつた、モシ／＼妙見町にぶらさがつてゐる宿屋はございやせんか」と大まごつきで尋ね回つたことを思ひ出す。こゝを一名彌次喜多樓と云ふことにも氣が付く一九先生こゝに泊つたに違無い、そして屹度屋號を

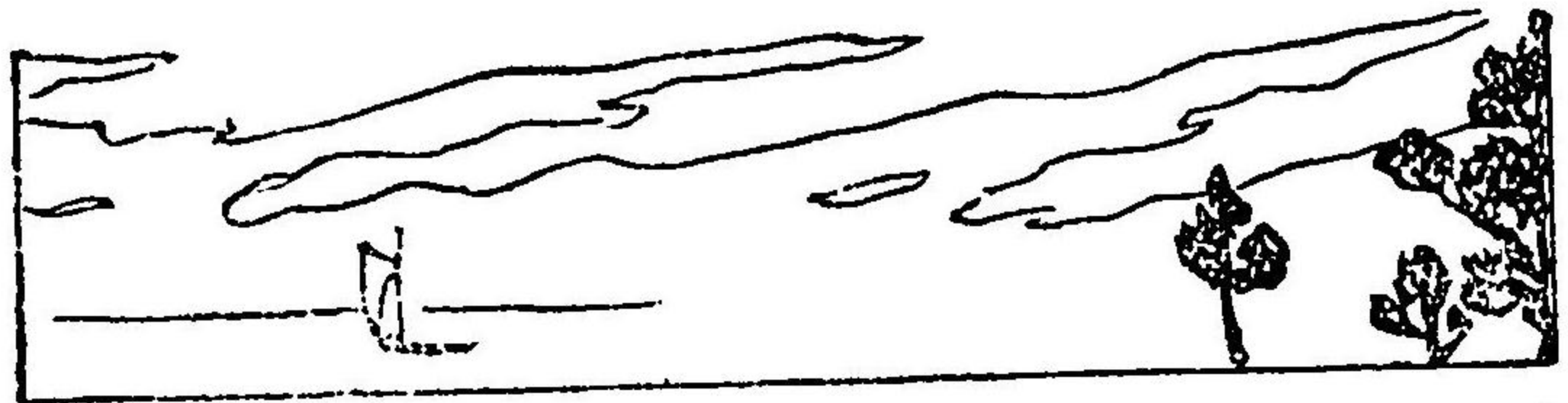


忘れてまごついたに遠無いと大に感興を催してそこらを見まはす。天井に何か塗つてあるのが漆の如く光つてるのが目に付く。左の手でバタ麵麩を食ひながら右の手で原稿を書くと言調子の心でこの藤屋に泊つてるのは間違つてると思ふ。茶代を出す、晝飯を食ふ。そして兎も角俵を驅つて通信員の立田君の家を訪ふ、不在だ。徴古館へ行けと命ずる。素晴らしく立派な道路に出る、人道車道明確に分れて兩道の堺には御蔭石で浅い溝が造つてあり又櫻の若木が並木になつて其根もと丸く人造石で劃してある、山の所は切通しになつて左右の截断面には規則正しく萩の植込がある。車は勢よく走る。どうしても東京の凱旋道路と伯仲する。これ新道だね」と聞く、「御成街道だす」と車夫が答へる、「新しく出来たんだね」と聞く、「左うだす」と答へる。秋の日は稍暑い、近在の人らしいのが十人廿人づゝ一團になつて通る、古い

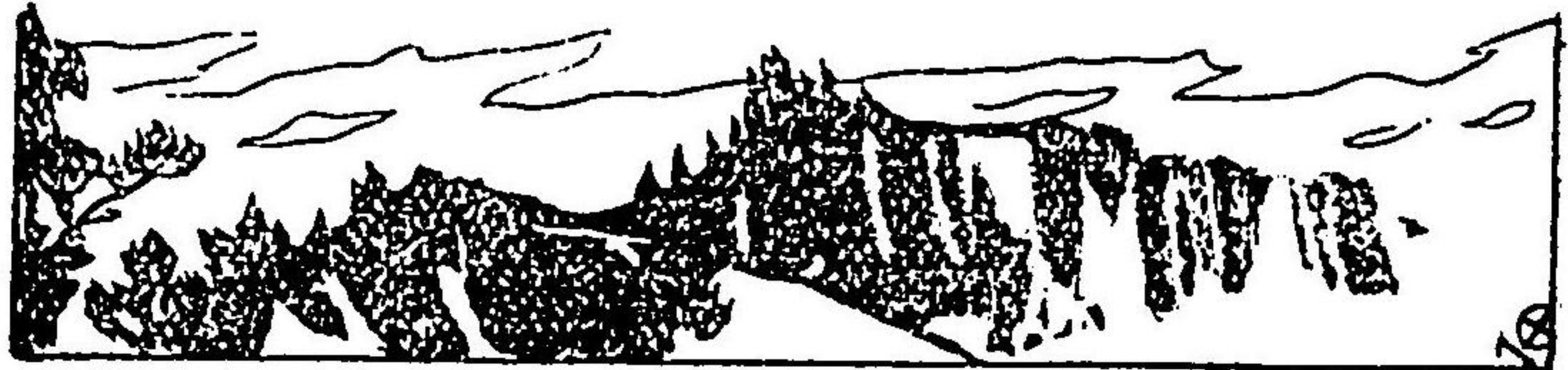
蝙蝠傘、赤い腰巻、男女老幼を問はず十人のうちで七人までは歩きながら柿を食つてゐる。溝の石に腰をかけて行厨を開いてゐるものもある。

五

倉田山の徴古館に着く。これは神苑會で設けた歴史博物館で開館式は廿九日に擧げられて坪井さんも臨場された筈だ。観覧券を買うとすると、非常な人で服の釦もちぎれさうだ。押分けて小窓の所へ行く。皆が無暗に手を突込んで何枚々と叫んでるから、僕も突込んで一枚々と叫ぶと一枚呉れた。いくらとも何ともいはぬ。こちらへと巡查のいふ儘に館の入口の方へ行かうとすると、靴の者もカバールを附ければ入れぬとのこと、カバールも草履も一足も無い。下足番はたゞうろして居る。下駄をぶらさげて素足で這入る人もある。巡查に相談すると、「どうもこの雑沓ですからどうも」といつてゐる。ふと横を見る

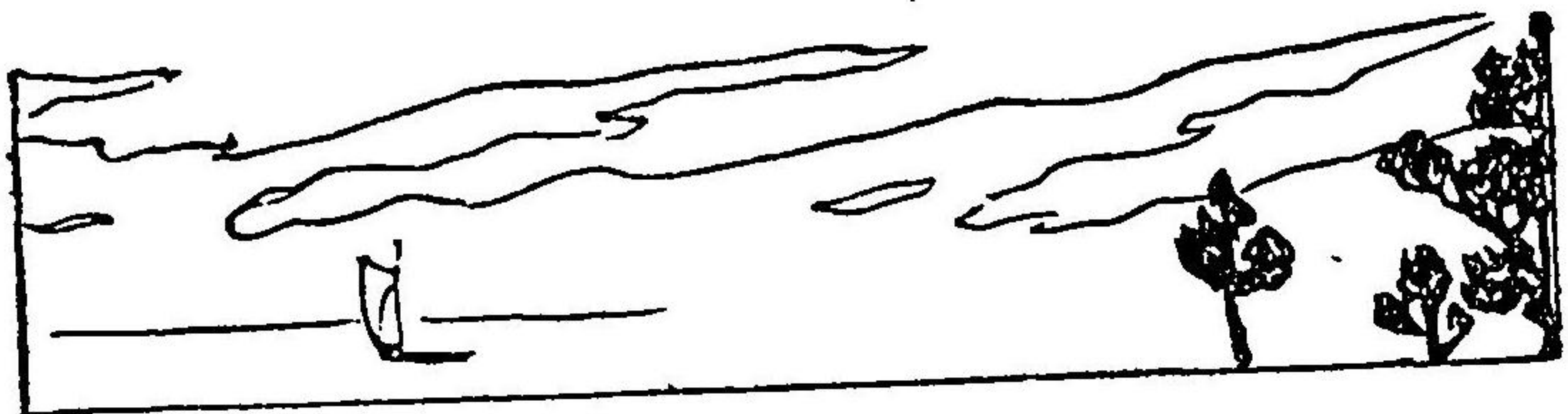






と小さい室の扉が開いて下足手傳ひの女らしいのが出て来る、室の中に洋服着た人の姿が見えた。早速名刺を女に出して洋服の人に見せて呉れと頼む。どうぞ此方へとある。中へ入ると二人の人が陳列品目録を書いて居られる最中、名刺を貰ふと東京市帝室博物館の關保之助氏と高橋健自氏だ。この館の話聞き、徴古館案内を貰ふ。昨卅日と今日とは無料観覧を許したのださうな。カバ―を借りて、「それでは一寸拜見して来ます」と出かける。「御案内する筈ですが、今頃こんな事をしている始末ですから」と關さんが云。一人の爺さん入口の番人に謹んで観覧券を渡して「へえ、どうぞ御願ひ申します」とびよこしく頭を下げて入場する。淳朴なものだ。

館の建坪は三百坪、片山工學博士の設計だから、上野の表慶館に酷似してる。上古から徳川時代までの等身風俗人形が先づ目を惹く。徳



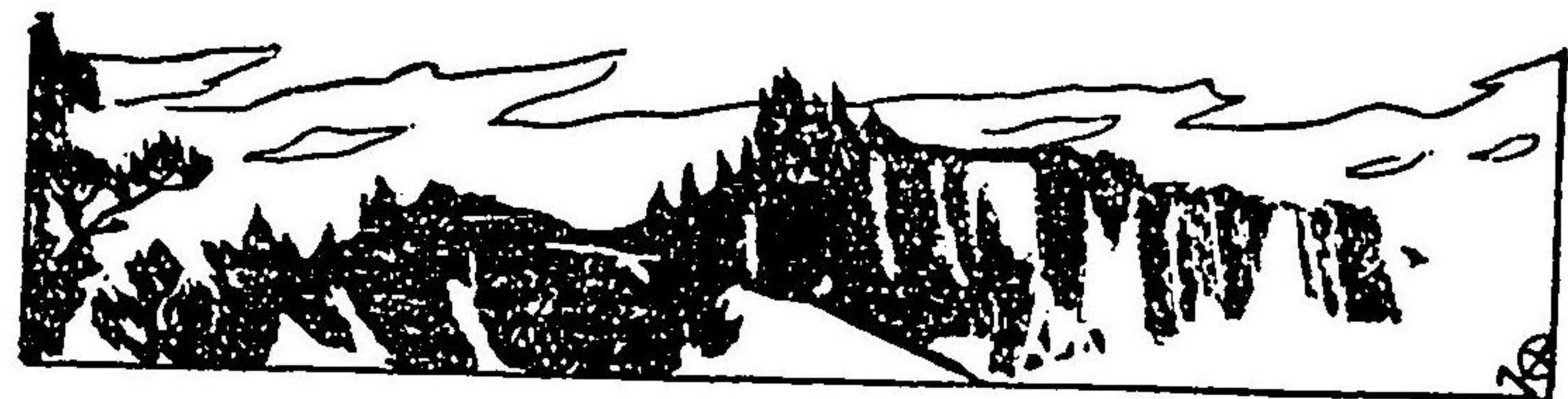
川時代の上臈かたはづしに結つて打掛を着たのが三方を捧げて歩まうとしてるのを、つくづく見てた婆さんが連れの人に「この別嬪さんはどうや、目許は自宅のお修にそつくりや、お修に斯う云委させたら吃度似合ふやろ」と云、嫁女の自慢であらう。豊宮崎文庫藏の田原藤太の大太刀、京都大佛供養圖の屏風、賀茂別雷神社出品の御唐櫃御帳臺、嘗て有栖川總裁宮の令旨を奉じて御巫清直が畫工を指揮して摸寫させた云御遷宮圖額、齋内親王參宮圖、維新後撤去になつた風宮の額の字々躍らうとするの、近世名家肖像、太閤征韓の折九鬼嘉隆に造らせた日本丸の船首の龍などが目に附く。何しろ大混雑で細かい物は一々見て居れぬ。九室で坪井さんに會ふ。「お宿はどこです」と聞かれる、「藤屋です」「ハ、藤屋は宜うがすな、一つうしのよだれの序文を書いて下さい、彌次喜多樓にて、としてハ、ハ、ハ」。博士の戲著「うしのよだれ」が

今印刷中であるのだ。人類學に關した陳列品の説明をして貰つて、こゝを出る。

## 六

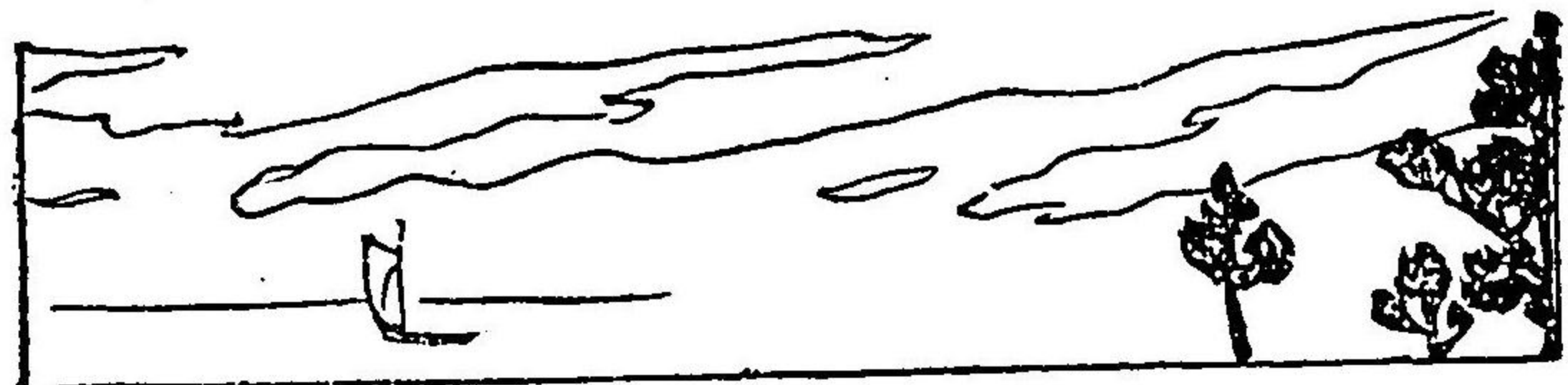
例の新道を走らせて内宮に參る。今年の春架せられたる宇治橋はなほ檜の葉高く、五十鈴川常よりも水嵩増されるやうにて漆々の響先づ心を改めしむ。御手洗のあたり得もいはず清げにて、老杉の根に人々の手拭敷きて憩ふ様思ふ事無げなり。新宮は今の宮の東にあたりて木の間隙れに拜まれ給ふ。今の宮より新宮への道に假の屋根を設へたり遷御の折雨あらむを慮りてのことにてこの御設ひはこの度始めてなりとぞ。新宮への道は繩延へて遮られたり。宮の廣前に額づく。

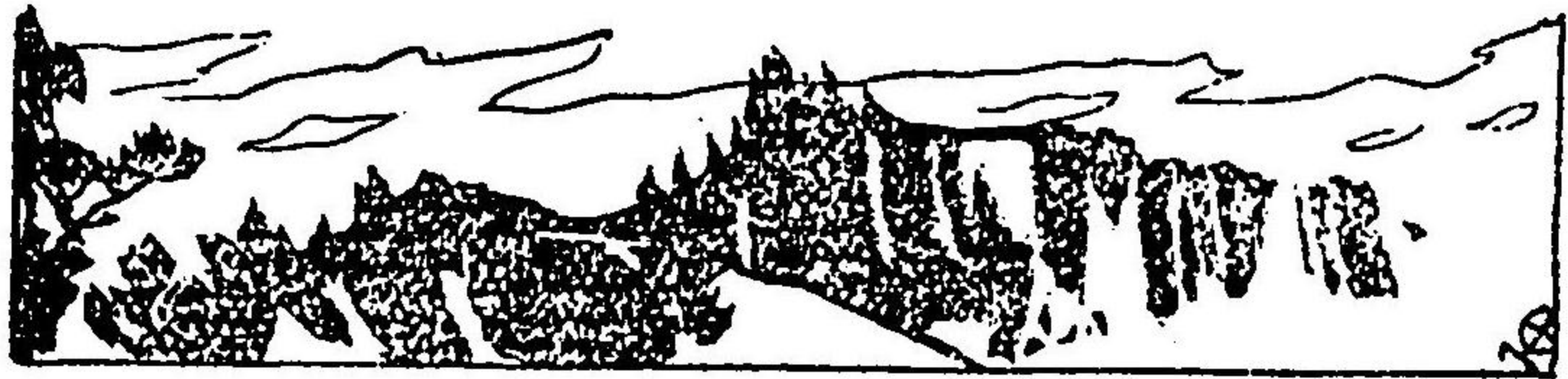
我が參宮はこれにて三度目なり。初めての時は明治二十六年の秋で名古屋の中學の生徒で四年級の時であつた。二度目は明治卅五年の春



伊賀上野の中學の教頭をしてる時であつた。様々の事が思ひ出される。御造營に與た人に會うて神材の事など聞く。よく晴れた日で神苑の土も石も輝いてゐる。問の山(宇治山田市に問の山と云阪二つあり、これは内宮寄りの所で一名牛谷坂)に蒐るとこゝは人通りも稀で兩側が丘になつて野菊匂ひ薄戦ぎ虫が細く鳴いて居る。神部署を訪うて木村署長に面會を求め、不在、宿直の人に會つて明日の御式に我々が何時に何處へ參つて宜いかと云事を聞いて宿に歸る。

二六の方がお着きになりましたと宿の者が云から、其の部屋を訪ふと岡村柿紅君である、初對面だ。この部屋へ來てはどうですと岡村君が云つて呉れ磯巾着も部屋の事で心配して「どうも貴君に申譯がありませんな」と云が、僕は僕の部屋で辛抱することにする。そのうち都の相原君から電話がかゝつて、「僕が來た麻吉に泊つてる、晚方訪





問するよ」と云、大に氣丈夫になる。通信員の立田君が来た、多方面に興味のある人で會話が面白い、藤屋に變史の事の通知と僕の出發と行違つたのださうな。一寸失敬して通信を書く、社からの注文通り見聞録だけ書く。立田君に酒を出してると、そのうち石井君が歸つて来る。社の會我部一紅君がひよこりと来る、松阪に所用があつて来たから爰へ寄つたお手傳をしませうとのことだ。相原君が来る。稍盛なる晩餐會が始まる。机には机懸がかぶさり坐蒲團が改まり珈琲道具が運ばれて大分居心が宜くなる、小便の匂も解らなくなつた。着いた時はひどく癢に障つたが、この藤屋と云のは老實と云點に於て大に優れてると云事が知れて来た。

二日、遷御式は愈今宵と相成る。一二の人を訪問して土地の事を聞き大に得る所がある。今日は朝から景氣立つて小旗立てた講中や隊を



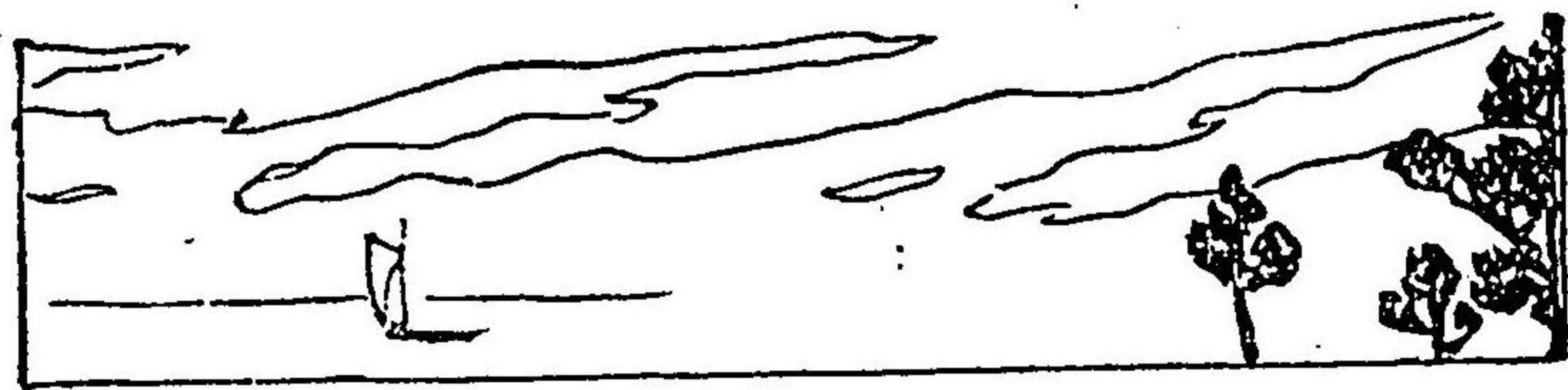
組んだ師範中學の生徒などが通る、少し大きい家には定紋つけた幔幕が張てある。再び内宮に參る。宇治橋の手前から車馬の通行が禁じてある。三重縣常工夫と染抜いた半被を着た男が頻りに往來を掃き清めてゐる。橋際に赤十字の臨時救護所が設けられた。神域には大一と云紋附けた筒袖を着て白袴を穿いた者が荒蕪の束などを忙しうに運んでゐる。神官の往來參拜者の往來が極めて劇しい。宇治橋の邊に二三人寫眞を撮つてゐる人がある、或爺さんこれを見て「こんな人の動いとる所が撮れるもんか」と笑つて過ぎたのは可笑しい。電車も今日は國旗を掲げてゐる、その國旗がポールに附いてるので頗る異様だ。

七

山田郵便局へ行つて今日遞信省より發行の記念繪端書を買ひ記念スタンプを捺して貰ふ。端書は上出來の方では無い、スタンプは稍宜い。



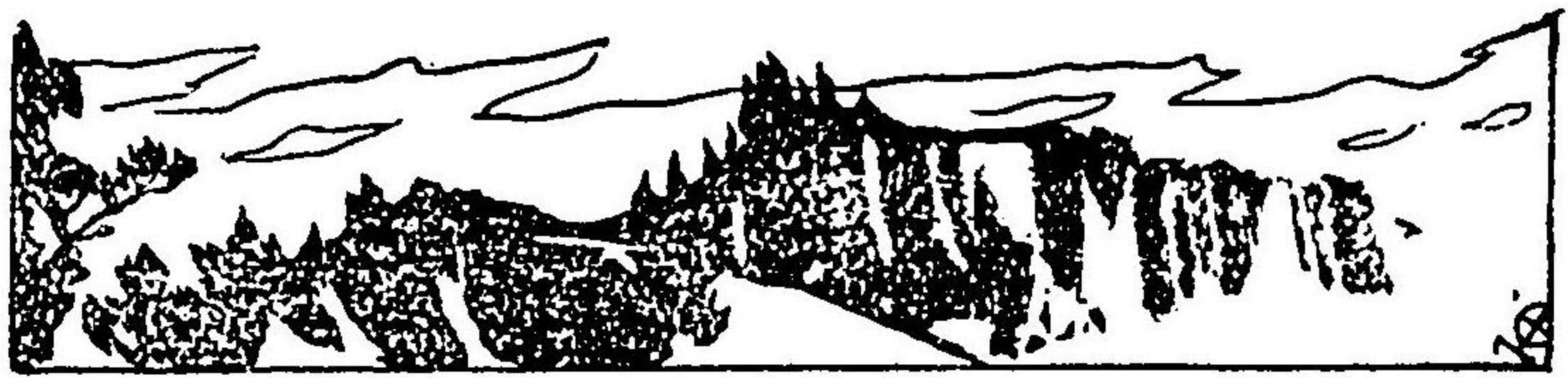
繪端書熱はあまりこの邊には無いと見えて、中學生位が来て居るだけ。局長はゆつくりとスタンプを捺して「赤い方へはよく附きまへんなあ」などと呑氣なものだ。市中には何の催も無い、唯五二會館の陳列所で義士木像の展覽と云のがある。試みに這入つて見ると、山城國山科岩屋寺の什寶四十七士の木像と云のが並べてある。説明爺さんの口上が頗る振つてる、曰く「いづれも、敵討の次第は今より二百八年前、元祿は十五年十二月十四日、大石内藏助君が先導致されまして、四十七名の義士等亡君の仇を報いまして、仇を報いは致しましたけれど、時の政府の法律に背きましたるが故に、一同切腹を仰せつかりました、内藏助君辭世の歌に、あーらー嬉しー思ひはー晴るー云々」。古いやうで新しいやうで餘程珍だ。柴舟君から奈良の或寺の僧が「聖武天皇陛下」といつたと云事を聞いたが、内藏助君と好一對である。歸



つて通信を書く。晝餐を済まして、儀仗兵が錦水橋で勢揃する様を見に行く。四時頃にシルクハット、フロックコートになつて相原君の宿に行き、暫く休んで二人で内宮に赴く。拜觀記者は五時までには神樂殿に集ることになつてる。一般の參拜はもう禁せられた。神樂殿で他の記者諸君と火鉢を圍んで待つて居る。御式に列する神官等が裁ちたての袍の袖をさわ〜いはせて通る。御簾越しに外を見ると、御造營に與つた工匠等が折烏帽子素襖で往來する。軍人警官が通る。いろいろの時代が一緒になつた氣がする。御式は八時からである。

八

漸く御時刻近づけば、容儀を整へて殿を辭し、新宮石階の右側なる記者席に入る、寔に此上無き好位置なり。二重に結び廻らされたる御矢來の内外拜觀者數を知らざれど、物言ふ聲も潜めたり、そよとの風



の音づれもあらず、物静に神域は暮れ果てたり。御道筋には菊花御杖章の高張挑灯所々に點せられて、又庭燎の二ヶ所に燃上るあり。蟲の音頻りなり。仰げば杉の木の間、稀に星影の燦きを見る。

本宮の方に鼓聲起る、臨時祭主多嘉王殿下岩倉奉遷使等參集の合圖なり。

第二鼓響く、祭庭係祭具を備ふるなり。

神官一群づ、我等の前なる石階を徐に上り行くあり。この邊燈無ければ人影臚げに、唯履の響の高きを聞くのみ。喇叭の聲遠くより來り、本宮石階に儀仗兵の進みて整列せる様庭燎に照らされて仄見ゆ。雜仕御道筋に清薦を敷き、上に更に白布を敷く。

第三鼓高らかに響き渡る。正に御時刻となんぬ。夜の氣愈冷かなり。

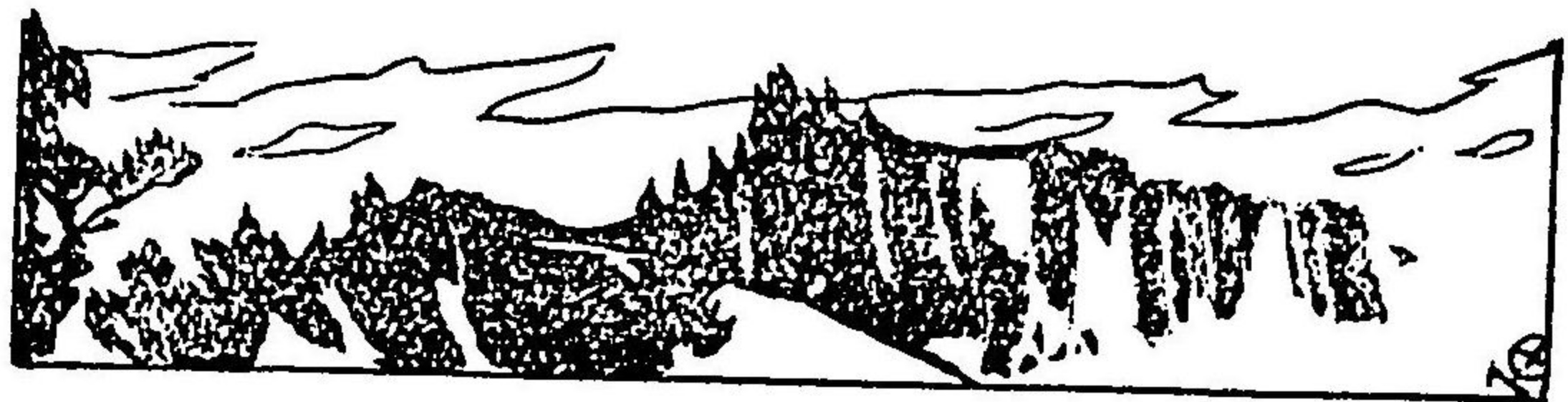
本宮の石階松明の影動きて杉の葉の翠は闇に浮めり。儀仗兵の喇叭吹



奏起る。奉遷使御祭文を奉進するなり。更に吹奏あり。大宮司少宮司今し御扉を開き奉るなり。儀仗兵の一部新宮の石階に來たる。渡御の時は迫れり。彌高く彌廣き神威、人々の胸に響き來る。

御式の次第漸くに進み、頓て御巫宮堂瑞垣御門下に於て鷄鳴を唱ふ。こは「カケッコー」と三度高らかに唱ふるなり、岩戸開の故事を傳へらるゝにや。御巫家代々この儀を奉仕すとぞ。鷄鳴と共に奉遷使御階の前に進みて三度出御と申す。この時神儀絹垣の内に入らせ給ひ、

渡御の御列始めて練り始む。まさに九時。前陣の松明輝きて、白き紅なる或は黄なる袍の木隠れに動きて石階を下るを、遙に望みたる心地比ふべくもあらず。筵道傳ひに御列次第に近づき、我等が前なる新宮の石階に差蒐らせらる。松明の次に御楯御鉦など、暗き中にさら〜と照りて、菅御翳紫御翳の尊げ



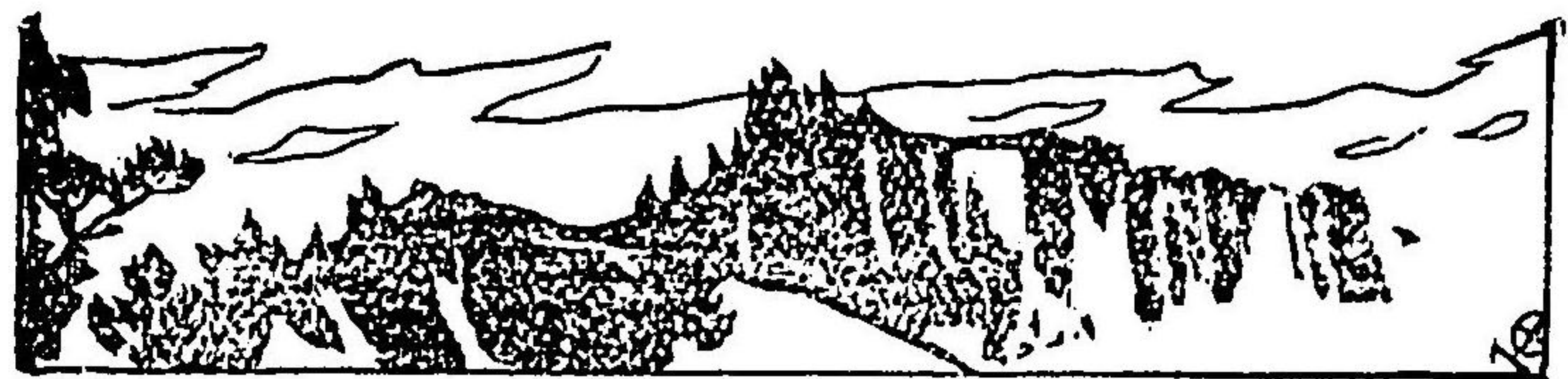
なる形いと仄に見えて渡る。御蓋の後に樂師十餘人、衣の色などいと暗うて見分難きが、筆築倭琴拍子鳴らし聲低う神樂歌々ひて進む。感涙止め敢ず。次に、奉遷使先立ち給ひて、神儀、二本の行障を前に、高さ七尺ばかん長さ三丈ばかんの絹垣に圍まれさせ給ひて、徐に渡らせさせ給ふ。尊しとも畏しとも神々しくしとも申すべうもあらず。唯身を打忘れて伏し拜み奉る。遙に距れる拜觀者も、この絹垣の間にもいと白く渡り給ふを望み奉りてや拍手の音遠く起る。御後より白衣の人跪きつゝ進みて、御道の白布を巻き行く。神儀の御迹を畏みての儀なるべし。

祭主の宮隨はせ給ふ。このあたり松明の光明かに、宮の束帯明衣木綿懸け給へる様いと掲焉なり。更に御蓋菅の御笠などときらびやかに續きて渡る。總て新宮南御門に入らせられしは九時半なり。

## 九

それより殿内入御御神寶奉安の儀などありて御式は十一時近くまで續くのであるが、僕は御列皆新宮に入らせられたのを見届けるや相原君と一緒に眞暗闇の人込の中を押分けて一散駈けに駈け出した。電報を打たうとてゝある。杉の森を出ると、外は良い月夜で、神苑に木犀の香が頻りにする。汗をだく／＼出して駈けて／＼駈け通してやつと宇治の局へ着いて電報を打つ。それから疲れた足を引摺つて宿に歸る。岡村君から淋しくて耐らぬから来て呉れぬかとの使が来る。曾我部君と二人で行く。神様の事が話題になつて、それから諸國の祭禮の奇習が續々出る。興は愈湧く曾我部君が喇嘛教の秘像の話を始め、こんな目をして、こんな口をして、腹の所にもこんな顔があつてと身振交りに盛に話していると、女中が来て、「あのお隣のお客様が、どうして



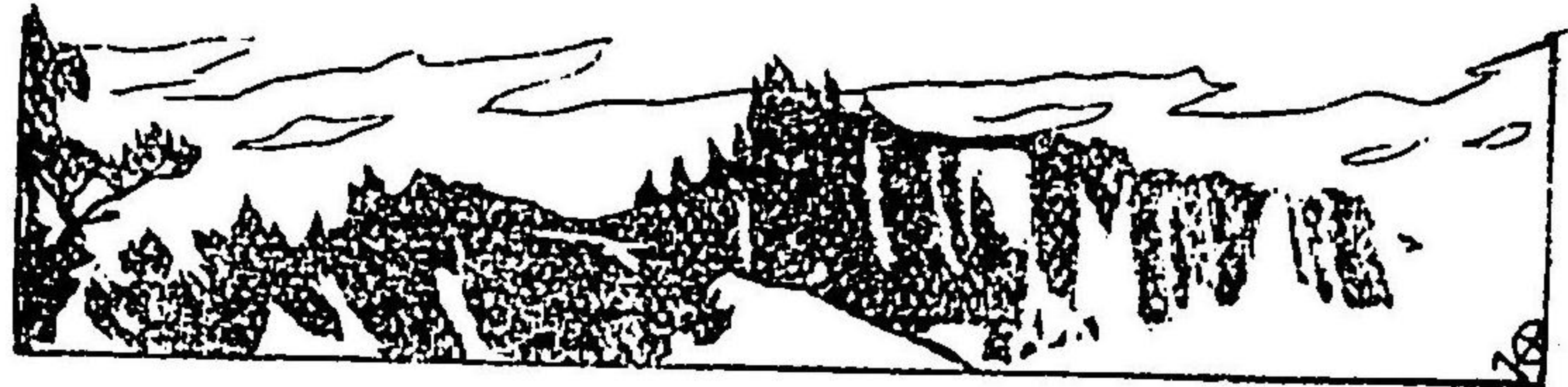


も御休みになれませんで、もう少しお静に願ひたう御座いますと被仰ります」と云、そいつは失敬したと時計を見ると實に午前二時半、そこくに部屋に歸る。祭式の事は通信しないで宜いとのことであつたが僕は遷御式の印象の明らかなうちにこの感じだけとは思つて机に對して拜觀記を謹誌するこの印象は終生忘れざるものであらう、僕は莊嚴と云事の極度に達した光景を拜觀し得たのである。書き終つて床に入る頃はもうしら／＼と明けて居た。外は徹宵人通りが絶えなかつた。扱前に謹誌した御式御模様は僕の拜觀した儘であるが、其御次第の詳細は次の如きものである。鶏鳴出御の聲は記者席よりは明かに聞えなかつたのであるが御次第に依つて記したのである。

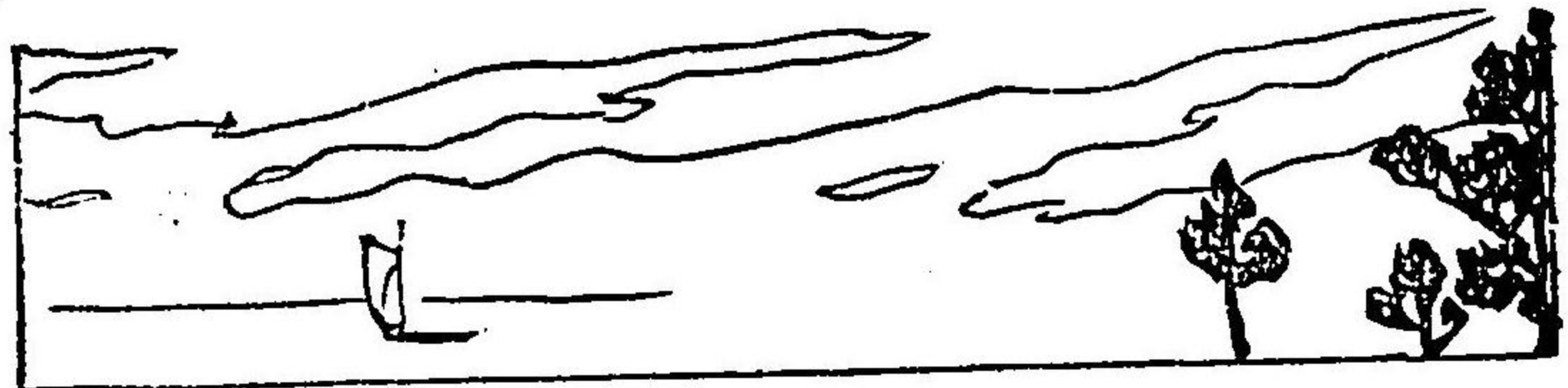
○第一鼓にて臨時祭主多喜王殿下、三室戸大宮司、桑原少宮司以下禰宜、權禰宜、宮掌總員、岩倉奉遷使(勅使)、掌典、宮内省掌典補、平内務大臣、井上神社局長、大臣秘書官、牧野造禰宮使、副使、主事、恩、拱手、壓托(列任)右田三重縣知事參集○第二鼓



にて儀式用度課祭庭係祭儀の諸具を辨備す○第三鼓(午後八時)にて奉遷使、掌典、宮内局、掌典補參進宮掌衣冠一員副從次に祭主東帶明衣木綿笠を懸け大宮司以下各東帶木綿笠木綿襦袢を乘燭及御帳召立奉仕の禰宜東帶明衣木綿笠を行障緒垣執物諸版の權禰宜以下各衣冠明衣を懸け齊節より第二鳥居前に參進す、歩兵第五十一聯隊第三大隊儀仗兵として第一鳥居内に整列岩倉奉遷使齊節出門の際捧統奏樂次で御列前後を護衛前進し奉遷使以下第二鳥居外に東上北面(西上南面)祭主以下同所に列立東上南面(西上南面)對揖し宮掌一員大麻を執り一員御籠を執り進んで奉遷使以下を清め學つて復列、此の間儀仗兵捧統、次に奉遷使以下參進玉串行事所に列立(南上西面)次に祭主以下參進同所に列立(奉遷使の南北上西面)乘燭及御帳召立奉仕權禰宜は禰宜の末行障緒垣執物等奉仕の權禰宜以下は西南の方に北上東面玉串所役の權禰宜以下は奉遷使に向ひて南上東面に着座(祭主以下北上東面權禰宜以下は其後玉串所役の權禰宜宮掌は西南の方南上東面)次に祭主大宮司、少宮司、禰宜進んで勅使と對揖(南上東面)學つて復列(祭主、大宮司、少宮司、禰宜、勅使と對揖)次に奉遷使玉串所役權禰宜の前に進む宮掌太玉串を權禰宜に傳ふ奉遷使拍手太玉串四枝(二枝)(左を左右を右)を執り參進次で掌典太玉串を執り參進前儀の如し宮内局、掌典補相副儀仗兵捧統次で前半隊進行板垣御門石階下東方(參道四方)に參列祭主、大宮司、少宮司、禰宜順次太玉串を執り參進中儀の石壺に着く(板垣御門下に於て宮掌御籠をそく)次に玉串所役の權禰宜拍手宮掌より太玉串八枝(左右各四枝)を執り參進(御籠前儀の如し)(此條なし)次に權禰宜宮掌參進(御籠前儀の如し)儀仗兵後半隊進行板垣御門外右階西方(參進東方)に整列次に着座(奉遷使以下東

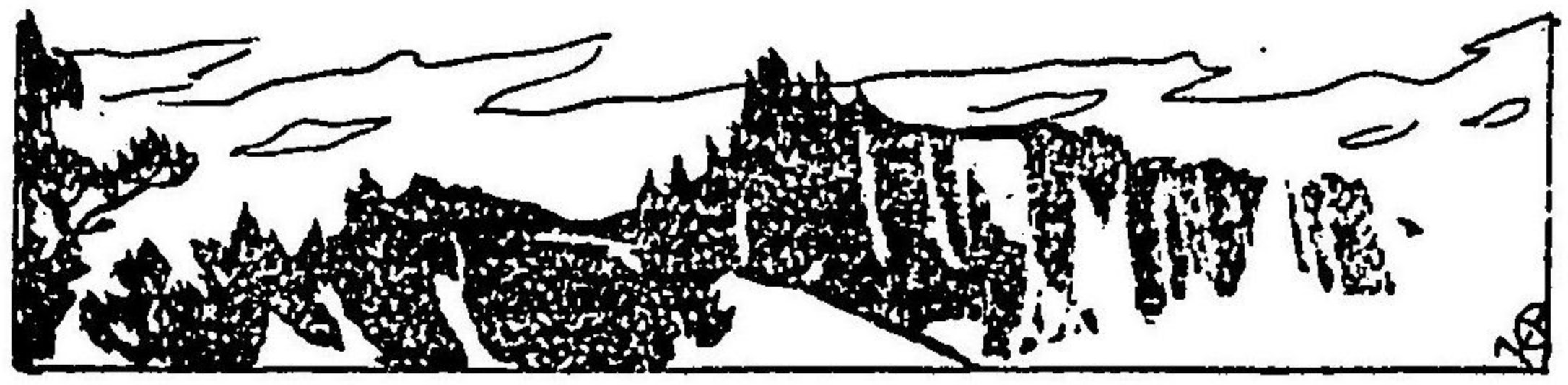


の石壺に四上北面) 祭主以下は四の石壺に東上北面燦燦御帳召立奉仕の權禰宜は其後に玉串所役の權禰宜一員(禰宜の末權禰宜一員無)自餘の權禰宜以下北上東面御帳所役の宮掌は環め参入八重櫛(内玉垣御門下)西方に辛櫃を置き側に候す東面、次に權禰宜一員奉還使の太玉串を受けて内玉垣御門東方に納む、次權禰宜一員(祭典の太玉串を受けて納む、次權禰宜一員祭主の太玉串を受けて内玉垣御門下西方に納む、次權禰宜一員大宮司、少宮司の太玉串を受けて同所に納む、次玉串所役の權禰宜太玉串を同所に納め、次宮掌御帳を捧げて大宮司の前に蹲踞し御帳の御封開く由を申し進め奉り復座、次諸員内院に参進版に著く(版位中重に同じ)次に奉還使階下の版に進み祭文を奏し奉り復座、諸員俯伏儀仗兵排統奏樂、次大宮司少宮司昇階御屏を開き御帳を大床に安じ奉り復座、諸員俯伏儀仗兵排統奏樂、次に權禰宜二員階殿内及大床に燈を點し奉り復座、諸員俯伏儀仗兵排統奏樂、次に大宮司少宮司禰宜次第に昇階殿内に候候す、次に禰宜二員權禰宜二員新宮に参進中重の版に著く(禰宜は石壺に東上北面權禰宜は其の後)次に宮掌御帳を捧げて禰宜に進む参入正宮に同じ、次禰宜權禰宜内院に参入版に著く(版位中重に同じ)次禰宜昇階御屏を開き御帳を大床に安じ殿内に候す、權禰宜昇階殿内及大床に燈を點し奉り復座、大床の東西に分候し入御を待ち奉り禰宜は正宮に歸参し昇階殿内に候す、次召立所役の權禰宜正宮の階下東方に卓立(西面)次奉還使階下の東方に卓立召立の南に、西南堂典其南、扇以下は其後、次に祭主降階々下に卓立(東面)次行障緒垣及び執物奉仕の權禰宜以下階下に進み東西に分候次宮掌御道敷布を正宮階下より新宮階下に敷設す、次に權禰宜召立文を讀上げ諸員(手袋)召立に隨ひ前陣執物を受く行障及緒垣奉仕の



權禰宜宮掌(左右一員)順次大床に参昇一拜奉りて階下に分候す次に役陣執物を受く前記の如し、次に行障緒垣を奉仕す(手袋)次宮掌一員瑞垣御門下(西方)に於て鶴鳴を唱ふ三聲次に奉還使御階の前に進みて出御を申す三聲次出御(權禰宜御帳を奏く)  
 ○前陣 宮掌一(左右)二員次燦燦(左右)四員次御櫛二板(左右)六員次御鉢二竿(左右)四員次御靴二腰(左右)二員次御弓二張(左右)二員次管御幣(左右)四員次管御幣一枚二員次紫御幣二枚(左右)六員次紫御幣一枚三員次金銅造御太刀二腰(左右)二員(次金銅造御太刀一腰一員)次玉璽御太刀一腰一員(次蟻螂形御太刀一腰一員)次須賀利御太刀一腰一員次御蓋一具八員(次紫御蓋一具八員)次樂師、次掌典暨舞次奉還使次行障二員次緒垣二十員  
 ○御樋代 (大宮司、少宮司、禰宜奉戴錦綬の肩當を掛け覆面手袋)  
 ○後陣 御蓋一具八員(管御笠一枚四員)次祭主次管御笠二枚(左右)八員(次鮎形太刀一腰一員)次御弓二張(左右)二員次御胡蝶二腰(左右)二員次御靴二腰(左右)二員(此條無)次御鉢二竿四員次御櫛二枚六員次御火(左右)四員次宮掌(左右)二員次入御(權禰宜御帳を奏く)前陣後陣の供奉諸員は階下東西に分列す(列次古宮に同じ)渡御の際儀仗兵石階(板垣御門外)より前後を衛護し進行新宮石階(同御門外)に到り参道に整列捧統、奏樂、次祭主昇階殿内に入る、次禰宜四員殿内に出で大庭及び御階に候す、次召立所役の權禰宜階下東方に卓立執物の召立文を讀上召立に隨ひ前陣後陣に神寶を(左を左右を右)次第に階上の禰宜に進む禰宜之れを殿内に奉納す御鉢四竿御弓四張御櫛四枚は大床御戸脇左右御壁持の上に寄せ奉る(御鉢以下無し)次供奉の諸員版に著く(以下版位古宮に同じ)

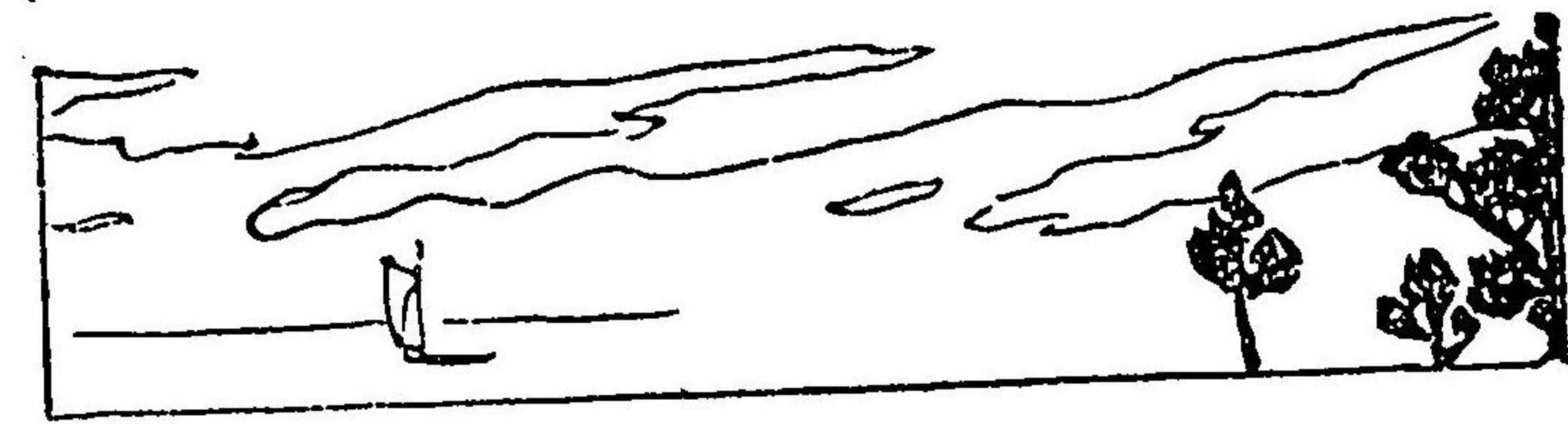




次古宮御魂奉仕の櫛瀬立及御鎧所役の宮掌奉着版に著く、次祭主降階版に著く、次櫛瀬立燈を撤し降階版に著く次禰宜降階版に著く、次大宮司少宮司御厚を閉降階版に著く諸員俯伏儀仗兵捧統奏樂次奉遷使階下の版に進み御祭文を奏し畢て復座諸員俯伏儀仗兵奏樂、次大宮司奉遷使の前に到り遷御儀式畢る旨を告げて復座、次諸員中返の版に退く、次宮掌二員大宮司前に踞居し一員は御鎧を受け一員は封紙を進む、大宮司御鎧に封を附く、宮掌御鎧納むる由を申し畢て復座、次諸員奉拜八度拍手爾端儀仗兵捧統奏樂、次諸員退出儀仗兵前後を護衛す、次荒祭宮(多賀宮)遙拜、儀仗兵急道の雨に整列捧統次諸員退下、儀仗兵前後を護衛して退下、内務大臣神社局長内務大臣秘書官(各衣冠)第三鼓正宮外玉垣御門内に参進渡御前新宮御門内に参著、三重縣知事(衣冠)第三鼓正宮外玉垣御門内に参進渡御前新宮御門内に参著神宮衛士長、衛士副長、衛士を率ゐる外玉垣御門以内を警衛す、三重縣事務官(警察部長)警視警部巡查各正装を率ゐる外玉垣御門以外を警衛す、

又この御遷宮の前後の御祭を兩宮とも擧げると次の通りである。

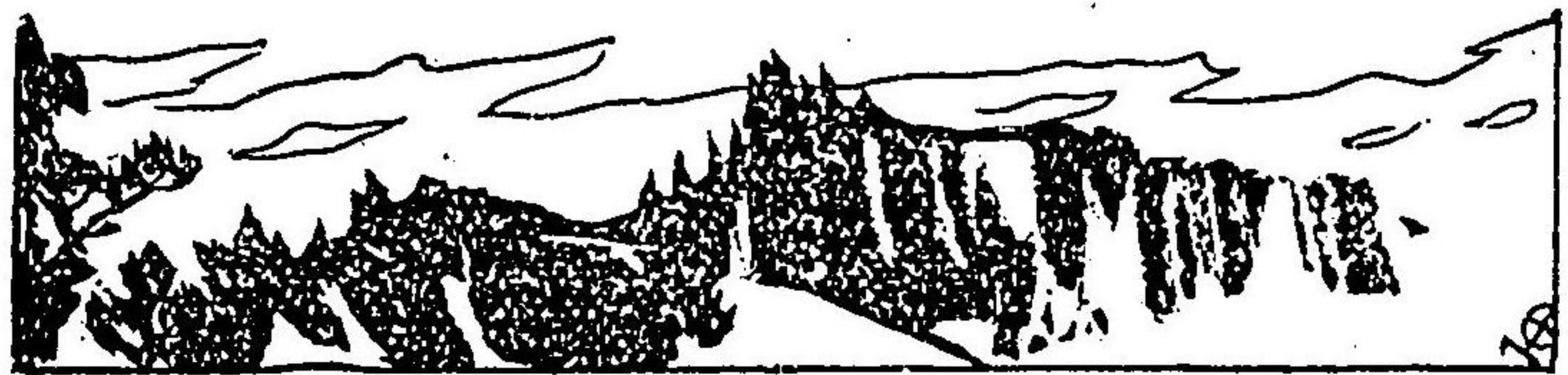
○立	柱	皇大神宮	三月十一日	午前八時	豐受大神宮	三月十三日	正午十二時
○御	形	祭	同	午後二時	同	同	午後四時
○上	棟	祭	同	午前十時	同	同	正午十二時
○檜	付	祭	四月廿四日	午前十時	同	同	午前十時
○聖	祭	祭	八月廿一日	午前八時	同	同	正午十二時



○御	戸	祭	九月十三日	午前十時	同	九月十五日	午前十時
○御	船	祭	同	午前八時	同	同	午前十時
○洗	清	祭	同	午前八時	同	同	午前八時
○心	御柱奉建	祭	同	午前八時	同	同	午前八時
○杵	築	祭	同	午前八時	同	同	午前十時
○後	鎮祭	祭	同	午前八時	同	同	午前八時
○御	裝束神寶	祭	同	午前八時	同	同	午前十時
○川	原大祓	祭	同	午後四時	同	同	午後四時
○御	防	祭	同	午前八時	同	同	午前八時
○遷	御	祭	同	午後八時	同	同	午後八時
○奉	御	祭	同	午前八時	同	同	午前八時
○古	物	祭	同	午前八時	同	同	午前八時
○秘	曲御神樂奏進	祭	同	午前二時	同	同	午後二時

抑御歴代のうちで御一代に御遷宮を二度奉仕遊ばされたのは延喜の聖代與其他二三の御例あるのみである、今の大御代には明治二年、二十二年、及びこの度の四十二年と既に三度遊ばされた、斯るめでたき御代は寔に空前である。天武天皇が式年しきねんを定めさせられ持統天皇の御

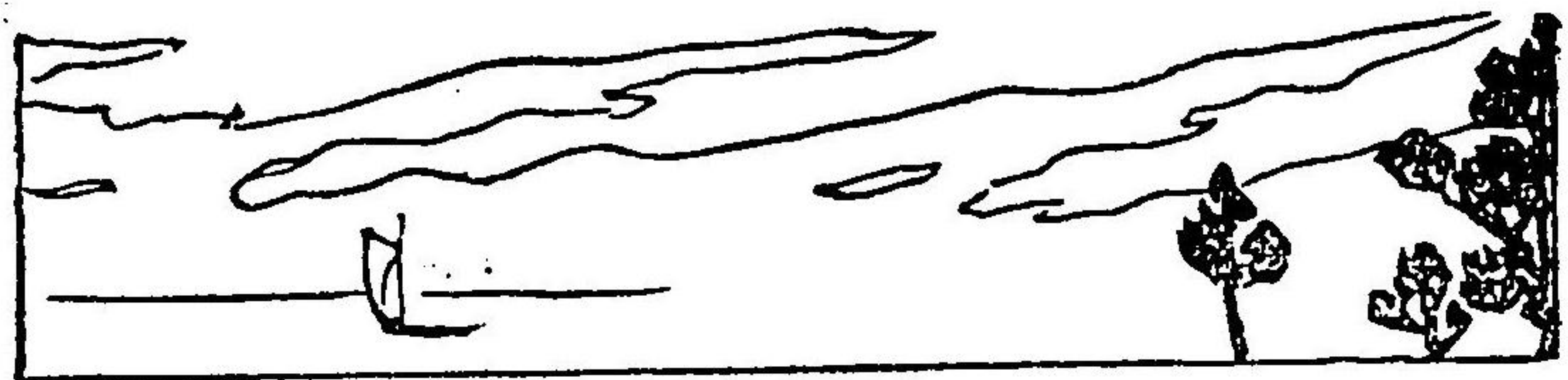
お伊勢参り



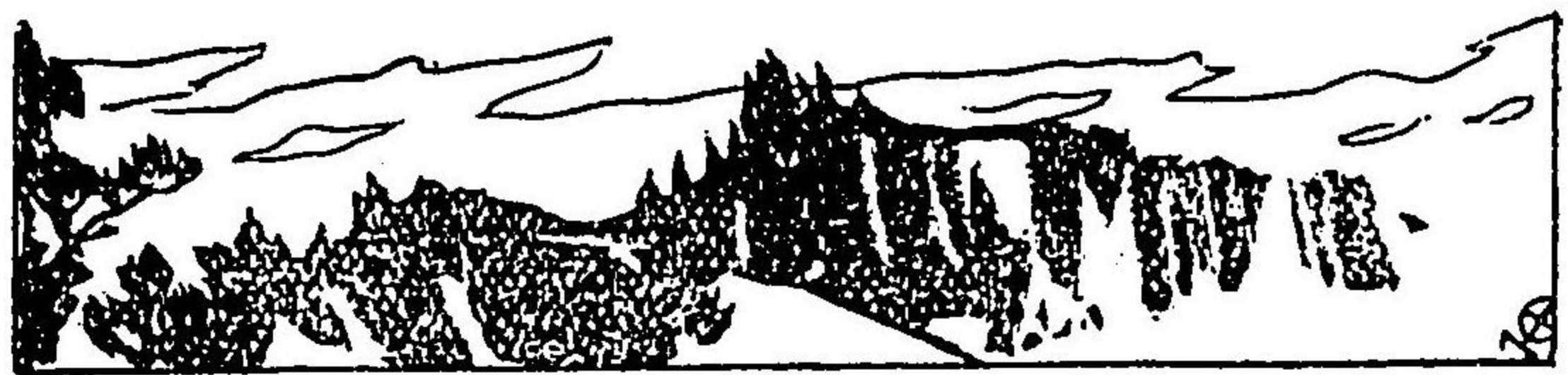
代に第一回の兩宮遷御式を舉げ給ひしよりこの度のは第五十七回にならせられる。先回二十二年の折には國庫より三十萬圓を出だして御式の御費にあてられたのであるが、この度は國庫より一層の巨額を出されて開關以來未曾有の大盛典を舉げさせられたのである。

十一

三日午前九時から三重縣斯民會發會式が縣立第四中學校内に開かれるに就いて案内を受けたから行く。此は教育勅語戊申詔書の御趣旨を遵奉して精神訓育を奨め廣く道徳經濟の調和地方自治の作興産業の發達其他一般地方の改良を期するを目的とする會で、會長は有田知事である。平田内相初め遷御式に參列の公人は大抵參會した。かねて選拔してある縣内の篤志者孝子貞婦忠僕等の表彰式がある。内務大臣の懇篤な演説がある。この表彰とこの演説は來會者に非常な感動を與へたら



しく、東京などでは想像の出來ぬ程多大な効果を見るに違無い。式が終つて後校室に於ける地方改良資料展覽會を一覽し、それから相原君と一緒に豊宮崎文庫へ行く。聖堂にでもありさうな門の古びたのを潜ると、櫻樹枝を參へて、木蔭に文庫創建碑、孝經碑等が立つてる。この櫻が咲いたら、耐へ難く淋しい春を顯すだらうと思ふ。文庫に入ると、二階建てになつて、二萬の和漢書が大小様々な本箱に納めて積んである。其の本箱の形に非常に面白いのが多い。本箱の蓋には大抵裏書きがあつて、それが足代弘訓など、云有名な學者の筆である。箱が上品に出來てるのに上へ上へと積重ねてあるので皆半壞れになつてる。大日本史の初めて刷上つたのを獻じたのがある。大鹽平八郎の獻じた洗心洞筋記の見返しには平八郎の自署名が見える。軸物も澤山ある。羅句語の地球儀などもある。庫の隅に蓆を敷いて爺さんが表紙をしかへた源氏物



語に標題を貼て居る。こゝで先回の參宮の折に遇つた尾崎八束氏に遇ふ、いつも莞爾々々して感じの宜い人だ。庫を出ると庭で子供が玩具の蜻蛉を飛ばしてゐる、袴穿いた爺さんが庫の入口に立つて、「随分高う上るもんやなあ」と感服する。歸て通信を書く。

この晩僕等は與可樓と云へ招かれる。こゝで皇學館教授の安藤正次君深澤鷗吉君に會ふ。深更酔うて歸る。宿の者はまだ起きてた、今夜は徹夜だと云。彼の秘曲御神樂奏進と申して今夜々半まで樂師神前に秘曲を奏し、新宮なる神靈を慰め奉る儀がある、これは樂師以外の人には悉く退けて唯大神のみ聞し召す御事である。これに列する樂師の一部がやはり藤屋に泊つて居るので徹夜をしてその歸りを待て居るのである。

## 十二

四日、今日から奥の方の奇麗な部屋が空いたとの知らせを得て引起す。今日は松阪で鈴廼屋の移築落成式があるので、内相其他の人々も參列に赴く。僕も午前十一時廿五分山田發で行く。山田の停車場で三上さんに遇ふ。大學の制服を著て寫眞機を引懸けた令息を伴れて居られる。先生は内相等と一緒に一等室へ乗込まれた。僕は岡山から出て來られた安原文學士と共に一等の隣の二等室に乗込む。三上さんが僕等の室を通つて、「はてな」といひながら、プラットフォームに下りて誰か頻りに探して居られる。ひどく心配さうなので、僕が「何ですか」と聞くと、「同伴者が紛失しました……二等へ乗れといつたんですが」といひ棄て、長い列車を覗いて歩かれる。汽車はもう出さうになる。僕も心配になつて車掌に「この外に二等室はありますか」と聞くと、「あります」と云ふ。「それぢや其處へ行つて三上さんと云方が居られるか探して呉れ給へ」



「三上さんは彼處を歩いて御出でなす」「あの三上さんぢや無いんだ、もつと小さい三上さんだ」「はあ。暫くして」「御見えになりません」といつて来る。どうなることだらうと僕もホームへ下りようとすると思息がひよつこり乗込んで僕の席の向側へかけられる。「わかりました」と三上さんが走りながら窓の外からいはれた。發車。

伊勢の田野には曼珠沙華が著しく多い、畔路、丘の腹などにそれが眞紅の色を陳ねて居る。又木のある處には必ず柿の木があつて美しい。伊勢では柿見といつて村々の柿の實つた状を高みから瞰下してその美を賞する所があると云事を聞いたことがある。

## 十三

松阪に著いて町を通ると、山田と違つて非常に奇麗で心持が好い。僕は二十六年の參宮の折この町に泊つたことがあるが、其時は松阪大



火のあとで、實に見る影も無かつた。先づ山室山神社の奉告祭に列する。こゝで藤田明君に遇ふ。それから本居大人遺物展覽會場に行つて見る。短冊、文章の軸物、畫賛類、新まなび玉銚百首吉野百首などの原稿など所狭きまである、其のうち、翁が谷川士清に送られた漢文の書簡がある。即ち次のやうな文句である。本居谷川の兩大人は實に肝膽相照してゐたもので、本居大人は古事記傳の原稿を一巻出來る毎に谷川大人に見せ谷川大人は倭訓栞の原稿を一まとめづゝ本居大人に見せて居られたと云事を佐々木信綱先生に聞いたことがある。

飯南本居宣長

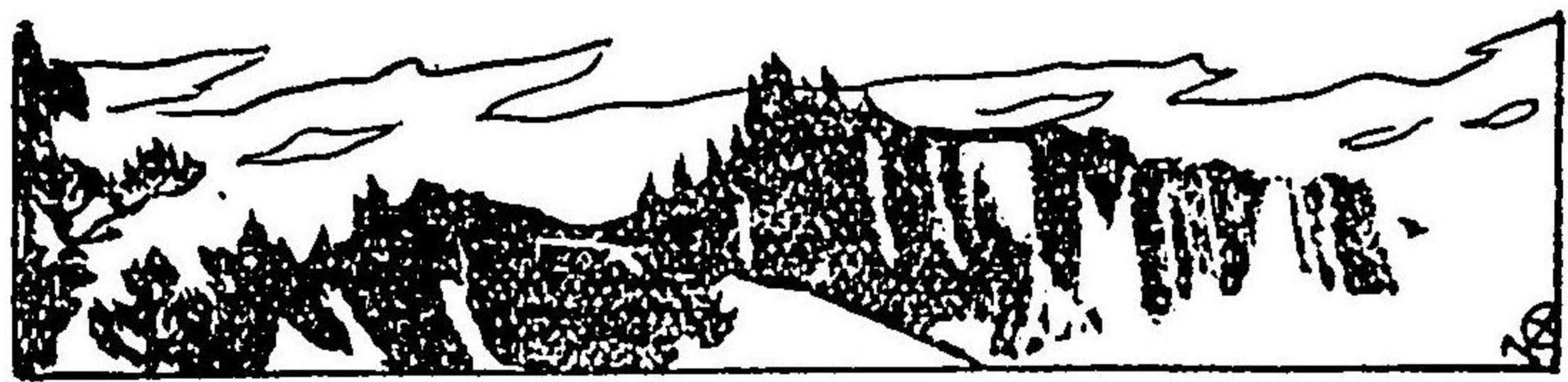
啓安渡

谷川先生足下

先生筆研無恙、僕嘗在京師側聞先生高名也、竊慕慕者多年矣、乃歸郷里、則欲奉刺就見焉、而塵事冗忙、不果到今、謹茲附尺一介草深氏、敢致諸左右、聊以布鄙悃、伏乞勿俚冒擲之、僕性好飲、因亦好其香醴之遂成癖、然近代歌道之衰、鄙靡酬瓊、愈功愈卑、鑿々無

お伊勢参り





可觀者焉。蓋道遠公爲之魁，若註解家，亦皆腐淺疎謬，或設奇僻之說，漫高妙其義，以欺後學者，乃歐人愚昧不能辨是非，一仰諸神家之許與，固守其家說，而不復思其外，陋習無奈何已，唯有契沖、學不溺時流，直據古書，以考覈之，大闢邪說，而倡古學，卓見裁然，其動在訓詁，而不及詠歌，是爲可憾矣。僕不敏不自量，竊有復古之志，乃亦賴其學而別開一雙眼，以歷觀古今之軌，察其得失，則妍蚩瞭然，如指諸掌，於是乎頗得詠歌大體，亦唯沖公之賜也。厥後益求古言，稽々淵源，讀古事記日本紀，日夜不懈，久而熟之，通曉古言，則古典之旨亦明矣。於是乎，宇宙豁然，適見大直日之光，乃回首看焉，則神典諸註家謬誤亦瞭然，如指諸掌，因謂歐學者，不可以不學神典也，神學者不可以不學歐書也，而近代歧爲二途，如不相與者宜矣相失也，乃或人奉垂加氏學者，頗有才識，著作日本紀考證及和訓譯云，日者贈僕書曰云々，非歐僕之是言，僕乃答之書曰見足下所著日本紀考證，則宛然儒者之言非神道之意也，嗚呼以足下命世之器宏覽之才，而且猶不免儒學之弊焉，雖哉今之世而知古道也，夫異學一盛世之治，神典者或附佛，或會儒，古道混乎，不復見眞面目矣。悲夫，然後世學者，專以講理爲務乎，則牽強刻察，不一而定從，知附佛之可惡，而不自覺其會儒形，是無他儒學習氣，沒心肝，乃認以爲天地自然之理也，夫故僕深惡儒焉，爲亂古道，已迨宋學之行之也，此弊滋甚，如垂加輩，則惟假神典而說儒道者安在其爲神道哉，大抵漢人喜言事物理焉，精則精矣，而惡其實莫有之焉，皆屬度妄測，若夫陰陽乾坤五行說，亦惟空言而已，天地自天地，日月自日月，水火自水火，豈別有陰陽乾坤者乎，故神國之古，無言陰陽乾坤者也，迨至於樂樂漢學大行，天下風靡，雖舍人親王乎，不復出其圈套，其擲日本紀，往々語陰陽乾坤，然不得不陰陽訓男女、乾坤



訓天地，則男女之外無所謂陰陽者，天地之外無所謂乾坤者可知已，且

日神而女

月神而男，是言陰陽者之不合於古道也更明矣，而謂之無錯綜之妙也，吁理學之謬罔一至于此乎，夫如是恣言，則天下之理，任口隨意莫有不可得而言者焉，以五行配物，亡論率強，至如土金，則固妄說，是後世好事者，僞託古人以言者，決非古人言也，苟善讀古書者，則不須辨而自寤焉，漢人言陰陽五行，其說精微，此方人亦染之，強以假飾神典，又欲少以異焉，而說此說，其陋可醜，又聞足下有和訓釋之作，亦何其命名之謬耶，夫和訓者，就文字而言者，若就辭而言之，則謂文字爲漢訓可也，足下乃解辭者，而謂之和訓，是主

乎異國文字也，無乃外視

神國乎，僕雖未與見其書，而其爲解也誤可知矣，竊見日本紀考證中解古言者，則亦皆自理學文字上，說來者，而大非吾古言之意也，凡欲解古言者，當先洗去漢學文字習氣也，而人皆爲所眩惑，不辨古言東西，足下亦坐此病，又神代事多奇異，蓋有不測之妙存焉，非區區常理所能盡也，學者乃以己之心，妄思議之，是不知神道之所以神道者也，足下有能明神道之所以爲神道，則宜無此誤矣，而有甚焉者獨何也，殊不知人非神，孰能知神心，神心唯神爲知，足下自以爲神歟，可謂僭妄矣，其唯以足下命世之器宏覽之才，而且猶不去俗學之弊惡焉，僕竊怪之，豈福津日神爲崇邪，庶以此鄙言，爲總原中瀨，祇除舊染理學之汗習，至神道清々域早見大直日之光矣，方今吾道之柄，在足下手，足下一舉誤焉則天下後世承其誤，豈不哀哉，足下其思諸，僕嘗聞先生深信萬葉集，微乎古言，以證明神典之義焉，想當有所發明也，必非或人爲理學所編之比矣，僕是以私心竊竊焉，因今具載

右伊勢參り

答或人書辭于此、將以質於先生

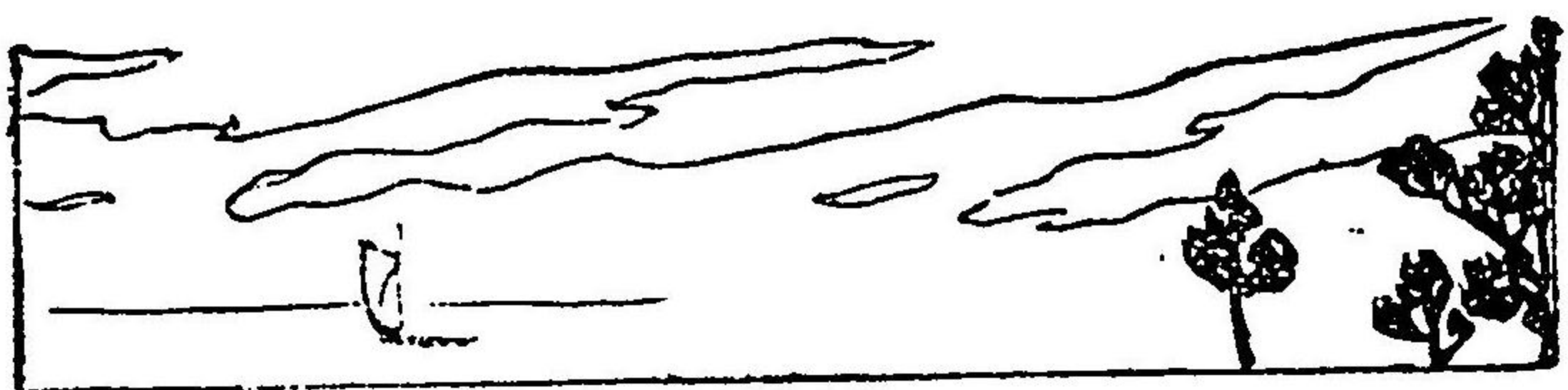
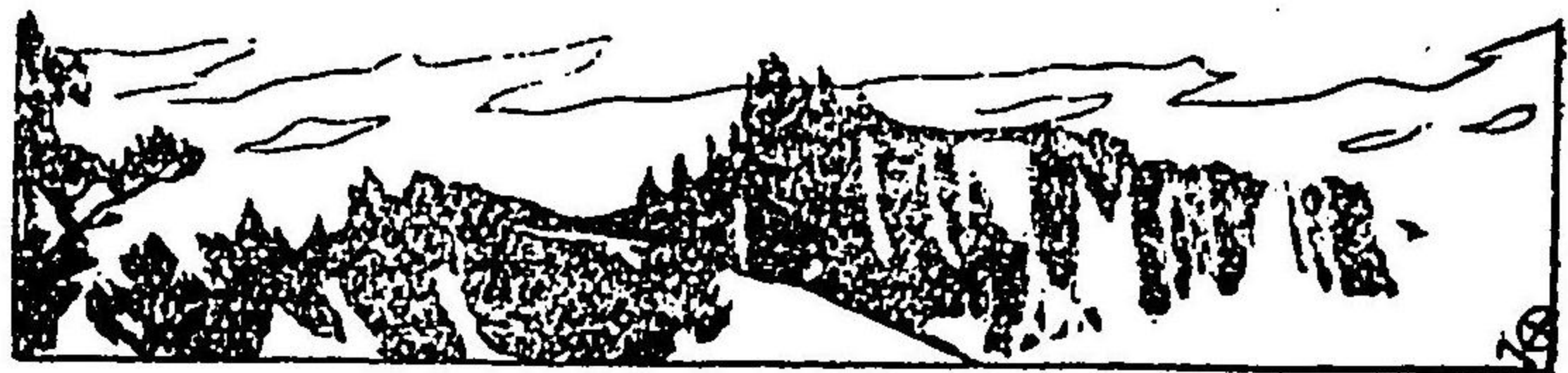
先生以爲如何、敢請見教、但恐先生以爲好爭、僕豈好爭乎、不得已於他道之汚穢、則不過願長者之誦也、若言人心不同如其面、各有所見何爭之爲、是自備常言、唯嫌害己之德而已、非眞恤道者之言也、想先生則必不然、若將言燕雀安知鴻鶴之志哉、是亦抗顏誇世者言已、想先生則必不然、敢請見教、僕不識詞避文幼時嘗學備以裁書統、幸鑑察一報察函、則僕之願也、拙歌若干首致瀆電覽、維仲秋芳宜盛華郊垣游賞之時也、不知高興如何不備

八月四日

本居宜長頓首

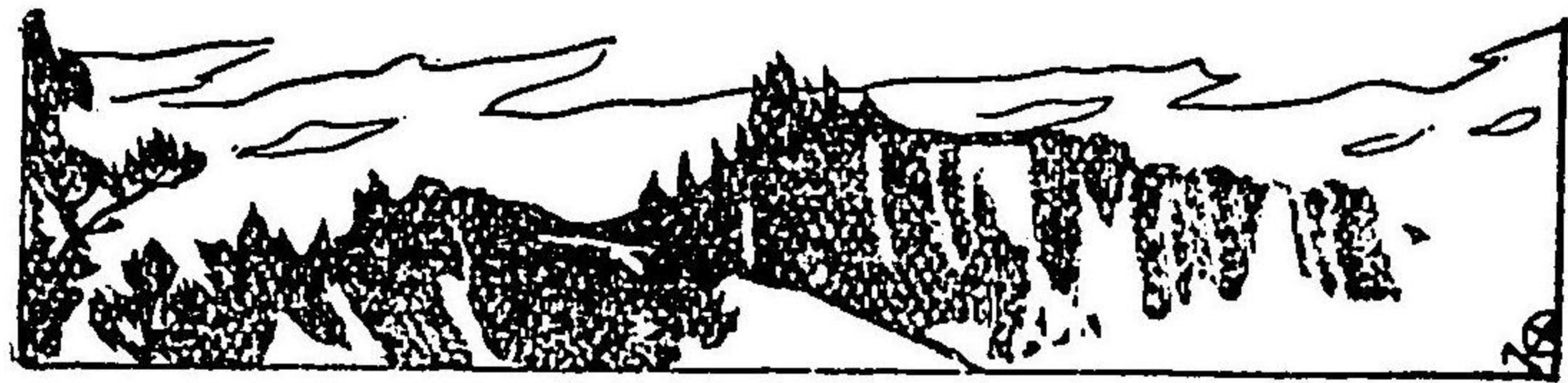
谷川先生足下

それから公園へ行くと、これは意外な、久しぶりな、友人石原敬吉君が接待員の一人になつて居る、君は漢詩文に長けた人で、今水産業を企劃してる、豪快な性格の人だ。談りつゝ所謂移築された鈴廻屋に入る。翁の裔本居清造氏が叮嚀に案内される。格子戸を潜つて患者の控所にあてられたと云ふ八疊を通つて、次の暗い四疊半に入ると、そこ



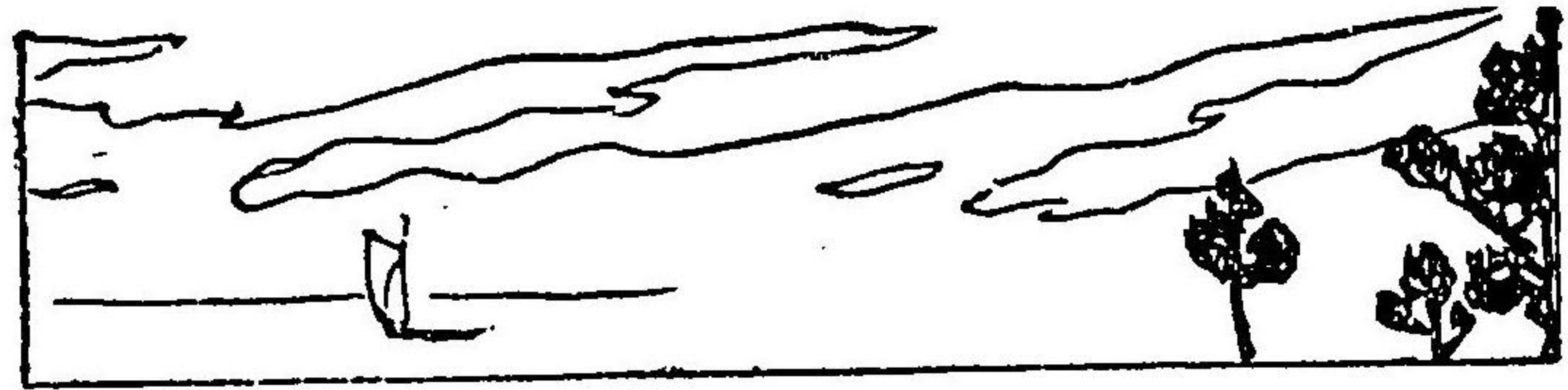
にどうも實に危険な箱梯子がある。それを昇ると四疊半一間の二階で、これがかねて噂に聞いて居た本居翁の書齋である。梯子を昇つて左の方が床の間と押入になつて居る。床には翁の自筆で「縣居大人之靈位」と恭しく書かれた幅が懸けてある。これは大人の忌日に懸けて禮拜されたものださうな。床に向つて左の床柱に、そら長い形で下が顔になつてる驛鈴があるでせう、あれに似た形の帛が垂れてあつて、その上に紐が下がつて、其紐に鈴が三所に群つて着いてる。床の間の右の壁に釘があるが、この鈴は時々この釘にも懸け更へられたさうだ。押入の襖には翁の自詠及び門人等の歌を書いた短冊が無造作に貼つてある。床の反対の方が窓になつて、こゝから松と榊と井戸がある狭い中庭が見下される。この窓が西向きで、しかもこの書齋の下が臺所である爲、夏の暑さは堪らなかつたさうだ。この書齋はもと物置に使

お伊勢参り

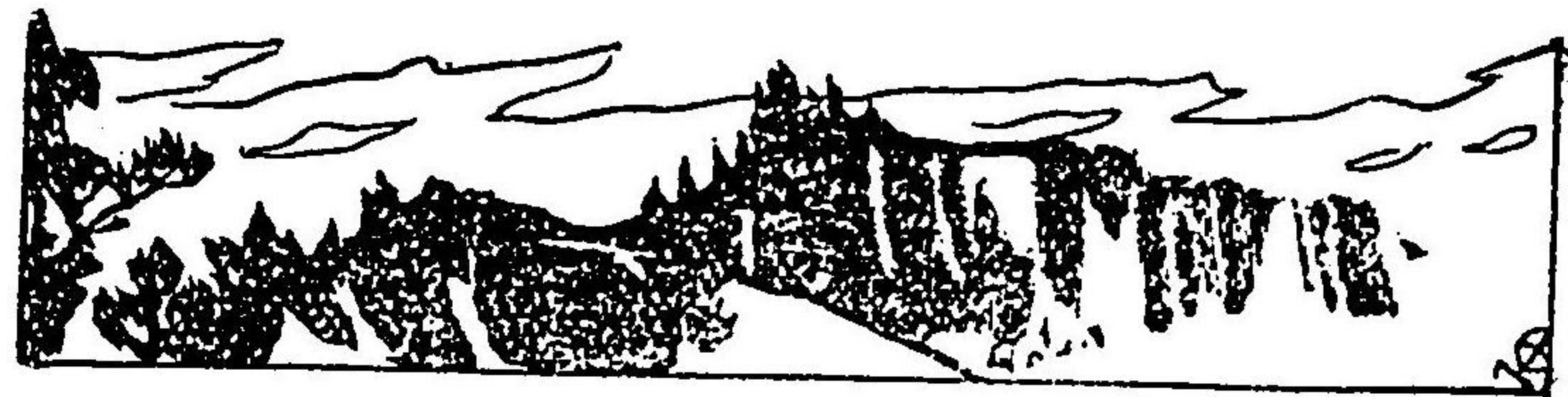


つてあつたものさうで、この事でいかに居心の悪い部屋かと云事が  
見ぬ人にも解らう。翁はこんな部屋で大著述をされたのである。梯子  
口の反対の方は半分だけ棚になつてゐる。こゝに書物など置かれたもの  
であらう。押入の中にも書物ばかり入れてあつたさうだ。この棚の横  
の壁に小さい窓が切つてあるが、これは餘り、暑いので、あとで風通  
しの爲に切つたものと見える。爰に坐つてみると何だか宜長翁がそこ  
に居られるやうな心持がする。

階下に行くと、梯子のある四疊半の間の右(奥に向つて)に三疊が  
あり、この二間の次の奥に四疊と六疊の二間がある。こゝは調合場即  
ち薬局であつたさうだ。その次の奥に六疊の座敷があつて庭に面して  
居る。格子戸の入口から裏までは、やはり上方風に土間が續いて居て、  
竈や井戸や風呂場などがある。



調合場には翁の原稿が堆く積んで並べてある。古事記傳の原稿を一  
寸拜見する。一等奥の座敷の床には、彼の世に知られて居る翁の自畫  
像が掲げてあり。又翁が常に着て居られた所謂鈴廼屋衣スズノヤと云ふ居士衣  
見たいな着物や、愛玩された鈴や、調劑帖、音信到來帖、日記類など  
が陳列してある。その中に僕の目を惹いたのは、翁が十五歳の時に寫  
されたと云職原抄支流、支那帝王系圖、及び十四歳の時に寫されたと  
云圓光大師傳である。非常に細い字で骨折つて寫された痕が見える。  
翁はこの若年の時、既に已に大學者たるべき熱心があつたのである。  
西洋には名士の家が大概保存してあるさうだが、我國には少い。完  
全に保存されてゐるのはこの鈴廼屋位のものであらう。伊勢參宮に行く  
人は、歸りに是非松阪に寄つて、この鈴廼屋を見て、偉人の俤に接す  
るが宜い。その建物及び遺品は、無言の間に多大の教訓を興へるので



ある。

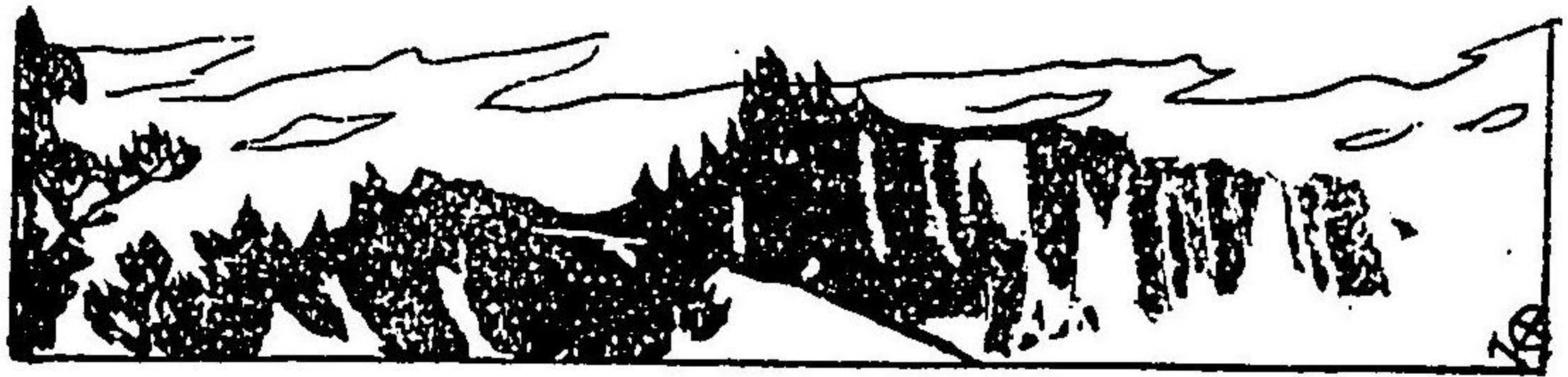
#### 十四

それから公園内千歳樓で折詰の御馳走になる。突然障子を開けて東京仕立のフロックコートを着た紳士現はれ、「ヌ………ヌマ………バさんは貴君ですか」と云。「さうです、僕はヌナミです」と訂正しながら返事をすると、紳士は「私、堀内ほりうちです」と云。出発前に佐々木さん所へ寄つたら、松阪の堀内へ是非お寄りなさい、本居先生に關した書類や其外珍しいものが澤山あるから見えていらつしやい、私手紙を出しておきますから、といはれた。その堀内君である。堀内君は佐々木さんから手紙が来たこと其手紙に何々を見せよと目録書きにしてあつたことなどを話し是非ゆつくり別荘まで来て頂きたい、といつて又ふいに行つて仕舞はれた。石原君は、堀内はこゝでの素封家で別荘は立派な



もんだ、君が別荘へ泊られることと思つて、こゝの新聞には君が六日に松阪に来て暫く堀内氏別荘に滞在すると云事が出て居た、と云。それでは今夜別荘に行かうかと思つたが、堀内君が今夜は手がひけぬと云から、それでは日は追てお知らせします、兎に角是非御厄介にはなりますと約してこゝを出ようとするとう入口は今二階の大臣様が御たちと云のでゴツタかへして居る。僕は外套と傘が見つからぬのでマゴマゴして居る。女中に聞くと、「存じません」と云。大臣等は今二階から下りて來られる。僕は隅の方に細くなつて立つてる。梯子は暗い、大臣が「どうも危いな」といはれる、女中が「鈴廼屋はんの梯子段見ただすなあ」と冗談を云と、大臣等が「ワハ、ハ」と一度に笑ふ。一行がこゝを出られたあとで僕はやつと傘と外套を探して貰つてこゝを出る。雨が降つて來た。





石原君の案内でもとの魚町の鈴廼屋遺址を見る。庭の木石だけ存してある。(新鈴廼屋の木石は寫しである)。南隣が接近して居て、いかに暑苦しい家であつたか、更によく解る。この家の址の空地に、近日三上博士撰坂正臣氏筆の碑が立つさうである。この遺址の向側に基督敎會と云ふ看板が出てゐる家がある。翁が生きて居られたら何といはれるだらうと思ふ。

### 十五

相原君と共に午後四時一分發の汽車に乗て山田に歸つたのは丁度外宮の川原大祓が濟んだ頃。宿に着いて通信を書く。

鳥羽造船所の支配人久保村憲介君と云のが同じ藤屋に泊つて、僕の部屋を訪はれた。快活な、相對すると胸の透くやうな人だ。久保村君の發起と我が會我部君の盡力とでなほ滞田中の東京大阪の記者九名が



明後日志州見物に招待されて行くことに定まる。

この夜記者打揃つて備前屋へ名物の伊勢音頭を觀に行く。一行の中でこれを再び觀るのは僕だけだ。八年前に見た時には無かつた電燈が先づ目障りだ、部屋へ通されて老婦に「どうして電燈などつけたんです」と訊問すると、電燈は臺所帳場梯子段の處などで部屋の中はこの通り蠟燭だと云。音頭の用意が出来た由を後揚うしろあげと云に結つた可愛い坊主(禿のこと)が知らせて来る。皆例の大廣間へ行く。喫驚するやうな大きな螺鈿の煙草盆や菓子盛つた高坏やらが運ばれる。胡弓二人三味線四人で突如「さくら／＼なあ」と唄が始まる。右と左の廊下から各十人づゝ女が手を振つて踊り出づる。踊る者も囃す者も淡藍地に源氏車の裾模様で赤い同模様の帯をして居る。チョン／＼と時々何處かで拍子木が鳴る廊下の天井から提灯が下がる朱塗の欄干が迫り上げる、



一六〇  
囃子唄は極めて賑かに極めて急促に進む。右から出た女は左へ、左から出た女は右へ、ズン／＼と這入つて行く、すべて四分位で女消え朱欄消え提灯消え失せて仕舞ふ。「狐につまゝれたやうなもんですなあ」と曾我部君が云、「もうお仕舞ですか」と誰か、聞く。この音頭が終ると誰しも啞然とする。大抵の人は馬鹿々々しいと思ふ、二度と見るものでは無いと云。併しこの音頭が突如として起つて華美な光景が一時にパツと現はれて兎も角暫時人をして幻境に遊ぶの思あらしむる所は大に買ふべき所と思ふ、それが又突如と終つて塵生は夢さめてと云趣も面白い、皆引込んだと思ふと一人が立戻つて一寸踊つて引込むのものはれありげだ。唯僕が今度少からず憤慨したのは庇髪のが二三人踊り子の中に居たことだ、八年前にはこんなことは無かつた、伊勢音頭に流行の反影を見るは憾むべきことである、他は皆銀杏反しであつた

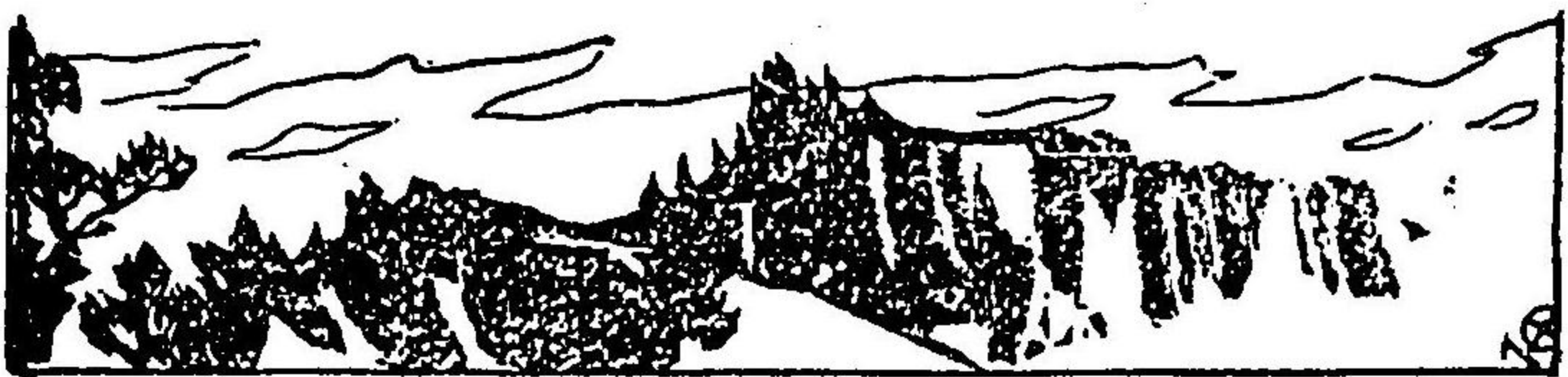


が、一體あの服装といひあの踊りぶりといひ踊りの性質といひ是非島田で無くてはいけぬ。斯う云ものは或は近く無くなつて仕舞ふかも知れぬ、併し無くなるまでは古風の儘で置きたいものだ。さてこの音頭の唄は櫻襖と云ので文句次の通り。

櫻々な、誰が齒くにも盛りとは、いひ合はされど人心、移り安きよ世の中の、戀は若の  
開くまで、はつと浮名を流しては。曲水結ぶ谷陰に、散りも始めぬ一木に、誰も目を避  
る窓の内、調子の高い三味線に、坐頭は散るを待ち顔に、鶯鳴けばほゝみみて、振袖口  
にあでやかな。飾り車や御所車、御室あたりの夕暮に、花の顔見る樂しみも被衣かき一重に  
開の戸に、人目無ければ一枝は、手折る心を抱かれて、縁を結ぶの短冊に。風一吹き  
散り際を、とよむは山の笑ひとも、實にや名におふ嵐山、あからめなせそ朝朝、明けは  
なしたる次の間は、嵯峨野を通ふ人霞む、楢にかゝる一筋の、霞は筆をかすらせて。空  
色うつる大堰川、青きは清き水の色、白きは流の清水や、北野詣での杵の音、太刀持つ  
稚兒の戯れに。鞍馬の山のおおろし、道こちらは紫の、幕打はへてかとの音、花も聞  
入る風情にて。一日かさのもりをして、獨り静に寺の縁、へりとりかりて後る手に、つ  
く／＼思ひめぐらせば、齒そらごとにも花咲きて、實もある御代のえ、

随分よく出来てる。

お伊勢参り

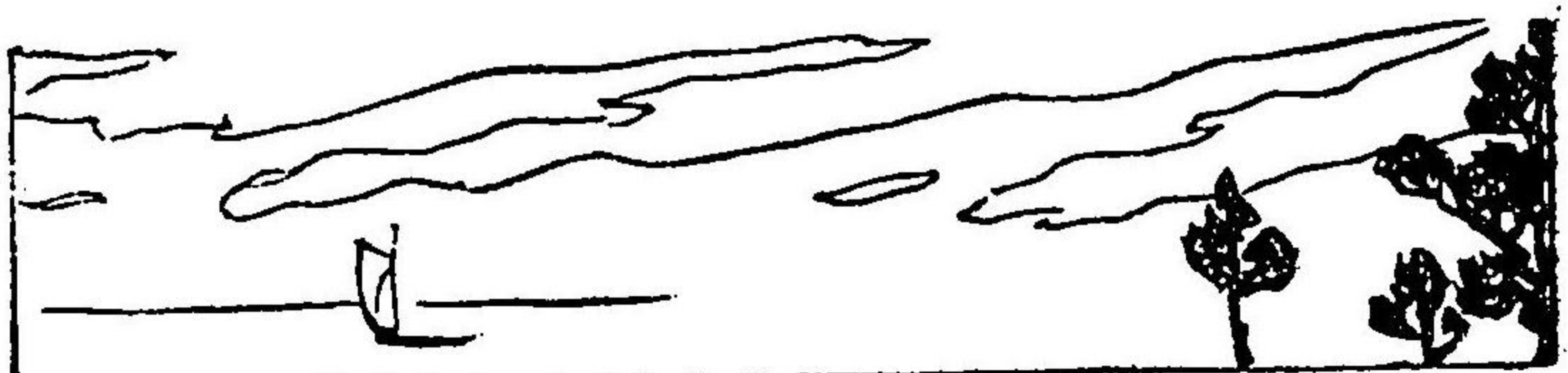


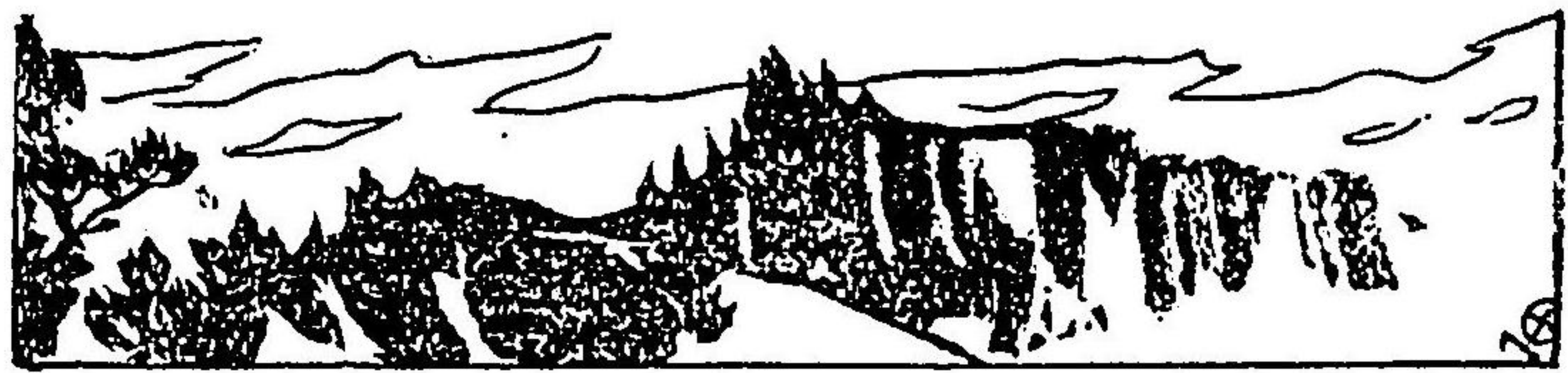
歸り際に、女が老婦を「繁の」「松の」など、「の」附けに呼ぶのを聞いて、芝居の伊勢音頭の彼の「萬の」と云名を思出し、「の」の字のいはれを老婦に聞くと、古市では昔から老婦の名を斯う呼ぶ、お繁ならば繁の、お松ならば松のと呼ぶとのことだ。「繁どん」「繁のん」「繁の」と云ふ風に轉じたものだらう。すれば「萬野」と云ふ名では無くてお萬と云ふ名で、それを呼ぶ時に「萬の」と云ふのを寫したものであらう。又ここでは「附け文」といつて客の泊つた翌朝、女が文を書いて客の宿へ届けさせる、小女が文箱に入れて持つて行くのださうな。その文箱を見せて貰ふと、黒い漆塗で源氏車が金蒔繪で出てゐて、朱の褪せた總で結はへてある。大に嬉しい。斯う云ふことは保存しながらなせ庇髪で踊らせるのだらう。

## 十六

五日、今日は更に松阪へ行つて、堀内君の別荘を訪ふ。洋館の方へ案内される。その應接室で一寸失禮して通信を書く。小津法學士が訪はれた。學士は鶴岡の相馬法學士と懇意ださうな。二階へ上る。床には抱一の菊が掛けてある。その右に蕪村の繪、大きな奔放な瓢の成つてる儘なのを描いて彼の「たび人の目鼻つけたる瓢かな」の句がある、大に面白い。左に徂徠の詩が掲げてあつて其の傍に石帯を短冊かけに用ひて誰かの繪が挿んである。床の反對の方に置棚があつて爰に諸國の玩具人形が飾つてある。開いてる屏から向うを見ると廊下の隅に大きな太刀が反りかへつて居る、五代目の使つた暫の太刀ださうだ。書畫類の展観が始まる、小津君等と共に拜見する。

守武の椿の自畫、上に「岩戸かやひらけば白し伊勢椿、珍品だ。宣長翁が二見浦の景を極めて拙く描いてる、それに大平が「ふしのねの



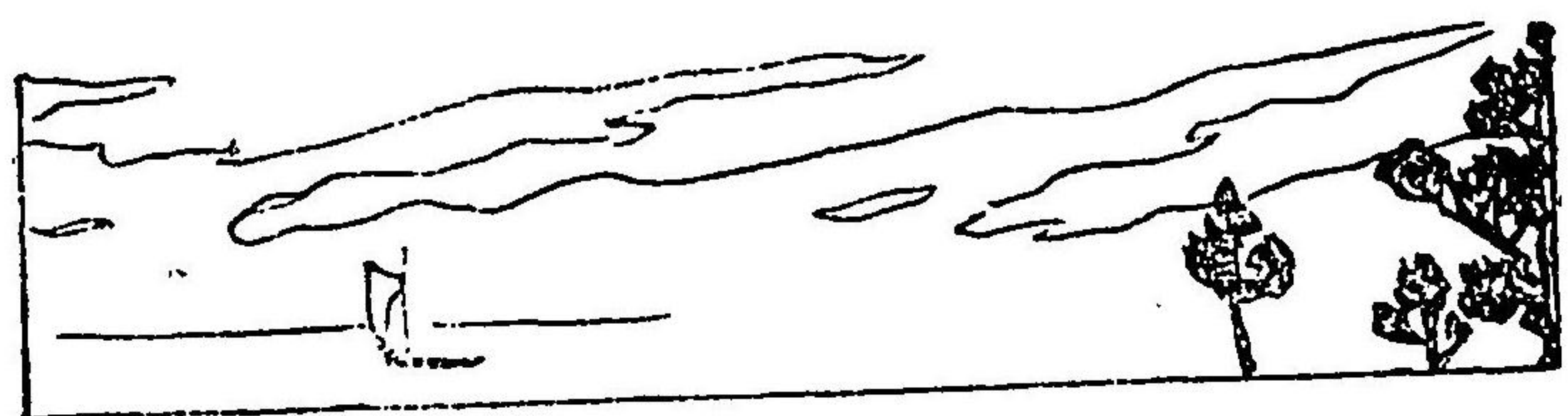


雪もとこよの浪まより朝日にはふ花とこそ見れ」と云寫生で而かも  
想雄渾な歌を賛してゐる、楓蔭(服部中庸)が、「夏至二三日ばかりに二見  
浦の朝朝に不二山見たるかた」と題してゐる、富士を見て興湧いて寄合  
ひ書きをしたのだらう。麗女の短冊、「秋の野やちくさを虫の聲の色」。  
馬琴が寫させて藏して居た「池の藻屑」。谷川士清が愛玩した木彫狸の  
置物、背が壁へ附着くっけておくやうに平たくなつてそこに「化物寺什物」  
と彫つてある、狸は腹鼓を打つてゐる姿。實にいろ／＼なものが集めて  
ある。こゝに堀内君の物では無いが僕の爲に知人某氏から借りて來ら  
れた一軸がある。これは眞淵翁の評された宣長翁の詠草で、即ち次の  
通りのものである。

山居梅

かくれかやうめ咲のきの山風に

宣長



身のほとしらの袖の香とする

此言一首には「いひもしてん一句につゝめては俗のはいかい言なり

古寺落花

夕あらしはつせの花やさそふらん

そてにちりくる入相の鐘

歌ともなし

花埋苔

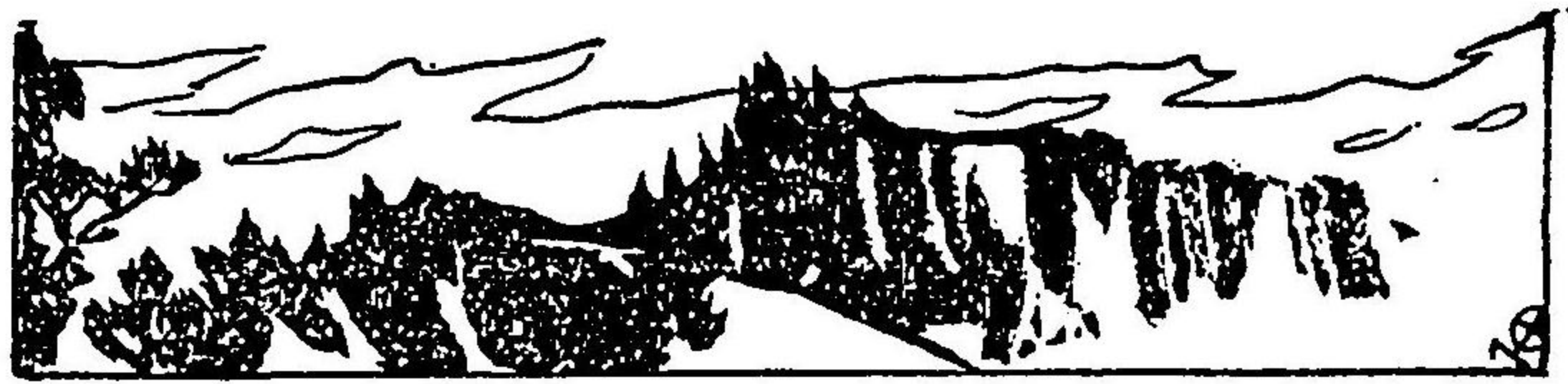
庭のおもは櫻ちりしく春風に

よそはぬこけの色そよそとゆく  
(こけ)

夏月

程もなくふくるを夏のしるしにて

お伊勢参り



すゝしさはた、秋の夜の月

此所歌にはならず

野虫

月影もこぼる、野への秋風に

むしのねきえぬ浅茅生の露

只今のはいかいにこそ

野分

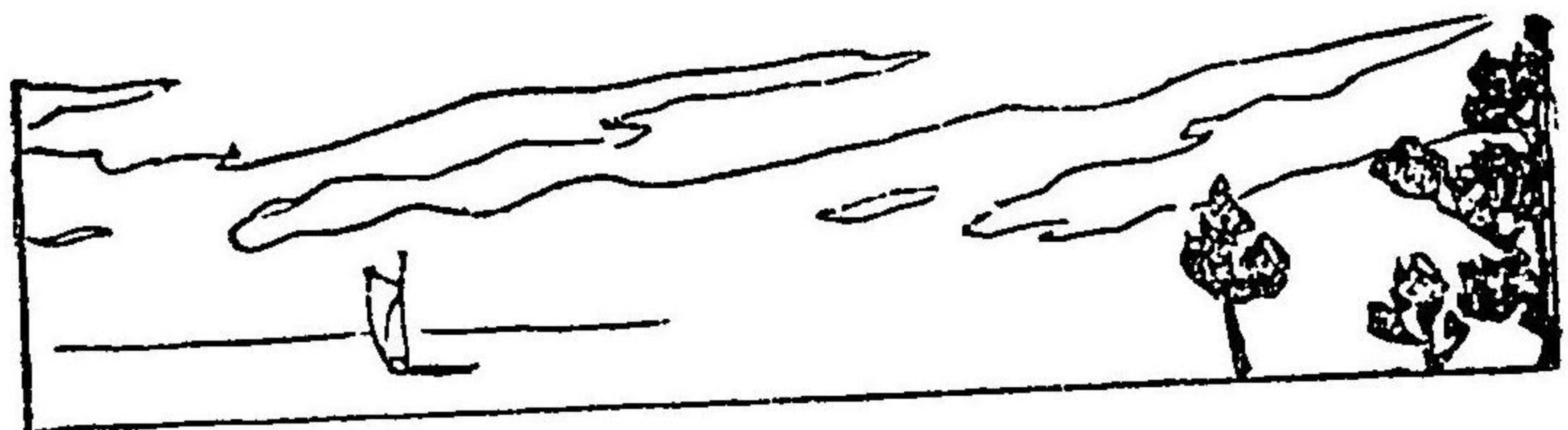
散にけり野分する夜のおもかけに

明日の朝けの花の千種は

かく上へかへしていふ事古今には少しあ  
れど歌にからめられたる人のわさなり

月

うき雲のゆき、も空に絶えはて、



吹風見せぬ秋のよの月

歌とはならず

浦雪

かつ散てつもりもやらぬ松の雪

たかうちはらふ袖のうら風

此つ、けいやし又浦の事、にの(不明)

爲人忍戀

いさや川いさめし人のひと言に

うきなもらさぬ袖のしからみ

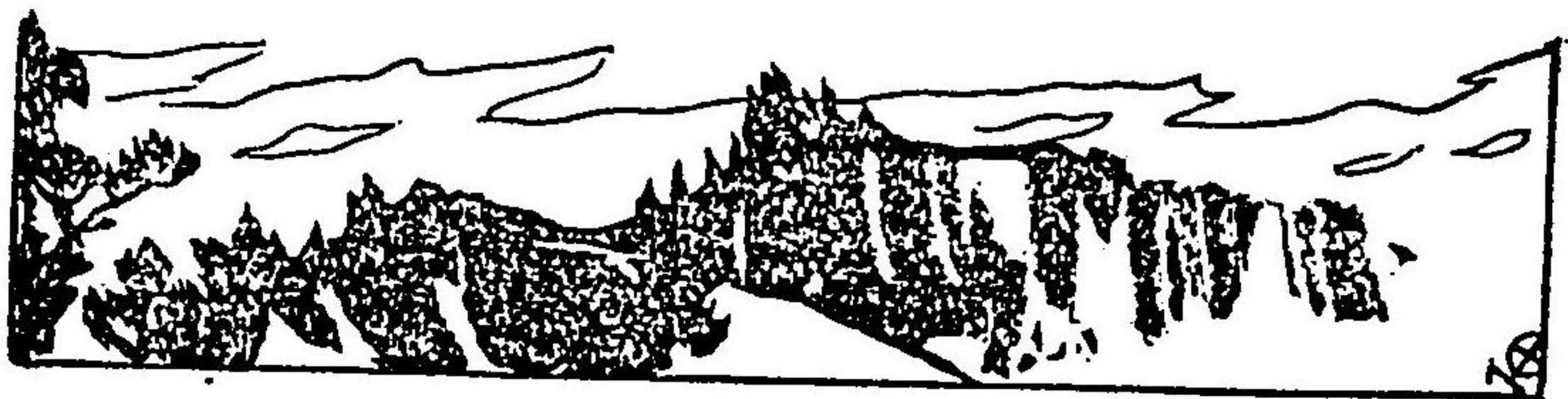
歌ならず

後朝戀

さぬくのなこり身にしむ朝風に

言つまれり

お伊勢参り



おもかけるそふ袖のうつり香

（一句いひつめては歌ならず）

戀命

同じ世の月見る事もこひしなは

これやかきりの契ならまし

（此言いか）

寄魚戀

小車のわたちの水のうをならて

（から人の言を歌に用る事古今などにもあれど）

かるゝをなげくわかちきり哉

（心ひくき事なりいかほともこの古事ながらんや）

寄箏戀

かきたえて忘れなはてる逢事は

なかの細緒のちきりなり共

寄風戀

さそはれぬ深き思ひの色もなほ

有とはしるや庭のこからし

（猶を言の下にいふ事後世の俗歌にのみ有なり古今には一首あれど古本には別なり）

寄枕戀

思ひやれ三年の後もあかつきの

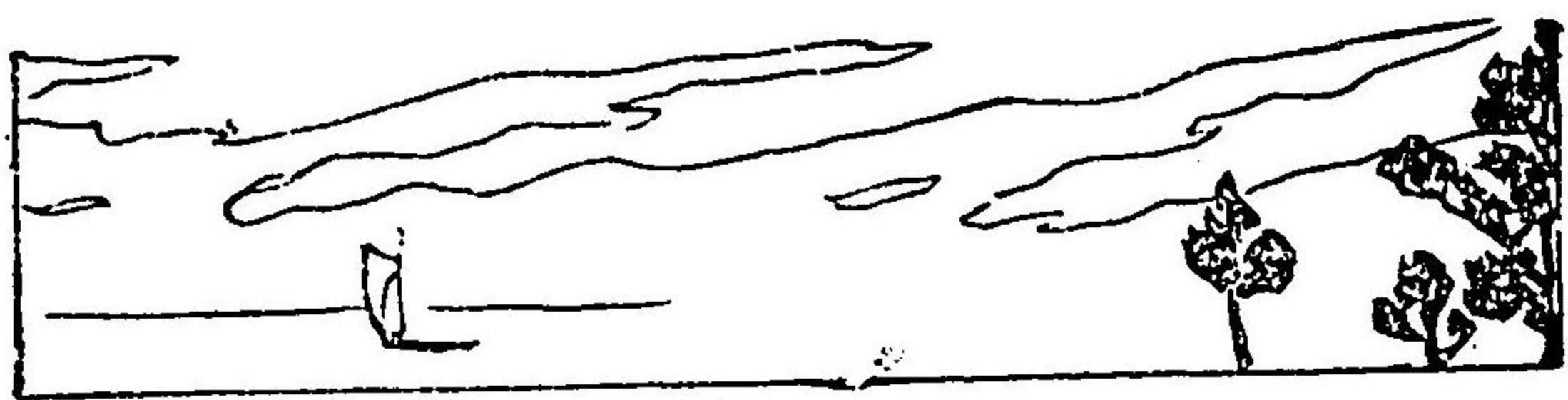
かねのつらさはしらぬ枕を

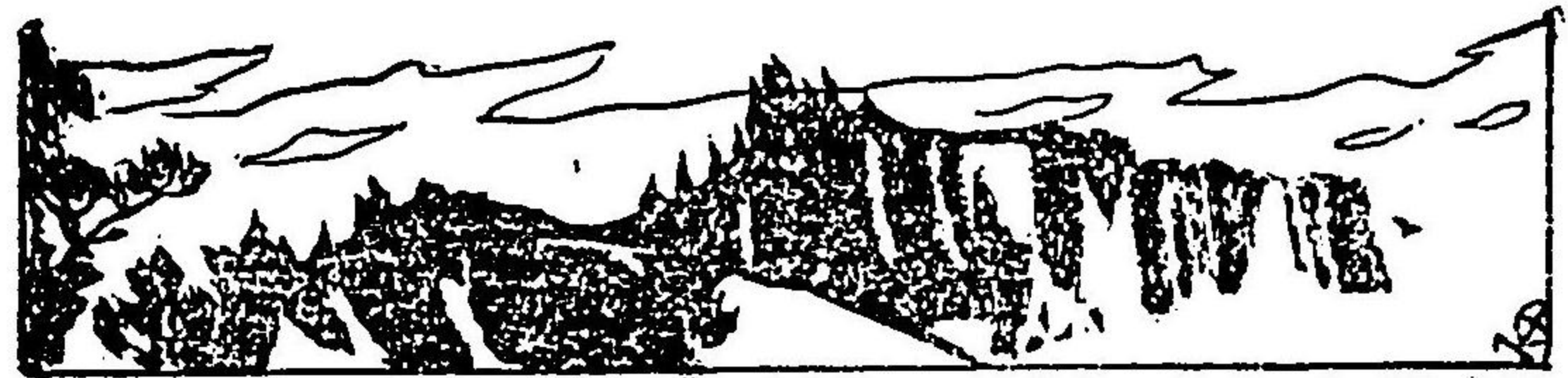
（いひなほはいかに恋などは随にあはれにこそいはめ）

是は新古今のよき歌はおきて中にわるきをまねんとして終に後世の連歌よりもわるくなりしなり右の歌とも一つもおのかとるべきはなし是を好み給ふならば萬葉の御問も止給へかくては萬葉は何の用にたゝぬ事なり

なんと面白いものではありませんか。本居さんのこの歌は皆不味い。併し眞淵先生も随分ひどく頭ごなしにしたものだ。萬葉の研究なんか

お伊勢参り





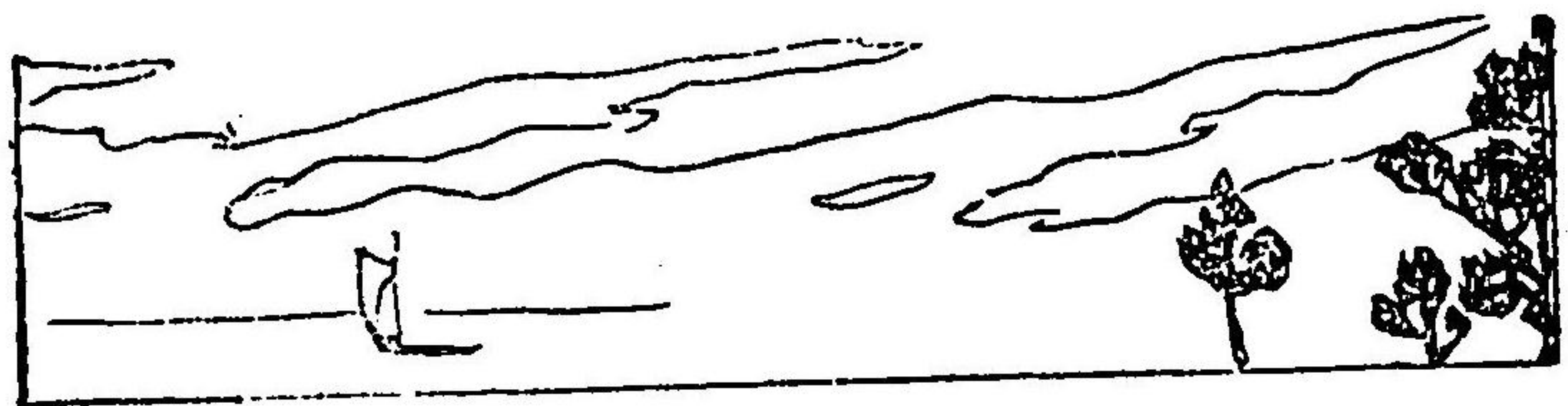
止めちまつた方が宜いせ」などは思切つたことをいつたものだ。これで腹も立てず續いて師事した本居さんも偉い、齒にも筆にも衣せぬ眞淵翁も偉い。あゝ今はこんな先生もこんな弟子も無い。

この夜外宮の遷御式あり。おほよそに申せば御式、内宮のと異ならぬやうなり。鶏鳴の儀外宮にては「カケロー」と唱ふ。御列の次第次の如し。

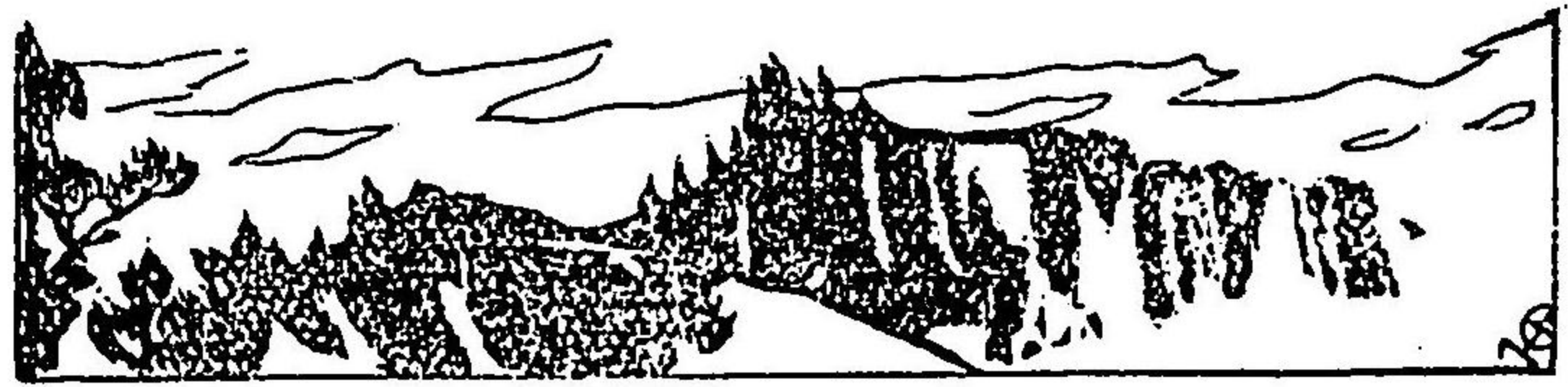
宮堂左右二員、次燦燭四員、次御楯二枚左右六員、次御鈴二竿左右四員、次御行帳左右二員、次管御騎一枚二員次紫御騎一枚三員、次金剛作御太刀一腰一員、次燐螂形御太刀一腰一員、次紫御騎一具八員、次樂師掌典、警蹕、次勅使、次行障二員、次絹垣二十員(前陣)御(後陣)皆御傘一枚四員、次祭主、次船形御太刀一腰一員、次御胡録二重、左右二員、次御火左右四員、次宮堂二員、次禰宜

## 十七

六日、取り散らかつた荷物を纏めて藤屋に保管を頼み、電車に乗つて二見まで行き、こゝへ造船所から迎に來てるランチに乗込み、東を



指す。二見の女夫岩を遠く始めて望む。成る程噂通り小さな詰らなささうな岩だ。浪が宜い加減に船を揺つて、遙に尾張の知多半島三河の伊良胡崎が紫に見える。伊勢と志摩との境橋を見て過ぎると直きに堅神の浦と云深い灣が來る、ランチはこの中を一巡りする。この灣の口に近く飛島と云群島が並んでるので、鯨をこゝへ追ひ込んでまるで軍のやうに盛な漁を遣るさうだ。飛島に連つて桃取の島(後に云答志島と同じ島で東部を答志といひ西部を桃取と呼んで居る)が見えて來る。小濱の半島と其先の離れ島との間の瀬戸を潜ると、蓬萊に似た小島が近く散らばつて、向に坂手島、菅島、安樂島(半島)が重なりつ離れつ見え、願れば桃取島の形が横長に形を變へてる。満目皆島、海は湖の如く静で鷗が飛び飛ぶ。船は小濱の東に沿つて廣重繪の如き鳥羽港に入る。造船所で暫く休んで錦浦館で晝餐。障子越に靜な島々の姿が見えて



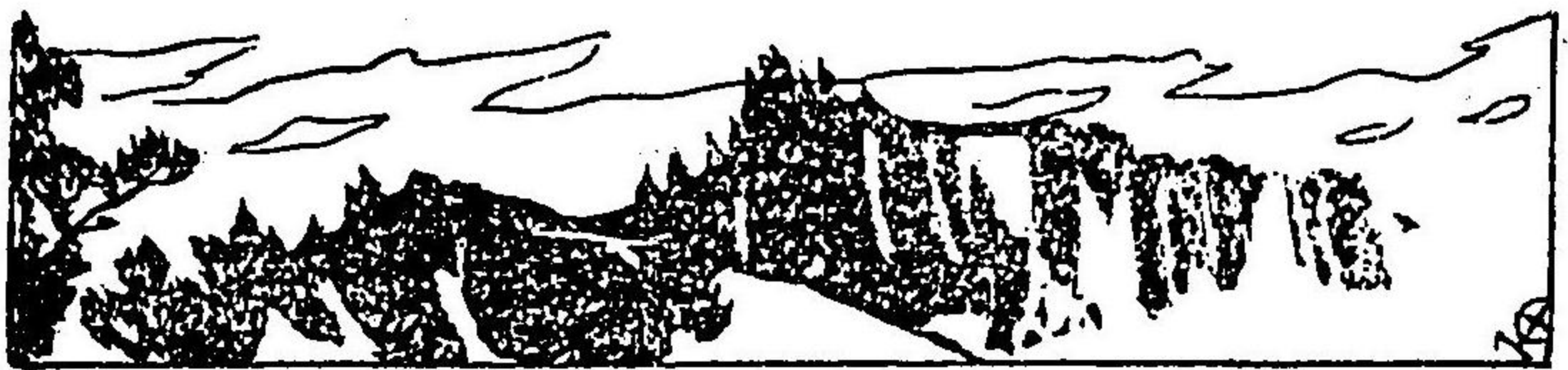
恍惚とする程居心地が宜い。久保村君がこの志州に就て面白い話をする。これから御覽に入れます海女は志摩の名物です、志摩の島々の女は海女を知らないと嫁に行かれないんです、海女を行つて亭主一人位養へない者は女ぢや無いといはれます。志摩には盗難と云事が更にありません。志摩には牛と云物を見たことの無い人が多い。馬は知つてゐるが、人間が馬に乗つた所を見たことが滅多に無い、先達二見から馬に乗つて来た人があつたが、どうも町の者が珍しがつて大騒をしました。坂手島が妙です、皆釣竿一本で暮してゐる、網を用ひません、坂手の島民位釣の巧なのは他に無いと信じます。

御飯が濟むと又ランチに乗つて、海女を見に行く。左には答志島、右には坂手島、菅島、小さな無人島も所々に見える、當面には三河の神島が判然と見えて其左手に伊良胡崎、右手に遠州御前崎が蒼い。菅



島の東に回ると土佐繪の蓬萊のやうな、面白く松の生へた島が現はれる。そのあたりに小舟が一艘浮んで海女が四人乗つて居る。もう海は寒いので一般には遣らぬ、これは僕等の爲に特に遣らせるのである。海女と云ものを非常に美しく思つて居たのは古い誤解で、海女といへばすぐ男か女かわからぬやうなものと思ふのは新しい誤解である。この海女は髪こそ潮で赤くなつて居るが（髪は黒いうちはダメだと土地ではいはれて居る）肌の色は東京あたりの労働者位のもので、上品な顔も見える、言語も明晰で美しくて殆ど訛がない。最老いたるは六十五歳、最若いのは十七歳、中に三十六歳の木下なつと云ふのは志州一番の上手であるさうな。海女は一齊に衣を脱して白腰巻一つになる、水天宮の御守を頸にかけてゐる、腰にスカリと云網蓑を着け、ノミと云て獲物を岩から梳ぎ取る具を挿す、布で頭を縛る、兩耳を水で濡す、ノ





ミで舷を叩いて魔を除ける、さて水に入つて暫く舷に捉つて口を妙にして深呼吸をして居る、「ヒュー、ア、ン」と云ふやうな一種懐い哀れな聲を出して居る。忽ちドブンと、双足正しく天に朝して眞逆様に潜り込む。一昨年見た三瀬の海女、赤銅色の肌に一絲を纏はず巖の上から飛込んだのは大分趣が違ふ。息の長いのは四分位出て来ない。交る／＼飛込んで浮み上り獲物の鮑は舟中に溢く。茶の間に籠つて子供を叱つたり飯の菜を趣向したりして暮すのも一生、斯うして婆さんになつても大海に飛込んで暮すも一生である。

## 十八

ランチを北に進めて答志島に着く。東京なら數十圓百圓もする面白い石が路に敷いたり家の土臺にしたりしてある。九鬼嘉隆の墓を弔ふ。海戦に長じた英雄も末路は悲惨であつた。こゝから村の狭い路を辿る。

と黒板が掲げて白墨で何か書いてある、近寄つて見ると、

## 學校新聞

「其一」十月七日

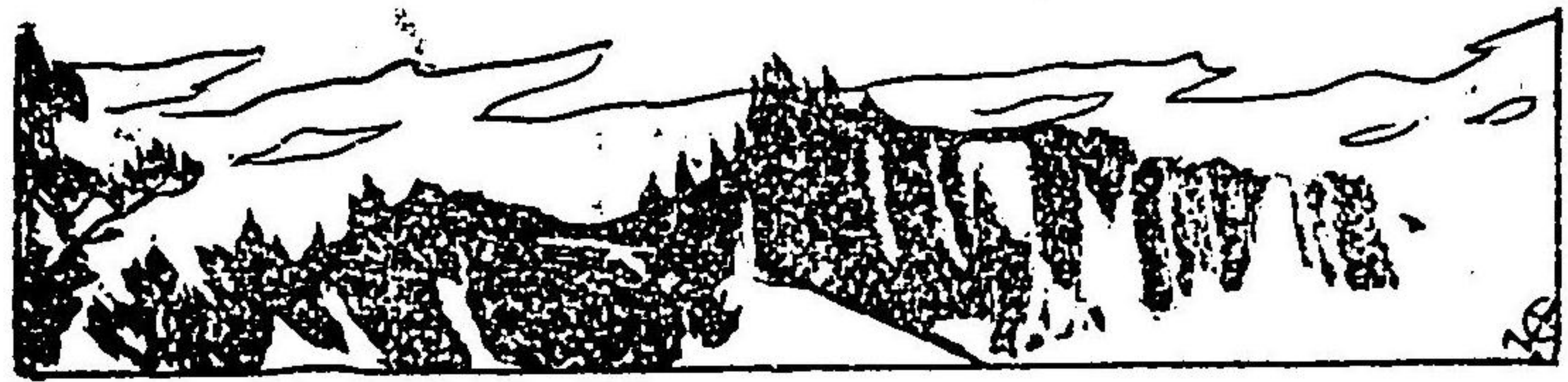
リョーシと犬

むかし奥州にリョーシがありました、いくひきかの犬をかつておいて、それひきつれて深山に入り、しかや猪を取るのを家業としておました。犬どもよく主人のしつけによりて、主人が仕事にでかけると、そのあとさきについて行つて、しかや猪をおひかけたりくひころしたりすることをやくめにしておりました。

とある。これはこの邊で一般にやつてる児童作文奨励法で、學校の兒童に交る／＼毎日何か話を書かせるのださうな。七日とあるのは明日の新聞をもう書いたのである。三四人の子供が立つて讀んで居るのも可愛い。島路を爪先上りに行つて宏壯な小學校に着いて尾崎校長に會ひ休憩する。斯う云島に似合はず校の廣くて潔いこと驚くばかりである。生徒は四百三人あるとのこと。壁に懸けてある村の統計表の職業表の所を見ると漁業三百三人農業七人とある。校長の案内で御手洗

お伊勢参り





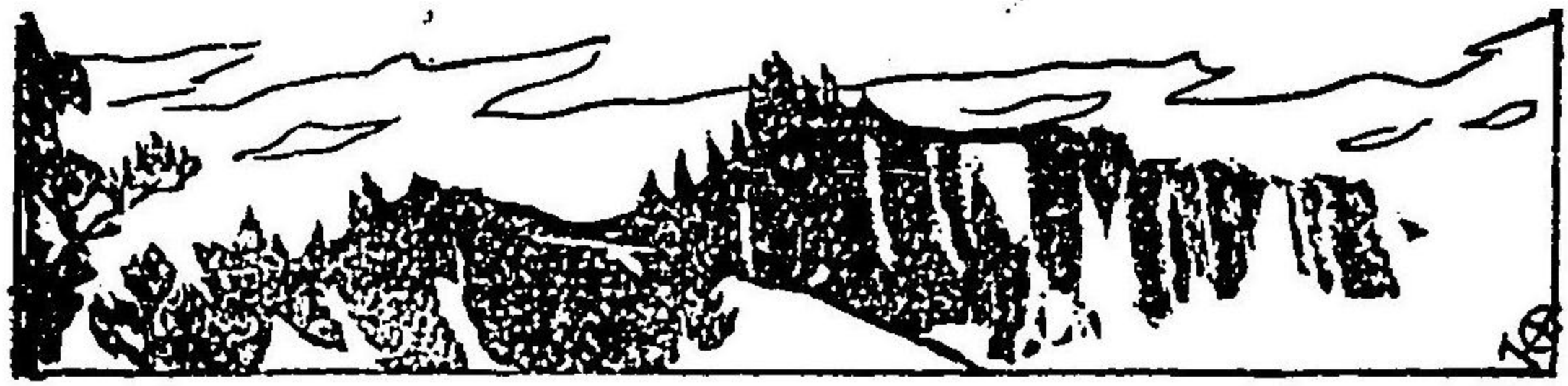
神社を拜しそれから殿山と云山に攀ぢ登る。薄の太いのや笹や扉の木小松、萩其他雜草が人より高く伸びて路も無いところを押分けく登つて稍平らかな所へ出ると夕陽がバツト顔に照る、左を見るとこの答志島が南に細い地峽を伸ばしてその先が圓い翠色の島を成して居る、その島の南の丘に松が二三本茂つてるのが九鬼嘉隆の首塚だと云。我が来た路は眼下に悉かに見えて、海は夕方の色美しくランチの碇泊して一行を待つてるの見える。なほ路を進むと一つの狭い窟がある。校長は、「これはどうも古墳のやうに思ひます、この邊から曲玉などが時々出ます」と云。僕等は腹を地に附けて足からさきへこの窟に俯ひ込む、親指ほどの蚯蚓がビチ／＼と襟を弾いたには驚いた。頭の上へ手を遣つて膝で滑りながら後へ進むうち、手が岩に觸れなくなる、「立てるよ」と誰だか奥で叫ぶ、段々手を伸して體を伸して背伸をして



見ると成程立てる、燐寸を擦つて見ると入口三尺ばかりだけ狭くて、中は高さ六尺ほどで、奥までは三間もあらうか、窟内の蒸暑いのが不氣味だ。又腹這ひになつて蚯蚓を除けながら出る這入らなかつた連中に大に窟内の怪を説き散らす。大汗になつてランチに歸り、襯衣一枚になつて海女の取つた匏を味ひつゝ、鳥羽に向ふ。浪は盛に揚る、日は見る／＼没して、尾三の空は夕焼に燦る、島々の翠色は霧の如く薄れる。

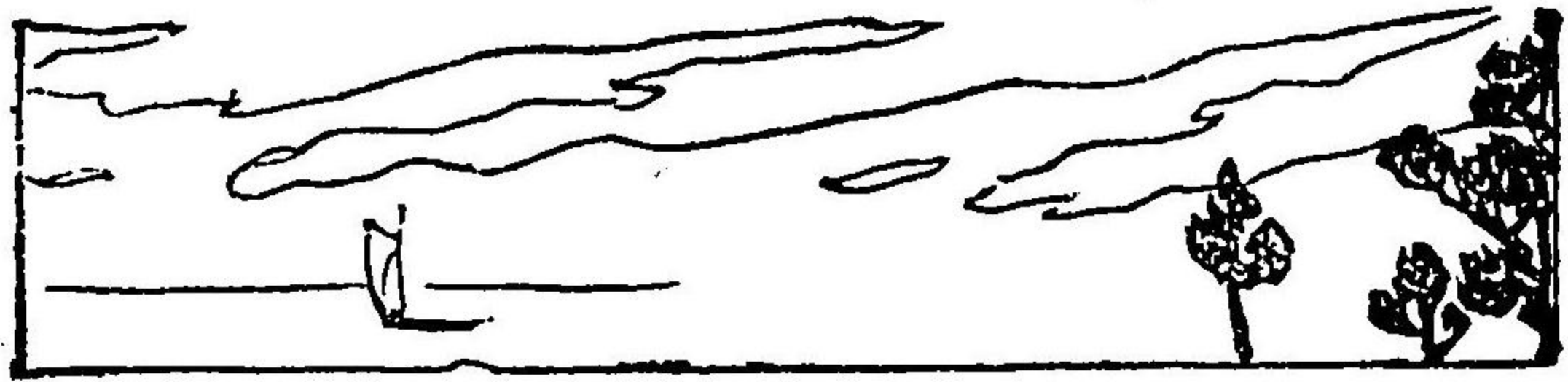
十九

六時頃灯影美しき鳥羽港に入り、錦浦館に歸つて浴後華かな晚餐となる。藝者が鳥羽の名物であつたハシリガネの話をする。ハシリガネと云のは裁縫師兼の詛つたので、船夫のみを客にする公娼の稱である。船が着くと見るとハシリガネはチョロと云小船に乗つてその船へ出か



ける、ハシリガネの女は必ず齒を染めて銀杏返しに結つて素肌すはだに「上つ張り」と稱する総黒天鵞絨の廣袖を着白い帯をぐる／＼巻にして居る、これが船に着くと船夫の爲に着物の綻ほころびを縫つたり（これがハシリガネの稱の所因）臺所のことも遣つたり、唄も唄へば三味線も弾き、つまり女房の役も藝者の役も女郎の役もするので、斯う云女が鳥羽に二百人餘居て、船夫はこれを樂みに入港したものださうなが、明治三十三年に差止められて仕舞つた。伊豆の下田を朝やままけば、晩にや志州の鳥羽浦に「追風おひてに帆あげて舟飛ぶ矢の如く遠州灘の荒浪を凌いで、暮色美しき鳥羽に入ると愛らしいハシリガネが上つ張はらを光らせて漕ぎ寄せる、この時の情景どんなに船夫の心を震はせたであらう、僕はその繪のやうな光景を想うて、官の餘裕の無い潔癖を怨んだ。

土地の盆踊が始まる、其唄、



ほととぎす、横雲晴る、朝風に、花桶の香に匂ふ  
盆と正月と一緒に來たら、巨燈籠かえて蚊帳の中、ヨイヤサー、ヤレコリヤホイ。  
昔忍ばし柴の月に、しめやかに降る雨の音、軒の玉水ほと／＼と、琴の調べも奥深く、山路いとほす山岐の。

うまい物食て樂する奴は、寺のたい／＼く藝者の唄、ヨイヤサー、アレコリヤホイ。

これは「ほととぎす」と云ので、まだ長い唄であるが藝者があとは忘れたといつて止めた。節は長唄のやうに重々しくなく上品だ、そしてこゝに列ねたやうに句切毎に俚謠を、踊り子が輕快に唄ふ、するとまた重い本唄ほんたに戻る、この變化が非常に面白い。

この俚謠には次のやうなものもある。

やぶれがふれといはんすけれど、なんのやぶれががぶらりよか。

二朱はお金で、三州は三河、志州は鳥羽浦、こしゆは酒。

鳥羽はよい所朝日を受けて、セつ下れば女郎が出る。

この音頭の唄には次のやうなものもある。

道成寺

お伊勢参り



嘘のかは日高川より恐しき、女心の一筋に、賊があらば逢ふまでに、遣りし類も消えぬべき、消えなば消えよたきさしの、甲斐なき人の仇心、我は此頃此里へ、二道かける悪性の、跡を尋うて曲輪町、三筋四筋と移り氣の、影は二つ月は程なく入しほの急ぐ心にまだ暮れぬ、格子々々の掛行燈、とほさぬうちに着きにけり、さゝぬ戸たきつりとおけて、月に耻かし我姿、ハアなんとせう、傾城買に女とて、禁制にてはあられもない、末社の羽織かりに着て、すでに酒宴をすいめけり、花の外には松ばかり、うきが友には酒ばかり、暮れそめてまだ間が無いと思へども、仕舞太鼓や響くらむ、あらく曲もなや怨めしやと、腹立たも辛抱をするが女の道なりとて、どうなりとも障いたり、山衆の暮の身じまひ来て見れば、皆入相のわけてより、さし日くの揚屋入に、花ぞ散りける、情の花の仇櫻と、情氣の角のとり聲、魚敷蹴立て、踏み鳴らす、梯子の音も十二段、亂れ心の亂拍子、とりもほうほうと、睡る人目をよき障と、思へばこの蚊帳疑はしやと、釣手に手をかけ飛ぶぞと見えしが、引かついでぞ伏しにけり、言語道断、仰山に禿が告げて、花車遣手皆同音に聲をかけ、東方へござんせ、花の盛りは二軒茶屋の色競べ、南方に宮川筋も、弘法大師の流れ汲む、西方に太夫天職、引舟かこひはし女郎、北方に内のしんせん七軒町、浮きに浮かれて第一中有に迷うた、さんげく六根さいせよ、南無不動明王、動くか動かぬか、なまくさまんぢばさらだ、そりや動かぬは、眞言秘密で攻めかけ、珠敷のありたけやつさらさ、せんだまかるしや何のこちやえ、何の怨みか有明の月、かれこそふわく動かわいの、たゞ弾くや手ん手に琴三味線、しゆのあひの手に引き立てられて、むつくと起き、蚊帳に向つて



吐く息は、蚊遣となつて蕪黄の外、あれ見よ問夫は現はれて、二尋餘りの女帯、取り違へたる後朝の、腰に巻きあげ巻き下し、結び餘りを兩方へ、引手へ戻くえ。

座能

相生の夫婦も軒に若やげば、萬民之を賞す、松の位の二葉より、禿は里の橋が、り、鏡の間より身仕舞に、面の出ばえも大臣の、千秋樂に紙をなで、鼻毛をのべの紙花は、酒中花にして引受る、ひやッひやりの口笛に、大盃の舌つみ、大鼓末社も、うかれ出て、君が酒を呑なら、我も酒を呑ふよ、實にもさうよの、やよ下戸もすけようと、問の調子も二上りに、引手あまたの文づかひ、色紙短冊付られた身のなる果ては植込の、木の下かげを宿とせば、しのお出合も忠度の、右のかひなに入はくる、左りの小ゆび過し夜に切つた咄はさぬかにて、水くさけれど世の中の、なまきは雪と曇りの、女心も正直に鏡によれば我影の、浮名に立て身あがりも、秋の扇と捨てられて、風の便りの夏もはや、おもへば杉の下地まで、四疊班女のひとりごと、淋しきれやの腰張も、我は化けたとおもへ共、人は何とと思ふらん、按摩のあたま撫でられて、茶ばかりながら伯父坊に、似たとなぶれば尾を見せて、いなうやれくいやしばらくと引とめる、羽織のすそにつくばはれ、さすが岩木にあらざれば、心よわくも立どまる、そこを山衆のとまりまれば、料も法界林間に、紅葉たく人にくいといへど、酒のかんする色となる、かあいらしいぢやないかいな、さるとはやさしいかあいらし、猿がうつつほがうつつほが猿か、夜さのとまりはどことまり、うしろ姿を見てもらへ、見たり見せたり心中に、髪は切てもまゆ盛の、かげを船にもたとへたり、又すひかけるがん首は、釣ばりかともうたがはれ、島田も今